

異世界おくてっと

仮面大佐

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界はひとつではない。

次元を超えた先に別の世界が無限に広がっている。

一つは、とある異世界にやってきた青年が聖剣を手に、仲間達と共に世界を救った世界。

一つは、召喚された青年が仲間と共に困難を乗り越えている世界。

一つは、幼女に転生した元サラリーマンが戦場を生き抜く世界。

一つは、とあるゲームの世界に異世界転移した元サラリーマンのいる世界。

一つは、仮想現実の技術が発達し、新たな人類が生まれた世界。

一つは、ケロン星という星からやってきたケロロ小隊がいる世界。

一つは、ゲームのキャラのまま異世界へと転移してしまったゲームのいる世界。

一つは、通り魔に刺されて死亡したサラリーマンと車に轢かれて死亡した大学生が、スライムとキメラに転生して、魔王となった世界。

これは、その八つの世界が交わる物語。

リクエストは、下記から受け付けています。

学園祭について

<https://syosetu.org/?mode=kappo|view&kid||286309&uid||373253>

ドッジボールに関して

<https://syosetu.org/?mode=kapp>

0 | view&kid=285671&uid=373253

あなざーわーどに関して

https://syosetu.org/?mode=kapp

0 | view&kid=286003&uid=373253

あなざーわーどに関して(改訂版)

https://syosetu.org/?mode=kapp

0 | view&kid=290518&uid=373253

日常回に関して

https://syosetu.org/?mode=kapp

0 | view&kid=285331&uid=373253

目次

キャラ紹介	1
第1期	
プロローグ	12
第1話 集結！おくてつと	24
第2話 緊迫！じこしようかい	31
第3話 膠着！くらすめいと	49
第4話 邂逅！くらすめいと	61
第5話 炸裂！こんしんかい	73
第6話 決定！いいんかい	95
第7話 遂行！いいんかい	109
第8話 準備！りんかいがっこう	125
第9話 満喫！りんかいがっこう	140
第10話 参戦！らいばるたち	157
第11話 協力！たいいくさい	169
第12話 団結！おくてつと	191
日常回	
日常1 激突！かりえす・うおー	211
日常2 奮闘！さくもつさいばい	222
日常3 盛況！じよしかい	227
日常4 激突！がんぷらさばいばる	233
日常5 襲撃！どらごんもどき	240
第2期	
第1話 参戦！てんこうせい	250

第2話	潜入！こうちようしつ	270
第3話	反省！しどうしつ	284
第4話	窮地！がくりよくてすと	297
第5話	勤勉！ばれんたいんでー	312
第6話	激突！どっじぼーる	328

キャラ紹介

2組

この聖なる刃に祝福を！

神崎零士／仮面ライダーセイバー

CV 草尾毅

カズマ／仮面ライダーブレイズ

CV 福島潤

アクア

CV 雨宮天

リナ／仮面ライダーエスパーダ

CV 野口瑠璃子

カイト／仮面ライダーカリバー

CV 逢坂良太

めぐみん／仮面ライダー剣斬

CV 高橋李依

ダクネス／仮面ライダーバスター

CV 茅野愛衣

カリン／仮面ライダースラッシュ

CV 高垣彩陽

Re：ゼロから始まる異世界生活

スバル

CV 小林祐介

エミリア

CV 高橋李依

レム

CV 水瀬いのり

ラム

CV 村川梨衣

パック

CV 内山夕実

ベアトリス

CV 新井里美

幼女戦記

ターニャ

CV 悠木碧

ヴィーシャ

CV 早見沙織

ヴァイス

CV 濱野大輝

ノイマン

CV 林大地

グランツ

CV 小林祐介

ケーニツヒ

CV 笠間淳

オーバーロード

アインズ

CV 日野聡

アルベド

CV 原由実

シャルティア

CV 上坂すみれ

アウラ

CV 加藤英美里

マーレ

CV 内山夕実

コキユートス

CV 三宅健太

デミウルゴス

CV 加藤将之

ソードアート・オンライン Re:紫紺の剣士

小野冬馬／カルム
C V 齊藤壮馬
桐ヶ谷和人／キリト
C V 松岡禎丞
兔沢深澄／ミト
C V 水瀬いのり
結城明日奈／アスナ
C V 戸松遥
ユイ
C V 伊藤かな恵
カナ
C V 高橋李依
桐ヶ谷直葉／リーファ
C V 竹達彩奈
佐々木悟／アーン
C V 梶裕貴
朝田詩乃／シノン
C V 沢城みゆき
石動克己／エターナル
C V 松岡充
紺野木綿季／ユウキ
C V 悠木碧
剣崎映司／オーズ
C V 櫻井孝宏
アंक
C V 中村悠一
後沢鋭二／ノーチラス
C V 井上芳雄
重村悠那／ユナ
C V 神田沙也加
ユージオ

CV 島崎信長

アリス

CV 茅野愛衣

イーデイス

CV 花澤香菜

ダイジ／カゲロウ

CV 小野賢章

ケロロ軍曹

ケロロ

CV 渡辺久美子

ギロロ

CV 中田譲治

タママ

CV 小桜エツ子

ドロロ

CV 草尾毅

クルル

CV 子安武人

日向冬樹

CV 桑島法子

日向夏美

CV 斉藤千和

西澤桃華

CV 池澤春菜

東谷小雪

CV 広橋涼

サブロー

CV 石田彰

アングルIIモア

CV 能登麻美子

転生したらキメラだった件

レイトIIテンペスト／仮面ライダージユウガ
C V 松岡禎丞
リムルIIテンペスト
C V 岡咲美保
ヴェルドラ
C V 前野智昭
ミリム
C V 日高里菜
嵐牙
C V 小林親弘
ディアブロ
C V 櫻井孝宏
ゲルド
C V 山口太郎
骸骨騎士様只今異世界お出掛け
中
アーク
C V 前野智昭
アリアン
C V ファイルーズあい
チヨメ
C V 富田美憂
ポンタ
C V 稗田寧々
1組
この聖なる刃に祝福を
クリス
C V 諏訪紗花
リア／仮面ライダーデュランダル
C V 河瀬茉希
シエロ
C V 礒部花凜

エーリカ／仮面ライダーサーベラ
CV 加藤聖奈
ミツルギ／仮面ライダーグラム
CV 江口拓也
アイリス／仮面ライダーグラディウス
CV 高尾奏音
Re：ゼロから始まる異世界生活
ラインハルト
CV 中村悠一
フェルト
CV 赤崎千夏
ユリウス
CV 江口拓也
幼女戦記
ツイーテ
オーバーロード
ユリ
CV 五十嵐裕美
ルプスレギナ
CV 小松未可子
ナーベラル
CV 沼倉愛美
ソリュシャン
CV 佐倉綾音
シズ
CV 瀬戸麻沙美
エントマ
CV 真堂圭
ソードアート・オンライン Re：紫紺の剣士
綾乃珪子／シリカ
CV 日高里菜

篠崎里香／リズベツト

C V 高垣彩陽

帆坂朋／アルゴ

C V 井澤詩織

ケロロ軍曹

ガルル

C V 大塚明夫

タルル

C V 渡辺明乃

トロロ

C V 山口勝平

ゾルル

C V 矢尾一樹

プルル

C V 雪野五月

転生したらキメラだった件

紅丸

C V 古川慎

蒼影

C V 江口拓也

紫苑

C V M・A・O

火煉／仮面ライダーデストローム

C V 茅野愛衣

ガビル

C V 福島潤

ヤシチ

C V 江越彬紀

カクシン

C V 手塚ヒロミチ

スケロウ

CV 佐々木義人
蒼華

CV 大久保瑠美

蒼月／仮面ライダーデモンズ

CV 水島大宙

グルド／仮面ライダーオーバーデモンズ

CV 榎木淳弥

ラミリス

CV 春野杏

トレイニー

CV 田中理恵

骸骨騎士様只今異世界お出掛け中

ダンカ

CV 江口拓也

ゴエモン

CV 竹内良太

3組

この聖なる刃に祝福を

ゆんゆん

CV 豊崎愛生

ダスト

CV 間島淳司

リン

CV 花守ゆみり

ソードアート・オンライン Re:紫紺の剣士

竹宮琴音／フィリア

CV 石川由依

上城幸太／アラン

CV 徳本英一郎

高峰紅葉／クレハ

CV 佐倉綾音

ケロロ軍曹

カララ

CV 野田順子

チロロ

CV 桑谷夏子

アリサ

CV 矢島晶子

新ケロロ

CV 悠木碧

火ノ原灯

CV 加藤英美里

金阿弥明

CV 茅野愛衣

転生したらスライムだった件

ゴブタ

CV 泊明日菜

リグル

CV 石谷春貴

シズ／仮面ライダーダークウガ

CV 花守ゆみり

エレン

CV 熊田茜音

カバル

CV 高梨謙吾

ギド

CV 木島隆一

教師陣

この聖なる刃に祝福を

バニル（1組担任）

CV 西田雅一

ソフィア（司書）

- CV 知念里奈
荒くれ者（色々）
CV 稲田徹
ユーリ／仮面ライダー最光（用務員）
CV 市川知宏
Re：ゼロから始まる異世界生活
ロズワール（2組担任）
CV 子安武人
ヴィルヘルム（用務員）
CV 堀内賢雄
幼女戦記
レルゲン（2組副担任）
CV 三木眞一郎
ルーデルドルフ（校長）
CV 玄田哲章
ゼートウーア（副校長）
CV 大塚芳忠
オーバーロード
パンドラズ・アクター（1組副担任）
CV 宮野真守
セバス・チャン（用務員）
CV 千葉繁
ソードアート・オンライン 紫紺の剣士
重村徹大（情報担任）
CV 鹿賀丈史
菊岡誠二郎／クリスハイト（用務員）
CV 森川智之
壺井遼太郎／クライン（用務員）
CV 平田広明
アンドリユー・ギルバート・ミルズ／エギル（用務員兼学食の料理人）

C V 安元洋貴
ケロロ軍曹
556 (用務員)
C V 檜山修之
ラビー (用務員)
C V 金田朋子
ポール森山 (桃華の執事兼用務員)
C V 藤原啓治
転生したらキメラだった件
ハクロウ (体育担任)
C V 大塚芳忠
シュナ (家庭科担任)
C V 千本本彩花
リグルド (用務員)
C V 山本兼平
骸骨騎士様只今異世界お出掛け
カーシー (理科担任)
C V 田丸篤志
デイラン (歴史担任)
C V 鳥海浩輔
グレニス (体育担任)
C V 皆口裕子

第1期 プロローグ

世界はひとつではない。

次元を超えた先に別の世界が無限に広がっている。

今から紹介するのは、とある8つの世界での出来事だ。

カズマ「よいしょっと。ふう。」

零士「何とか運び終えたな。」

ここは、とある異世界にやってきた青年が聖剣を手に、仲間たちと共に世界を救った世界。

テールブルにクエスト報酬を置いたのは、神崎零士と佐藤和真。

神崎零士は炎の剣士、仮面ライダーセイバーで、佐藤和真は水の剣士、仮面ライダーブレイズだ。

アクア「ああああ!!お風呂!お風呂に入らせて!」

やけにヌメヌメなこの女性はアクア。

カズマの死をバカにした結果、道連れとして連れて行かれた女神だ。

カズマ「待て、まずはクエスト報酬の整理からだ。」

アクア「そんなの後でいいじゃない!私の体を見てよ!ジャイアントトードのせいでベタベタよ!!」

零士「て言うか、ジャイアントトードに突っ込むからだろ。」

リナ「そうよ。流石にアレは愚かよ。」

カイト「全くだ。」

カリン「まあ、いつもの事じゃない。」

零士の発言に同意した3人は、リナ、カイトにカリン。

リナは雷の剣士、仮面ライダーエスパーダ、カイトは闇の剣士、仮面ライダーカリバー、カリンは音の剣士、仮面ライダースラッシュだ。

アクア「何がいつもの事よ!女神である私をこんな風にして、何とも思わないの、このヒキニート!」

カズマ「ヒキニートじゃなくて、水の剣士だから!」

ユーリ「そもそも、お前はいつになつたら学習するんだ？」
ローブを着た青年は、ユーリ。

光の剣士、仮面ライダー最光だ。

カズマと零士が袋を漁っていると、ボタンが出てきた。

カズマ「何だこれ？」

零士「ボタンだな。しかも、いかにも怪しい雰囲気醸し出している。」

アクア「ねえ、押してみましようよ。」

カズマ「お前、零士の話を聞いてたか？」

アクア「どうして押しちゃダメなの?! いいじゃない! ちよつとぐらい……!」

カズマ「どう考えても怪しいだろ!」

零士「これはバニルに診てもらった方が良いつて!!」

めぐみん「確かに、2人の言う通りです。」

彼女はめぐみん。

紅魔族にして、風の剣士、仮面ライダー剣斬だ。

カズマ「めぐみん!!」

零士「流石、知能の高い紅魔族は理解が早くて助かるよ……?」

めぐみん「ですが、押すか押さないかと言われると、押しちゃう女です、よー!!」

カズマ「おいコラー!!」

めぐみんがボタンを押すと、空間が歪み出してくる。

アクア「へっ。へっ!？」

「「やっぱり罨じゃねえか!!」」

ダクネス「ああ!これから私たちはどうなってしまうのか!……!!」

彼女はダクネス。

貴族の娘で、土の剣士、仮面ライダーバスターである。

カリン「こんな時に喜ばないでよ、ダクネス!」

めぐみん「ふふん!」

カズマ「お前は何ドヤ顔してんだよ!!」

アクア「アアアアアッ!!何とかしてよ!カズマさん!零士さん!」

零士「やかましいわ!!」

ユーリ「とにかく、何が起こるのか分からないから気をつけろ!!」
そうして、彼らは姿を消した。

世界は変わって。

スバル「おはようさん!今日も一日頑張って行こうぜ!せーの!」
「ビクトリー!!」

パック「ビクトリー。」

スバル「おおっ!エミリアさんにパック!」

ここは、召喚された青年が仲間と共に困難を乗り越えている世界だ。

男は菜月昴。

無知蒙昧にして、天下不滅の無一文。

彼女はエミリア。

ハーフエルフにして、王選候補者の1人だ。

そして、空中に浮いている猫はパック。

精霊で、エミリアと契約している。

エミリア「そう言えばさ、さつき、レムとラムが何か変な物を見つけたみたいなの。」

スバル「変な物?」

エミリア「何か、ボタン?っていう物が現れたのよ。」

レムとラムとは、このスバル達が住んでいる屋敷で働いている鬼族のメイドだ。

スバル「そういうのはさ、押すなよ!絶対押すなよって奴だな!」

エミリア「そうなの?」

パック「そうなんだねえ。」

世界は変わり。

とある世界では。

ターニャ「うわー!!うわー!!!」

彼女はターニャ・フォン・デグレチャフ。

元々はエリートサラリーマンだったが、信仰心が無いという理由で神を名乗る存在Xに幼女として異世界転生された。

シュューゲル「何をやってるのだね！このままでは暴発してしまうぞ！早く宝珠拡張のボタンを押すのだ!!」

彼はアーデルハイト・フォン・シュューゲル。

ターニヤが使用しているエレニウム九五式を開発した人物だ。

ターニヤ「そうは言っても、この欠陥品、仕様と全然異なる……!」
シュューゲル「欠陥品だ?!このエレニウム九五式を超える私の、最高傑作を!!」

ターニヤ「聞けMOD!!そもそもだな!ボタンを押せと言われても2つあるのではどちらを押せばいいのか分からないだろ!!」

シュューゲル「何を言っているのだね?ボタンは1つしかないだろ。」

ターニヤ「ええっ?」

ターニヤの手元には、本来のボタンと、零士達の世界にも現れたボタンがあった。

少しの静寂の後。

ターニヤ「2つある物は2つなんだから2つだろうがー!!!」

シュューゲル「君は頭がおかしくなったのかね!」

ターニヤ「貴様に言われたくないわー!!」

シュューゲル「早く押したまえ!命令だ!め、い、れ、い!だぞー!!」

ターニヤ「ううっ。凄まじきは宮仕え。命令一つで人権と理性が無意味になるうとは。もう好きになれだ!どっちも押してやる!ああ、押してやるとも!!」

そうして、ターニヤは消えた。

はたまた世界が変わり。

とある王宮の間にて。

アルベド「……この2つがナザリック地下大墳墓及び建国されたアインズ・ウール・ゴウン魔道国が諸外国に対する対応です。」

アインズ「ご苦労、アルベド。」

ここは、とあるゲームの世界に異世界転移した元サラリーマンのい

る世界だ。

骸骨が、アインズ・ウール・ゴウン。

元サラリーマンだ。

そして、彼女はアルベド。

ナザリック地下大墳墓の階層守護者統括の担当だ。

デミウルゴス「アインズ様。」

アインズ「何だ、デミウルゴス。」

彼はデミウルゴス。

ナザリック地下大墳墓第七階層守護者だ。

デミウルゴス「失礼ながら、進言の許可を。」

アインズ「許そう。何だ？」

デミウルゴス「実は、最近、ナザリック内で奇妙な現象が起こっているとの報告が入っております。」

アインズ「奇妙な現象？」

デミウルゴス「ボタンみたいな物が唐突に現れるという物です。」

アインズ「なるほどな。ナザリック地下大墳墓に命じる！その様な物が現れし次第、トラップ解除のルーチンに従い、対処せよ。」

「！！！！！！」

アインズ「まあ、お前達はよくやっているがな。」

アルベド「勿体ないお言葉です。」

ちなみに、残りはアウラ、マール、シャルティア、コキュートスだ。

アインズ（本当に罠なのか？そもそも、そんな怪しい物を押す奴が居る筈がない。よっぽどの初心者がやる事だ。）

現在、押した奴が何人か居る。

アインズ「ん？」

アルベド「どうかされましたか？」

アインズ「いや、続けてくれ。」

アルベド「それでは、本日の議題です……。」

アインズ（何だったんだ、今の？）

突如起こった違和感に首を傾げつつ、椅子に座ろうとすると。件のボタンが現れ、押してしまった。

アインズ「うん？うんんん!!」

そうして、何処かへと転移された。

はたまた世界が変わり。

キリト「噂？」

カルム「何だそれ？」

アスナ「何か、ボタンが唐突に現れるらしいのよ。」

ミト「それも、何度も。」

ユイ「現在、ALOでは、その様な現象が多発してるのです。」

カナ「ただ、押そうとする直前で消えるのですが。」

ここは、仮想現実の技術が発達し、新たな人類が生まれた世界。

黒髪の青年はキリト。

様々な仮想世界を渡り歩き、問題を解決してきて、黒の剣士と呼ばれている。

横の紫の髪は青年はカルム。

キリトと共に仮想世界を渡り歩き、戦ってきた青年で、紫紺の剣士と呼ばれている。

青髪の女の子はアスナ。

キリトの恋人で、閃光の異名を持つ。

紫のポニーテールの女の子はミト。

カルムの恋人で、紫鎌の異名を持つ。

アスナの膝に乗っているのはユイ。

SAO由来のAIで、キリトとアスナの愛娘。

ミトの膝に乗っているのはカナ。

ユイと同じくAIで、カルムとミトの愛娘。

リーファ「でも、それって大分怪しい気配ですよ。」

アールン「運営にも聞いてみたんですが、分からないの一点張りでしたよ。」

シノン「何か嫌な予感がする。」

エターナル「確かなな。運営が分からない以上、無闇に手を出すのは危険だ。」

金髪のポニーテールの女の子はリーファ。

キリトの妹で、ALOではスピードホリックと呼ばれている。
リーファの隣にいる緑色の髪の青年はアーロン。
リーファの彼氏で、ALOではシルフの強い人物の内の一人だ。
猫耳を生やした女の子はシノン。
ALOでもGGOでもスナイパーとして名を馳せている。
シノンの隣にるのが、エターナル。
シノンの彼氏で、白の支配者という異名を持つ。
ユウキ「でも、面白そうだよな。」
オーズ「確かに！」
アंक「バカか！」
ノーチラス「面白そうだからって、押そうとするなよ。」
ユナ「まあ、普通は押さないけどね。」
紫のロングヘアの女の子はユウキ。
ALOでは絶剣という異名を持つ。
ユウキの隣にいるのはオーズとアंक。
オーズはユウキの彼氏で、アंकは、オーズの仲間だ。
黒に紫の線が入った装備をしているのはノーチラス。
ユナとは幼馴染で、スプリガンという種族をセレクトしている。
そのノーチラスの隣に居るのはユナ。
ノーチラスの恋人で、ALOでは歌姫として名を馳せる。
アリス「唐突に現れて、消えるですか。」
ユージオ「何なんだろうね。」
イーデイス「さっぱり分かんない。」
ダイジ「だが、気をつけた方が良いのは確かだな。」
カゲロウ「だろうな。」
金髪の騎士はアリス。
ユージオとは幼馴染で、UWでは金木犀の整合騎士。
その隣に居るのはユージオ。
アリスの恋人で、UWでは青薔薇の剣を振るったキリトの親友。
ポニーテールの女性はイーデイス。
アリスと同じく整合騎士で、UWでは闇斬剣を使用している。

イーデイスの隣にいるのはダイジ。

イーデイスの恋人で、UWでは表裏の弓剣を振るつたカルムの親友。

そして、ダイジの口調が変わった理由は、ダイジのもう一つの人格、カゲロウとしての人格だ。

キリト「まあ、気をつけよう。運営も分からない以上、手を出すのは危険だ。」

カルム「何が起こるか分からないからな。」

ミト「これ以上、厄介事に首を突っ込まないでよね。」

そうして、移動すると、キリトの足元からインターホンの音が。恐る恐る足を退けると、ボタンが。

キリト「何だよこれ!!」

カルム「何か世界が……!」

そうして、彼らは消えた。

一方……。

夏美「こおら!ボケガエル!」

ケロロ「ゲロツ!?何でありますか!?!」

ここは、ケロン星という星からやってきたケロロ小隊がいる世界。緑のカエルがケロロ軍曹。

ケロロ小隊の隊長で、優柔不断。

ケロロを怒鳴ったのは日向夏美。

地球最終防衛ラインという異名で恐れられている。

夏美「アンタ達!また変な作戦を始めたわね!」

ケロロ「何の話でありますか?」

冬樹「何か、変なボタンが出現するんだよ。」

彼は日向冬樹。

宇宙外交官と呼ばれていて、三度の飯よりもオカルト好き。

ギロロ「変なボタンだと?」

タママ「そんなの知らないですう。」

ドロロ「クルル殿は知らないでござるか?」

クルル「そんなもん、知るわけねえだろ。」

モア「てゆうか、詳細不明？」

この4人はケロロ小隊の残りの面子。

アングルⅡモアは、ケロン星と同盟関係にあるアングル族の少女だ。

小雪「ドロロ達は知らないみたいだね。」

桃華「一体、何なんでしょうか？」

サブロー「ま、そう簡単には分からないよね。」

東谷小雪、夏美のクラスメイト。

西澤桃華、冬樹のクラスメイト。

サブロー、残りの4人にとっては先輩。

ケロロ「とにかく！我輩達は知らないであります!!」

夏美「本当に？」

ケロロ「本当であります！」

夏美「じゃあ、誰の仕業……。」

冬樹「あ！姉ちゃん！」

すると、夏美が踏んでいた。

夏美「何よこれ！」

ケロロ「夏美殿!?何で踏むんでありますか!？」

ギロロ「そんな事を言っている場合じゃないぞ！」

すると、空間が歪み、ケロロ小隊と地球人は消えた。

一方、とある世界では。

アーク「アリアン殿。その泉は、あとどれくらい行けば着くのだ？」

アリアン「そうね……。もう少しかかるかもしれないわね

……。」

チヨメ「それにしても、アーク殿の素顔が骸骨なのは驚きました

よ。」

ポインタ「キュ！」

彼はアーク。

ゲームのキャラのまま、異世界へと転移した男だ。

その仲間である、ダークエルフのアリアン、獣人のチヨメ、精霊獣のポインタ。

フンバの目論見を砕き、現在は、アークにかけられている呪いを解くために、泉へと向かっている。

すると、ポンタが何かに気付く。

ポンタ「キュ！」

アーク「どうした、ポンタ？」

アリアン「あれは……？？」

チヨメ「何でしょうか……？？」

ポンタが見つけたのは、めぐみん、アインズ、ターニヤ、キリト、夏美が押ししてしまったあのボタンだ。

アリアン「何かしら、これ……？？」

チヨメ「さあ……？？」

ポンタ「キュ？」

アリアン、チヨメ、ポンタが首を傾げる中、アークはというと。

アーク（こ、これ！もしかして、何かのトラップじゃあ!?!）

アークは、筋金入りのゲーマーである為、すぐにトラップだと見抜く。

だが、アリアン達は、トラップだと気づかず。

チヨメ「何か、押せそうですよ。」

アリアン「試しに押してみましようか？」

ポンタ「キュ。」

アーク「ちよ……!!！」

アークは、アリアン達がボタンを押す事を止めようとしたが、間に合わず、インターホンの音が周囲に鳴り響く。

アリアン「何、この音!?!」

チヨメ「何か、周囲が歪んでますよ!?!」

ポンタ「キュ!?!」

アーク「皆！掴まれ！」

アーク達が戸惑う中、彼らは、姿を消してしまった。

一方、別の世界、魔国連邦では。

リムル「謎のボタン？」

レイト「え、どうなってんの？」

ヴェルドラ「どういう事だ？」

ゲルド「実は、リムル様とレイト様達が居ない間に、謎のボタンが出現する様になったのです。」

あのスライムは、リムル。

元々は、ただのサラリーマンだったが、通り魔に刺されて死亡し、スライムへと転生した。

その隣に居るのは、レイト。

仮面ライダーキマイラの力を授かり、キメラことギフテリアンに転生して、現在は、仮面ライダージユウガだ。

その周囲に居るのは、暴風龍ヴェルドラ、黒嵐星狼のランガ、猪人族のゲルド、悪魔族のディアブロ、竜魔人のミリム。

リムルとレイトは魔王となり、魔国連邦に帰ってきてから、しばらくが経ったのだが。

ちなみに、ディアブロは、ファルムスでの作戦の経過報告に一時的に戻ってきて、ミリムは偶々遊びに来た。

ディアブロ「まったく。どこの輩が、その様な物を置いたのですかね。」

リムル「ゴブタ………じゃないよな。」

ランガ「分かりませんな。」

ミリム「そんな事よりさー、私と話そうなのだ！」

レイト「ま、まあ、そのボタンが発見されても、絶対に押すんじゃないぞ。」

ディアブロ「承知しました。」

リムル（まあ、進んで押す様なバカは、居ない………よな？）

リムルは、そう思っていたが、現在、六人も人が、そのボタンを押ししてしまった。

そんな風に考えている間にも、話はどんどん進んでいく。

リムルは、椅子に座ろうとすると、突然、そのボタンが現れ、リムルは、それを押ししてしまう。

リムル「えっ!? 何これ!？」

レイト「何が起こってんだ!？」

リムルとレイトとその場にいた面子は、忽然と消えてしまう。
こうして、8つの世界から移動した。
この8つの世界が変わる。

第1話 集結！おくてつと

目を開けるとそこには、グラウンドが広がっていた。

アインズ「ここは……………!?!」

デミウルゴス「ここは……………どうやら、我々の住む世界とは違う様ですね。」

アインズ（こ、これって……………!?!もしかや異世界転移!?!）

アクア「すいませーん。ちよつと聞きたい事があるんですけど。」

アインズ「んん!?!」

アクア「うわっ!?!」

一方、零士とカズマは、周囲を見渡していた。

カズマ「戻ったのか……………?」

零士「いや、戻ったにしては、日本でここを見た事がないんだが……………。」

アクア「カズマ！零士！ちよつと見てよ、あれ！アンデッドよ、アンデッド!!」

ダクネス「しかも、モンスターの大量まで!?!ああっ……………!?!私たちが、こいつらに抵抗虚しく蹂躪され……………!?!」

めぐみん「フッフツ！我が爆裂魔法と風双剣翠風の出番の様ですね!!」

リナ「ちよつと、落ち着いて!?!」

カイト「爆裂魔法を撃とうとするな!?!」

カリン「まず、状況を確認しないと……………!?!」

カルム「あの……………。」

『ん?..』

零士達が、アインズ達に驚いている中、カルムが零士達に話しかけていた。

零士「何だ?」

カルム「ここって、どこですか?」

カズマ「いや、分かれれば苦労はしないって。」

キリト「それもそうだな。」

アスナ「ていうか…………お化け!!」

ミト「アスナ、落ち着いて!!」

リーファ「アスナさんが壊れた…………。」

アーロン「まあ、無理もないでしょう…………。」

シノン「ねえ、あれつて、モンスターなのかしら?」

エターナル「全く状況が飲み込めないな。」

ユウキ「あれっ!?メニューが出ない!!」

オーズ「え?あ、本当だ。」

アंक「おい!どうなつてやがる!?!」

ノーチラス「何!?!…………本当だ。」

ユナ「つまり、この世界はゲームの世界じゃないって事?」

アリス「しかし、ステイシアの窓も出ないとなると、ここはどうなつているのでしょうか…………?」

ユージオ「さあ…………?」

ダイジ「何にせよ、警戒はしておくべきだろうな。」

イーデイス「そうね…………ていうか、肉体はALLOなのに、装備はアンダーワールドの物になってるわね。」

そこには、カルム達をはじめとする面子が居た。

すると、アークが話しかける。

アーク「あのお、すいません。」

『ん?』

アーク「ここがどこだか、分からんか?」

カルム「いや、俺たちもここに飛ばされて、訳が分からないんだよ。」

チヨメ「もしかして、アレが原因でしょうか?」

アリアン「迂闊に押すんじゃないかな?…………。」

ポンタ「キュ…………。」

そこには、アーク、アリアン、チヨメ、ポンタの姿が。

更に、リムルとレイトが話しかける。

リムル「ちよつと良いか?」

『ん?』

レイト「ここつて、一体何処なんだ?」

零士「俺にもさっぱり……………」

ゲルド「ここは……………」

ミリム「何処なのだ？」

ランガ「一体、どうなっているのだ……………!？」

ディアブロ「分かる事としては、我々の世界ではない事は確かですね。」

ヴェルドラ「これは……………漫画で見た、異世界転移とやらか!？」

そこには、リムル、レイト、ランガ、ミリム、ゲルド、ディアブロ、ヴェルドラの姿が。

それを見た零士、カズマ、カイトの心境は。

(（オークが居るけど、オスだな。）)

そう、この三人は、元の世界で、オークに対してトラウマを抱いていたが、オスだと知って安堵していた。すると。

アクア「ああーっ！アンデッドのみならず、悪魔まで居るの!?!上等よ！全員纏めて成仏させてやるわ!!」

リナ「ちよつとアクア！落ち着いて！」

ディアブロ「……………何だ、あの下賤な女は。」

ダクネス「しかも、オークのオスまで居るぞ！さあ！私を辱めてみせろ！」

ゲルド「え……………?」

カリン「ごめんなさい！ごめんなさい！ちよつとダクネス！こんなに性に癖を發揮しないでよ！」

リムル「どうなってるんだ……………?」

アーク「分からない……………」

レイト「えええ……………!?!」

カルム「なんなんだ……………!?!」

アインズ達は、呆然としていた。

すると、朝礼台に、クルト・フォン・ルーデルドルフが現れて。

ルーデルドルフ「お前達！授業の時間だ!!」

ルーデルドルフは、タバコを吸いながらそう叫ぶ。

その際、その場に居た全員がルーデルドルフを見ると……………。

『……………誰?』

その場にいる全員が、同じ様な事を考えていた。全員は、2組に案内される。

ただ、ランガだけは、飼育小屋へと連れて行かれた。

そこには、ターニヤ達とケロロ達が既に居た。

その際に、ターニヤとケロロが考えていた事としては。

ターニヤ（何だ!?何だここは!?)

ケロロ（どこなんでありますか!?)

2人は驚愕していた。

突然、見知らぬ世界に飛ばされたと思ったら、学校に居たのだから。ボタンを押した経緯を思い出し終わると、周囲の確認をする。

ターニヤ（一見、元の世界だ。だが!）

ヴィーシャ「ひっ!？」

アクア「何でしれつと座ってるのよ!」

カズマ「お前だつて座ってるじゃないか!」

零士「喧嘩すんなよ!!」

リナ「落ち着きなつて!!」

ターニヤ（あれは、ファンタジーの世界か? 剣以外の装備はまともじゃない。）

ケロロ（ていうか、あの一団はなんですか? 猫耳が生えてたり、耳が尖つてたりしててであります……………。もしか、敵性宇宙人でもありますか!?)

ターニヤは零士達を、ケロロはカルム達を見てそう判断している。

カルム達は、外見はALLOだが、カルム、キリト、ミト、アスナ、ノーチラス、ユナはSAOの、シノンとエターナルはGGOの、アリス、ユージオ、イーデイス、ダイジはアンダーワールドでの服装になっている。

リーファとアロンとユウキは、ALLOのままだ。

ユイとカナは、プライベート・ピクシーではなく、人間としての姿になっている。

そして、ターニャとケロロは、アインズ達とリムル達を見る。
ターニャ（そして、こいつらに至っては、人ですらない。）

ケロロ（何か、ペコポン人ではないのは、確かでありますな。）

ターニャ（これは、神を騙る存在Xの仕業……と、考えるべきか
……!?!）

ターニャとケロロがそう考えていると、廊下から声が聞こえてくる。

??? 「廊下を走るのは、すごく良くないと思うの。」

「まったく、バルスのせいで走る羽目になったわ。」

「ちよつと反省する必要があるかしら!!」

??? 「お前らが起きないのを俺のせいにするじゃねえよ!」

廊下から声が聞こえてきて、全員が廊下の方を向く。

??? 「スバル君大丈夫ですか?」

スバル「ああ、抗って抗って抗って手に入れたこの幸せ!!……が、

ちよーと不思議な状況だけ!!そこは置いといて一先ずは……。」

そんな声がすると、教室のドアが開かれる。

スバル「毎日が楽しい学園生活を……。」

スバルは、教室のドアを開くと、中にいる面子を見渡す。

そして、叫ぶ。

スバル「………って、なんじゃこの状況はあああああ!?!」

スバルが叫ぶ中、後ろには、エミリア、パツク、レム、ラム、ベア

トリスが居た。

そんな状況に、他の面子は。

アインズ（また何か増えてるよ?）

アルベド「アインズ様、殲滅致しましょう。」

アインズ「まあ待て!!まずは情報収集からだ!!」

アルベド「かしこまりました。」

カズマ「……これ、何かヤバイ状況だよな?」

零士「だよな……。」

アクア「大丈夫よ!!カズマと零士には女神である私が付いてるわ!!
任せて頂戴!!」

カズマ「だからヤバいって言ってるんだよ!？」

零士「どうなってんの……………?」

カルム「ええ……………?」

キリト「誰だ……………?」

アスナ「もう、頭が痛い……………」

ミト「大丈夫?」

ターニャ「これが存在Xの試練だと言うなら行幸だ!!奴の目論見を破壊して目に物を見せてやるう!!アヒヤハハハハハハハ!!アヒヤハハハハハハハ!!」

ヴィーシャ「しよ、少佐あ?少佐あ~~~~~?!」

ケロロ「これ、どうなってるとありますか?」

アーク「……………どんな展開なんだ……………?」

リムル「嘘だろ……………」

レイト「完全に想定外だな……………」

そんな風になっていた。

一方、スバル達は。

スバル「……………なんだよこれ。」

ベアトリス「普通じゃない奴がいっぱいなのよ。」

ラム「バルス、情報が無さすぎるわ。とりあえず犠牲になって来て。」

スバル「犠牲が確定なのね!？」

レム「大丈夫です!!スバル君と姉様は、レムが護ります!!」

そんな中、エミリアが口を開く。

エミリア「ねえ、スバル。」

スバル「ん?」

エミリア「ここは……………凄く沢山のお友達が居るのね!!」

スバル「こんな状況でもポジティブなエミリアたん、マジ天使!!」
笑顔で話すエミリアを見て、スバルも喜びながら答えるのだった。
一方、校長室では。

ルーデルドルフ「学園生活の、始まりか。」

ルーデルドルフがそう呟く。

こうして、八つの異世界からやって来た者達による、奇妙な学園生活が始まった。

第2話 緊迫！じこしようかい

8つの異世界からやって来た人たちが集結すると、ロズワールが入ってくる。

ロズワール「以上が、学園生活における約束事だあくよ。君達は共に学ぶ仲間だからね、仲良くするんだあくよ。」

そう言うロズワールに、スバルが手を挙げる。

スバル「ロズつちく。」

ロズワール「先生だよお。」

スバル「ロズつち先生!!何やってんだよコレ?」

スバルの質問に対して、ロズワールは解答する。

ロズワール「学園生活。」

スバル「そう!!学園生活!!青い春と書いて、青春まつさかりな学園生活……。でもどう見ても同級生の中に学生じゃない感たっぷりな人が沢山いらつしやるんですけどお!!」

そう言つて、スバルは、アインズ、ターニヤ、カズマ、零士、キリト、カルム、ケロロ、アーク、リムルを指差しながら、大声で突っ込む。

「「「え?」」」

その学生じゃない感たっぷりな人に入れられた事に、カズマ、零士、キリト、カルムは唾然とする。

ロズワール「見た目で人を判断しちゃだあくめだよお。」

ラム「見た目で人を判断するだなんて最低ねバルス。」

スバル「いやいやいや!!そう言う問題じゃないでしょ!」

ロズワールが、首を振りながらそう言い、ラムもロズワールに同意する様な発言をして、スバルが突っ込む。

すると、話題を変える為か、アインズがわざとらしい咳払いをする。その咳払いで、全員の視線がアインズに集中する。

アインズ「む…むうん!!要するに…我々は、ここでこの者達と一緒に学園生活とやらを行わなくてはならない。と言う事か?」

ロズワール「…そういう事になあくるね。」

アインズの質問に対して答えるロズワール。
すると、次はリムルが質問をする。

リムル「もし、断ったら？」

ロズワール「断る事は出来ないよお。校則違反につき、指導がは
いっっちゃうかあくらね。」

ロズワールは、目を細くしながら答える。

少しの間、自由時間になる。

ミリムがリムルに話しかける。

ミリム「なあ、リムル、レイト。」

リムル「どうした？」

レイト「ん？」

ミリム「何か、あの赤い剣を持つてる奴が、お前達の事を見てるの
だ。」

リムル「えっ？」

ミリムに指摘され、零士の方を向くリムルとレイトだが、零士はす
ぐに顔を前に向ける。

ディアブロ「何やら、リムル様とレイト様の事を見ていた様です
な。」

ゲルド「どうしたのだろうか……？」

リムル「さあな。」

ヴェルドラ「もしや、リムルとレイトの事が気になるのではないか
!？」

レイト「それは無いだろ。」

一方、カルム達は。

カルム「なあ、あの人を持つてる剣って……。」

ユージオ「うん。火炎剣烈火だね。」

アリス「なぜ、あの者も火炎剣烈火を持っているのでしょうか
……？」

キリト「それより、メニューが出なくなったのはどういう事だ？」
アスナ「つまり、ソードスキルを使えないかもしれないって事？」
ミト「どつちにしろ、分からない事だらけね。」

そんな風に話していた。

すると、ロズワールが手を叩く。

ロズワール「はいはい!!それじゃあみいくんな?自己紹介でもして貰おうかあ〜ね。まずはスバル君かあ〜ら。」

そう言つて、自己紹介が始まる。

ロズワールに指定されたスバルは、立ち上がる。

スバル「俺の名前はナツキスバル!無知蒙昧にして天下不滅の無一文!!よろしくな!!」

スバルは、そう言いながら、サムズアップをする。

だが、誰一人として反応しなかった。

ラム「何処の世界に来て、バルスがスベってる事が分かって安心したわ。」

スバル「言い方酷過ぎない!?!」

ロズワール「じゃあ順番にどうぞお?」

エミリア「は、はい!!」

ラムの言葉にスバルは突っ込むが、ロズワールはそれを無視して、エミリアに自己紹介を促す。

エミリア「わ…私はエミリアです。よろしくお願いします。」

パツク「僕は精霊のパツクだよ!!リア…あ、この子の事だけど、リアを虐めたら許さないからね!!」

エミリア「もおくパツクてば。」

エミリアが自己紹介を終えるとエミリアの髪からパツクが出て来て、そう挨拶しながら胸を張った。パツクに呟くエミリア。

それを見ていた一部の人は。

アインズ「ふうむ…………。(聖霊にエルフ…………いや、ハーフェルフか。どうやら、種族はユグドラシルに限りなく近いみたいだな。)」

アリアン(ハーフェルフか…………。何か、複雑だなあ…………。)

アリス(何か、あのエミリアの風貌が、最高司祭様に似ている気がするが、気のせいかな。)

その3人はそんな風に考えていた。

その後、自己紹介は続く。

ラム「ラムよ。そしてこっちは妹のレム。」
レム「レムです。よろしくお願いします!!」

ベアトリス「ベアトリスなのよ。……よろしくしなくても良いかしら。」

スバル「そんな事言ったら、友達100人出来ねえぞ?」

ベアトリス「別に欲しいと思った事もないのよ!? 本当にムカつくかしら!!なんのよまったく……。」

ターニヤ「……あの小さな子どもまで。」

ヴィーシャ「えへへ……。」

ベアトリスがそっぽを向きながらそう言うのにスバルが突っ込み、ターニヤが呟き、ヴィーシャは愛想笑いをする。

次は、アーク達が自己紹介をする。

アーク「どうも、こんにちは。アークです。で、こっちがポンタだ。」

ポンタ「キュ!」

アリアン「私はアリアンよ。」

チヨメ「私は、チヨメと言います。」

アーク達の自己紹介を見ていた人たちは。

リムル(あのアリアンって人、エルフ……いや、ダークエルフか。

で、チヨメって人が獣人か。俺たちの世界に近い気がするな。)

スバル「あの人も、エルフなのかな。」

エミリア「そうみたい。」

マーレ「お姉ちゃん、あの人、私たちと同じダークエルフだよね。」

アウラ「そうだね。」

アリス「あの者も、全身に鎧を着てますね。」

イーデイス「という事は、騎士なのかしら?」

そんな風に反応していた。

すると、ターニヤが立ち上がる。

ターニヤ「さて、次は私か。」

ヴィーシャ「え?」

突然、ターニヤが立ち上がった事に、ヴィーシャは驚いて上官を見る。

ターニャは自己紹介を始める。

ターニャ「……帝国、」

『っ!』

ターニャ「……帝国軍、203航空魔導大隊大隊長。ターニャ・フォン・デグレチャフ少佐だ!!」

ターニャの帝国という単語に、アインズ、アルベド、デミウルゴス、リムル、レイト、ディアブロ、ミリムが反応する。

ターニャは、少し動揺しかけるも、自己紹介を終える。

他の203航空魔導大隊のメンバーも順番に自己紹介し始める。

ヴィーシャ「同じく魔導大隊、ヴィクトーリヤ・イヴァーノヴナ・セレブリヤコフ。中尉です!!」

ヴァイス「マテウス・ヨハン・ヴァイス。大尉です!!」

ケーニツヒ「ヴェリバルト・ケーニツヒ。中尉です。」

ノイマン「ライナー・ノイマン。中尉です。」

グランツ「ヴォーレン・グランツ。中尉です!!」

203 航空魔導大隊の自己紹介は、まさに軍人のそれだった。

それを聞いていたケロロ小隊は。

ケロロ「あっちの方が階級が上ですか………。敬語とか使った方がいいでありますかな……?」

ギロロ「そうしないとダメだろうな。」

ドロロ「そうでござるな……。」

ケロロ小隊は、一番高い階級だと、クルルの曹長だが、203 航空魔導大隊は、自分達よりも階級が上だった。

一方、それを見ていた他の世界の人物たちは。

カズマ「うわあ、戦争な世界の人達だよ。」

零士「軍人だな……。」

アインズ「……。(わあ、戦争な世界の人達だよ。)」

スバル「おおく、ベア子と似た感じのが居るぞ? 仲良くしなきゃな

!!」

ベアトリス「何度言ったら分かるかしら!! お前より長く生きているし、歳関係なく仲良くするつもりもないのよ!!」

カズマ、零士が反応して、アインズは心の中でそう思った。スバルは、ベアトリスを揶揄って、ベアトリスが怒る。

次は、ケロロ達が自己紹介する事に。

ケロロ「ええ〜こほん。我輩は、ガマ星雲第58番惑星、宇宙侵攻軍特殊先行工作部隊、ケロロ小隊長、ケロロ軍曹であります！」

ギロロ「同じく、ギロロ伍長だ。」

タママ「タママ二等兵です！」

ドロロ「拙者、ドロロ兵長でござる。」

クルル「クルル曹長だぜえ。クツクツクツクツ……………」

モア「私は、アングルⅡモアです！」

冬樹「僕は、日向冬樹です。」

夏美「私は、日向夏美。よろしくね。」

桃華「私は、西澤桃華です。」

小雪「私は、東谷小雪です。」

サブロー「僕は、サブローだよ。」

それを聞いたターニャ達は。

ターニャ「何だ、むこうの方が階級は下か。」

ヴィーシャ「みたいですね。」

そんな風に反応していた。

一方、他の世界の面子は。

カルム（え!?あれ、宇宙人なの!?)

イーデイス「それに、侵攻って、侵略って事!?’

アリス「危険そうな存在ですね。」

アインズ「……………（ええ!?宇宙人!?)」

アルベド「アインズ様、あの者達を抹消した方が宜しいかと。」

アインズ「まあ、待て。」

アルベド「かしこまりました。」

リムル「……………嘘だろ……………」

ディアブロ「排除しましょうか?」

リムル「待て、落ち着け。」

ディアブロ「ハッ。」

ユージオ「……………あのサブローって人、ベクタと声が似てる様な気がするんだけど、気のせいかな……………?」

ダイジ「気のせいじゃないのか?」

アスナ「ていうか、ロズワールって先生といい、あのクルルって人……………?といい、何か須郷と声が似てる気がするわね。」

キリト「確かに……………」

アーク（これは、これでファンタジーだ!）

零士「カズマ。」

カズマ「お前の言いたい事は分かるぞ。」

零士「恐怖の大王が居るよ……………」

カズマ「ああ……………」

ケロロ小隊の自己紹介に、警戒心を見せる整合騎士コンビに、同様に警戒心を見せるアインズとアルベド、リムルとティアブロ。

地球人に対しては、ユージオとダイジは、サブローの音が、アンダーワールドで戦った皇帝ベクタと声が似ていると気にしている。

キリトとアスナは、ロズワールとクルルの声が、須郷に似ている事を気にしている。

アークは、喜んでいた。

零士とカズマは、恐怖の大王その人が居る事に戦慄していた。

次は零士達に入る。

すると、アクアが立ち上がる。

アクア「はいはいはいは〜い!!次私の番ね!!え……………ゴホン!!私は全知全能にして水の女神……………」

カズマ「はいコイツアクア!!」

アクア「へ?」

アクアは、自己紹介をしようとするが、カズマに遮られる。

カズマ「俺、カズマ。こっちめぐみん。これダクネスね。」

零士「俺は、神崎零士です。よろしく。」

リナ「私は、リナです。」

カイト「俺は、カイトだ。」

カリン「私は、カリン!よろしくね!」

アクア「……ちよつとちよつとカズマ!!私の輝ける自己紹介の場をサラッと流さないでよ!!ていうか、何で零士達には普通に自己紹介させるのよ!!」

めぐみん「そうですよ!!この紅魔族随一の天才魔法使いの見せ場を!!」

ダクネス「私をコレ呼ばわり……コレ、まるで物のような扱い。」

カズマが、零士達を除いた面子を簡潔に紹介した事に抗議するアクアとめぐみん。

ダクネスは、性癖を起こしていた。

それを見ていた面子は。

ドロロ「何か、零士という人の声が、拙者と似ている気がするでござる。」

小雪「そうだね。」

リーファ「ていうか、あのカリンって人、リズさんと似てる気がするわ……。」

イーデイス「何か、アリスみたいなのが居るわね。」

ユージオ「何でだろう、アリスと違って、ダメな気がする……。」

アリス「確かに……。」

キリト「ていうか、気づいたけど、カイトって奴、闇黒剣月闇を持ってるぞ!!」

ダイジ「みたいだな。」

ドロロは、自分と声が似ている零士に反応して、リーファはリズベットに似てるカリンに反応して、イーデイス、ユージオ、アリスは、ダクネスに反応して、キリトは、アンダーワールドで使った剣を、他の世界の面子が持つる事に驚く。

零士は、アクアとめぐみんを抑える。

零士「ちよつと!次の紹介が止まってるから!すみません!次、どうぞ!!」

カルム「あ、はい……。」

アクア「ちよつと!これで終わり!!」

零士は、カルム達に自己紹介を促せる。

「カルム達は、自己紹介を始める。」

キリト「俺はキリト。よろしく。」

カルム「俺はカルムだ。よろしく頼む。」

アスナ「私は、アスナです。」

ミト「私はミト。」

ユイ「こんにちは。ユイと言います。」

カナ「私は、カナです。」

リーファ「私、リーファ。よろしくね。」

アーロン「僕は、アーロンです。よろしくお願いします。」

シノン「シノンよ。よろしく。」

エターナル「俺はエターナルだ。よろしく頼む。」

ユウキ「僕はユウキ！よろしくね！」

オーズ「オーズだ。よろしく。」

アंक「アंकだ。」

ノーチラス「僕はノーチラスだ。よろしく頼む。」

ユナ「私はユナ！よろしくね！」

アリス「初めまして。私はアリス。アリス・シンセシス・サーティ

です。」

ユージオ「僕はユージオです。」

イーデイス「私はイーデイス。イーデイス・シンセシス・テンよ。」

ダイジ「俺はダイジ。よろしく。」

SAO組は自己紹介を行う。

それに対する反応は。

零士「……………なんか、剣士が多いな。」

リナ「確かにね。」

カズマ「何か、ダクネスよりもまともな金髪女騎士が居るぞ。」

ダクネス「くうん！カズマは、相変わらず辛辣だな……………！」

アリアン「エルフみたいなのと獣人が居て、残りは妖精って言った

所かしら。」

アーク「そうだな。（アレって、ゲームのアバターみたいな気がするのは、気のせいかな？）」

ロズワール「じゃあ残るは君達だあ〜ね。」

そうしているとロズワールがアインズ達に声を掛ける。

まず、アインズはそれを聞いてすぐさま立ち上がり、アインズに続くようにアルベド達も席を立った。

アインズ「はあ……一先ずはこの学園生活を送るしかないようだな。では私から……。我が名はナザリック地下大墳墓の支配者、アインズ・ウール・ゴーン!!その人である!!」

アインズは胸に手を当てながら話した後目の部分から赤く光らせ、まさに死の王に相応しきオーラを発しながら自身の名を叫んだ。すると。

アルベド「……………ああ〜ん!!♡ああ!!」

アインズ（え、ええ〜……………!?!）

それを聞いて何故か興奮したような声を挙げたアルベドは机に倒れ、それを見てアインズは少し心中で驚いた。

ロズワール「おんやあ〜そこの彼女?体調でも悪くしたのかあ〜な?」

アルベド「何を言っているのです!!アインズ様のあのお姿を見て、私の奥深い所がウズウズしているのです!!」

ロズワール「それは……………また、凄い事だあ〜ね。」

ケロロ「どういう事でありますか……………?」

アルベドの発言に笑顔で返すロズワールと、戸惑うケロロ。

ロズワール「じゃあ、君の自己紹介は後に回して他の人から……………」

アルベド「っ!!戯れ言を!!アインズ様が威厳を示されたのに、私が休むなどあり得ません!! 皆の物、ナザリックが威を示しなさい!!」

『はい!!』

『はっ!!(ハッ!!)』

ロズワールの言葉を聞いて立ち上がったアルベドは言い返ししながら他の階層守護者達に命じ、それに他の階層守護者は答えた。

シャルティア「第一、第二、第三階層守護者。シャルティア・ブラッドフォールン。」

コキユートス「ダイ5カイソウシユゴシヤ。コキユートス。」

アウラ「第六階層守護者!!アウラ・ベラ・ファイオーラ!!」

マーレ「同じく……:マーレ・ベロ・ファイオーレ。」

デミウルゴス「第七階層守護者。デミウルゴスです。」

アルベド「そして……私がナザリツク地下大墳墓守護者統括、アルベドと申します。」

ナザリツク地下大墳墓の面々が自己紹介をする。

アスナは、アンデッド揃いのナザリツクの面々に怯えていた。

その他の面子は、ナザリツクの面々に若干の警戒心を見せていた。ちなみに、アーク達は。

チヨメ「アーク殿と同じ骸骨が居ますよ!」

アリアン「でも、アークと違って、完全なアンデッドね。それに、あのアウラとマーレって子、私と同じダークエルフみたいね。」

アーク「そうだな。」

ロズワール「最後は、君達だあくよ。」

ロズワールは、リムル達にそう伝える。

すると、リムルの影からランガが現れる。

リムルは、一度人間としての姿から、スライムとしての姿になる。

リムル「俺は、リムル!!テンペスト。見ての通りスライムだが、悪いスライムじゃないから安心してくれ。」

レイト「俺は、レイト!!テンペストだ。キメラという種族で魔王ではあるんだが、敵対はしないさ。」

ランガ「我はランガ。リムル様にお仕えする者だ。」

ヴェルドラ「俺は、ヴェルドラ!!テンペストだ!ガーハツハツハツ!!」

ミリム「私は、ミリム!!ナーヴァだ!こう見えても、私とリムル、レイトは魔王なのだ!」

ゲルド「我はゲルド。」

ディアブロ「私はディアブロです。」

自己紹介を終えたリムルは、人間としての姿に戻る。

それを聞いた零士達は。

めぐみん「狼が喋りましたよ!」

カリン「それより、ディアブロって……………」

カイト「ああ。前にイツキ達の世界で倒した悪魔と同じ名前だな。」
ダクネス「何故奴がここに!？」

零士「……………いや、奴とは同じ名前だけど、アイツの方が強い。あのディアブロよりも。」

カズマ「マジかよ……………」

リナ「刺激させない方が良さそうね。」

アクア「……………悪魔やアンデッドだけでなく、魔王まで居るなんて……………」

零士達は、以前、ディアブロという悪魔を倒したのだが、リムル達の世界のディアブロの方が強いと判断し、あまり刺激させない事にした。

アクアは不満そうな表情を浮かべていたが。

一方、それ以外の人たちは。

アーク（スライムにキメラが魔王!?!これは、これでファンタジーとしてありだな!）

冬樹「凄い!色々と話したい!」

夏美「ああ……………冬樹のオカルトスイッチが入っちゃったわね……………」

ロズワール「これはまた……………本当にバラエティに富んだ子達が集まったものだ・あ・ね。さて、次に、教員と用務員を紹介するとしてしようじゃないか。」

ロズワールがそう言うと、中に他の教員達が入ってくる。

その中には、それぞれの世界の人にとって、顔見知りの人がいた。
レルゲン「2組副担任、エーリツヒ・フォン・レルゲンだ!」

ソフィア「私はソフィア。図書室の司書です。」

ユーリ「俺はユーリ。用務員という役職を担当する事になった。」

重村「私は重村徹大。情報の担任だ。」

クリスハイト「僕はクリスハイト。用務員を担当するよ。」

クライン「俺様はクライン!用務員だぜ!」

エギル「俺はエギル。学食の料理人だ。」

556 「俺は556！用務員だ！ハーツハツハツハツ!!」
ラビー「兄が大声ですみません！すみません！ラビーと申します。
用務員です。」

ハクロウ「俺はハクロウ。体育とやらの授業の担任じゃ。」

シユナ「私はシユナと申します。家庭科という授業の担任です。」

リグルド「私は、リグルドと申します！用務員です！」

カーシー「僕はカーシー。理科の担任をさせて貰うよ。」

デイラン「私は、デイラン・ターグ・フラトイア。歴史の授業の担任を
務めさせて貰うよ。」

グレニス「私は、グレニス・アルナ・フラトイアです。ハクロウさんと
同じく、体育の担任です。」

教員達の自己紹介を見た人たちは。

ターニャ「レルゲン殿!」

零士「ソフィア様にユーリ!」

カズマ「何やってんだよ!」

ユナ「お父さん!」

ノーチラス「ええっ!」

アスナ「クラインさんに、エギルさん!」

キリト「クリスハイトまで……………!」

ケロロ「556!」

冬樹「ラビーさんまで!」

リムル「ハクロウ!?シユナ!?リグルド!」

レイト「三人揃ってやがる……………!」

アリアン「お父さんにお母さん!」

アーク「カーシー殿まで……………!」

そんな風に驚いていた。

その後、解散となった。

帰っている最中のリムル達。

リムル「まさか、こんな事になるなんて……………」

ミリム「でも、面白そうなのだ!」

レイト「色々と、おかしな世界だな。」

ランガ「このランガ。例え違う世界でも、我が主達に着いて行きま
すぞ！」

ディアブロ「勿論、私もです。」

ゲルド「我也是です。」

ヴェルドラ「私もだぞ！面白そうだからな！ナーツハツハツハツ
!!」

リムル「そ、そうか。頼もしいな！（それにしても、この世界、何
か違和感がある。）」

リムルは、スライムの状態で、ランガの背に乗り、周囲を見渡す。
そう、他に人が居ないのだ。

レイト（どうやら、俺たち以外には人は居ないみたいだな。どうに
かして、元の世界に戻る方法を見つけないと……………。）

同じことを考えていたレイトがそう思案する中、声が聞こえる。

アクア「この……………アンデッドとその仲間達！」

『ん？』

アクアの声が聞こえてきて、リムル達が声のした方に向かうと、そ
こには、アクアが、アインズに指を指していた。

アクア「この世界が何処かまだよく分からないけれど……………例えど
んな世界だとしても、アンタ達が堂々としてる事態を神である私が許
すわけにはいかないわ!!」

アインズ「神……………だと？」

ヴェルドラ「アイツ、神を自称してるぞ。」

アクア「ていうか！悪魔を引き連れてる連中も居るじゃない！丁度
良いわ！そのアンタ達も成仏させたり、倒すわ！」

リムル「ちよっ、ちよっと待て！」

レイト「何しようって気だよ!？」

アクア「感謝しなさい!!この、アクシズ教のご神体にして水の女神
であるアクア様が、アンタ達を直々に成仏させてあげるんだから!!」

アクアは、自前の杖を取り出して、アインズ達に向かって、浄化魔
法を放とうとするが。

カズマ「フン!!」

アクア「ふええ!!」

アインズ「ええ!」

リムル「ええっ!」

レイト「えっ?」

後ろからカズマが水勢剣流水で、アクアの頭を思い切り殴り、それを見てアインズだけでなく、リムルも驚いていた。

カズマの隣には、零士も居た。

カズマ「アクア! お前学園生活始まって早々に揉め事起こす気か!」

零士「揉め事厳禁って、言われただろ!」

アクア「だつて!! アイツらアンデットなのよ!! 他にも悪魔とかヴァンパイアとか、どう見ても邪悪な連中じゃない!」

カズマと零士が怒鳴る。

アクアは、涙目で話す。

アルベド達は、アクアに対して臨戦態勢を取っていた。
ランガ、ディアブロ、ミリム、ヴェルドラが臨戦体勢を取る。

アクア「女神として放っておくわけには行かないわ!! ターンアンデットオ!!」

カズマ「ちよつと待てコラアああああ!!」

零士「おいいい!!」

アインズ「ターンアンデット……。低位階魔法だな。」

カズマと零士の静止も聞かず、アクアはアインズにターンアンデットを放つ。

アインズは、弱い浄化魔法と判断し、何もしなかったが。

アインズ「え、ええええええええええええええええええええええええええええ! (普通のターンアンデットで、この威力!)」

アクアの放ったターンアンデットが思ってた以上に強かったのか、アインズは悲鳴を上げる。

アインズはそう心中で考えながらも、何とかアクアのターンアンデットを耐えきるのだった。

アクア「私のターンアンデットが効かない!」

零士「フン！」

アクア「ぐへえ!!」

アクアが驚愕する中、今度は零士がアクアの頭を火炎剣烈火のグリップエンドで叩く。

アクア「ちよつと！2回も聖剣で殴るなんて、どういう事!!!」

カズマ「分かった!!分かった!!……分かったけど、帰るぞ。」

アクア「何よ放して!?何でよおく!!ちよつと!?何で帰るのお!?止めてよお!!二人とも、さつき殴ったの謝ってよ!?!」

『……………』

そう言つて、カズマはアクアの服を掴みながら、零士と共に帰る。それを見て、ナザリックとリムル達は、呆然としていた。

カズマ「本当……すみません。」

零士「そつちも何か、すみません。」

アインズ「あ……いや。」

リムル「じゃあな……?」

レイト「あ、ああ……………」

突然、カズマと零士が振り返り、二つの陣営に謝る。

そして、去つて行った。

ちなみに、アクアの杖は、零士が回収していた。

アクア「放してつてば!?アンデット覚えてなさいよお!!絶対成仏させてあげるんだからあく!!」

アクアは、未だに諦めていないのか、そう叫ぶ。

そんな光景を、ロズワールが電柱の上から見ていた。

リムル「あの……大丈夫か……?」

アインズ「ああ……すまない。」

ヴェルドラ「ていうか、アンタの仲間の一人が、魂抜けかけてるぞ。」

アインズ「あ。」

ヴェルドラが指差す先には、シャルティアの魂が抜けかけていた。

そう、アクアのターンアンデッドの余波を受けたのだ。

アインズ「……これくらいならすぐに回復できる。それに……私の守護者はこの程度でくたばる程柔ではない。」

ミリム「そうなのか？」

ゲルド「なら、良かったです。」

リムル「じゃあな、アインズ。また明日。」

レイト「じゃあな。」

アインズ「うむ。」

リムル達は、ナザリックの面々から離れ、帰路に着く。

一方、アインズの心境は。

アインズ（レベル100の私に痛みを与える女神。そしてその神のクラスを平然と聖剣でぶっ叩く二人の人間。この世界は………力のバランスがおかしいのか!?)

アインズはそう思いながら、夕方の空を眺めるのだった。

翌日の教室。

アクアは座席に居なかった。

ロズワール「アクア君は、昨日お友達に暴力を振るったので、罰として廊下だぁよ。」

そう、ロズワールに一部始終を目撃されていて、廊下に立たされる。

アクアは、両手と頭にバケツを持っていて、泣いていた。

アクア「アイツらが悪いのに……。アイツらが……!」

カズマ「よっ!!似合ってるぞ水の女神!!」

アクア「っ!!先生にチクったわね!!」

零士「チクってないけど、アクアの自業自得だろ？」

その後もダグネスとめぐみん、リナ、カイト、カリンも加わって更に騒がしくなったのを見てターニヤは首を傾げ、スバルはそれを見ずに教科書で隠しながら寝ており、アインズは頬吊りしていた。

ケロロは呆然としていて、キリト、カルム、リムル、レイトは呆れながら廊下のアクアを見ていて、アークは無視を貫いていた。

その後、校長室では、ロズワール、ルーデルドルフ、ゼートウーアが話していた。

ルーデルドルフ「どうだ?可愛い生徒達の様子は?」

ロズワール「面白い子達ですねえ。ただ……お互いまあ距離がありますね。」

そう、まだ距離を置く生徒が居たり、ノーチラス、アリアンと言った面子は、警戒心を解いていないのだ。

すると、ゼートウーアが提案をした。

ゼートウーア「ならば……あれをやったらどうだ？」

ルーデルドルフ「あれ……か？」

果たして、ゼートウーア、ルーデルドルフが言う、あれとは？

第3話 膠着！くらすめいと

現在、授業が行われていた。

そんな中、アークは。

アーク（皆さん、こんにちは。アークです。ゲームキャラのまま異世界へと放り込まれ、目立たずひっそりと暮らそうと決意した矢先に、別の異世界に移り、学園生活を送る事になりました。）

アークは、そう心の中で思う。

アーク（学園生活を送る事になったのは、良いよ。でも……クラスメイトが癖が強い人ばかりなんだよなあ……。宇宙人だったり、俺と同じ感じにゲームのAvatarを使ってそうな奴だったりと色々……。まあ、これも異世界ファンタジーだと思えば……。それに、気になるのはアレだよなあ。）

アークは、昨日の朝、ロズワールが言っていた事を思い出した。

それは、アクアが廊下に立たされた時の話だ。

アルベドがアクアに殺意をぶつけている時に。

アルベド「……………」。

ロズワール「アルベド君だったかな？ 止める事だよね。」

アルベド「……お前に命令される筋合いはないわ。」

今だに廊下に立たされるアクアを、魔力のオーラを少し出しながらアルベドが睨んでいるのを見てロズワールが言う、アルベドがそう言い返したのを聞いて少し困り顔になった。

ロズワール「皆仲良く学園生活を送ってもらわないと、我々は困った事になるんだよ。そして引いては……君達も困る事になっちゃうかもね!？」

デミウルゴス「……なるほど、そういう事ですか。」

シャルティア「どういう事でありんす?」

ロズワールがそのまま話した事を聞いて、何かに気付いたデミウルゴスが呟いた事にシャルティアは振り返りながら聞いた。

デミウルゴス「ロズワール先生と名乗る彼の言葉から考えるに、この学園生活と言う状態を崩壊させる行為は厳禁。と言う事でしょ

う。」

シャルティア「言ってる意味が良く分かりんせん？」

デミウルゴス「簡単に説明しましょう。」

デミウルゴスがそれに対して答えても意味が今だ分からないシャルティアが言った後、デミウルゴスは両手を少し上げながら席を立った。

デミウルゴス「我々はこの世界に……生徒として閉じ込められている……と考えて見てください。」

マーレ「閉じ込められてる？」

アインズ（そうだったの!?)

デミウルゴスの話を聞いてマーレが首を傾げ、アインズも心中では驚いていると……。

デミウルゴス「アインズ様は最初から理解されていらっしやいました。」

アインズ「(最初も何も、まったく見当が付いてませんでしたあ!!) 良く気づいたなデミウルゴス。……アレだな!?'」

デミウルゴス「アレでございます。」

アインズ「アレなんだな!?'」

デミウルゴス「アレなんでございます!!」

アインズ（どれだよ!?)

デミウルゴスが言った事に、本当に見当が付いて無かったアインズは心中で思いながらも、それに気づかれないようにデミウルゴスと聞いている答えては聞いては答えをしたが……そのアレの事がまったく分からないアインズだった。

アインズ「他の者は、我々以外の者達も分かってないようなので、優しく教えてあげなさい。」

デミウルゴス「かしこまりました。」

そう言って上手くデミウルゴスの話を聞けるようにしたアインズの命を聞いたデミウルゴスは、少し礼をした後、話を始めた。

デミウルゴス「この世界自体が、何らかの強制力を持った結界の様な物で覆われている。……と考えられます。細かい所までは分りま

せんが多分、学園生活を破綻させたら元の世界に戻る事が出来なくなる。と言った所でしようか？」

アインズ（なるほど、そういう事か。）

コキユートス「ダカラアインズ様ハ、戦闘行為ヲ咎メラレレタノデスネ？」

アインズ「あ、ああ……そういう事だ。見事だぞデミウルゴス。」

デミウルゴス「いえ、理解が遅く申し訳ございません。アインズ様。」

アインズ「何を言うか、流石ナザリック随一の知恵者。」

デミウルゴスの話を聞いてアインズは納得した後、コキユートスが聞いた事に答えながらデミウルゴスを褒め、マーレが感心して口を大きく開けている近くでデミウルゴスは頭を下げたのを見ながらアインズは言い返した。

それを聞いていたリムル達、零士達は。

リムル「何らかの強制力を持った結界の様な物で覆われている………か。」

ヴェルドラ「それなら、リムルが我の無限牢獄を破ったみたいに来るのではないか？」

リムル「どういう物か分からない以上、出来ないと思うよ。」

レイト「確かに。どういう原理か分からない以上、やるのは危険だろうな。」

零士「結界………だから、ブックゲートが正常に動作しないのか。」

リナ「そうみたいね。」

そう呟いていた。

それを思い出していたアークは。

アーク（確かに、あのデミウルゴスって奴の話には頷ける。でも、これはこれで、ありかもな。……いやいや、元の世界に戻って、呪いを解呪せねば………。）

そう考えていたアークに、アリアンが話しかけていた。

アリアン「アーク。アーク？」

アーク「あ、ああ………どうしたアリアン殿？」

アリアン「先生から……これを一枚ずつ渡してって。」

アーク「ああ、助かる。」

アリアンから貰ったプリントを見るアーク。

その内容を見る。

アーク「……懇親会のお知らせ。第一回、ドキドキかくし芸大会!」

アークは、その内容を見て、首を傾げる。

その昼、ゲルドとヴェルドラは。

ゲルド「隠し芸大会とは、何をやれば良いのだろうか?」

ヴェルドラ「あのスバルとか言った小僧の話聞いた限りでは、他の人は出来ない、自分だけの得意分野を見せつけければ良い感じだろう。」

ゲルド「そうなのですか……。」

ヴェルドラ「まあ、我も色々と考えているがな! ナーツハツハツハツ!」

ゲルド「流石です、ヴェルドラ様!」

そんな風に話していた。

一方、ケロロと冬樹は。

冬樹「軍曹、隠し芸をやるって言われたけど、何をするの?」

ケロロ「そうでありますな……。ここは、あの土井中海岸でやった、青空ケロ子で……。」

冬樹「やめた方が良いんじゃないの……?」

ケロロの案に、苦笑しながらそう言う冬樹。

すると。

ベアトリス「何ジロジロこつちを見ているかしら!」

「ん?」

そんな風に話していると、ベアトリスの怒鳴り声が聞こえて来て、ケロロと冬樹は前を向くと、そこではベアトリスがケーニツヒとノイマンを睨むように見ている。

ケーニツヒ「いや、これは失礼した。お嬢さん?」

ベアトリス「お前にお嬢さん呼ばわりされる程ガキじゃないのよ!! さっさと失せるかしら!」

ノイマン「これは申し訳ございません、お嬢さん？」
ベアトリス「んうう!!」

そんなベアトリスに対してケーニツヒが答えると、それに対しベアトリスは言い返しながら振り返ったのだが、ノイマンが言った事に対して思わず睨んでしまう。

そこに、ケロロと冬樹が入る。

冬樹「ちよつと、どうしたの?」

ケーニツヒ「いや、お嬢さんって言ったたら、不機嫌になっちゃって。」

ケロロ「……………そうでありますか。」

ケロロは、余りケーニツヒ達には強く言えなかった。

何せ、階級がケーニツヒの方が上なのだから。

それを見ていたベアトリスは、何処かへと向かっていく。

ベアトリス「……………まったくどいつもこいつも、不愉快なのよ!!」

ヴァイス「……………。」

ベアトリスは、息を荒げながら立ち去っていき、ヴァイスはそれを見ていた。

その後、ヴァイスは、ケーニツヒ達のもとに。

ヴァイス「……………ケーニツヒ中尉。ノイマン中尉。あの少女に何かしたのか?」

ケーニツヒ「いえ、何もしてないであります。」

ヴァイス「本当か? 凄い形相だったぞ?」

ヴァイスはケーニツヒとノイマンに質問してそれにケーニツヒは頭を掻きながら答えた。

ノイマン「まあ何ですな! 幼女つてのは、難しいもんでありますよ。大尉殿?」

ケーニツヒ「フウゝ何処かの大隊長と同じで、か?」

ノイマン「だな!!」

「ハハハハハハハハハハ!!」

ノイマンの発言に、ケーニツヒが反応して、2人は笑う。

それに、ヴァイスが苦笑しながら口を開く。

ヴァイス「それ、定時報告で大隊長殿にお伝えしておくな?」

ケーニツヒ「止めてくださいよ！俺達が消し炭になっちまう。
ノイマン「だな!!」

「アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!」
ケロロ「どうやら、大丈夫みたいでありますな。」

冬樹「そうだね……………」

ヴァイス達が笑うのを見て、そう判断するケロロと冬樹。

一方、ベアトリスは、職員室へと向かっていた。

ベアトリス「……………ロズワールは何を考えてるのかしら!?!とっ捕まえて事情を説明させてやるのよ!!」

ベアトリスは、ロズワールに事情を聞く為に職員室へと向かっていた。

職員室の扉を思い切り開ける。

ベアトリス「ロズワールはいるかしら!?!」

カーシー「ん?」

ベアトリスが怒鳴りながら入ると、カーシーが反応する。

カーシー「君は……………確か、ベアトリス君だっけ?」

ベアトリス「そうなのよ!お前は何なのかしら?」

カーシー「僕は、先生なんだけどな……………」

ベアトリス「先生なんて認めて無いのよ!!ベティはロズワールに話があるかしら。お前に用は……………」

白老「まあまあ、落ち着くのじゃ。」

ベアトリスが激昂しながら、カーシーに対してそう言うと、白老が現れる。

ベアトリス「……………お前は、体育の教師だったかしら?」

白老「そうじゃ。それはそうと、その様な口の利き方は、あまりよろしくないの。お主らはこの学園の生徒、学園生活を行う為にここに居るのじゃぞ?だから、ちゃんと学生らしくするのじゃ。」

白老はそう言うと、その言葉から催眠術の様な物が発せられる。すると、ベアトリスは、大人しくなった。

白老「……………分かったかの?」

ベアトリス「……………仕方ない、かしら。ロズワール先生にはベティ

が来た事を伝えて欲しいのよ。」

白老「承知した。しつかり伝えておこう。」

カーシー「さ、昼休みも残り少ないから、早く教室に戻るんだ。」

ベアトリス「お前に言われなくても分かっているかしら。フン!!」

ベアトリスは、白老の質問に答え、そのまま職員室を去っていく。

カーシーは、一息ついて、ハクロウに話しかける。

カーシー「ふう……………。すみません、白老先生。お手を煩わせて。」

白老「ホツホツホツ……………。気にする事はないぞ。……………少し、強く

言い過ぎたかの？」

レルゲン「幼女だからって、気を緩める事はしてはいけませんよ。」

カーシーが白老に礼を言い、白老がそう言うと、レルゲンが口を開

く。

2人の視線が、レルゲンに向く。

レルゲン「私は知っている……………。世の中には幼女の皮を被った悪魔

が居ると言う事を…………。」

カーシー「レルゲン先生…………。」

白老「お主、その様な幼女を実際に見たのか？」

レルゲン「はい。」

白老の問いに、そう答えるレルゲン。

すると、白老にグレニスと話しかける。

グレニス「白老先生、少し良いですか？」

白老「どうされましたかな？」

グレニス「実は、鍛えがいのありそうな生徒達を見つけまして

…………。」

白老「ほう。誰ですか？」

グレニス「それは、これらです。」

白老「ほう……………これはこれは、鍛えがいがありそうですね

…………。」

白老とグレニスは、悪い笑みを浮かべながらそう言う。

グレニスが渡したリストに書いてあったのは、零士、カズマ、リナ、

カイト、カリン、キリト、アスナ、カルム、ミト、リーファ、アール

ン、ユウキ、ノーチラス、アリス、ユージオ、ダイジ、イーデイスの名前が。

それを見ていた朱菜とデイランは。

朱菜「……………ハクロウに目をつけられたみたいですね。」

デイラン「その人達は、死なないとよいのだがな。」

そう語る。

一方、ヴィーシャと昼食をとっていたターニャは。

ターニャ「へっぷし!!」

ヴィーシャ「風邪ですか?」

ターニャ「いや……………」

ヴィーシャの問いに、そう答えるターニャ。

すると、アクアが現れて。

アクア「ガツデスブレスゅー!!」

カズマ「……………は?」

それを見ていたアクアがサムズアップしながら言った事に対し、隣のカズマは間抜けな声を出してしまう。

一方、零士は。

零士「……………っ!」

リナ「どうしたの?風邪?」

零士「いや、誰かに目をつけられた様な気がして……………」

リナ「目をつける人なんて、居ないんじゃないの?」

零士「だと良いんだけど……………」

零士は、ハクロウとグレニスに目をつけられた事に気づいていない。

零士は、アインズ、アルベド、リムル、レイト、アークが歩いているのを見た。

零士（放課後にでも、話してみるか。）

零士は、アインズ、リムル、レイト、アークを見ながらそう考える。

だが、昼休みにて、ターニャがアインズに話しかけていた。

ターニャ「話がある。」

アインズ「……………（ええ!?俺に?）」

午後の授業が始まる前、ターニャはアイنزの席の前に立ち、睨みながら話しかけて来たターニャを見てアイنزは心中で驚いた。

ターニャ「放課後、学校近くにある公園で。」

アイنز「ここで、話してもよいのだぞ?」

ターニャ「いや……………二人で話しがしたい。」

アルベド「……………!!あああん!?!」

ターニャが話した事にアインスが聞き、それにそう答えたターニャの話聞いたアルベドは、目を光らせながらターニャを睨む。

アルベド「アイنز様と……………私のアイنز様と!!二人きりで話!!ですつてええええええええええええええええ!!」

アイنز「お、落ち着けアルベド!?!」

ターニャ「いいえ!?! 落ち着く事など出来ません!! アイنز様に色目を使うこの小娘は……………ギツタンギツタンにして!!ボツコボツコにして!!メツチャメツチャにしてなあああああああ!!」

ターニャ「ええ……………」

スバル「ギツタンギツタンつて今日日エミリアたん以外で聞かねえな。」

魔力のオーラを出しながら叫ぶアルベドを落ち着かせようとするアイنزだったが、アルベドはターニャを指差しながら叫び続け、それを見て呆然とするターニャ。

そんな中、そんな光景を見ていたスバルは隣のエミリアに振り向きながら呟いていた。

アイنز「アルベド!!相手は子どもだぞ。」

アルベド「年齢性別種族など関係ありません!!アイنز様の魅力は、そのようなものに超えております!!」

アイنز「だがあって間もないのだぞ?」

再びアルベドを落ち着かせようとするアイنزにアルベドが言い、対してアイنزがそう聞いた直後だった。

『時間なんて関係ありません(ないわ)ー!』

そう言つて、レム、アスナ、ミト、リナの4人が立ち上がる。

スバル「レムさん、レムさん?」

キリト「アスナ……………」

カルム「ミト……………」

零士「リナさん？」

レム「人を好きになるのに、時間なんてないんです！」

アスナ「そうよ！」

ミト「本当に大事なのは……………」

リナ「その人の事が本当に好きかって事よ！」

スバル、キリト、カルム、零士がそう言う中、レム、アスナ、ミト、

リナの4人はそう言う。

その言葉にアルベドは。

アルベド「あなた達分かってるじゃない!!」

レム「はい！レムもスバル君と会って間もないですから!!」

ミト「ええ。私も、カルムとは、会ってから好きになったから。」

アスナ「私は、時間は掛かったけど、キリト君の事が本当に好きなんだから！」

リナ「私は、零士に助けられて、惚れたの。」

そんな風に話していた。

アルベド「スバルとかカルムとかキリトとか零士とやらは誰か分からないけど……………」

レム「スバル君はこの人です！レムにとって大切な人です!!」

ミト「カルムは、あの人よ。」

アスナ「キリト君は、あの人。」

リナ「零士は、彼よ。」

それを聞いていた男性陣は。

スバル「物怖じしないレムさん凄いですけど。」

カルム「何か、ミト、大胆だな。」

キリト「アスナまで……………!?!」

零士「リナ、大胆だなあ……………」

そう呟いていた。

アルベド「フフフ……………あなた達とは仲良く出来そうだな。」

レム「挨拶が遅れました。レムと言います!!」

ミト「私は、ミトよ。」

アスナ「私は、アスナです。」

リナ「リナよ。よろしくね。」

アルベド「アルベドよ。レムにミト、アスナ、リナ。これからよろしく願うするわ。」

そういう感じに意気投合していた。

一方、アインズとターニャは。

ターニャ「……今からでも構わんが？」

アインズ「ではそうするか。」

ターニャの言葉を聞いてアインズは頷きながら席を立ち、デミウルゴスが頷いたのを見た後、ターニャと共に教室を出た。

一方、それを見ていた零士とリムルとレイトとアークは。

零士「カイト、悪い。ちよつと、あの2人を追いかけるわ。」

カイト「気をつけろよ。」

零士「ああ。」

リムル「ディアブロ、ヴェルドラ、ちよつとあの2人を追いかける。気になる事があるからな。」

ディアブロ「お気をつけを。リムル様。」

ヴェルドラ「まあ、行ってこい。」

リムル「ああ。行くぞ、レイト。」

レイト「ああ。」

アーク「アリアン殿。少し、あの2人を追いかけてくる。」

アリアン「……分かった。気をつけてね。」

アーク「ああ。ディメンションムーブ次元歩法。」

零士はブックゲートを、リムルはスライム状になって窓から、レイトは普通に窓から飛び降り、アークはディメンションムーブを使って、アインズとターニャを追いかける。

一方、アインズと零士が居ない事に気づいたアルベドとリナは。

「はっ!？」

アルベド「アインズ様がいらっしやらない!？」

リナ「零士が居ない!!」

アルベドとリナは、2人を追おうと教室から出ようとする、扉の前には、レルゲンが居た。

アルベド「どきなさい!!」

リナ「退いてください!!」

レルゲン「今から授業だ。」

アルベドとリナは、強行突破しようとするが、レルゲンの口から、催眠術の様な何かが出てきて、2人を怯ませる。

アルベド「くう……アインズ様……。」

リナ「零士……。」

2人は、澁々と自分の座席に戻る。

第4話 邂逅！くらすめいと

アインズ「……………」。

ターニヤ「……………」

学校近くの公園。そこではアインズに対峙するようにターニヤが睨んでいた。

それを見ていた零士、リムル、アークは。

零士（何か、ターニヤって奴、アインズって奴を凄いい睨んでるんですけど。）

リムル（それにしても、睨まれてるのに、アインズ、平然としてるな。）

レイト（というより、何でターニヤは、アインズを睨んでるんだ？）

アーク（むっ!?何やら、アインズが光ったぞ!?)

それぞれ、違う茂みに隠れていた。

アークは、アインズが精神を安定させる際に放つ光を見て、反応していた。

アインズは、ターニヤに話しかける。

アインズ「……………で、用と言うのは……………何だ？」

ターニヤ「……………貴様あ!!」

アインズ「ぬう!!」

((?!))

アインズの質問に対してターニヤは更に睨みながら答え始め、それを見て再び精神を安定させるアインズと、それを見て、それぞれ、零士は火炎剣烈火、リムルは自分の日本刀、アークは聖雷カラドボルグの剣を抜刀しようとし、レイトはジュウガドライバーを腰に装着する。

だが、ターニヤの問いに、全員が困惑する。

ターニヤ「存在Xか？」

アインズ「……………え？」

((……………え?))

そう、ターニヤは、アインズを存在Xなのではと疑っていた。

その言葉に、アインズは問いかける。

アインズ「存在………X?」

ターニヤ「しらばつくれても無駄だ。貴様の圧倒的な存在感、そしてその見た目!!どう見ても自称神と名乗る存在Xでしかない!」

アインズ「待て!!何の話だ!」

ターニヤが腕を組み、そしてアインズに向かって指をさしながら言った事が分からないアインズは、話について詳しく聞こうとする。

そんな中、ターニヤの放った言葉に、その場にいる全員が耳を疑う。

ターニヤ「私をあの様な世界に放り出しただけでは飽き足らず、今度は何だ!?!この姿のまま学園生活を送らせる事にどんな意味があると言うのだ!嫌がらせか!」

アインズ「ん?………待て待て待て!」

ターニヤ「何だ!?!」

アインズの問いに、苛立ちながら答えるターニヤ。

だが、ターニヤも、アインズの言葉に、驚愕する。

アインズ「もしかして貴様………元々地球いや、日本に居た人間か?」

ターニヤ「……え!?!」

その言葉に、ターニヤは驚き、静寂が包む。

すると、零士、リムル、レイト、アークが茂みから出てくる。

零士「ちよ………ちよつと待って!」

アインズ「ん?」

ターニヤ「貴殿らは………」

リムル「その話………」

レイト「良かったら………」

アーク「我にも、聞かせて貰えないだろうか。」

「「「「え………」」」」」

その場にいる全員が驚く。

そう、この場にいる全員が、日本から転生もしくは転移した人物だと気づいたのだ。

一方、クラスでは、レルゲンの授業が行われていた。

そんな中、リナはソワソワしていた。

リナ「………」

ミトを落ち着けようとするカルム。
そんな中、授業をしていたレルゲンは。
レルゲン「……………授業を続けたいのだが。」
そう呟く。

一方、公園にいるアインズ、ターニヤ、零士、リムル、レイト、アークは、同郷のよしみで、話が弾んでいた。

その際、アークは自分の姿が骸骨である事を明かした。

ターニヤ「何だ……………貴殿らも私と同じ立場だったか。」

アインズ「そうらしいな。私とアーク君は転移で、君と零士君とリムル君とレイト君は転生のようだが。」

リムル「まさか、零士はともかく、そんな姿の元日本人が居るなんて、思わなかったぜ。」

零士「それを言うなら、アンデッドの姿をした元サラリーマンや、幼女の姿をした元サラリーマン、スライムにして魔王の元サラリーマン、キメラにして魔王の元大学生、骸骨騎士の元ゲーマーなんて、想像つきませんよ。」

アーク「確かにな。」

レイト「言えてるな。」

リムル「サラリーマンか。その言葉を聞くのは、久しぶりだなあ……………」

リムルは、その言葉を懐かしがる。

ターニヤは、アインズ達に言う。

ターニヤ「アインズ殿がもつと早く、自分は異世界転移して来たとか言ってくれたら良かったのだよ！」

アーク「いや、それは言わないと思うぞ。」

零士「そうですね。どうせ、誰も信じないオチですし。」

ターニヤ「それもそうだな。」

ターニヤの指摘に、アークと零士がそう答え、ターニヤも納得する。そこから、自分達がそれぞれの世界で、どの様に生きてきたのかを話していく。

その姿は、微笑ましい物だった。

一方、教室では、授業が終わった。
その直後、アルベドが立ち上がる。

アルベド「っ!!アインズ様ああああああ!!」

「「いってらっしゃあい。」」

アルベドは、チャイムが鳴ると同時に、公園へと向かっていく。
それを見送るアウラとマーレとシャルティア。

カリン「あれ?リナは?」

カイト「ああ。ブックゲートですぐに帰ったぞ。」

カリン「早!?!」

そんな中、ヴィーシャ、ディアブロ、アリアンも立ち上がる。

ヴィーシャ「……………すみません!!失礼します!!」

ディアブロ「では、私はこれにて。」

アリアン「失礼します!」

三人は、即座にそれぞれの人たちの元へと向かう。

それを呆然と見ていたレルゲンだったが、咳払いをして、明日の連絡をする。

レルゲン「……………ゴホン。ああ明日は午前中授業の後、以前から言っていた懇親会がある。誰が出し物をするかは決まっていらないから、各自準備しておいてくれ。」

コキュートス「センセイ。ナゼコンシンカイデカクシゲイヲシナクテハナラナイノデシヨウカ?」

ゲルド「それは、気になります。」

レルゲンの連絡に、コキュートスとゲルドが質問をする。

レルゲンは、答えた。

レルゲン「……………それは、ロズワール先生が、『楽しそうじゃなくいか?』……………と、言ったからだ。」

ラム「なら仕方ないわね。」

レルゲンがその質問に対して返答すると、コキュートスの席の近くに座っていたラムが頷いた。

ゲルド「……………仕方ないのか?」

ラム「ええ、先生の希望だもの。仕方ないわ。」

コキユートス「シカタナイ……ノカ!？」

ゲルド「仕方ないのか!？」

ラム「仕方ないわ!!」

ラムが言った事に対して、ゲルドとコキユートスが尋ねる。

物凄い勢いで答えるラム。

それを見ていたデミウルゴスは。

デミウルゴス「……なるほど。」

ダイジ「……今ので、何が分かったんだ?」

イーデイス「さあ?」

デミウルゴスの呟きに、ダイジがそう呟き、イーデイスが答える。

一方、公園では、五人の会話が弾んでいた。

アインズ「コーヒーが好きなのか?」

ターニヤ「ああそうなんだ。元居た世界では……。」

リナ「零士ー!」

「「「ん?」」」

そんな風に話していると、リナがやって来る。

リナ「零士……その人達と、随分と仲良くなってるわね。」

零士「ああ。話しているうちに、段々と盛り上がってさ。」

リナ「なら、良かったわ!」

リナは、顔を赤らめながら、そう答える。

そんな中、アインズ、ターニヤ、リムル、アークは、零士に尋ねる。

アインズ「君の彼女か?」

ターニヤ「なかなか隅に置けんな。」

リムル「仲が良さそうだな。」

レイト「確かに。」

アーク「そうだな。」

零士「茶化さないで下さい。じゃあ、また明日!また話をしようぜ

!

リムル「おう!」

そう言つて、零士はリナと合流する。

そんな中、アリアンとディアブロが到着する。

アリアン「アーク！一緒に帰りましょう。」

ディアブロ「リムル様、レイト様。お迎えに上がりました。」

アーク「ああ。分かった。」

リムル「じゃあ、また明日。」

レイト「じゃあな。」

アインズ「ああ。」

ターニヤ「また明日。」

アークとリムルとレイトは、アリアンとディアブロに合流して、帰路に着く。

そんな中、ヴィーシャも到着する。

ヴィーシャ「少佐く!!少佐あく!!」

ターニヤ「ん?おどろした?」

ヴィーシャ「はい!!学校も終わつたのでお迎えに上がりました!!そろそろ、門のお肉屋さんのコロツケのタイムセールが始まっちゃいますよと……。」

ヴィーシャに気付いたターニヤが聞くと、ヴィーシャは敬礼した後手を合わせて笑顔で答え、それを見たターニヤは。

ターニヤ「……誰がこの世界に私達を呼び寄せたかは分からないが、ただ一つ……。」

アインズ「ただ一つ?」

ターニヤ「この世界は、飯がうまい。じゃあな。アインズ・ウール・ゴウン殿。また五人で話そう。」

アインズ「ああ、また五人で。」

そうアインズと話しながらベンチから降り、アインズと別れを言いながらヴィーシャの元へ向かって行った。

ヴィーシャ「少佐はどんな人とも付き合えるんですね?」

ターニヤ「それはどう言う意味だ?」

ターニヤ「いえ!!凄いなあつて。」

そんな二人を見送るアインズはというと。

アインズ「……この世界は飯が美味しい、か。(飯食えないんだけどね!俺!!そう言う意味では、アーク君が羨ましいよ。)」

そんな話をしながら帰って行くヴィーシャとターニヤの背中を見ながら呟いた後、そう心中で思うアインズだった。

アルベド「ぬううううううう……んううううううううううウウウウ!!」

そんなアインズ、と言うよりアインズがターニヤと仲良く話していたのを機の見ていたアルベドは、嫉妬で魔力のオーラを出しながら木々が揺れる程騒ぐのだった。

翌日、レルゲンとリグルドが校門前に立っていると、リムルがやってくる。

リムル「おはよう、リグルド先生。」

レイト「おはよう。」

リグルド「おはようございます！リムル様、レイト様！」

リムルとレイトの挨拶に、リグルドが反応する。

リムルとレイトの笑顔に、リグルドが微笑む。

リグルド「リムル様、レイト様、大分笑顔ですな。何か、良いことがありますか？」

リムル「ああ。」

レイト「そういうことだ。」

リグルド「それは良かったです。今日は、午後から懇親会だそうです。頑張ってください！」

リムル「ああ。」

レイト「分かった。」

リムルは、そのまま学校に入っていく。

レルゲンの方には、ターニヤとヴィーシャがやって来る。

ターニヤ「おはようございます、教官殿!!ではなく、先生!!」

ヴィーシャ「おはようございます先生!!」

レルゲン「あ……ああ、おはよう。(ターニヤ・フォン・デグレチャフ少佐が笑顔だった!?あの幼女の皮を被った悪魔が!?) 一体何が起きていると言うのだ?」

何時もは見る事もないターニヤとヴィーシャが笑顔で挨拶したの

を見て挨拶し返したのも、そんな事を考えながら頭を抱えていると、今度はアインズ達が登校して来た。

アインズ「おはようございます、先生。」

レルゲン「ああ……おはよう、アインズ君。」

アインズが挨拶して来たのに対して挨拶した後、レルゲンは彼らの背中を見ながら呟いた。

リグルド「ん？どうしたんですか、レルゲン先生。」

レルゲン「いやもう……悪魔とかそういうレベルじゃない世界だったなって。」

リグルド「ん？」

聞いて来たリグルドに対してレルゲンは眼鏡を上げながら答えて、それを聞いて首を傾げるリグルドだった。

一方、ケロロはというと。

ケロロ「ゲくろく！完全に遅刻であります！」

そう、遅刻しそうになっていた。

夜遅くまでガンπραを作っていたからだ。

ケロロ「この世界は、ガンπραがかなり多いであります！このままでは、遅刻するであります！かくなる上は………！」

ケロロは、リモコンを操作して、フライングボードを呼び出した。

ケロロは即座にフライングボードに飛び乗る。

ケロロ「これを使えば、遅刻は回避できますであります！」

そう言って、フライングボードを加速させる。

ケロロ「まあ、我輩よりもおかしな登校をしてる者なんて………」

ケロロは、そう言いかけると、とある四人が目に入る。

それは、レムに抱えられているスバルと、ダクネスに抱えられているカズマだった。

スバルとカズマも、ケロロが視線に入り、三人は気まずくなる。

スバル「……レム、やっぱり降ろしてくれ。」

レム「？分かりました。」

カズマ「ダクネス、やっぱり降ろしてくれ。」

ダクネス「そ、そうだな。」

ケロロ「……………降りるでありますか。」

その後スバルはレムに、カズマはダクネスに降ろすよう頼み、ケロロはフライングボードから降りた。

ちなみに、フライングボードは、自動的にケロロ達が住んでいる家に戻った。

「……………どうも。」

キーンコーンカーンコーン

「「とか言ってる場合じゃねえええ（であります）!?!」」

三人は挨拶したが、チャイムが聞こえてきて、絶叫する。

レルゲンは、時計を見ていた。

レルゲン「……………」

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!』

レルゲン「ん?」

レルゲンが顔を向けると、五人が駆け出していた。

レムとダクネスは、ギリギリになって校門を通った。

スバル「うおおおおお!!」

ケロロ「ゲくろく!!」

スバルとケロロは、物凄い声を出しながら校門を通ろうとするが。

レルゲン「菜月昴!ケロロ軍曹!遅刻だ!!」

スバル「ノオオオオオツ!!」

ケロロ「ゲくろく!」

レルゲンの無慈悲な言葉に絶叫するスバルとケロロ。

レルゲンは、扉をよじ登ろうとするカズマを見て。

レルゲン「佐藤和真!お前も遅刻だ!!」

カズマ「ノオオオオオツ!!」

レルゲンの無慈悲な言葉に絶叫するカズマ。

それを、スバルとケロロは見ていた。

その後、遅刻をした罰として、両手と頭に水が入ったバケツを持たされて立っている三人。

すると、スバルはカズマに声をかける。

スバル「……………なあ、カズマって言ったっけ?」

カズマ「はい。カズマです。」

スバル「サトウ……カズマ？」

カズマ「はい、サトウカズマです。」

スバル「……お前ってさ。」

カズマ「待て!!その先は俺からも言わせてくれ。」

ケロロ「何でありますか………?」

ケロロが呆然とする中、スバルとカズマはバケツを廊下に置く。

「………お前ってさ………」

スバル「絶対異世界召喚だよなあ!!」

カズマ「絶対異世界転生だよなあ!!」

ケロロ「召喚?転生?」

ケロロが首を傾げる中、スバルとカズマは説明をする。

自分達が、異世界転生や異世界召喚をした事を。

スバル「名前聞いた時点で絶対そうだって思ったんだよ!!」

カズマ「極めつけはジャージ!実は俺も、転生した時ジャージで

さあ!!」

スバル「部屋引きこもりのマストアイテム、ジャージ!!」

カズマ「いや俺は引きこもりじゃないよ。」

レルゲン「コラ!お前たち、反省しているのか!?!」

スバルとカズマが大声で話した結果、レルゲンが怒鳴りつける。

その日の昼休み、スバル、カズマ、ケロロは屋上で話す事に。

すると、キリトとカルムがやって来る。

スバル「あれ?アンタらって確か………」

カズマ「キリトにカルムって奴らだよな。」

ケロロ「どうしたんですか?」

キリト「いや、俺とカルムは、屋上でよく話すんだ。」

カルム「先客が居たとはな。………一ついいかな?」

ケロロ「何でありますか?」

キリト「いや、俺たちも、お前たちの話に混ぜてもらえないか?」

スバル「良いけど………」

そうして、キリトとカルムも話に参加する事に。

それぞれの世界について話した。

スバル「へええ……。お前らの世界って、仮想現実の技術が発達したんだな。」

キリト「まあな。」

カルム「カズマの世界って、世知辛いつて感じなのか？」

カズマ「まあな……。零士が居なかつたら、確実に嫌になつてたし。」

ケロロ「皆、大変なんでありますな……。」

そんな風に話していた。

そんなこんなで、昼休みは終わり、全員教室に戻る。

第5話 炸裂！こんしんかい

昼休み、懇親会が始まった。

ちなみに、教室ではなく、体育館に移動している。

ロズワール「それじゃあ、懇親会の出し物を始めようおこな。」
そう言うと、ロズワールは一つの箱を取り出す。

ロズワール「ここに皆の名前が書かれた紙がある。一枚ずつ引くから、名前を呼ばれた子からかくし芸を見せてくれたまあえ!!名前は……。」

『……………。』

皆が緊張で黙る中、ロズワールが箱の中から引いた最初の一人は……。

ロズワール「レルゲン先生!!」

レルゲン「……はい!」

何故か自分が選ばれた事に驚くレルゲンだった。

レルゲン「ロ……ロズワール先生!? どうして私がかくし芸をする必要が!」

コキュートス「ソレハ……。」

何故自分の名前が書かれた紙が入ってたりと訳が分からないレルゲンがロズワールに聞こうとすると、コキュートスがレルゲンに向けて呟いた。

コキュートス「ロズワールセンセイガ、タノシソウジヤナクイカトオモツタカラ!!」

ゲルド「ならば、仕方ないだろう。」

ラム「仕方ないのよ!!」

レルゲン「くう!!」

コキュートスに続くようにゲルドとラムも言い、それを聞いたレルゲンは歯を食いしばった。

ロズワール「仲良くなるのは全員だからね? 皆の規範となる為にも、まずは先生からどうぞお。」

レルゲン「くう……! 私はこの学校の生徒指導を務める、エー

リツヒ・フォン・レルゲン！それでは僭越ながら、我らが帝国国歌を
斉唱します!!」

ターニヤ（うわあ……。）

ロズワールの説明に納得がいかないものの前に立ったレルゲンは、
拳を胸に添えながら言い、それを聞いたターニヤは少しだけ引いてし
まった。

そのままレルゲンは帝国国歌を斉唱するのだが、これと言って面白
い物でも無く、当然全員の反応は薄いどころでは無かった。

それを見ていたダクネスは。

ダクネス「……………見たかカズマ、零士!？」

カズマ「はい見ました、カズマです。」

零士「うん、見たよ、零士です。」

ダクネス「あの圧倒的にスベった様を!!」

零士「スベってるね。」

ダクネス「誰もが!?人や人でない誰もが!?軽蔑の目で彼を見ている
ぞ!!」

カズマ「可哀そうー。」

ダクネス「今この瞬間彼は、種族を超えて!!もつとも非議された存
在として晒されているぞ!!」

零士「あれ?この展開……………」

レルゲン（や……………止めて、止めてください……………。）

そんな中ダクネスは何故かテンションを上げながらカズマに話し
かけ、殆どが興味が無い者や不思議がる者。

同じ世界の出身であるターニヤ達からも呆れ&ドン引きな顔をさ
れていた。

ヴァイスに至っては、笑いを堪えていた。

ケロロ小隊は、ケロロ、タママ、ドロロはドン引きしていて、ギロ
ロは感心、クルルは笑っていた。

ダクネス「ああ!! 私もこのような目で皆に見てもらいたい!!」

カズマ「始まった……………」

ダクネス「何故貴様は、おめおめと生きて居られるのか!……………」と言

わんばかりの目で!」

ラム「…………ツフ!!」

そう言い続けながら、何故か興奮し出したダグネスがアルベドやベアトリス、アリアン、ミリムと言った面々が目を半開きしながらレルゲンを見ながら言ったのを見てカズマは呆れる中、ラムはレルゲンを見て鼻で笑った。

そんな対応の中、レルゲンは帝国国歌を最後まで斉唱し続けながらこう思ったらしい。

レルゲン（くっころ!!）

その後、レルゲンは撃沈した。

そんなレルゲンを無視して、ロズワールは紙を取り出す。

ロズワール「さてお次はあくど、おやあスバル君だあくどよ!!」

どうやら、スバルの様だ。

スバル「ラツキー!!レルゲン先生のお陰で、ハードルが凄い勢いで下がったぜ!!」

ラム「そうは言っても、バルスに何かまともな芸があるとは思えないわ。」

さっきのレルゲンのスベリっぷりに少し喜んだのか、笑みを浮かべながら立ち上がるスバルに対してラムは話しかけた。

スバル「そう言われると思ったよ姉様?でもな、俺にはとっておきの特技が一つあるんだよ!!」

レム「流石スバル君です!!」

スバル「まだ何もやってねえよ!!」

そんなラムに対してスバルが言った事にレムが喜び、まだその反応が早いとスバルはツツコんだ後、皆の前に立った。

スバル「さあくて、ここに取り出すは…………ただの糸!!何処も切れてないし、繋ぎ目もありません!!でもここをこうして…………こうしてこうすると…………東京タワー!!」

スバルが見せたかくし芸はあやとりで、それで東京タワーを作ったのだが…………。

『…………。』

ラム「…………ハッ!!」

スバル「のおおおおおお!! やつぱり地味だったかあ!」
殆どが異世界から来た面子でもあって反応が無く、ラムにも鼻で笑われたを見てスバルは膝を床に付けて、頭を抱えながら叫んだ。

ただ、カルム達、ケロロ達といったメンツは、東京タワーに反応していた。

レム「いいえ! レムは感服しました! それがかはわかりませんが。」

レムは、落ち込んでいるスバルに対して、フォローしきれていないフォローをする。

一方、アンダーワールド組は、東京タワーについて話していた。

アリス「東京タワーとは……………」

ユージオ「ああ…………以前、テレビで見た、あの赤い塔のことじゃない?」

ダイジ「アレ、東京タワーって言ってたしな。」

イーデイス「でも、あれは滑るわよね……………」

そんな風に話していた。

ロズワールは、再びくじを引く。

ロズワール「はいはい次の番…………お!! レム君だぁ〜ね!!」

レム「はい!!」

そんな中、次はレムに決まり、ロズワールが呼ぶとレムは前に立ちながら準備をした。

レルゲン「…………え?」

その準備の最中、レルゲンは何故かスイカを持たされた事に疑問を抱いていたその時、レムの額から光るツノが生えてきて。

レム「ぬううう!! ハアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

レルゲン「ぬわああああああああああ!!」

レムは少し狂気じみた笑みを浮かべながらモーニングスターをレルゲンが持つスイカ目掛けて振り、それによってスイカが粉碎されたの同時にレルゲンは倒れてしまう。

レムは、モーニングスターをキャッチする。

コキュートス「ミゴトダ……アレダケノシツリヨウヲブレルコトナクアヤツリ、マトライヌクギジュツ。」

ラム「当然よ。レムは優秀なの。」

レム「でも、姉様には到底及びません。」

さっきのレムのかくし芸を見てコキュートスが賛美したのを見てラムが自分のように言った隣で、レムは謙虚しながら席に座った。

ヴェルドラ「ほう……あの赤髪の奴が……。」

コキュートス「アレヨリセイドノタカイセントウギジュツヲモツテイルノカ？」

スバル「わっ寒う!!」

そんなレムの話を信じてしまったヴェルドラとコキュートスが呟いた後、コキュートスが放った冷気で少し寒さを感じたスバルだった。

ロズワール「さあくってお次は……おやあく！零士君だあくね！」

零士「あ、俺？分かりました。」

そう言つて、零士は前に出る。

リムル「アイツ、何を披露するんだろ。」

冬樹「楽しみだなあ……。」

キリト「剣舞でもやるのかな……。」

そう三人が予想する中、カズマ達は、とある予感がしていた。

カズマ「そういえば、俺たちが変身できる事を明かすのかな。」

リナ「さあ？」

皆の視線が零士に集まる中、零士は、ソードライバーのバックルを取り出す。

『聖剣ソードライバー!』

ソードライバーを腰に装着して、零士は火炎剣烈火を納刀する。

零士「俺が今から見せるのは、変身です。」

ケロロ「変身ですと?」

アーク「何だ?」

零士はそう言つて、ブレイブドラゴンワンダーライドブックを取り出す。

『ブレイブドラゴン!』

ページを開いて、ストーリー音を流す。

『かつて全てを滅ぼすほどの偉大な力を手にした神獣がいた…。』

シャルティア「何でありんすか?この音?」

ベアトリス「何の本なのかしら……………?」

リーファ「何が起るんですかね?」

アーロン「さあ……………?」

周囲の人たちがそうざわめく中、レイトは。

レイト「あれって……………ソードライバー!」

レイトは、驚いていた。

零士はブレイブドラゴンワンダーライドブックをソードライバーに装填する。

すると、零士の背後に巨大なブレイブドラゴンワンダーライドブックが現れ、零士は、火炎剣烈火を抜刀する。

『烈火抜刀!』

零士「変身!」

『ブレイブドラゴン!』

『烈火一冊!勇気の竜と火炎剣烈火が交わる時、真紅の剣が悪を貫く!』

零士は、仮面ライダーセイバーへと変身した。

零士「炎の剣士、仮面ライダーセイバー!」

キリト「仮面……………?」

ケロロ「ライダー……………?」

エミリア「セイバー……………?」

キリト、ケロロ、エミリアが首を傾げる中、一部の人たちは。

リムル（えっ!?!アイツも仮面ライダーになれるのか!?!）

レイト（薄々予感はしてたが……………。）

アーク（仮面ライダーだとおお!?!アイツ、そんな力を隠してたのか!?!）

アインズ（仮面ライダーか……………。たっちさんが居たら、大喜びだったんだろうな……………。）

スバル（アイツ、仮面ライダーなのかよ!?!）

ターニャ（どうやら、ただの転生者という訳では無かった様だな。）
転生者&転移者はそう反応する。

ヴェルドラが質問をする。

ヴェルドラ「なあ、良いか？零士とやら。」

零士「ああ、はい。」

ヴェルドラ「お前の仲間も、変身とやらをできたりするのか？」

零士「そうです。」

リムル（ええっ!?!）

ヴェルドラの質問に答えた零士。

その答えに、リムルが再び驚く。

その次に、ミリムが質問をする。

ミリム「なあ。」

零士「ん？」

ミリム「それは、竜の力を使えるのか？」

零士「ああ、はい。」

ミリム「なるほどなのだ……。」

ミリムの質問に答えた零士。

ロズワールは、くじを引く。

ロズワール「さあくってお次は……おおっ！リムル君だあくよ。」

リムル「俺か？じゃあ、零士。手伝ってくれよ。」

零士「ああ。」

リムルが前に出て、まだセイバーに変身していた零士に手伝わせる。

零士「………で、俺に何をやれと？」

リムル「簡単な話だよ。俺に向かって必殺技を撃ってくれ。」

零士「ええっ!?!」

ダクネス「ず、ずるいぞ！その役目は、是非、私に………!」

カリン「はい、ダクネス。落ち着いて……。」

暴走しかけたダクネスを、カリンが抑える。

零士は、リムルに聞く。

零士「良いのか？リムルの仲間から、反感を買いそうなんだけど……。」

リムル「良いつて、良いつて。」

零士「……………まあ、行くぞ。」

零士は、バックルに火炎剣烈火を納刀して、トリガーを引く。

『必殺読破！』

そして、火炎剣烈火を抜刀する。

『烈火抜刀！』

『ドラゴン！一冊斬り！』

『ファイヤー！』

零士「火炎十字斬！」

零士の火炎十字斬が、リムルに向かっていく。

だが、リムルは慌てていなかった。

リムル「喰らい尽くせ！ベルゼビュート暴食之王！」

リムルがそう叫ぶと、リムルの手から黒いオーラが現れて、火炎十字斬を包み込み、そのままリムルに取り込まれる。

それには、リムルの仲間を除く全員が驚く。

アスナ「嘘……………」

シノン「あの炎の斬撃波を……………!？」

エターナル「取り込んだのか……………!？」

リナ「嘘……………!？」

カイト「どうやら、クロスセイバーとは相性の悪い奴みたいだな。」

カリン「カリユブデイスと似た能力ね。」

アーク「嘘だろ……………!？」

零士も、驚愕の表情を浮かべていた。

零士は、リムルに近寄る。

零士「まさか……………俺の火炎十字斬を取り込むなんて……………!」

リムル「これが、俺の力ってわけ。」

零士「いやはや……………カリユブデイスみたいな能力だなあ……………」

リムル「カリユブデイス!？」

レイト「えっ!？」

リムルとレイトは、カリユブデイスという名に驚く。

そう、リムルとレイト、零士の世界には、カリユブデイスという存在が在るのだ。

ただし、概念としては異なるが。

リムルとレイトの世界では魔物、零士の世界ではメギドとしてなのだから。

そうして、零士とリムルは自分の位置に戻る。

ロズワール「お次は………アリス君だあ〜よ。」

アリス「私ですか。」

そう言つて、アリスは前に出る。

アリスは、金木犀の剣を抜刀する。

アリス「………この様な場で、やるのは些か抵抗がありますが、しようがないですね。エンハンス・アーマメント！」

アリスがそう叫ぶと、金木犀の剣の刀身が、無数の金木犀になる。

近くに練習用の木偶人形が置いてあった。

アリス「では、あの木偶人形を斬り伏せてみせましょう。」

そう言つて、無数の金木犀で、木偶人形を斬り倒していく。

それには、全員が驚く。

そうして、アリスの番は終わる。

ロズワール「お次は………ドロロ君だあ〜よ。」

ドロロ「拙者でござるか。」

小雪「ドロロ〜！頑張つて〜！」

ドロロが前に出る。

ドロロ「拙者がやるのは、この木塊を、木の彫像にするでござる。」

ドロロはそう言つて、自分の短剣を抜刀して、木塊を切つて、納刀する。

すると、一体の龍の木像が出来た。

ドロロ「こんな感じでござる！」

夏美「ドロロ、器用じゃない！」

リムル「何か、ドロロつて、蒼影に似てるよな。」

レイト「雰囲気も、似てるよな。」

リムルがそうつぶやく。

その後も、隠し芸大会は続き、アリアンの番となった。

アリアン「ハアアア!!」

アリアンは、炎を纏った剣で、剣舞を行う。

アリアン「こんな物かしら。」

ロズワール「はあくい!!アリアン君ご苦労だあくたね。」

それを見ていたターニャとヴィーシャは。

ヴィーシャ「皆凄いですね少佐。それにしてもさつきレムさんが砕いたスイカ……。」

ターニャ（なるほど……さつきまでで八人ほど見た限り、これは各陣営相手に能力を見せつける場と言う事か。ヤバそうな二つの陣営のトップや実力のありそうな二つの陣営のトップと交友が図れたとはいえ油断は禁物だ。考えるに我々の能力は決して高くはないだろう。能力の底を見せて、軽く見られるのは愚策だな……。）

隣のヴィーシャの話が聞こえないぐらい、アインズとリムルと零士とアークを見ながらターニャが考えている中、次に芸を見せる人が決まった。

ロズワール「お!!次はヴァイス君だあくね。」

ヴァイス「はい!!」

ターニャ（まあ……ヴァイスならうまくやるだろう。）

次は部下であるヴァイスで、大きく返事しながら前に出たヴァイスを見てターニャは思った。

ヴァイス「帝国203魔導大隊、マテウス・ヨハン・ヴァイス大尉であります!!私はこれと言った芸を持ち合わせておりませんので

……せめて!!」

ターニャ「ハア!？」

ヴァイス「第一ボタン！外します!!」

ターニャ「干渉術式!!」

ヴァイス「があああああああああああああああああああああ!!」

そう思った矢先、ヴァイスが芸が持ち合わせてないと言う理由か分

からないが服を脱ごうとしたのを見て、ターニャは干渉術式でヴァイスを止めた。

ヴィーシャ「あ……あ……え？」

ターニャ「……お見苦しいものをお見せした!!」

さっきのと気を失ったヴァイスをケーニツヒとノイマンとグランツが運んだのを見てヴィーシャが戸惑う中、ターニャはさっきの事に對して全員に謝罪した。

ダクネス「あのような仕打ちを！私にもくれえ!!」

カズマ「黙れよなダクネス!!」

((……仲良く出来る気がしたのは。))

((気のせい……かも。))

さっきのを見てダグネスがまた興奮したのを見てカズマが止める中、アインズとリムルとレイトと零士とアークは心中でそう思った。そんな中、ロズワールは再びくじを引き。

ロズワール「次はダクネス君だね。」

ダクネス「お……わ、私は、一人では出来ないの……だ、誰か協力してはくれまいか？」

次に芸を見せる事になったのはダグネスで、指名されたダグネスは身体をもじらせながら他の皆に協力を頼んだ。

グランツ「じゃあ俺！俺が手伝いますよ!!」

ターニャ「アイツ、何で立候補してるんだ？」

ヴィーシャ「さあ……？」

グランツが協力すると言って、グランツも前に出る。すると、鞭を持たされる。

ダクネス「わ……私は身体が丈夫なのがとり得で、そ、それを証明する為に……い、今からこの屈強な男に鞭で!!まさに鞭で思うように叩かれるのを、耐えて見せようではないかあ!!」

グランツ「え……ええええええ……!!」

そのダグネスが腰を振りながら説明したのを聞き、ダグネスから渡された鞭を持ったグランツの顔は青ざめてしまう。

ダクネス「さあ軍属の男よ!!その手に持った鞭で、何時もやってる

様に私を容赦なく打ち付けるが良い!!」

グランツ「やってないですよ!?!」

笑みを浮かべながら腰を振り続けるダグネスの話にグランツはツツコんだ後、周囲の目を気にする。

すると、浮かんでいたのは、軽蔑の視線だった。

ラム「最低ね、あの男。」

コキュートス「ブジンノカザカミニモオケヌナ。」

レム「本当に最低です。」

アリアン「最低……………」

チヨメ「最低です……………」

シノン「最低ね……………」

ミト「最低……………」

イーデイス「最低……………」

タママ「最低です……………」

グランツ「いや…………いやいや…………え?!」

ラムとコキュートスとレムとアリアンとチヨメとシノンとミトとイーデイスとタママの言葉を聞いて、グランツは首を振ってそれを否定しようとする。

すると、スバルが前に出てくる。

スバル「おいその兄ちゃん!女の子つてのは、大事に扱わなきゃダメなんだぜ!!」

グランツ「俺は何もやってない!!ねえ!?!」

前に出たスバルの言葉に言い返しながら、グランツは仲間達に助け舟を求めたのだが…………。

「……………プイツ!!」

グランツ「プイじゃないよおおおおお!!」

グランツはケーニツヒとノイマンに、そっぽ向かれたのを見て思わず絶叫した。

ヴィーシャが口を開く。

ヴィーシャ「グランツ中尉……………」

グランツ「え……………?」

ヴィーシャ「最低ですね。」

グランツ「うおおおおおおおおおおおおおおい!!」

そんなグランツに止めを刺すかのごとく、ヴィーシャがゴミを見るかのような目でグランツを見て、グランツは絶叫する。

それを見ていたダクネスは。

ダクネス「どうした!?早くやったらどうだ!?もう一人増えたか…:もしや!?二人がかりで私をどうしようしようってつもりなのか!?何て酷い辱めを!?いやあ…:だが!!それも受けて立とう!!」

スバル「何で俺も加えられてんだよ!!」

そんな最中でもダクネスは何時も通りどころか、前に出たスバルも参加すると勘違いして更に興奮した笑みを浮かべながら腰を振り、それにスバルは当然ツッコんだ。

スバル「本当に最低ねバルス。」

コキュートス「ブジンノカザカミニモオケヌナ。」

レム「そんなスバル君も嫌いではありません!!」

スバル「おいおいおいおいおい!!お〜いい!!」

それを聞いて勘違いしてしまったラムとコキュートスとレムにスバルがツッコむ中、ダクネスの仲間でもあるカズマと零士は。

(すいません…:ウチの変態が、本当にすいません!!)

暴走気味のダクネスを止めることなく、ただ下を向きながら思ううだけだった。

ロズワールは、再びくじを引く。

ロズワール「アクア君だあくよ。」

アクア「ええく?」

カズマ「何だよお前!?何時もみたいに、花鳥風月!!とかやったら良いじゃねえか!」

零士「確かに、良くやってるだろ。」

次に指名されたのはアクアだったが、やる気のないアクアを見てカズマは扇子を広げながら言った。

零士も、そう言う。

アクア「あのね。いつも言ってるけど、芸つてのは請われてやるも

のじゃないの!？」

ロズワール「ううくん、それは困ったあくね。」

そう言つてそっぽ向いたアクアにロズワールが困っていると、アクアはある事に気付いた。

アクア「ん？ああ、別に魔法とかでも良いのよね!？」

ロズワール「まあ……クラスの皆が驚くような魔法があるからね。」

アクア「じゃあやるわ!!私のおき!!」

ロズワールの返答を聞いたアクアは立ち上がると、後ろらへんに座っているアインズとリムルとレイトを睨みながら。

アクア「女神にしか使えない最強魔法……セイクリッドターン・アインデッドを……!」

カズマ「お前はクラスメイトを消す気か!？」

ケロロ「アクア殿は、クラスメイトを消す気ですか!？」

アクア「ふぎや!!」

そう言いながら腕に魔力を込めたのを見てカズマだけでなく、ケロロもハリセンでアクアの頭を叩いた。

アクア「だつて!!あんな不純な連中と一緒になんて許せないじゃない!!私は女神なのよ!!」

ケロロ「そうだとしても、やっていい事と悪い事があるはずであります!」

カズマ「そうだそうだ!!もつと言つてやれ!!」

アインズ「……………」

リムル「危なかった……………」

レイト「人の命を狙おうとすんなよ……………」

立ち上がりながらアクアが言った事にケロロはまたツツコみ、それに呼応するようにカズマが言う中、アインズは全身に防御魔法をめちゃくちゃ展開し、リムルはベルゼビュートを使おうとしていて、レイトはジュウガドライバーを取り出していた。

ロズワール「はあくい!!と言うこおくとで、アクア君の出し物はトリオ漫才でえくした!!」

アクア「待って!!」

カズマ「待ってください!!」

ケロロ「何で我輩も入ってるんですか!?!」

それを見てロズワールが言った事に対してアクアとカズマが止めにかかり、ケロロも別の事ではあるがツッコむのだった。

ロズワール「そろそろ良い時間だぁ〜ね。皆にやってもらいたいけど、後三人にしておくかぁ〜ね。誰かやりたい人は拳手でえ〜す?」
懇親会も終わりに近づき、ロズワールはそう言う。

すると、めぐみんが手を上げる。

カズマ「……既にダグネスが恥を晒して。」

ダクネス「なぁ!?!」

カズマ「アクアの馬鹿さを世に晒して。」

アクア「ハア!?!」

カズマ「これ以上俺と零士を困らせるのは止めてくれめぐみん。」

めぐみん「フン!!何を言っているのです!?!このような場で、私が大人しくするはずがないじゃないですか!!」

カズマは、そう言いながらめぐみんを止めようとする。

だが、めぐみんは聞く耳を持たない。

カズマ「だってお前……かくし芸って何も出来ねえだろ?もう、変身でやるか?」

めぐみん「出来ますよ。」

カズマ「出来ねえよ。」

めぐみん「出来ますよ!!」

カズマ「……変身以外で、何が出来るんだよ?」

めぐみん「最大最高にして最強の爆裂魔法に決まってるじゃないですかあ!!」

カズマ「結局いつも通りじゃねえか!?!」

そんなこんなで、グラウンドに移動する。

ロズワール「流星に体育館でやられたら大変だぁ〜からね。目標はこちらで用意し〜たよ。」

全員と校庭に出たロズワールが手を向けた先には、何処かの世界の

誰かに似た銅像が置かれていた。

めぐみん「対象が銅像なのは不満ですが、ひとまずは感謝すると思います!!」

カズマ「良いのかよ先生!?この頭の可笑しい爆裂娘は、変身を除くと、爆裂魔法だけは本当に凄いだぞ!!」

カズマがロズワールに聞くと、アインズとリムルが声をかける。

アインズ「それは、是非とも見せて貰いたいですなあ……………」

リムル「早く見せてくれよ。」

レイト「確かに。見せてくれ。」

めぐみん「そのアンデッド集団とスライムにして魔王とキメラにして魔王も目を見開いて見るが良いです!!紅魔族最強のアークウイザードにして風の剣士、めぐみんの勇姿を!!」

めぐみんはそう答え、爆裂魔法の準備に入る。

めぐみん「……………輝きを秘めしこの力、不可視を我が元へと導き、

混沌より接触せんとす、今!!爆裂魔法が誘おう!!」

詠唱と共に魔方陣が展開し、めぐみんの周囲に魔力のオーラが大量に集まって来るのを見てカズマは呆れていたが、他の面子はそれぞれ反応しており、リムルとレイトも感心していた。

次の瞬間。

めぐみん「穿て!エクスペロージョン!」

めぐみんの爆裂魔法が放たれ、銅像は木っ端微塵になった。

めぐみんは、笑みを浮かべていた。

めぐみん「ハア……………気持ち良かった、です。」

それを見ていたロズワールは。

ロズワール「言うだけの事はあって、これは本当に見事だったね。これでファイナレにしても良いかあゝも……………」

アーク「ちよつと待たれよ。ロズワール殿。」

ロズワールは、終了にしようとするが、アークが待ったをかける。

アーク「我も、披露して良いかな?」

ロズワール「何を?」

アーク「さて……………アレをやるか。」

アリアン「まさか……………！皆、アークの周囲から離れて!!」
何かを察知したアリアンが、全員をグラウンドから避難させる。
すると、アークの手から、雷が出て、周囲に暗雲が現れる。

アーク「中級職、魔導師。雷属性範囲魔法……………ライトニングダンパー雷撃豪雨!」
すると、グラウンド一帯に沢山の雷が落ちてくる。

他の面子は、予め避難していたからか、雷には当たらなかつた。

アーク「フハハハハッ……………!ハーハッハッハッハッ!!」

全員が唾然としている中、アークの高笑いが響いていく。

しばらくして、雷が治る。

アーク「ふう……………こんなもんかな……………」

チヨメ「何ですか、アレ……………!?!」

アリアン「ああ、そつか。チヨメちゃんは、アレを見た事無かつたわね。アレを食らつたから、分かるのよ。」

ポンタ「キュ!」

チヨメ「へえ……………!?!」

そう、アリアンとポンタは、先ほどの魔法を食らつたのだ。

それを見ていたロズワールは。

ロズワール「これはまた、凄いねえ……………。じゃあ、今度こそフィ

ニッシュで……………」

アインズ「いやまだだ。」

ロズワール「おんやあ〜?」

ロズワールが、今度こそ終わりにしようとしたが、今度はアインズが待ったをかける。

アインズ「これほどの魔法とは……………いや良いものを見せて貰つた。代わりにと言つてはなんだが、私も一つ芸を出させて頂くとしよう。」

ロズワール「……………で、何を?」

アインズ「そうだな……………」

アインズの話の聞いてロズワールは笑みを浮かべながら聞くと、アインズは顎に手を添えながら空を眺めた。

アインズ(……………かくし芸なんて、サラリーマン時代も一度しかやらなかつたな。酷い営業先の忘年会で……………色んな出し物あつたけど

結局店を出た後、これだったのが一番盛り上がったんだよ。」

そうサラリーマン時代の事を思い出しながら、校庭の真ん中に立ったアインズは手を広げ、めぐみんが出した何倍もの数の魔法陣を展開した。

リムル「すげえ……………!」

めぐみん「なあ!?何ですかこの魔法陣の数は!」

ロズワール「とんでもない実力だぁ〜ね。」

その魔法陣の数を見てリムルとめぐみんは驚き、その実力にロズワールが認めていたその直後。

アインズ「ぬおおおおおおおおおおお!!」

アインズはその魔法陣から光を発し、その光は空高くまで届いた。やがて光が止むと、空はいつの間にか青空が曇り空で隠れてしまっていた。

カルム「……………ん?」

コキュートス「コレハ…………。」

その直後、その曇り空から降って来たのは、雪だった。

大雪でも吹雪でもない。

小さく、そして儂く散ってしまいそうな雪が多く、されどゆっくりと降って来たのだ。

マーレ「わぁ……………!」

アウラ「凄いですアインズ様!!」

コキュートス「コレダケノユキヲ、ミゴトデス。」

デミウルゴス「本当に……………本当に素晴らしい!!」

シャルティア「当然でありんす!!至高なる恩方でありんすえ!!」

アルベド「ええ……………本当に、当然ですわ。」

アインズの仲間であるマーレとアウラとコキュートスとデミウルゴスは驚き、それに頷くようにシャルティアとアルベドも雪降る空を見上げた。

ダクネス「この!!この冷たさがあ!!あぁ〜!!」

カリン「相変わらず、平常運転ね。」

めぐみん「凄いです……………!」

カイト「確かにな。」
リナ「儂く降ってくるわね……………」
零士「本当に凄いな、アインズは。」
アクア「ま、まあ結構やるじゃない!? 大した事無いけど!」
カズマ「コキュートスが冬將軍に見える。」
アクア「それは言わないで!? 思い出すから!」
雪の冷たさに震えるダクネスと、それを呆れながら見ているカリ
ン。

アインズに感心しているめぐみん、カイト、リナ、零士。
アクアは、カズマが思い出した冬將軍でそう叫ぶ。

ターニャ「アインズ君やるな……………」

グランツ「ブググググぐグググググググググ……………」

ノイマン「グランツ!! グランツ中尉!」

ヴァイス「どうした?」

ケーニツヒ「泡を吹いて、気絶してます。」

ヴィーシャ「多分、冬期戦演習場でのトラウマが……………」

ターニャ「フハハ……………」

アインズの魔法を見てターニャが感心してる中、朝礼台に立ち泡を吹いて気を失っているグランツを見てノイマンが驚いたのを見てヴァイスが聞くと、それに対してケーニツヒが答えた。

それを聞いてヴィーシャが呟いた隣で、ターニャは少しだけ笑みを浮かべた。

ケロロ「ぶへつくしよくい! 寒いであります……………」

ギロロ「しかし、気象衛星こまわりなしで、天候を変えてしまうとはな……………」

タママ「凄すぎですう……………」

ドロロ「あれは、本当に凄いでござる……………」

クルル「面白えじゃねえか。クツクツクツクツ。」

モア「てゆーか、驚天動地?」

冬樹「本当に凄いや!」

夏美「凄すぎるわよ……………」

桃華「そうですね……………」

小雪「アインズさんって、凄いですね！」
サブロー「確かにね。」

寒さに震えるケロン人と、アインズの凄さに感心する地球人達。
モアは、いつも通り、四字熟語を言う。

カルム「夢く降ってくるな。」

ミト「そうね。」

カナ「雪です！」

キリト「あれって、チートレベルだろ……………」

アスナ「そうね……………」

ユイ「雪が降って来ました！」

リーファ「ユイちゃんとカナちゃん、元気にはしゃいでるね。」

アーロン「そうだね。」

シノン「どういう能力なのよ……………!?!」

エターナル「何でもありかよ……………」

ユウキ「わあ〜いい！雪だ!!」

ノーチラス「綺麗だな……………」

ユナ「うん。」

アリス「雪です…ね……………」

ユージオ「何か、ルーリッドでの雪景色を思い出すね。」

イーデイス「そうね。夢く降ってくる感じが、ルーリッドを思い出
こすわね。」

ダイジ「確かにな。」

アインズの能力に驚愕するキリト、アスナ、シノン、エターナル。

雪を眺める、カルム、ミト、ノーチラス、ユナ。

雪を見てはしゃぐカナ、ユイ、ユウキ。

それを微笑ましく見ているリーファ、アーロン。

故郷、ルーリッドの風景を思い出していた、アリス、ユージオ、イー
デイス、ダイジ。

アーク「これは……………凄いな！」

アリアン「アークと同じくらいに凄いわね、アインズは。」

チヨメ「もはや、何でもありですか……………」

ポンタ「キュ〜！」

魔法に関心するアーク。

アインズの凄さに驚愕するアリアンとチヨメ。

雪の中を走り回るポンタ。

リムル「これは……………やろうと思えば、出来るのか？」

ミリム「本当なのか!？」

レイト「やめろよ？変な目で見られるからな。」

ヴェルドラ「やるではないか、アインズは！」

ゲルド「雪が降ってくる……………」

ディアブロ「まあ、やりますね。」

ランガ「アオ〜ン！」

リムルはそう呟き、ミリムが驚く。

ヴェルドラはアインズを絶賛し、ゲルドが雪を眺め、ディアブロは

アインズを少し認める。

ランガは、周囲を走り回っていた。

ベアトリス「フンツ!!」

ラム「寒いわ……………」

レム「スバル君!!こういう時はアレを飲みましょう!!」

スバル「学生は駄目なんだぜ。」

レム「んう〜。」

パック「気持ちいいね、リア。」

エミリア「そうねえ。」

小さい雪ダルマを作るベアトリスの隣でラムが寒がっている近くで、スバルはレムの質問に答えながらエミリアを見てみると、降る雪を見つめながらパックと話すエミリアを見て、スバルは笑みを浮かべた。

アインズ「……………フ、フフ……………」

そしてアインズもまた、降り積もる雪を見ながら静かに笑うのだった。

こうして、懇親会は終わる。

クラスの絆が、少し、深まったのだった。

第6話 決定！いいんかい

学園生活が始まって、しばらくが経ったある日、ロズワールは、朝のホームルームで皆に向けて話をする。

ロズワール「学園生活にも慣れてきたようで、先生は嬉しいよお。皆も顔が一致した頃かあくな？なのでそろそろ……クラス委員を決めようじゃないか？」

ロズワールは、クラス委員を決める事を、手を合わせながら告げるのだった。

ロズワール「まずは委員長、委員長を助ける補佐、そして副委員長と書記を決めようかあくな？」

ロズワールがそう言うと、アルベドが声を出す。

アルベド「先生!!」

ロズワール「なあくなかな？アルベドくんう？」

アルベド「アインズ様こそが、委員長に相応しいですわ!!」

アルベドが、アインズを推薦して、他の守護者も頷いていた。

それを見ていた人たちは。

リーファ「なんか………凄い頷いてるわね………。」

アーロン「確かに………。」

シノン「必死すぎないかしら………?」

エターナル「忠誠心が凄まじいんだろな。」

すると、アクアが机を叩きながら大声で叫ぶ。

アクア「反対!!反対!!反対!!反対!!アンデッドが委員長なんて、この私が絶対許さないわ!!」

ロズワール「じゃあ君が立候補してくれるのかあらい？」

アクア「そうよ！まあ仕方ないわね!!生まれながらに人を導く定めだもの!!」

アクアがそう叫び、立候補する。

ちなみに、この時、零土が思っていた事とは。

零土（アクアが導くとか、絶対に碌なクラスにならないだろ。）

そう思っていた。

すると、アルベドがつぶやく。

アルベド「何を言っているの？ このブス。」

アクア「あゝああああ!!」

アルベドが言った事が聞こえ、アクアは怒りながらアルベドを睨んだ。

アルベド「だってね？こんな頭の可笑しいブスが委員長になるなんて……失笑ものでしょ？」

アクア「ブスって言った!!二回も言ったあ!!カズマあ!!」

カズマ「……はいカズマです。」

アクア「あのサキユバスが酷い事言ってくるう!!」

アルベドの話を聞いてアクアはカズマの頭を叩きながら呼び、反応するのも面倒くさそうなカズマが立ち上がったのを見てアクアが言った後、ダクネスが口を開く。

ダクネス「いやアクア、あの程度は罵詈雑言とは言えないな。もつとレベルの高い言葉責めを……。」

零士「ダクネス分かった!!黙れ。」

ダクネスの意味不明な発言を止めさせようと、零士はツツコんだ。

そんな中、ロズワールは口を開く。

ロズワール「じゃあ委員長の立候補はアインズ君とアクア君、他にはいないかな？」

ミリム「なら、委員長には、リムルとレイトを推薦するぞ!」

リムル「ええっ!!」

レイト「俺まで!」

ディアブロ「であれば、私は、委員長補佐へと立候補します!」

リムル「ディアブロまで!」

ヴェルドラ「良いではないか!」

ゲルド「我らの国の主として!」

リムル「お前らなあ……。」

レイト「やれやれ……。」

ミリムはリムルとレイトを推薦して、ディアブロは自ら立候補する。

更に。

リナ「なら、私も立候補するわ。」

カイト「リナもか？」

リナ「アクアが不安だから……………」

カリン「なるほどね……………」

ユイ「私も立候補します！」

カナ「私もです！」

キリト「ユ、ユイ？本気なのか？」

ユイ「はい！」

アスナ「なら、ユイちゃん、頑張ってね！」

ユイ「はい！ママ！」

カルム「おお？頑張れよ、カナ。」

ミト「頑張ってね。」

カナ「はい！」

そこから更に、リナ、ユイ、カナの三人も立候補する。

ロズワール「では改めて現在委員長の候補は、アインズ君とアクア君とリムル君とレイト君とディアブロ君とリナ君とユイ君とカナ君との七人だあ〜ね。他に立候補する人はいないかな？」

ターニャ「……………」（こんな可笑しい連中だらけのクラスで委員長をやるなど、最前線に出るも同然。立候補などするものか……………」
ケロロ（こんな曲者揃いのクラスで委員長なんて、まっぴらごめん
であります。）

ロズワールの話に対してターニャとケロロは黙った後、周囲の面々を見ながらそんな事を考えていた。

ただ、ケロロの場合は、めんどくさいという理由が強いが、
すると。

エミリア「わ!!私も、り……………立候補します!!」

その直後、エミリアが立ち上がりながら手を挙げ、立候補したのを聞いて皆がエミリア見る中、ロズワールは顎に手を添えながら頷いた。

エミリア「み、皆が仲良く出来るクラスにしたいから……………」

スバル「じゃあ俺は!!エミリアたんを委員長にして見せる!!ロズつち先生!!選抜方法は!?選挙とか!？」

そう言ったエミリアを応援しようとしてスバルが立ち上がり、ロズワールに委員長を決める方法を聞くのだが……。

ロズワール「くじ引きだよ。」

スバル「……またくじ引き?」

ロズワール「またくじ引き。」

アーク「好きなのか?くじ引き?」

ロズワール「まあ好きだねくじ引き。」

くじ引きで決める事を聞いてスバルはロズワールに聞くとロズワールは答え、くじ引きの事でアークが聞いた事にも答えるロズワールだった。

その結果。

エミリア「私が、委員長に選ばれたエミリアです!!頑張りますので、よろしくお願いします!!」

スバル「ふふうくん!!」

ラム「……やり遂げた男の顔してるけど、バルスは何もやっていないわよ。」

くじ引きの結果、書記はリナ、ユイ、カナ、副委員長はアインズとアーク、補佐はリムル、ディアブロ、レイト、そして委員長はエミリアに選ばれた。

エミリアが皆の前に出て挨拶したのを見てスバルが鼻を鳴らしたのを見て、ラムはスバルにツツコンだ。

そんな中、結果に不満を持つ者と喜ぶ者が居た。

アルベド「ぬうううううう!!こんな不正認めません!!どうしてあの小娘が委員長で、アインズ様が副委員長なんですか!？」

ディアブロ「私が、リムル様と一緒に……!これ以上の誉れはありません……!」

リムル「ディアブロ……嬉しそうだな……。」

レイト「何か、やばい顔になってんぞ?」

ロズワール「そうは言っても、公平なくじの結果であくしね。」

アルベドは不満を言い、ディアブロは結果に歓喜する。それを見たリムルとレイトは、少し引いていた。

アルベド「しかも……あのブスまで副委員長に……。」

アクア「また言ったわね!!こっちだってあんなガイコツ野郎願ひ下げよ!!そもそも副委員長なんてやりたくないもん!!」

その後、アクアが副委員長になる事も納得いかないアルベドがアクアを睨みながら言うと、それに言い返ししながらアクアは副委員長を降りた。

ロズワール「じゃあ副委員長のポストが一つ空いてしまっうねえく。補佐と書記の誰かが副委員長をやるってのもあるけえくど。」

ディアブロ「私は遠慮しておきます。現状に満足しているので。」

リナ「私も、書紀で十分よ。」

ユイ「私は、書紀からやりたいです!」

カナ「私もです!」

リムル「俺も、今のままで良いかな。」

レイト「右に同じく。」

そう言つて、リナとディアブロ、ユイ、カナ、リムル、レイトは却下した。

ロズワール「となると……副委員長の残り一人は他の人にやつてもらおうかあくな。」

「っ!」

ロズワールのその言葉に、アルベドとシャルティアが反応する。

アルベド「では私がやります!!」

シャルティア「では私がやるでありんす!!」

「ぬうううううううう!!」

アウラ「待ちなよ!!私だってアインズ様と一緒に良いんだからね!!」

マーレ「ぼ……僕も。」

アルベドとシャルティアは立ち上がりながら同時に言い、それを聞いたアルベドとシャルティアが睨んでる所にアウラが割つて入り、それにマーレも続いた。

アインズ「お……落ち着け！落ち着くのだ!!」

それを見ていたケーニツヒとノイマンは。

ケーニツヒ「……なあノイマン。」

ノイマン「ん?」

ケーニツヒ「……：骸骨でも、春なんだぜ。」

ノイマン「ああ。」

ケーニツヒは隣で座つてるノイマンに話しかけ、それに頷いたノイマンはケーニツヒと一緒に自身の手を重ねた。

ケーニツヒ「男として、悲しくなるよな。」

ノイマン「だな……。」

グランツ「マジで羨ましいツス。」

その後アインズ達の方を見ながらケーニツヒとノイマンは呟き、それにグランツが便乗するように言った。

それを見たヴァイスは、三人を嗜める様に言う。

ヴァイス「帝国軍人はそんなあからさまに欲しがらない。」

それを聞いたケーニツヒは、ヴァイスに質問をする。

ケーニツヒ「じゃあ大尉殿は、あれを見て羨ましくないと?」

ヴァイス「羨ましくない!!……：と言えば嘘になる。」

ノイマン「だな!!」

ケーニツヒの質問に対して、ヴァイスは手を重ねながら、そう答える。

それを見て少し喜ぶノイマンだった。

それを見ていたヴィーシャは。

ヴィーシャ「本当にウチの男共は、どうして何時もこうなんでしょう?」

ターニヤ「ん?まああの、そう言う欲求が強いくらいが戦場では役に立つものだ。」

ヴィーシャ「そうなんですか?」

ターニヤ「ん……：そうなの。」

呆れていたヴィーシャに対して、ターニヤは腕を組みながら答えた。

スバル（どこの世界も、幼女は知ったような口を聞くものなのだろうか？）

ベアトリス「口を開かなくても何を思っているか分かるかしら!!」
そんなターニャとヴィーシャの会話を見てスバルは考えながらベアトリスを見ると、それに気づいたベアトリスは少しイラつきながら答えた。

一方、ヴァイス達を見ていたギロロは。

ギロロ（なるほど……。ターニャ少佐が言うように、ヴァイス大尉達はケロロと同じくらいに弛んでいるな。なら、遠慮なくしごくとするか……!）

夏美（あ……あのヴァイスって人、ギロロに目をつけられたわね。）

ギロロは、以前ターニャから、弛んでいる様なら、遠慮なくしごいて欲しいと言われていて、ギロロの目を見て、夏美は冷や汗を流す。すると、ロズワールが大声を出す。

ロズワール「ハイハイ!!ハイハイハイ!!君達母が明かないので、もう後はくじ引きにするよおっ!!」

アインズ「そ!!それで行こう!!良いな!?皆の者!」

そんな中、ロズワールは手を叩きながら全員に言い、それを聞いたアインズは立ち上がりながらアルベド達に聞くと。

「二二はい!!」

スバル「返事早えなおい!!」

ケロロ「切り替えが早いです……。」

モア「てゆーか、心機一転?」

冬樹「アインズさんの命令なら、なんでも聞くだけじゃあ……?」
速攻で答えたアルベド達を見て、スバルは思わずツツコみ、ケロロ、モア、冬樹は口を開く。

くじの結果、クラス委員は、このような配置となった。

学級委員長

エミリア

委員長補佐

リムル、レイト、ディアブロ
副委員長

アインズ、アルベド

書記

リナ、ユイ、カナ

飼育委員

スバル、アウラ、アクア、ドロロ、小雪、ユージオ、チヨメ、ポン
タ

風紀委員

ターニヤ、デミウルゴス、カズマ、アリス、アスナ、ケロロ、アーク、アリアン

給食委員

ヴィーシャ、ラム、エターナル、ダイジ、ミリム

体育委員

コキュートス、ダクネス、ヴァイス、ケーニツヒ、ノイマン、ギロ
ロ、夏美、リーファ、アロン、ユウキ、ゲルド

保健委員

レム、シャルティア、ミト、タママ、桃華、イーデイス、モア

図書委員

ベアトリス、マーレ、零士、シノン、冬樹、ヴェルドラ

放送委員

めぐみん、グランツ、キリト、サブロー、ユナ

整備委員

クルル、ノーチラス、カルム、カイト、カリン、オーズ、アंक
それを見たアルベドは。

アルベド「よっしやあああああああああああああああああああああ
あ!!」

黒板に書かれた委員のメンバー、特に副委員長の所を見てアルベド
は喜び、他の守護者はガツカリしたのか、ため息を付いていた。

ロズワール「君達は当面、このチームで班を組んでもらうよお。」
ノーチラス「……………本気ですか？」

カズマ「あんまりってか、話した事ない人ばかりなんですが？」

ロズワール「最初は誰もが、話した事がないもんだあゝよ。」

ロズワールの話を聞いて、ノーチラスが驚き、カズマがロズワールに聞くと、その質問に答えながらロズワールは教室を出てホームルームは終わり、しばしの休憩時間となった。

それを見ていたディアブロは。

ディアブロ「これはチャンスと言えるでしょう。」

ミリム「どういう事なのだ？」

リムル「ディアブロ、何か考えがあるのか？」

ディアブロ「はい。この振り分けを見て下さい。」

ディアブロは、クラス委員の振り分け表をリムル、レイト、ミリム、ヴェルドラ、ゲルドに見せる。

ディアブロ「我々がバラバラに配置されています。」

ゲルド「それが……どうしたのですか？」

ディアブロ「リムル様やレイト様、我々の敵ではないとはいえ、何か、強い力を隠している可能性があります。そこで、彼らの実力の偵察を行うのです。」

リムル「そうか………。流石に無いとは思うけど、敵になったら、面倒くさいもんな。」

レイト「まあ、備えあれば憂いなしって言うからな。」

そんな風に、リムル達は話すのだった。

その近くで、ナザリックの面々も、そんな風に話していた。

ロズワールはそれを見て、去ろうとするが。

ロズワール「……………ベアトリスう、どうしたのかあゝな？」

ベアトリス「話があるのよ、ロズワール!？」

ロズワール「先生だあゝよ?」

ベアトリス「アレで公正なくじ引きなんて笑わせるんじゃないかしら!？」

ロズワール「それはどういう事かあゝな?」

ベアトリス「何を企んでるのかって話なのよ?」

どうやらベアトリスもさっきのくじの結果に疑問を持っていたの

か、ロズワールの真意を聞こうとするのだった。

それを聞いたロズワールは。

ロズワール「企むう？そんな無意味な事はしないとおくも。」

ベアトリス「それはどう言う意味かしら!？」

ロズワール「結局は、決められた役割をこなすしか無いのさ。君も

……私も……皆もおく。」

ベアトリス「あっ!!ちよつと待つのをロズワール!」

ベアトリスが呼び止めようとするが、ロズワールはそのまま去っていく。

授業は進んで放課後、各委員会メンバーがそれぞれ集まり、話し合う時間が訪れた。

カズマ「(……お父さん、お母さん。カズマです。僕は死んだと思ったら、駄目女神、略して駄女神とどうしようもない異世界で、一部のどうしようもない連中と一緒に生活をしていました。でも今、何故か別の異世界に行ってしまったようで、学園生活を送る羽目になっています。登校拒否になってた僕が学校に行っているだなんて、今の僕を見たら二人はさぞ驚かれるでしょうね。でも……一つだけ言わせてください(……)ここに居る連中、どう見ても学生じゃないんです!本当におかしいんです!!」

カズマは、モノローグ気味に父と母にそう言っていたが、突然叫ぶ。

風紀委員で集まっていたが、カズマ、アーク、アリス、アスナ以外は倒れ伏していた。

つまり、アリアンとケロロが倒れていた。

それを見ていたデミウルゴスは、内心焦っていた。

デミウルゴス(まさか……支配の呪言が効かない者が多いとは……)。どうやら、力関係が色々複雑ですね(……)。

ちなみに、デミウルゴスの支配の呪言が効かなかった理由としては、アークはレベルをカンストしており、カズマもブレイズに変身出来る様になった事で、レベルは50以上になっており、アスナとアリスはALO自体がスキル制ではあるものの、アスナはSAOでのレベルが40以上になっていて、アリスも権限レベルが整合騎士になった

事で、かなり高い。

だが、ケロロとアリアンは効いてしまった。

2人には、レベルという概念が存在しない為だ。

デミウルゴス「表を上げてよし！」

アリアン「なっ……………なんだったの……………？」

ケロロ「ゲロ……………？」

アスナ「アリスさん、もしかして……………」

アリス「ええ。あのデミウルゴスの言葉で、アリアンとケロロが倒れました。何か、関係がありそうですね。」

アリスとアスナは、デミウルゴスに目星をつけていた。

すると、デミウルゴスが声をかける。

デミウルゴス「大丈夫ですか？気分が悪いようでしたら横になった方が良いかと……………」

アリアン「大丈夫よ。」

ケロロ「申し訳ないであります。」

そう言つて、2人は立ち上がる。

風紀委員長となったターニヤが宣言する。

ターニヤ「さて。私が風紀委員長になったからには、緩い世界は許さん！」

デミウルゴス「ほう。」

ターニヤ「規律だ！規律の先に自由！それを徹底してやる！」

デミウルゴス「それは良い考えですね！！その為にはルール作りをしなくてはなりません。」

ターニヤ「ああ、細かく定めて行くとしよう！！時に……………」

自ら風紀委員長を名乗り出たターニヤの意見に対してデミウルゴスは頷いており、早くも話が合うようになったターニヤとデミウルゴスとはというと。

ターニヤ「貴君は中々話が出来そうだな！！流石はアインズ君の仲間だ！！」

デミウルゴス「貴方こそ！！流石はアインズ様がお認めになられるだけの事はありますね！！」

ターニヤ「改めて、私の名はターニヤ・フォン・デグレチャフ。ターニヤと呼んでくれても構わない……。」

それを見ていた人たちは。

アスナ「………これから、忙しくなりそうだね………。」

アリス「ええ。ですが、規律を守るのには賛成です。」

アーク「我も頑張るとしよう。」

アリアン「そうね。」

カズマ「ケロロ、お互いに、頑張ろうぜ。」

ケロロ「そうでありますな。」

そんな風に話していた。

一方、グラウンドには体育委員が集まっていた。

コキュートス「僭越ナガラ、体育委員長ヲ務メサセテモラウ事ニナツタ。」

ケーニツヒ「確かに、この中で一番強そうだしな。」

ノイマン「だな。」

ゲルド「よろしく頼む。コキュートス殿。」

リーファ「よろしくね!」

ユウキ「よろし!頑張ろう!」

アーロン「そうですね!」

夏美「皆、よろしくね。」

そんな風に挨拶をする中。

ダクネス「それより!!どんな事をする!?身体に縄を括り付けて吊るすか!?!いやそれよりも、ジャイアントトードの口の中でドロドロに……。」

コキュートス「娘……。」

ダクネス「何だ?見るからに狂暴そうな体育委員長!」

ギロロ「何だ、その呼び名は。」

ダクネスの性癖全開気味の発言に、コキュートスが呼ぶと、それに気づいたダクネスの言った事に対してギロロがツッコんだ。

ダクネス「その四本の腕は何の為にある!?!私の両手両足を押さえつける為にあるのだろうか!?!」

アーロン「違うと思いますが……………」

ユウキ「違うんじゃないの？」

ダクネス「そしてお前は言うのだ……………これで身体の自由は奪った、泣いて謝ってももう遅い……………だが私は負けない!!」

アーロンとユウキのツツコミに気付かず、ダクネスはコキユートスだけでなく、ゲルドも見ていた。

ダクネス「しよんな私に!?お前達は冷気をかけて行き、鎧を剥くのだ!!身体の柔らかい部分を重点的に……………柔らかい……………敏感な所を……………重点的にい!!そして、そのまま弄ばれて……………!!」

コキユートス「何ヲ言ツテイルノダ？」

ゲルド「何を言っているんだ？」

ケーニツヒ「これ何が起きているんだ？」

ノイマン「分からねえ。」

ユウキ「ダクネスって人、どうしたの？」

リーファ「ユウキさんは、知らない方が良いかな……………」

アーロン「知らない方が幸せでしょうね……………」

夏美「……………この人も仮面ライダーなのに、ダメな性格なのね……………」

そんな風に色んな人たちが話していると、ヴァイスとギロロが話しかける。

ヴァイス「ダクネスさん、コキユートスが困っている……………」

ギロロ「貴様、何を言って……………」

ダクネス「だああああああああああああああああああ!!」
すると、ダクネスが大きく叫ぶ。

ダクネス「貴様あ!?!同じ人間種であると言うのに異形の者と手を組み、その屈強な腕と眉毛で私を慰み者にしようと言うのかあ!?!」

ヴァイス「何故そうなる!?!」

ケーニツヒ「今、屈強な眉毛って言ったか？」

ノイマン「言ったな。」

ギロロ「どうなっているんだ……………」

ダクネス「くっ……………くっ殺!!」

グラウンドには、ダクネスの叫び声が響いた。

荒くれ者「……遂に輪廻が回り始めたか。フツ!!」

その頃、門のお肉屋さんの店番をやっていた荒くれ者は、意味深な発言をしながら笑みを浮かべるのだった。

第7話 遂行！いいんかい

クラス委員で書記になったリナとユイとカナ。

リナ「失礼しました。」

ユイ「失礼しました。」

カナ「失礼しました。」

この日は、今日書いたレポートを職員室に居る先生に渡し、礼をしながら職員室を出た。

リナ「ありがとうね、ユイちゃん、カナちゃん。おかげで助かったわ。」

ユイ「いいえ！これも書記の仕事ですから。」

カナ「はい！」

リナ「じゃあ、帰りましょうか。」

三人がそう話していると。

リムル「お？リナ達じゃん。」

レイト「書記トリオだな。」

ディアブロ「お疲れ様です。」

ユイ「リムルさん！レイトさん！ディアブロさん！」

カナ「お疲れ様です！」

リナ「三人も、これから帰る所ですか？」

リムル「ああ。丁度仕事も終わったしな。ディアブロが居てくれ

て、助かるよ。」

ディアブロ「ありがとうございます。」

レイト「良かったら、一緒に帰るか？」

六人は、話しながら帰る事に。

ユイ「それにしても、エミリアさんは、凄いですね。」

リナ「そうね。一癖も二癖もある人たちばかりなのよね。」

リムル「そうだな。」

カナ「一度、エミリアさんに聞いたんですが、凄く大変かもしれないけど、私はこの世界で出来る事をしたいって言ってました。」

ディアブロ「我々も負けてはられませんよ、リムル様。」

リムル「そうだな。よおしくし！俺たちも頑張るぞ！」
レイト「ああ！テンペストの盟主で、魔王だからな！」

そんな風に話ながら帰っていく。

翌日、カルム、キリト、アスナ、ミト、ユージオ、アリス、イーデイス、ダイジが登校していた。

カルム「それにしても、ゲームのアバターの姿で登校することになるなんてな。」

キリト「そうだな。」

アスナ「でも、私、キリト君と一緒に登校出来るのは、凄く嬉しいよ。」

ミト「私も。カルムと一緒に登校出来て、嬉しい。」

カルム達は、そんな風に朝からイチャイチャしていた。

一方、アリス達は。

アリス「そういえば、ユージオは飼育委員とやらでしたね。」

ダイジ「そうだったな。」

イーデイス「で？飼育委員はどんな感じなのよ？」

ユージオ「昨日は本当に大変だったんだよ？」

アリスとダイジとイーデイスは、ユージオの飼育委員の事を聞いたが、ユージオは呆れた目になって、昨日の事を話す。

アクア「いくやくだあゝ!!」

チヨメ「アクア殿！早く行きますよ！」

ユージオ「駄々を捏ねないで！」

昨日の放課後、ユージオは、飼育委員の集合場所である飼育小屋に向かおうと、行きたくないアクアを見て連れて行こうとするのだが、当のアクアは机にくっ付いて拒み、そんなアクアの足を、ユージオはチヨメと一緒に引っ張り続けた。

それを見ていたドロロは、呆れた様子で言う。

ドロロ「どれだけ、委員長をやったでござるか………?」

アクア「当たり前でしょ!?女神である私が、副委員長とか飼育委員とか似合わないもの!?やっぱりここは一番の委員長が良いの！」

小雪「くじ引きでそうなったんだから、諦めようよ。」

小雪が優しく言うが、アクアは駄々を捏ねる。

アクア「嫌だったら嫌だ!」

チヨメ「しようがないですね。ポンタ!」

ポンタ「キュ!」

チヨメがそう言うと、ポンタはアクアの髪を引っ張る。

アクア「痛い!痛い!痛い!ちよつと!何で女神である私のチャームポイントを引っ張るのよ!」

チヨメ「アクア殿がいつまでも動かないからですよ!」

アクア「分かった!分かったから!引っ張るのはやめてく!!」

ユージオ「やれやれ……………」

ポンタがアクアの髪を引っ張った事で、アクアも諦めたのか、一緒に行く事に。

それを、ユージオ、ドロロは呆れながら見ていた。

ドロロ「飼育小屋に行くだけでも、大変でござるな……………」

ユージオ「本当だよ……………下手したら、キリトよりも大変な気がするよ。」

小雪「でも、何が居るんだろうね!」

小雪は、前向きにそう言って、飼育小屋に行く事に。

飼育小屋には、既にスバルとアウラが来ていた。

スバル「おお!悪いな、アクアを連れて来てもらってよ。」

ユージオ「いや、アクアも、飼育委員だからね。」

ドロロ「生き物を育てる役割でござるから、拙者達は。」

スバル「……………てゆーか、この飼育委員、忍者が三人も居る気がするが……………まあ、良いか。おっしやあ!行こうぜ!」

スバルはそう呟きつつ、飼育小屋の中へと、ユージオ達と入っっていく。

そこには、嵐牙だけでなく、巨大なハムスターも居た。

ユージオ「嵐牙は、ここに居るんだね。」

嵐牙「はい……………。正直言うと、我が主達と一緒に居たいです……………」

小雪「そればかりは……………どうなんだろうね?」

スバル「コイツ……俺の知ってるジャンガリアンハムスターにしては、デカすぎなんだよなあ……。」

チヨメ「え……ジャンガリ……何と？」

飼育小屋には、嵐牙だけでなく、アインズのペットであるハムスケが居た。

スバルの言葉に、チヨメは首を傾げ、ハムスケはスバルに近づく。ハムスケ「其方!!それがしの種族を知ってるでござるか!？」

スバル「いやあ知ってるけど微妙に、つてかすつげえ大事な所が違うんだけどお……。」

ハムスケ「それは以前、殿にも言われたでござる……。」

スバル「何言ってるか聞こえねえし……そもそも、頭齧るの止めてもらえますう!？」

ハムスケは少し落ち込みながら話し……ながらスバルの頭を齧る。それを見た他の人たちは。

チヨメ「スバル殿!!」

ユージオ「齧られてるよ!？」

ドロロ「早く引き剥がすでござる!!」

小雪「うん!」

四人は慌てて、ハムスケからスバルを引き剥がす。

スバルは、頭から出血していた。

チヨメ「ハムスケ殿。無闇矢鱈に頭を齧ってはダメですよ?」

ハムスケ「申し訳ないでござる……。」

そこに、アウラがやってくる。

アウラ「ああありがとう皆……つてスバル大丈夫!?!血だらけだよ!!」

スバル「コイツ……何でか俺だけすつごい齧って来るんだけど……。」

すると、アウラは血だらけのスバルに驚き、スバルはつぶやく。

アウラ「もおハムスケ!!本当ダメでしょ!？」

ハムスケ「何故かスバル殿を見ると、感情が盛り上がってしまうのでござる。」

ユージオ「盛り上がったの!？」

スバル「でもそれでガブガブって野生のコミュニケーション?!」

アウラに叱られたハムスケが答えた事に対して、ユージオとスバルがそれぞれツツコんでいると。

ハムスケ「本当にかたじけないでござる……。」

スバル「かたじけないってんなら、齧るなつての!!」

嵐牙「ハムスケ!落ち着くのだ!」

今度は、ユージオ達は、嵐牙も一緒に協力して、なんとか、ハムスケからスバルを引き剥がす事に成功したのだ。

そうして、ユージオは語り終える。

ユージオ「……そんな感じだよ。下手したら、修剣学院のキリトの時より大変だったよ。」

アリス「思いのほか、大変そうですね。」

ダイジ「確かに。」

イーデイス「そうね……。」

ユージオの苦労した話には、アリス達は、ユージオに同情した。すると、キリトが反応する。

キリト「おい。いつ俺がお前に迷惑をかけたんだよ?」

カルム「キリト……。」

ダイジ「お前……。」

ユージオ「よく言うよ!修剣学院の学院規則スレスレのことをして、何度、僕たちをヒヤヒヤさせたのか!」

アリス「キリト……そんな事をしてたのですか……?」

そんな風にアリスがキリトの事をジト目で見ていると、前方から声がしてくる。

レム「その魔獣を倒しましょう!!」

スバル「結論早いなあ!!揉め事起こすなって、ロズつちにも言われるだろう?」
ノープロ、ノープロ。」

見ると、スバル、レム、ベアトリスの三人がいて、レムはモーニングスターを持っていた。

アスナは、三人に話しかける。

アスナ「おはよう、三人共。」

スバル「ん？おお、おはようさん！」

ミト「おはよう、レム。」

レム「おはようございます。」

その後、カルム達は、スバル達と一緒に登校する事に。

ユージオ「それにしても、昨日の怪我は大丈夫なのかい？」

スバル「おお！おかげさまでな！」

カルム「そういや、ミトにイーデイスにレムって、保険委員だよな？
？どうなんだ？」

スバル「そうだったな。お前達の方はどうだ？」

レム「はい！！レム達保健委員は、誰かが怪我や病気にならない限り、
仕事がありません。」

ミト「まあ、怪我が無い方が良いんだけどね。」

イーデイス「それでも、凄い暇よ。」

レム「ハッ！！スバル君!？」

スバル「ん？」

カルムとスバルの質問に対して、そう答えるレム、ミト、イーデイスだったが、レムが何かに気付いたのか、スバルに近寄る。

レム「どうして魔獣に襲われた時に来てくれなかったんですか!？」

スバル「ああ〜悪りい悪りい!!」

レム「次は絶対に来てくださいね!!」

スバル「その前にあのハムスターに齧られないといけないけどねえ
〜。」

レムとスバルがそんな風に話す中、アスナは、キリトに話しかける。
アスナ「ねえ、キリト君。キリト君って、放送委員じゃなかった？」

キリト「え……………？あ！やっべ！俺、もう行くわ！」

ユージオ「キリト……………」

カルム「自分の仕事を忘れんなよ。」

キリトは、背中から妖精の羽を出して、学校にすぐに向かう。

ミトが、カルムに話しかける。

ミト「カルムって、ノーチラスと同じで、整備委員よね？何か仕事

あるの？」

カルム「いや、不備が発生しない場合は、仕事は特に無いかな。」
スバル「……で、ベア子はどうなんだ？確か、図書委員だったよな？」

ミトの質問にカルムが答える中、スバルはベアトリスに質問する。
ベアトリス「別に何も無いのよ。ずっと本を読んだけかしら。」
スバル「何時もと変わんねえな。」

ベアトリス「それで良いのよ。こんな頭の可笑しい奴だらけの集団の中に居ると、こつちも頭が可笑しくなるかしら。」

レム「あ！ですが、他にも委員の方がいらっしやいますよね？」

イーデイス「確か、シノンに零士、冬樹、ヴェルドラ、マーレちゃんだったっけ？」

ベアトリスがそう答えている中、レムとイーデイスは、そう言う。それを聞いたベアトリスは。

ベアトリス「あの猫耳娘に炎の剣士にあの男は、よく仕事をちゃんとして、特に問題ないかしら。後あの娘は……まあ良いかしら。」
スバル「珍しいな、ベア子がそんな反応するなんて。」

ベアトリス「これと言って特徴は無いけど何て言うか……妙に安心するかしら。」

ベアトリスは、昨日の出来事を思い出す。

マーレ「……あ、あの。」

ベアトリス「何なのよ？」

マーレ「こ……この本面白い、ですよ？」

ベアトリスが図書室で本を読んでいると、マーレがさつきまで読んでいた本をお勧めする。

それを聞いたベアトリスは。

ベアトリス「……後で読んでみるかしら。」

ベアトリスがそう答えたのを聞いて、笑みを浮かべるマーレだった。

ただ、それと同時に、とある出来事も蘇る。

ヴェルドラ「クワーハツハツハツ!!ここは、聖典が多くあるではな

いか！新たな知識を学ぶとしようか!!」

零士「漫画を聖典って言うなよ。」

シノン「あと、図書室では静かにしなさい。」

冬樹「そうだよ。図書室では静かに……………」

そんな風に、ヴェルドラが喧しくしている事も思い出して、ベアトリスはイライラする。

ベアトリス「アイツは……………!やかましいのよ……………!」

スバル「誰に怒ってるんだ……………?」

ベアトリス（ただ……………気になる事もあつたかしら……………。）

ベアトリスは、ある事も思い出していた。

それは、図書室の一角にある、とある部屋への入り口があつたが、封鎖されている事だ。

そこには、マークが付いていて、2本の剣が交差して、上に本が付いている物だ。

ベアトリスは、気付いていない。

そのマークが、零士達が所属する、ソードオブロゴスのエンブレムである事を。

すると。

マーレ「お、お姉ちゃんまつてよお!!」

アウラ「ホラ!!ゆっくりしてたら置いてくよ!?!」

後ろからアウラとマーレが走って来て、遅れてるマーレに言いながら前を見たアウラは、前を歩いていたスバルとカルム達に気付いた。

スバル「よおチビツ子達!良い朝だな!!」

アウラ「相変わらずうるさいねえ、スバルは。」

スバル「そこが俺のなけなしの個性だからなあ。」

隣まで走って来たアウラに気付いたスバルは声を掛けた後、アウラが言い返した事に答えた。

アウラは、呆れ笑みを浮かべながら口を開く。

アウラ「そこを自分で言えるのはある意味凄いよお。所で傷は大丈夫?」

スバル「ああ、もうバツチリさ!!」

アウラ「そりや良かった。あ、今日は私が朝のエサ当番だから先行くね!!」

アウラは、そう言って駆け出していく。

スバル「お頼んだぜ!! しっかりエサ食わせて、後で俺をガブガブしないようになあ!!」

アウラ「分かった! 分かった!! スバルの分の胃袋だけ、余裕残しておくよお!!」

スバル「おおい!!」

先を急いだアウラの後ろ姿を見ながらスバルが言うと、それに答えたアウラの返答を聞いてツッコんだ。

ちなみに、ユージオは、この日のエサ当番ではない。

マーレは、息を切らせながらやって来る。

マーレ「ハア……ハア……あ、おはようございます。」

ベアトリス「……おはようかしら。」

遅れて来たマーレは息を切らしながらやって来た後ベアトリスに向かって挨拶し、ベアトリスも挨拶を返した。

マーレ「じゃ、じゃあ僕も先に行きます。」

ベアトリス「待つよ。図書室を開けるならベティも一緒に行くかしら。」

そう言つて、マーレとベアトリスが走っていく。

今日の図書室の鍵開け当番はマーレとベアトリスで、シノンと冬樹、零士とヴェルドラの3組で分けられている。

すると、レムが笑う。

スバル「……? どうしたレム?」

レム「いえ、少し楽しいなど。」

アスナ「確かにね。」

ミト「そうね。」

カルム「ああ。」

アリス「悪くありませんね。」

ユージオ「そうだね。」

イーデイス「楽しいわね!」

ダイジ「ああ。」

そんな光景を見て微笑んでるレムを見てスバルが聞くとレムは答え、その答えを聞いたカルム達も頷いた。

スバル「そう言えば……エミリアさんは、今日は早く学校に行っただけ？」

レム「ええ。何かやる事があるとおっしゃってました。」

アスナ「ユイちゃん達も、早くに学校に行っただよね？」

ミト「確かにね。」

そんな風に話しながら、学校に到着する。

すると、放送が流れる。

めぐみん『おはようございませす！今日も一日頑張つて行きましよう！それでは目覚めの一曲！その名も……穿つ！咆哮漆黒の嵐……！』

グランツ『まるで似合わない！その曲は朝に絶対似合わない!!』

めぐみんの放送が聞こえていたのだが、朝の音楽の一曲目の事でグランツと揉み始め、それも全部全スピーカーから丸聞こえだった。

放送室では。

めぐみん「聞かずにそう言う事言うの止めてください！センスのない人間には、この素晴らしさが分からないんです!!」

グランツ「そんな服を着てる子に、センスうんぬん言われたくない

!!」

めぐみん「服装関係ない!!」

そんな風に言い争っていた。

それを見ていた、キリトとユナは。

ちなみに、キリトは何とか間に合った。

キリト「おい！こんな所で喧嘩するなよ！」

ユナ「そうだよ！少し落ち着いて！」

二人は、めぐみんとグランツの喧嘩を止めようとするが、二人は聞く耳を持たない。

すると、サブローは。

サブロー「やれやれ。じゃあ、少し退場して貰おうかな。」

そう言つて、スケッチブックに実体化ペンを走らせる。

そう言って取り出したのは、氷を発生させる装置だった。

サブロー「そおれ！」

めぐみん「ふぎや!!」

グランツ「んがあ!!」

サブローによつて、二人は凍らされて、放送室から追い出される。

サブロー「さてと。それじゃあ、ユナちゃん。代わりに頼めるかい？」

ユナ「私？」

キリト「頼む。」

ユナ「分かったわ。」

そう言つて、ユナが放送する事に。

ユナ『ええと、先程は申し訳ありませんでした！めぐみんちゃんとグランツさんの代わりに、私がやります！』

そうして、ユナの放送が流れる。

廊下を歩いていたスバル達は。

レム「あ、ちよつと保健室に用事がある事を思い出しました！スバル君は先に行つててください。」

イーデイス「私も、レムと一緒に行くから、ダイジ達は、先に行つてて。」

ミト「私も、レムとイーデイスと一緒に行くわ。」

アリス「私も、風紀委員で用事があるのを思い出しました。先に行つて下さい。」

アスナ「そうだった！私もだ！」

ユージオ「……………僕は、少しアウラさん達を手伝つてこようかな。」
ダイジ「俺も、少し給食委員で仕事があるから。」

スバル「おお!!」

カルム「じゃあまた後で。」

用事を思い出したり、手伝つたりするという事で、スバルとカルムを除く全員が離脱した。

二人は、先に教室に向かう。

スバル「おはようさん！ナツキ・スバル！華麗にクランクイン!!」

カルム「どんな入り方だよ………ていうか、皆して、何してんの？」
スバルの入り方にカルムが突っ込む中、カルムは、黒板前の教卓に集まっているエミリア、リムル、レイト、ディアブロ、アインズ、アルベド、リナ、ユイ、カナを見て、尋ねる。

エミリアは答える。

エミリア「ああスバル……私、昨日凄く考えたの。どうしたら皆が、学園生活を楽しく過ごせるかなって。」

スバル「うん。」

エミリア「でね!! やっぱ皆で楽しい事をするのが一番って、そう思ったの。どうかな？」

リナ「私たちも、エミリアさんの意見には賛成したのよ。」

ユイ「はい！皆が仲良くするには、一緒にやる且つ、楽しめる物の方が、良いと思ったので！」

カナ「その方が良いですから！」

カルム「そうか。」

スバルとカルムは、エミリア、リナ、ユイ、カナの言葉に頷いた。

スバル「……エミリアさんがそう決めたんなら、それが一番良いと思うよ。俺も全力で協力する!!」

エミリア「ありがとう、スバル。」

スバル「おお!!でも……こちらのの、こちらの方々は……。」

スバルはそう言って、エミリアは笑う。

すると、スバルは、アインズとアルベド、リムルとレイトとディアブロを見ながらそう言う。

すると、アインズとリムルが近寄る。

アインズ「やあ、私はアインズ・ウール・ゴウンだ。アインズで構わない。」

リムル「俺は、リムルⅡテンペスト。リムルで構わないぞ。」

レイト「レイトⅡテンペストだ。レイトで良いぞ。」

スバル「ア……アインズ君。」

アルベド「様でしょ!!」

スバル「ぬお!!」

カルム「圧がすごい。」

アインズとリムルがそう言う中、スバルがアインズの名前を言おうとすると、アルベドが圧をかける。

アインズ「アルベド、構わない。」

アルベド「失礼しました。」

アインズ「……失礼した。さて、エミリア君の提案だが……私やリムル、レイトも、意外と悪くないと思っている。」

カルム「え？」

レイト「俺たちは、経緯こそよく分からないけど、同じクラスで机を並べている、言わば仲間だ。」

スバル「仲間……。」

アインズ「仲間同士が交流を深めると言うのは、とても良い事では無いか？（俺も、ギルドメンバーと色々やったなあ……ゲーム内だけで。）」

アインズはスバルに話しながら、転移する前の事を思い出していた。

リムルも、そう話していた。

リムル「だからさ、こういう事をやるのは、悪くないと思ってな！な、ディアブロ！」

ディアブロ「リムル様の考えに、反対する必要性などありません。」リムルの問いに、ディアブロは頭を下げながらそう答える。

スバルは、礼を言いながら手を伸ばす。

スバル「ありがとうな！アインズ！リムル！レイト！」

アルベド「馴れ馴れしい!!」

スバル「すみません!!」

アインズ「いや……。」

すると、スバルは、またもや圧をかけたアルベドを見て頭を下げ、アインズはそれを見て呟いた。

リムル（多分、こいつも日本から来たんだろうからな。仲良くなったも損はなさそうだ。）

アインズ「私もスバルと呼ぶからおあいこだ。良いな？スバル。」

リムル「よろしくな！」
スバル「あ……おお。」

アインズとリムルとレイトとスバルは、4人で握手をする。
それを見ていたエミリアは。

エミリア「4人とも、凄く仲良ささんね!!」

リナ「この状況を素直に受け入れられるのは、凄いわね。」

リムル「ん？」

アインズ「ん？」

レイト「ん？」

そんな中、アインズとリムルとレイトは、スバルの心臓部分で燃える魔力の様なものを感じ取る。

アインズは、スバルの胸に手を置く中、リムルは智慧之王ラファエルに話しかける。

リムル『ラファエルさん。あれは？』

智慧之王『解。 个体名ナツキ・スバルから、強大な存在を確認。 我々の世界では存在しない物です。』

リムル『何なんだ……？』

ラファエルの答えに、首を傾げるリムル。

アインズとスバルは、笑い合い、カルムが突っ込んでいた。
すると。

リグルド「楽しそうで何よりです！ そんなリムル様達に、朗報があります。」

リムル「リグルド。」

レイト「どうしたんだ？」

ドアにリグルドが居て、この場に居る全員に向けて話をし出した。
リグルド「近頃、我が校では、臨海学校が計画されているのです。」

リナ「臨海学校……ですか？」

リグルド「はい！ クラスの皆で海に行って泳いだり遊んだりして仲良くなる、言わばイベントの様な物です。」

スバル「あのさあ、俺達出会って結構間もないと思うけど、何かイベント展開早くね？」

リグルドの言葉を聞いたリナが質問して、リグルドは答える。
スバルの素朴な疑問に対しては。

リグルド「ロズワール先生曰く……『青春つてのは、あつという間なんだあ〜よ!!』との事です。」

スバル「分かったような……分からないような……。」

リグルドの答えに、スバルが首を傾げる中、アインズとリムルが、エミリアにアドバイスをする。

アインズ「エミリア君、その臨海学校で何かアクティビティをやってみてはどうだろう?」

エミリア「あくてびてい?」

リムル「アクティビティだよ。」

レイト「臨海学校でクラス全員が参加できるイベントを提案するんだ。」

ディアブロ「それは、良き案ですね!流石はリムル様!あと、レイト様も!」

アルベド「素晴らしいですわアインズ様!!」

アインズとリムルとレイトの提案に、ディアブロとアルベドは、それぞれの主を賞賛する。

エミリア「あくてびていね……うん!!頑張つて提案して見る!!ありがとう、アインズ君!リムル君!レイト君!」

スバル「おお!その笑顔俺以外に向けられていたとしてもマジ天使!!略して……E・M・T!」

エミリア「ゴメン、ちよつと何言ってるか分からない。」

アインズとリムルに笑顔で礼を言ったのを見てスバルも喜びながら言うが、エミリアは少し困惑しながら言った。

アルベド「本当に分からないわ。」

アインズ「確かにな。」

リナ「略する必要って、ある?」

ユイ「何で略してるんでしょうか?」

カナ「さあ……?」

リムル「お前、何言ってるんだ?」

レイト「頭おかしいのか？」

ディアブロ「あまり、そういうのは、やらない方がよろしいかと。」

スバル「全員否定的!!」

アインズ達の追撃に、スバルは落ち込む。

それを見ていたリグルドは。

リグルド「後は、リムル様達に、お任せしましょう！」

そう言って、去っていく。

第8話 準備！りんかいがっこう

その日、臨海学校について話す事になった。

アインズ「この度の臨海学校。折角だからクラス活動として、全員で何かやるうではないか。反対意見のある者は、挙手してくれたまえ。」

カズマ（あんな恐ろしそうな生き物の提案を拒否できる奴なんていません!!）

放課後のホームルーム。

そこで今度行われる臨海学校でのクラス活動の意見を聞こうとするアインズの質問に対し、カズマは目を逸らしながらそう思ったのだが。

リムル「……………誰も反対意見はないみたいだな。」

アクア「反対。」

カズマ（拒否してる奴いたああああああああ!!）

アクアが手を挙げながら反対したのを見て、カズマは心中で驚くしかなかった。

それを見て、零士が即座に叫ぶ。

零士「アクア！何でお前はすぐに噛みつこうとするんだよ!!」

アクア「何でアンデッドやスライムやキメラなんかの提案聞かないといけないの!?!却下!!却下!!却下!!却下!!」

零士に突っ込まれながらも反対するアクア。

それには、アルベドが怒りを抑えていて、ディアブロもアクアに対して蔑む視線を向ける。

リムルは、ディアブロを抑えつつ理由を説明する。

リムル「確かに、俺やレイト、アインズのアドバイスもあつたけど、これを提案したのは、エミリアなんだぞ。」

エミリア「あ、あのね!!せっかく……………同じクラスになって、初めての……………イベントだから……………臨海学校が何か良く知らないけど、皆がもつと仲良くなれたら良いなって。」

ユイ「そうですよ！皆がもつと仲良く出来る様にしたいんです！」

カナ「私たちは、そう話したんです！」

エミリアにユイ、カナの説明に、アクアはたじろぐ。

アクア「そ、そう言われたら、私……………」

『ジーーーーー』

アクア「ああもう良いわよ!!皆でクラス活動しましょう!!そうしましょう!!」

アクアがたじろぐ中、カズマ、零士、カルム、ミト、キリト、アスナがアクアを見つめ、アクアが折れる。

リムル「何とかなったな……………。スバル、何か良い意見ないか？」
スバル「何で俺!？」

レイト「いや、何かお前、面白そうな意見を出しそうだからな。」

レイトが、スバルに意見を求める。

スバル「そう言われるとちとプレッシャーだけど、やっぱり俺的にはドキドキごちそうさまイベント、みたいのが希望かな？」

ミリム「ドキドキごちそうさまイベント？」

ユウキ「何それ？」

スバル「ああ簡単に言えば…………男子と女子が臨海学校中に良い関係になる、的な奴かな？」

アルベド「ん？」

スバルの提案した案を聞いてミリムとユウキが質問し、それに答えたスバルの話を聞いたアルベドの脳裏には…………。

アルベド「(ドキドキ…………ごちそうさま…………イベントお!!)あううううううううん!!」

スバル「うわあ凄い出血!?!保健委員!?!保健委員!?!」

アインズと良い感じな雰囲気ですすまですすましてしまう光景が写り、それを思い浮べたアルベドは鼻血を大量に噴き出して倒れてしまい、それを見て驚いたスバルは保健委員を呼んだ。

レム「はい!レムは保健委員ですが…………残りの人たちも、鼻血を出したり、熱を出してますが…………」

スバル「保健委員役に立たねええええええ?!」

レムはそう言いながら立つが、他の保健委員であるシャルティア、

タママ、桃華、イーデイス、モアは、軒並みダウンしていた。

シャルティアはアインズ、タママとモアはケロロ、桃華は冬樹、イーデイスはダイジといい感じになる事を想像したようだ。

ちなみに、それ以外にも、アスナ、リーファ、シノン、ユナ、アリス、リナといった面子も顔を赤くしている。

ユイ「ビーチフラッグに……………」

カナ「釣りつと……………」

リナ「一応、今の所出てる物ね。」

エミリア「もう他に、アイデアはありませんか？」

ユイとカナ、復活したリナが、案として出た物を黒板に書き込んでいく。

エミリアは、アイデアが無いか、他のクラスメイトに尋ねる。

めぐみん「爆裂魔法大会!!」

ダクネス「我慢比べ!!」

ケロロ「真夏のガンプラ大会!!」

ギロロ「サバイバル訓練!!」

ミリム「以前、リムルとレイトがやった、水鉄砲大会!!」

ヴェルドラ「一発芸大会!!」

アーク「釣り対決!!」

めぐみん、ダクネス、ケロロ、ギロロ、ミリム、ヴェルドラ、アークがそう叫ぶ。

アインズ「うむ、無いようだなー。」

『なあ?!!』

アリアン「ていうか、アーク。もう釣りは入ってるじゃない。」

アーク「あ。そうであったな。」

リムル「ミリムにヴェルドラ……………」

レイト「まあ、水鉄砲大会くらいなら、良いんじゃないか?」

ミリム「リムル……………!レイト……………!流石私のマブダチ達だ!」

だが、アインズがそれらの意見をスルーして、アリアンがアークに、リムルがミリムとヴェルドラに呆れるも、レイトは、水鉄砲くらいは

良いと言った。

カナ「一応、昼にやる事は揃いましたが……。」

アインズ「そうだな。夜にやる事がないな。」

アルベド「夜に!? ああ、夜に……ああ!!」

アインズ「うん、言い方がまずかった。夜に皆でやる活動だ。」

ダクネス「夜に皆で!! ああ!! ああ!!」

アインズ「どう言ったらまずくなるんだ……。」

リナ「本当にごめんなさい……。」

カナが、これまでのアイデアを見ながらそう呟き、アインズが呟くと、それを聞いて腰をくねらせながら喜ぶアルベド。

そんなアルベドを落ち着かせようとするが、今度は、ダクネスが腰を動かしながら喜び、それを見てアインズは困ったようにツツコミ、リナが謝罪する。

そうこうしている内に日も落ちて来て夕方になり、下校時間も迫っていた。

パツク「ふわあ〜。リア、そろそろ帰る時間だよ?」

エミリア「そうね。ケツかつちんね。」

スバル「ケツかつちんって今日日聞かねえな。」

アリス「お前は、一々突っ込まないと気が済まないのですか?」

それを感じてパツクが言った事にエミリアが答えてると、そんな会話を聞いてスバルがツツコンだのを見て呟くアリスだった。

リムル「誰か、何か良いアイデアはないか?」

そろそろ下校時間が迫って来て再びリムルが皆に質問すると、今度はカルムが手を挙げてながら立ち上がった。

ミト「カルム?」

カルム「肝試しとか、どうかな?」

エミリア「肝試し?」

カルム「うん、夜だしちょうど良いと思う。」

カルムのアイデアを聞いてエミリアが首を傾げ、それにカルムが話しかける。
すると。

スバル「いやいやいや！カルム!!」
カルム「ん？」

スバル「まず見ろよこのクラスメイト達!!どう見ても肝試しを仕掛ける方だろ!」

カルム「……………まあな。」

スバルは、立ち上がりながらナザリツクの面々を見ながらそう言う。

それには、カルムも苦笑しながら同意する。

スバル「一般的に肝試しってのは女子が、(ああ!!私怖いい!!)(僕が付いてるから大丈夫さ!!)(頼りになる!!キヤー!!)と抱きついた瞬間胸があ!!胸があ!!見たいな…………。」

めぐみん「……………大丈夫ですか?頭可笑しいですか?」

シノン「頭がイカれてるの?」

スバル「姉様ばりの容赦ないツツコミどうもありがとよ!!」

スバルが自論を言う中、めぐみんとシノンが呆れながらそう言い、それにスバルが突っ込む。

すると、ラムが。

ラム「バルスの頭がまともだった事なんて一度も無いわ。」

スバル「そして、本家本元の容赦ないツツコミどうもありがとよお!!」

ラムの容赦ない突っ込みに、スバルは突っ込む。
すると。

アルベド「やりましょう!!」

スバル「え……………?」

アルベド「肝試し!!私もアインズ様と、やりとうございますわ!!」

アインズ「え……………」

そんな中、アルベドが笑みを浮かべながら肝試しに賛同し、それを聞いてアインズは少し驚いた。

エミリア「他の人も、それで良いですか?」

その後、エミリアは皆の意見を聞こうとすると、皆も賛同したのか
全員頷いた。

エミリア「じゃあ、肝試しで決定します!!準備はロズワール先生とリグルドさんをお願いをしておきましょう。」

リムル「そうだな。」

レイト「じゃあ、ロズワール先生とリグルドには、俺が伝えておくよ。」

アルベド「それではホームルームを終わります。」

結果肝試しをやる事になり、エミリアとリムルがそう話している内にチャイムが鳴り、アルベドの挨拶と同時にホームルームが終了した。

アスナ「キリト君。」

ミト「カルムも、ちょっと良い?」

キリト「どうしたんだ、アスナ?」

カルム「ミト?」

アスナ「私たち、リーファちゃんやシノのん、ユウキ、ユナちゃん、アリスさん、イーデイスさん、ユイちゃん、カナちゃんと水着を見に行くんだけど……………」

ミト「荷物持ちをお願い出来ないかな?」

キリト「ああ、分かった。」

カルム「良いぞ。俺も、水着は欲しいしな。」

アスナ「ありがとうね。」

ミト「まあ、カルムとキリトだけじゃなくて、アロンにエターナル、ノーチラス、ユージオ、ダイジも誘ってあるから。」

そんな風に、カルム達は買い物へと向かう。

一方、エミリアはスバルに話しかけていた。

スバル「良かったな、エミリアたん。」

エミリア「うん、ありがとう!!ところでスバル。」

スバル「ん?」

エミリア「肝試しって…………何?」

スバル「……………え?」

エミリアの問いに、スバルは呆然とする。

カルム達は、デパートへと到着した。

女性陣は、水着を見ていた。

アリス「これら全部が水着ですか……………」

シノン「種類が豊富ね。」

イーデイス「選びがいがあるってもんよ！」

ユナ「そうだね！」

リーファ「どんなのにしようかな……………」

ユウキ「僕も、水着を探そう！」

ユイ「ママ！可愛いのが着たいです！」

アスナ「うん！ユイちゃんに似合うのがきつとあるわよ！」

カナ「私も、可愛い水着を着たいです！」

ミト「私も探すのを手伝うわよ。」

SAOの女性陣がそんな風に話しながら水着を探していると。

ターニヤ「おや？貴殿らも水着選びか？」

ターニヤが声をかける。

振り返ると、ターニヤとヴィーシャの2人がいた。

リーファ「ターニヤさん、ヴィーシャさん。」

ユウキ「2人も、水着を買いに来たの？」

ヴィーシャ「はい…………でも私、こう言うの来た事無くて。」

ターニヤ「あまり扇情的な物でなければ良いのではないか？」

2人を見て、リーファとユウキが声をかける。

それにヴィーシャは答えながら少しの不安を口にし、それを聞いた

ターニヤは腕を組みながら答えた。

ヴィーシャ「グランツ中尉達からは、女とは思えないと言われてい
ますが。」

アスナ「ヴィーシャさん、すつごく可愛いのに！」

ユナ「それは、見る目が無いわね。」

イーデイス「全くよ。」

ヴィーシャ「フツツ、三人共ありがとうございます。」

ターニヤ（まあ…………生死を分ける世界に生きる者が、そう言う目で
仲間を見てしまうようでは困りものだからな。）

ヴィーシャの話の聞いてアスナとユナとイーデイスが言い、それを

聞いて微笑むヴィーシャを見ながら、ターニヤはそう考える。
すると。

アルベド「んう〜!!何て素晴らしいコスチューム!!」
『ん?』

男性の水着エリアから声が聞こえてきて、全員がそちらを向くと、そこにはアルベドとシャルティアの2人がいた。

2人は、自分達ではなく、アインズの水着を選んでいる様だった。
アルベド「ああ〜これ何てどうかしら?アインズ様の野性味溢れる魅力を、表現出来ていると思わない!?!」

シャルティア「確かに素敵でありんすね……でもこっちはどうでありんす!!アインズ様の骨盤を、あえて開放していくスタイル!!」

アルベド「ダ、駄目!?!鼻血が止まらない!!」

シャルティア「ありんす!!ありんす!!」

ターニヤ「……………あそこまで扇情的過ぎると、清々しいな。」

シノン「そうね。」

ヴィーシャ「アハハ……………」

そんなアルベドとシャルティアを見ながら、ターニヤはそう呟き、シノンが同意し、愛想笑いをするヴィーシャだった。

そんな2人を見て。

ユイ「ママ、どうしてアルベドさんとシャルティアさんは、鼻血を流してるのですか?」

アスナ「……………ユイちゃんは知らない方が良いかな……………」

ミト「カナも、知らない方が良いわ。」

カナ「は、はい……………」

アスナとミトは、それぞれの愛娘にそう声をかける。

一方、男性陣は。

キリト「アスナ達、遅いな……………」

カルム「まあ、気楽に待とうぜ。」

ユージオ「そうだよ。」

ダイジ「女性陣の買い物が長いのは、良くある事だろう。」

カゲロウ「さっさと済ませてほしいな。」

キリト、カルム、ユージオ、ダイジがそう話していた。
途中、ダイジからカゲロウの人格が変わったが。

ちなみに、アールン、エターナル、ノーチラスの三人は、別行動を取っている。

すると。

アクア「カズマと零士の水着とか、どうでも良いじゃ無い！」

「「ん？」」

アクアの声が聞こえてきて、声の方を向くと、カズマ、零士、アクアの三人がいた。

カズマ「うるさいわい!!こう言う勝負イベントこそ勝負パンツが必要なんだよ!」

アクア「プウークスクス!貧相な身体してる癖に何が勝負パンツよ!?!笑っちゃうんですけどおー!!」

カズマ「この野郎おー!!」

零士「アクア!あまり挑発するな!」

そのカズマが言った事に対して、アクアはバカにするように笑いながら言ったのを聞いて、カズマは今にでも殴りかかろうとし、零士はアクアに注意する。

キリト「よお!零士!カズマ!」

零士「ああ、キリト!それに、カルム達も一緒か。」

カズマ「お前達も水着を買いに来たのか?」

カルム「ああ。………といっても、基本的には女性陣の荷物持ちだけだな。」

ユージオ「僕たちは、アリス達が買い物を終えるまで待つてたんだ。」

ダイジ「そういう感じだ。」

カズマ「そうなのか………うん?」

そう言ったカズマが水着売り場を見ると、アルベドとシャルティアと目が合う。

そのすぐ後にアルベドとシャルティアの目にアクアが写った。

アルベド「あら?」

シャルティア「無礼なバカ女でありんす。」

アクア「……………アンデッドの仲間達。」

互いに見た直後、睨み合いながら一触即発状態に陥るアルベドとシャルティアとアクア。

それを見た零士とカズマは、アクアを抑える。

零士「なあアクア。そろそろ皆と上手くやってくれよ。」

カズマ「エミリアさんも言ってただろう？（皆がもつと仲良くなれたら良いなあ……………良いなあ……………良いなあ……………）」

カズマは、エミリアの真似をしながらそう言う。

アクアは、落ち着いたのか、静かになる。

カルム「ま、まあまあ。」

キリト「お互いに相性が悪いのは分かっているんだけどさ……………」

ユージオ「上手くやって欲しいからさ……………」

ダイジ「頼む。」

アルベド「偉大なるアインズ様も上手くやれとおっしゃっていましたが、私達はそれに従うべきだわ。」

シャルティア「仕方ないでありんすね。」

カルム達が、アルベドとシャルティアにそう話しかけると、アインズの命令もあり、それに頷く。

カズマ「ほおらく、お前だけ子ども見たいだぞ?」

零士「納得いかないかもしれないけど、少しはクラスメイト達と協力してくれ。」

アクア「ムウ〜!!分かってる!!分かってるわよ!!サキユバスにヴァンパイアなんかと仲良くなかしたくないけど、攻撃はしない。」

カズマ「そうそう!!相手がサキユバスとヴァンパイアだからって……………」

それを見て頬を膨らませるアクアにカズマと零士が言ったのに対し、アクアが答えたのを聞いてカズマも納得したと思いきや。

カズマ「……………ふえ!?サキユバス!」

零士「カズマ?」

アルベドがサキユバスだと気付いたカズマは頬を赤らめ、鼻の穴を

少し大きくさせながらアルベドに近付いた。

カズマ「あ……あの、アルベドさん？」

アルベド「何……かしら？」

カズマ「アルベドさんって、サキユバス何ですか!？」

アルベド「それが、何か？」

カズマ「と言う事は!?!アレですか!?!夢の中で!?!いやあの……その……」

カズマの質問に対してアルベドは首を傾げながら答えると、カズマは思わず息を荒くしながらアルベドを見ていた。

それを見て、零士は呆れた風に首を振る。

シャルティア「ブウハハハハハハハハハハハツハ!!それが普通の反応でありんすよねえ!?!」

アルベド「ええ?何が?」

シャルティア「いやあ……あの男の顔を見るでありんす。」

そんなカズマを見て、シャルティアが高笑いする。

アルベドが聞くと、シャルティアは今のカズマの顔を見せるように指をさした。

カズマ「ハア……ハア……ハア……」

アルベド「ブサイクな顔だわ。」

ユージオ「サキユバス?」

ダイジ「サキユバスって、何だ?」

キリト「……後で教えるからな。」

カルム「ああ。」

零士「性欲ダダ漏れだな。」

カズマは、顔を赤らめ、鼻の下も伸びて息も荒くする。

ユージオとダイジが住んでいたアンダーワールドには、サキユバスが存在しない為、首をかしげる。

シャルティア「そのカズマとやらに、その五人!!」

「「「ん?」」」

シャルティア「一つ良い事教えてやるでありんす。」

そんな状況が面白くてしょうがないのか、シャルティアはカズマだ

けでなく、零士、キリト、カルム、ユージオ、ダイジにも話しかけた後、五人と集まって話し始めた。

シャルティア「ゴニヨゴニヨゴニヨ……ゴニヨゴニヨゴニヨ……。」
カズマ「うえ?……ええ!」

シャルティア「信じられないかもしれないけど、真実でありんす!!」
零士「よく分らんが……。」

カズマ「逆にレアじゃないですか!」

シャルティア「そうでありんす!!レアでありんすよお。」

アルベド「シャルティア?何の話をしているのかしら?」

シャルティアは、五人に何かを話す。

すると、カズマがそう叫ぶ。

ちなみに、後の4人は、よく分からないのか、首を傾げる。

そんなシャルティアにアルベドが話しかける。

シャルティア「いやあ、アルベドは清い乙女だと言う話を……ブツ

ハハハハハハハハハハ!!アハハハハハハハ!!」

アルベド「なあ!」

シャルティアがアルベドの秘密を暴露されたのを聞いて、アルベドは顔を真っ赤にしながら魔力のオーラを出した次の瞬間。

アルベド「シャルティアあああああああああああああああああああああああ
あああ!」

『ぬおおお!』

シャルティア「だつてえ!?面白過ぎるでありんすよ!?男性を虜にするサキユバスが処女だなんて!」

アルベド「だつてだつてえ!?アインズ様がアインズ様があ!」

赤面しながら叫んだアルベドに対して、全員が驚く中、未だにに笑っているシャルティアに対してアルベドが意見を述べようとしたその時。

アクア「別に良いじゃない。」

「ん?」

シャルティアとアルベドの間に入るように、アクアは腕を組みながら話し始めた。

アクア「好きな相手の為に純血を守る事は、別に笑われるような事ではないわよ？」

カズマ「アクア……。」

アクア「それは種族とか関係ないでしょ？恥じる事なんて全くないわ!!堂々としてればいいの!?!」

アクアが珍しくまともな事を言ったのを聞いて、カズマだけでなくアルベド達も思わず聞き入ってしまう。

零士「お前、まともな事、言えるんだな。」

アクア「いや、私女神だから。……とにかく!!そんな事で人を評価しちゃダメって事よ!!堂々と出来ない行為ってのは、基本的にないの。」

ユージオ「女神?」

ダイジ「アクアって人、そう言ったよな?」

零士「気にしないで下さい。」

零士に言われた事にツツコみながら、アクアはアルベド達に対して頭上から光を照らされながら話す姿は、ある意味女神らしいと言えば女神らしかった。

ユージオとダイジが、アクアが女神である事に首を傾げる中、零士が声をかける。

すると、光が消え、アクアはある爆弾発言をする。

アクア「……あ、でもアレはダメね。胸にパッドとか入れるのは。」

シャルティア「かああ!?!」

アクアが言った言葉を聞いてシャルティアはショックを受け、逆にアルベドは笑みを浮かべた。

アクア「胸が無いからって、パットを入れて誤魔化すとかは本当にダメ。エリスって私の後輩が居るんだけど、胸をパットで誤魔化してるの!!嘘や懺悔を受け入れる立場で、胸を誤魔化してるってどうなのかしらーって。」

カズマ「………零士、ああ言われてるけど、どうなんだ?」

零士「エリス様に悪口を言うんじゃないわねえ。」

カズマ「だよな……。」

呆然とするのだった。

そんなシャルティアの叫び声は、ミト達の方にも届いており。

アスナ「隣、騒がしいわね。」

ユイ「そうですね。」

ミト「確かに。」

カナ「シャルティアさん達ですね。」

リーファ「何か、あったんでしようか？」

シノン「さあ？」

ユウキ「大丈夫かな？」

ユナ「何があったんだろう？」

イーデイス「ねえ、アリスく！どっちが似合うかしら？」

アリス「どちらにも似合うと思いますよ。」

ターニヤ「にしてもアイツら、何時まで騒いでいるんだ？」

ヴィーシャ「少佐く!!こつち何てですか?凄く可愛いと思うん

ですけどお!!」

アスナ達とターニヤが気にする中、ヴィーシャが、ターニヤにそう声をかける。

その水着は、スカートが付いたピンクの水着だった。

一方、レジでは。

荒くれ者「海に大勢の男女、何も起きないはずはなく……。」

グランツ「早くレジ打ってください。」

アーロン「何を言ってるんでしょうか？」

エターナル「さあな。」

ノーチラス「後ろが待ってるから、早くして欲しいんだけどな。」

荒くれ者「フツ……。」

荒くれ者は、そんな意味深な事を言い、グランツ、アーロン、エターナル、ノーチラスからそう言われるが、鼻で笑う。

第9話 満喫！りんかいがっこう

現在、2組は、海に来ていた。

そんな中、カズマは。

カズマ「拝啓、皆様、元気ですか？僕たちは、このろくでもない異世界学園生活を……………満喫してまあーす！」

そう叫んだ。

ただし、女性陣には聞こえない様に。

一方、ビーチでは、リーファ、アーロン、ユウキ、夏美が準備をしていた。

リーファ「皆さ〜ん！バレーの準備ができましたよ〜！」

アーロン「ありがとう、リーファ！」

ユウキ「よお〜し！遊ぶぞ!!」

夏美「それはそうと……………あの人たちは、何をしてるの？」

夏美が指を指す先には、海辺をじつと見つめていたヴァイスとケーニツヒとノイマンとグランツが居た。

ヴァイス「……………なあ、皆。」

ノイマン「はい。」

ヴァイス「我々は今、ヴァルハラに居るのかもしれない。」

ノイマン「ですな。」

ユウキ「ヴァルハラ？」

ヴァイスが言ったヴァルハラという言葉に、首を傾げるユウキ。

ケーニツヒ「こちらも綺麗な女子達を、帝国で見た事あるか？」

グランツ「……………いや、無いツス。」

夏美「無いんだ……………」

アーロン「彼らは一体、元の世界で何があったんでしょ…？……………？」

リーファ「さあ……………？」

ケーニツヒの言葉に、夏美がそう呟き、アーロンのケーニツヒ達の問題環境に対する呟きに、リーファは首を傾げる。

ヴァイス「これは日頃戦場で酷い目に合っている、我々へのご褒美

ヴァイス「え？」

ノイマン「アレを見て下さい！」

ケーニツヒの眩きに、頷くヴァイス。

だが、ケーニツヒは違うと言って、ヴァイスは首を傾げる中、ノイマンが指摘する。

それは、ダクネスだけでなく、リーファ、夏美の胸が、腕立て伏せをする度に大きく揺れている事だ。

ヴァイス「た、確かに見事だ。」

グランツ「あれはもう……暴力です。」

それを見たヴァイスが言った後に続くように眩くグランツだった。

一方、ヴァイス達の視線が、自分達の胸に向いている事に気づいた、女性陣は。

ダクネス「視線を感じるぞ、そう舐め回すような視線だ。私のこの姿を見て、陵辱的な妄想を膨らませている男……いや、雄の視線だ。私はこの後どうなってしまうのだろう……腕に力が入らなくなつて、抵抗もままならぬ私は……。どうなってしまうのだろう!？」

コキュートス「……ドウシタラ良いノダロウ?」

ゲルド「……どうすれば良いのだ?」

何時も以上に妄想を膨らませながら腕立てをしたダクネスに聞かれ、少しだけ困つて汗を掻くコキュートスとゲルド。

リーファは。

リーファ「……アーロン君?何か変な事を考えていないよね?」

アーロン「考えてません!」

自分の彼氏に、疚しい事を考えていないかと尋ね、アーロンがそう答える。

夏美は。

夏美「何で、そんなに私を見るのよ!やめなさいよ!!」

そんな風に思っていた。

すると。

ギロロ「おい、貴様ら……!」

ヴァイス「ええっ!?!ギ、ギロロ殿……!?!」

ギロロ「腕が止まっているぞ!とつとと動かさんか!!」

ヴァイス「は、はいいいい!!」

ギロロは、夏美をジロジロと見るヴァイス達にキレたのか、大声で、ヴァイス達に腕立て伏せをさせる。

一方、ユウキは。

ユウキ(僕……………そんなに胸が大きく無い……………。)

ユウキは、大きく無い自分の胸に嘆いていた。

それを見ていたヴィーシャ、ラム、ギルバート、ダイジ、ミリムは。

ラム「最低ね。」

ヴィーシャ「最低です。」

エターナル「何やってんだ……………」

ミリム「ていうか、これ、ただ切っただけで、生ではないか!それをこのアタシに食わせる気か!?!」

ダイジ「後でちゃんと火を通すからな。」

ラム、ヴィーシャ、エターナルは、ヴァイス達の痴態に呆れ、ミリムは、具材に火が通っていない事を嫌がり、ダイジは火を通すと説明をする。

ミリムは、生の野菜が嫌いなのだ。

加工していれば、食べるのだが。

すると。

スバル「よおく姉様!!ちゃんと仕事してるかあ?」

ドロロ「ラム殿、随分と嫌そうな顔で準備をするでござるな

……………」

そこに、スバル、ドロロが来る。

それに対して、ラムは答える。

ラム「そんな事無いわ。バーベキューのせいで、給食委員の仕事が増えて嫌で嫌で仕方ないだなんて……………ラムは思っていないわ。」

エターナル「絶対思ってるだろ……………」

ラムの答えに、そう呟くエターナル。

今度はラムが、質問をする。

ラム「それより、バルスこそ仕事はしているの?」

その質問の答えは、ユージオとドロロがする。

ドロロ「飼育委員は、臨海学校中はやる事がなくてござるからな。」
ユージオ「僕たちは、仕事のある委員の手伝いをする事にしてるんだ。」

ラム「……………要するに雑用ね。何処に行っても役立たずなのは変わらないって事じゃないバルス。あなた達もあんまりバルスと一緒に居たら……………バルスがうつるわよ?」

スバル「言われると思った……………って!?!俺がうつるって病原菌かなんかか俺は!?!」

ドロロとユージオの答えに、ラムはそう言って、スバルは突っ込む。すると、ヴィーシャがスバルに話しかける。

ヴィーシャ「あのおく?」

スバル「あ?」

ヴィーシャ「スバルさん、ですよね?」

ラム「そうよ、バルスよ。」

ヴィーシャ「……………ナツキ・スバルさん?」

ラム「そうよ、バルスよ。」

ダイジ「ラムさん。ヴィーシャさんが混乱しているから、やめてあげたら?」

ミリム「お前、バルスって言うのか?」

スバル「違うから!」

スバルに聞いたヴィーシャに代わりにラムが答え、その答えを聞いて混乱しているヴィーシャを見て、今度はダイジがラムにツツコんだ。

ミリムは、間違った名前ですバルを呼んで、スバルは突っ込む。すると。

カズマ「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

『ん?』

そんな中、宿舎の方からカズマの大きな悲鳴が聞こえ、驚いたスバル達は宿舎の方を振り向いた。

宿舎の前では、風紀委員の面々が集まっていた。

その理由は。

カズマ「目があ?!目があああああああああああああああ
!?!」

アスナ「カズマさんったら………。」

アリス「一体何をしていたのですか?」

ターニヤ「女子の水着に目を奪われ続けるなど、風紀委員が風紀を
乱すとはどう言うつもりだ!!」

カズマ「それにしたってえ!?!」

カズマは、涙目で目を抑えており、アスナとアリスが呆れ、ターニヤ
の言った事に、カズマは反論する。

何故、こうなったのかと言いますと、時間は少し遡る。

カズマ「フッフッフッフッフッフッフッフ!!スキル「潜伏」による……N
O・Z O・K I!これに勝るものは……!」

カズマは、潜伏スキルを使って、女子の水着姿を盗み見ていた。
すると。

アリアン「そこで何をしているの、佐藤和真。」

カズマ「えっ?」

後ろから声を掛けられ振り向くと、そこにはアリアンだけでなくデ
ミウルゴスも居て、アリアンが一旦離れた次の瞬間。

デミウルゴス「フラッシュ!!」

カズマ「っ!?!目があ?!目があああああああああああ!!」

デミウルゴスはスキル「フラッシュ」を使い、カズマの目を痛む程
焼き……現在に至る。

カズマ「水着見ただけで目ん玉まで焼くかあ!?!」

ターニヤ「いやあくデミウルゴス君、アリアン君の協力かたじけな
い。」

デミウルゴス「いえいえ、ターニヤ殿こそ迅速な判断、お見事です。」
ターニヤ「何を言うか?君の様な部下を持って本当にアインズ君が
羨ましい。」

デミウルゴス「いえいえ、それを言うならターニヤ殿こそ充分
……。」

カズマ「つて聞いてええええええええええ!!」

目を焼いた事でカズマは議論をぶつけようとしたが、ターニヤとデミウルゴスはカズマの話の話を聞く事無く二人で話しており、話を聞かれなかったカズマは思わずツツコんだ。

一方、それを見ていたアークは。

アーク（流石に、我はやらぬぞ！目を焼かれるのは辛いしな。）

そんな風に考えていた。

すると、ケロロが声をかける。

ケロロ「それにしても、アーク殿。」

アーク「どうした？」

ケロロ「アーク殿って、骸骨姿なんでありますな……………」

アリアン「ああ……………。アークって、呪いでこの姿にされたらしいのよ。」

アリス「呪いですか……………」

アスナ「大丈夫なんですか？」

アーク「まあ、大丈夫であるな。」

そんな風に話していた。

一方、保健委員が運営しているテントには。

レム「誰もいらっしやいませんね。」

ミト「まあ、誰か来た場合は、大抵怪我してると思うんだけどね。」

イーデイス「まあ、誰も怪我しないのが一番よ。」

モア「てゆうか、無病息災？」

シャルティア「そ……………そうでありんすね……………」

レム、ミト、イーデイス、モアの言葉に、シャルティアは頷く。

だが、シャルティアの視線は、4人の胸部に向いていた。

理由は、4人は胸がでかい。

レム「ん？どうかされました？」

シャルティア「な!?何でもありません!？」

レムは、シャルティアの様子が変な事に気づき、声をかけるが、シャルティアはそう答える。

その後も、臨海学校を楽しんでいる一同。

リムル「うくん！これ、美味しいな！」
ラム「当然よ。」

アーク「美味であるな！なあ、ポンタよ。」
ポンタ「キュ！」

ゲルド「中々に、美味しいですな。」

カルム「確かに！」

バーベキューをして、焼いた物に舌鼓を打つ。

ダクネス「凄い！本当に当たる!!」

小雪「凄いねえ〜！」

桃華「どりゃああ!!」

タママ「モモツチ、やるですう！」

キリト「素手でスイカを割ったぞ……!!」

目隠しながらも、鉄球でスイカを見事に割ったレムを見て感想を言うダクネスと小雪。

そして、桃華は目隠しをしながらも、素手でスイカを割り、それを見てはしやぐタママと戦慄するキリト。

ミリム「リムル！レイト！食らうのだ!!」

リムル「甘い！」

レイト「これで、どうだ!!」

ノーチラス「レベルが高すぎる……。」

ユナ「まあ、楽しいし、良いじゃ無い！」

ミリムとリムルとレイトが、水鉄砲で銃撃戦を行い、レベルの高さから、引くノーチラスと笑うユナ。

カズマ「ステイール!!」

『ぐはああ!?!』

ケロロ「つちよ!?せこいであります！」

ビーチフラッグの際、ステイールを使ってカズマが旗を取り、結局旗を取れなかったヴァイス達が転び中、ケロロはカズマにツッコんだ。

ちなみに、クルルはというと。

クルル「そんな感じに遊ぶなんて、めんどくせえな。クツクツ

クツクツ……………」

と、語っており、日影で休んでいた。

そんな感じに遊ぶ中、夜となる。

ロズワール「と言うわくけで、肝試しの時間だくよ。くじを引いてチームを決めてちよううだいな？」

夜のアクティビティである肝試しの時間になり、ロズワールはくじが入った箱を持ちながら言い、皆は順番にくじを引いた。

アスナ「そんな……………」

ミト「ええ……………」

アルベド「どうして……………？」

ロズワール「じゃあ一組目かあくら。」

アスナはキリトと、ミトはカルムと、アルベドはアインズと一緒になれなくて、泣いている中、早速肝試しが始まった。

冬樹「じゃあ、僕たちの番だね。」

グランツ「よし！行くぞお嬢ちゃん方。」

一組目である冬樹とグランツとめぐみんとベアトリスとマーレが出発する前、めぐみんとベアトリスとマーレに対して冬樹とグランツが言う。

だが。

めぐみん「おい、この私を差し置いて勝手に仕切るのは止めてもらおうか？」

ベアトリス「貴様達よりは格段に長く生きているのよ人間。」

冬樹「なんか……………やりづらいね。」

グランツ「ああ……………」

めぐみんとベアトリスの態度を見て呟いた冬樹に頷くグランツ。

マーレ「ぼ……………僕……………」

グランツ「マーレちゃんだけは天使だな。」

そんな中、マーレを見てグランツは笑みを浮かべながらそう言ったのだが。

マーレ「僕……………男です!!」

『……………ええええ!!』

『ええええ!?!』

マーレの発言を聞いて冬樹とグランツだけでなく、隣に居ためぐみんとベアトリスも驚いた。

ロズワール「早く出発してくれたまえ。」

そんな冬樹達を、ロズワールは出発を急がせた。

その後も五人ずつのチームが順番に出発しては戻って来て、戻ってきていないのは、リムル、零士、アーク、レイトのチームと、アクア、アインズ、スバル、ターニャのチームだ。

ロズワール「皆、殆ど怖がらなかつたねえ。」

アルベド「当たり前ですわ。そもそもアインズ様と一緒に無い時点で、この企画はまったく意味が無いのです。」

ロズワール「君にとってはそうだろうね……。」

帰り際ロズワールに話しかけられたアルベドが答えると、その答えを聞いてロズワールは呟きながら、ヴィーシャとヴァイス、カルムとミトが話しているのを見る。

カルム「俺たちも色々あったから、慣れちまったのかもな。」

ミト「まあね。」

ヴィーシャ「私達も……どちらかと言うと、前の世界の方がもつと恐ろしかったですから。」

ヴァイス「まあ……前の世界と言うか、少佐殿が一番恐ろしいですから。」

カルムとミトが話した後、ヴィーシャが言った事にヴァイスも腕を組みながら答えた。

ヴィーシャ「大尉!?!私は言ってますからね!?!」

ミト「そうかしら?どこかで言ってるんじゃないの?」

ヴィーシャ「言ってます!!」

ヴァイスの話聞いてヴィーシャは言うが、ヴァイスのノリに乗っかるようにミトが言った事にヴィーシャは腕を回しながら言い返した。

一方、当のターニャは。

ターニャ「へつくしよん!!」

スバル「ん？風邪か？」

ターニヤ「あ、いや……。」

スバル「誰かが噂してるんじゃないか？」

その頃スバル、ターニヤ、アインズ、アクアのチームは森の中を歩いており、途中でターニヤがくしゃみをしたのを見てスバルは笑みを浮かべながら呟いた。

すると。

リムル「おお！お前ら！」

ターニヤ「どうやら、合流してしまった様だな。」

アーク「そうなるな。」

アインズ「まあ、この際、一緒に行くのもありではあるな。」

零士「そうだな。」

レイト「じゃあ、一緒に行こうぜ。」

リムル、零士、アーク、レイトのグループと合流して、そう話す。

すると、アクアが口を開く。

アクア「……ねえ、あなた達。」

リムル「また、俺やレイト、アインズに文句を言うのか？」

アインズ「私としては、そろそろ突っかかるのはやめてくれるとありがたいのだが。」

レイト「本当だよ。」

アクア「違うわよ!!」

アクアのセリフに、リムルとアインズ、レイトはそんな風に反応するが、アクアは否定する。

すると、次のアクアの言葉で、零士を除く全員が驚く。

アクア「あなた達……時代とか細かい所は違うけど、皆、地球から来たんでしょ？」

アーク「なあ!？」

リムル「ど、どうしてそれを!？」

レイト「何っ!？」

零士（アクアって、こういう所だけ、洞察力が凄いなよなあ……。）

アークとリムルが驚いてアクアに質問をすると。

アクア「分かるわよ、カズマと零士もそうだし。何よりカズマを前の世界に送ったのって、私だもの。」

ターニヤ「なあ!?!」

アクアの話聞いたターニヤは目を見開き、俯きながらアクアに聞いた。

ターニヤ「……その話をもう一回……。」

アクア「だ〜か〜ら!! 私は神様として、カズマを地球から呼び寄せたの!?! ここに来る前の世界に、魔王討伐の為にね。」

アーク「神様としてか?」

アクア「そう、私女神だもの。」

リムル「え、マジか!?!」

レイト「嘘だろ?」

アクアの言葉に、アークが首を傾げると、アクアは女神だと答え、その事を聞いてリムルが少し驚く中、ターニヤは拳を作りながら唸り声の様な声を鳴らしていた。

ターニヤ「……貴様が。」

アクア「え?」

そしてアクアに対して恨み籠った声で言い、それにアクアが少しビビった次の瞬間。

ターニヤ「貴様が存在Xかああああ!?!」

『っ!?!』

ターニヤの叫び声と共に、膨大な魔力が放出され、それには、その場に居た全員が驚く。

ロズワール「っ!?!」

ターニヤが放った魔力は、ロズワール達が居るスタート地点にも届き、魔力を感じたロズワールですら顔色を少し変える中、集合場所には電気のように魔力が走っていた。

キリト「何だ!?!」

ケロロ「何が起こってるんですか!?!」

リナ「膨大な魔力……!?!」

アルベド「なあ!？」

アリアン「これは!？」

レム「スバル君!？」

カズマ「なあ……!？」

その膨大な魔力に、全員が驚き、203航空魔導大隊の面々は、ターニヤの魔力だと分かったのか、ヴィーシャとヴァイス以外の面々、ケーニツヒは倒れそうなところ何とか耐えているが隣に居るノイマンは立ちながら気を失っており、グランツに至っては泡を吹きながら気を失っていた。

ミリム「むむっ!？」

ゲルド「ミリム様?！」

ミリム「どうやら、この膨大な魔素の発生源は、あのターニヤという者の様だな!！」

ミリムは、竜眼ミリムアイを使って、ターニヤが発生源だと知る。

一方、ターニヤ達は。

アインズ「ターニヤ君!？待て!待つんだ!!！」

ターニヤ「止めないでくれアインズ君!!！」

アクア「え!？何!？何何々!？ちよつと!？怖いんですけど!？」

アインズの静止も聞かずにターニヤはアクアに近付き、そんなターニヤを見てアクアは涙目になっていた。

ターニヤ「怖いだど!？存在Xともあろう者が情けない!？」

アクア「だから存在Xって何よ!？」

ターニヤ「黙れえ!この神を自称するペテン師め!!！」

どうやらターニヤは、アクアを完全に存在Xと勘違いしており、今にでもアクアを殺しにかかろうとしていた。

それを見ていた零士達は。

アーク「これは………かなりまずいんじゃないか!？」

零士「止めるぞ!!！」

リムル「言われなくても!!！」

レイト「分かってる!！」

かなりやばいと悟った零士達は、それぞれの武器を抜刀して、アク

アの前に立ち、ターニヤを止めようとする。

だが、零士達の前に、スバルが立つ。

スバル「ちよちよちよ!?ちよつと!?状況分かんねえけどストップ!?!」

零士「スバル!危ないぞ!!」

ターニヤ「何だ貴様……邪魔をするなら!!」

スバルがいきなり目の前に立った事に、零士はそう叫び、ターニヤは忠告する。

そんな中、スバルは。

スバル「お前らはまず戦闘態勢解いて!?それとターニヤさんよお、アンタの世界で何があったか知らねえけども、あんたがキレてる対象多分コイツじゃねえよ!?!」

アインズ「彼の言う通りだぞ。君をその世界に送り込んだ神、自称神こと存在Xだったか? そいつと彼女が同一人物だと本当に思えるのか?」

ターニヤ「……………」

アクア「あわあわあわあわあわあわあわ……。」

そう言つてスバルがターニヤを止めようとする、アインズもターニヤに対して質問した。

そして二人の話を聞いたターニヤは冷静になつて、零士達の後ろで涙を流しながら震えるアクアを見て……………アクアと存在Xは違うと感じた。

ターニヤ「……確かに、まったく違う。」

スバル「だろう?」

魔力を落ち着かせながら言つたターニヤにスバルが言い、それを見て零士達もホツとしながら戦闘態勢を解いた。

ターニヤ「……………ハア、そうだった。ここは沢山の世界が絡み合っている場所だったな。アクア殿、失礼した。」

アクア「は……はい。」

そんな様子を見てターニヤはため息を付きながらアクアに謝り、今だ涙目のアクアはそれに頷いた。

ターニヤ「神を自称する者に過敏になっていたようだ。」

アクア「で、でも私前から言ってたわよ!? 私は女神だって!? ずっと!?!」

そうターニヤが言った事に対して、アクアは全員に聞こえるくらいの声で言った。
すると。

「「「え?」「」」

アクア「え?」

アクアのその言葉に、ターニヤ、リムル、アークは口をポカンとしながら少し驚く。

その反応を見てアクアも少し驚く。

「「「え?」「」」

アインズ「ああ………言ってたぞ。」

零士「一応………言ってたな。」

再びターニヤ、リムル、アーク、レイトが少し驚く中、アインズと零士がそう言う。

すると、スバルは、ある事に気づく。

スバル「………あ、ああ………あまりに女神っぽくないから、俺達脳に染みて無かったんだわ多分。」

ターニヤ「そう………かも。」

アクア「それ酷くない!?!」

ターニヤ「いや、こんなに残念な自称女神に冷静さを失うとは、私もまだまだだな。」

アクア「本当酷!?!」

スバルの話を聞いて冷静に言ったターニヤの話聞いて、アクアはショックを受けるのだった。

零士は、呆れた様に頭を振る。

そこに、スタート地点に居た人たちがやって来る。

アルベド「アインズ様あ〜!!」

ミリム「リムル〜! レイト〜!」

アインズ「ああ、お前達。」

リムル「どうしたんだ、そんな血相変えて？」

ロズワール「今そつちから地鳴り見たいな膨大な魔力を感じたあよ？」

零士「それなんですが……………」

ターニヤ「将官が、冷静さを失いました。アインズ殿とスバル殿のお陰で、今は落ち着きを取り戻しております。ご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした。」

ロズワールの質問に零士が返答に困っていると、ターニヤが頭を下げながら皆に謝罪の言葉を述べた。

サブロー「まあ、皆無事なら、それで良いんじゃない？」

シノン「まあ……………アンタの魔力に当てられて、部下が2人ほど倒れてるけど。」

サブローがそう言う中、シノンは、ゲルドに背負われてるノイマン、カイトの肩を借りているケーニツヒ、完全に気を失って、ユージオとダイジに運ばれているグランツを見て眩く。

そんな体たらくに呆れたターニヤは、ため息を吐き、叫ぶ。

ターニヤ「貴様らあ！精神力が足りないぞお!!」

リムル「いや、こいつらは、いつものアンタを知ってて、こうなってるんじゃない……………」

零士「ああ、トラウマみたいな感じで？」

レイト「どんだけだよ……………」

ターニヤ「うむ、そうかもしれん……………だがそれでも許さん!!」

ヴィーシャ「ヒイ!？」

「「無慈悲!!」」

ヴィーシャ達が驚くほどに叫ぶターニヤ。

一応、リムルと零士がフォローするが、許せなかったのか、ヴィーシャが怯えるくらいに、気絶したグランツを蹴る。

それを見て、スバル、リムル、零士、レイトが叫ぶ。

アクア「私女神なのに……………女神って信じてもらえなくて……………信じてくれたと思ったら何故かキレられて……………」

カズマ「そうだな。アクアは、頭の可笑しくて自称女神のアーkup

リストだからな。」

アクア「酷!?!」

スバル「こっちも無慈悲!?!」

その近くではアクアが涙目になりながらカズマに言うが、カズマの態度を見てまたショックを受け、それを見てまたツツコむスバルだった。

カズマ「間違えた、宴会芸の女神だっけか?」

アクア「酷!?!」

そんな風に会話している中、リムルは、スバルと零士を見ながら考える。

リムル（それにしてもあの力………下手したら、ギイやミリムにも匹敵する程のオーラだったな。それを間近で受けたのに、平然としているなんて………スバル、零士。お前らは一体、何者なんだ?）

レイト（あの2人、一体何者なんだ?）

リムルとレイトは、そんな風に考えていた。

こうして、波乱の臨海学校は終わる。

第10話 参戦!らいばるたち

臨海学校が終わり、いつも通りの学園生活が始まった……………。

ロズワールは、ある事を口にする。

ロズワール「た〜い育祭が、近付いていくよ?」

スバル「ロズつち先生、この間臨海学校があつたばかりだつてのにもう体育祭つて、スケジュール的に変じゃねえなか?」

ロズワール「え!? そうなのかい?」

ロズワールの発言に、スバルが突っ込む。

だが、今度は近々体育祭が行われると言うロズワールにスバルが手を挙げながら質問し、その質問にロズワールは少し驚いた。

カズマ「いや、なあ……………」

零士「この世界は、全部おかしいんだから、そんな事を言われても今更なんだよな……………」

キリト「そうだな。」

カルム「それは、否定出来ないな。」

スバルの言葉に、カズマと零士がそう言つて、キリトとカルムも同意する。

ロズワール「まあまあ、皆で力を合わせて優勝してくれたまあくえ?」

リムル「優勝つて……………」

レイト「そんな事言われても……………」

アーク「優勝すると、何があるのだ?」

ロズワールの言葉に、リムルとレイトとアークがそう聞く。

すると、ロズワールの発言に、全員が耳を疑う。

ロズワール「そうだねえ……………元の世界に戻れちゃったりする、かあくもね!」

一同「っ!」

ロズワールのその言葉に、全員が驚く。

体育祭で優勝すれば元の世界、正確には、前居た世界に戻る。

それはこの場に居る面子の殆どにとって吉報だった。

バニルは、動揺しているスバル、リムル、ケロロにそう言う。
ちなみに、黒板には、ツイーテ・ナイカ・タイヤネンと書いており、
欠席しているようだ。

ロズワール「さあ〜てきて、教室に戻ろうじゃないか?」

零士「ここにクラスなんて、無かった筈だぞ?」

アインズ「気づいてたか?」

アーク「いや……………」

ターニャ「昨日までは存在すら……………」

カルム「突然、現れたよな?」

キリト「確かに……………何も無かった筈……………」

ロズワールが教室に戻る様に言っつて、零士がそう言っつと、アインズ、
アーク、ターニャ、カルム、キリトはそんな風に話す。
すると。

ロズワール「そう言う世界だと、受け入れるしかなあ〜いね。」

ロズワールはこの場に居る全員を見ながら、そう話したのだった。

その後、零士、スバル、ターニャ、アインズ、リムル、レイト、キ
リト、カルム、アーク、ケロロの面々が集まった。

零士「隣のクラス、1組つて書いてあつたけど、うちの知り合いが
何人か居たぞ。」

アインズ「ウチの戦闘メイド、プレアデスもいたな。」

スバル「戦闘メイドつて、ちよつと設定強すぎね?」

レイト「鬼つ子メイドと仲良しのお前が言うか?」

零士がそう言っつて、アインズがそう言っつと、スバルが突つ込み、レ
イトもスバルに突つ込む。

ターニャ「あの突如現れた一組には、我々の世界から追加で転移さ
れて来た者が居ると言う事だな。」

キリト「そうみたいだな。」

カルム「どうやら、この異世界転移の状況は変化し続けてる、そう
考えるべきだな。」

ターニャとキリト、カルムがそう言う。

まあ、キリトとカルムは、異世界転生とかそういうのでは無いが、1

組の面子がどんな感じなのかを言う為に来た。

ターニヤ「そして、今回の体育祭。優勝は我々にとって必須事項となっている。」

アーク「そうだな。ロズワール先生の話によると、優勝出来たら元の世界……正確には前いた世界に戻れると言う事らしいしな。」

ケロロ「でも……あのロズワールって先生、いまいち信用出来ないでありますな……。」

スバル「それは……ああどうだろう?」

ターニヤの言葉に、アークが頷く。

だが、ケロロはロズワールに不信感を抱いており、スバルもうまく反論出来なかった。

零士「まあ、何はともあれ、まずは1組に勝てなきゃ戻れないって訳だ。……いまいち自信ないけどな。」

ターニヤ「……アインズ君、彼我の戦力差は?」

アインズ「少なくとも、あそこにいたプレアデス相手なら、我々が負ける事はない。他の皆はどうだ?」

キリト「確か、1組に居たのは、シリカ、リズ、アルゴの3人だったな。」

カルム「なら、大丈夫だな。」

アーク「あまり、ダン力殿とゴエモン殿と戦うのは、気が引けるが、大丈夫だ。」

ターニヤの質問に、そう答えるアインズ、キリト、カルム、アーク。だが、スバル、零士、リムル、レイト、ケロロは不安そうな表情を浮かべていた。

スバル「いやあくさつき居た奴、ラインハルトってやつなんだけど

……」

リムル「あのどつかの騎士見たいな男か?」

スバル「アイツ多分、俺が居た世界で最強。」

零士「え?」

レイト「どういう事?」

スバルの言葉に、全員が耳を疑う。

スバルがその理由を話す。

スバル「俺達の世界って加護って呼ばれてる、何て言うかチート見たいな奴があるんだけど……アイツそれが付きまくってるんだよねえ。」

アインズ「加護？我々の世界のスキルや武技とも違うようだな。」

カルム「俺たちの世界の、ユニークスキルみたいなもんか？」

アーク「それで、そのラインハルトは、どんな加護を持っているんだ？」

スバルの言葉に、アインズとカルムがそう分析して、アークがどんな加護を持っているか聞く。

スバル「聞いて驚けよ……アイツ、初めて見る攻撃が当たらない。ファーストアタックが当たらない。ちなみに二度目以降も当たらない。これは噂だけど、死んでも蘇るつてもあるらしい。更に遠距離攻撃は食らわないのに、相手には必ず命中するし、呪術バフデバフの効果も無い。更には全ての属性攻撃……。」

リムル「待って待って待って待って待って!!」

スバルの言葉に、リムルが待ったをかける。

キリト「何だよそれ！理不尽の権化じゃないかよ！」

カルム「ヒースクリフを超えやがった……。」

ケロロ「それは、反則であります！」

零士「……………それを聞くと、何か、俺たちの世界の1組の面子が弱く感じるな……………」

アーク「そういえば、零士にケロロ、リムルとレイトが気にしている事は何だ？」

ラインハルトのあまりの性能に、キリトはそう叫び、カルムはSAOのゲームマスターにして、デスゲームの首謀者、ヒースクリフこと茅場晶彦を超えている事に戦慄し、ケロロも反則と言う。

今度は、アークが零士、ケロロ、リムル、レイトに質問をする。

零士「いや……………俺の世界の人が6人居ただけだよ……………。6人中4人が仮面ライダーなんだよね……………」

リムル「確か、聖剣を操る仮面ライダーだっけ？」

零士「しかも、厄介な能力持ちの聖剣ばかりだな。」
キリト「どんな聖剣なんだ？」

零士「煙の聖剣の煙叡剣狼煙、時の聖剣の時国剣界時、月の聖剣の月光剣萬月、星の聖剣の星雲剣恒星の四つだな。」

ケロロ「それで、どんな能力でありますか？」

零士「まず、煙叡剣狼煙は、自分の体を煙にさせる事が可能で、時国剣界時は、時間を削る事が出来る聖剣で、月光剣萬月と星雲剣恒星は、聖剣の能力を無力化出来るんだよな……………」

その言葉に、全員が疑問を浮かべる。

アインズ「煙叡剣狼煙と時国剣界時はともかく、残りの2本の聖剣の能力が、聖剣の能力の無力化か……………」

ターニャ「厄介な能力だな……………」

アインズとターニャは、零士が言った聖剣の能力に頭を悩ませる。
スバル「それで、リムルとレイトは？」

リムル「俺の世界の面子のうち、1人が魔王なんだよな……………」
しかも、実力者揃いだから、そう簡単にはいけないのが現実だな。」

レイト「更に、仮面ライダーが三人も居るからな。」

アーク「なるほど……………」
それで、ケロロは？」

ケロロ「ガルル小隊は、隊長のガルル中尉が、ゲロモンの悪夢という異名を持っているんですよ……………」

ターニャ「ゲロモンの悪夢？」

ケロロ「何せ、ケロン軍の中では、最高のスナイパーでありますから……………」

リムル「スナイパーか……………」

そんな風に、1組の事を話し合っていると、廊下から、アクアの声が聞こえる。

アクア「ああー！！」

『ん？』

全員が廊下を覗くと。

アクア「クリス!? 何であなたがここに居るのよ!？」

クリス「そんな事言われても……………あっ!!ダクネス!!」

ダクネス「クリス!?これは一体……。」

アクアが指さした先には、アクアやカズマ達と同じ世界出身で、一組にも居たクリスが居て、アクアの質問に困惑していたクリスは後ろに居たダクネスに気付き、声を掛けられたダクネスは振り向きながら聞いた。

クリス「いやさあ、良く分からないんだけど、私も急にここに飛ばされたんだよ。ダクネス達も?」

ダクネス「ああ、気が付いたらこの学園に。」

そんな風に話していた。

零士「クリスも居たのか。」

ケロロ「知り合いなんですか?」

零士「ああ。………ん?」

零士は、ケロロの質問に答えると、スバルの方を見る。

一方、スバルは、以前、キリトとカルムが言っていた事を思い出していた。

それは、カルム達が、死んだら現実世界の体も死ぬというデスゲームに巻き込まれた事を。

スバル「(俺の……俺の死に戻りはどうなるんだ? 前の世界じゃ死んでも強制セーブまで戻ってたけど、もしこの世界でそれが通用しないなら……死んだらお終いだ……)。……いや、あの世界でも死にたかねえけど。」

リムル「………?」

レイト「スバル………?」

スバルの呟きに、リムルが首を傾げる。

スバル「(そもそもこの世界でもあの言葉って言っちゃダメなのか?………試してみるか。なあ………ちよつと耳塞いでくれねえか?」

『ん?』

スバル「良いから!」

スバルは疑問を解決しようと、近くに居たターニヤ、零士、キリト、カルム、アーク、リムル、レイト、ケロロに頼み、頼まれた零士達はとりあえず耳を塞いだ。

スバル「ああ……ゴホン!!……俺は死に、っ!?!」

目の前の全員が耳を塞いだのを確認した後、スバルが何かを話そうとした次の瞬間、黒い霧の様な物に包まれたスバルの背後から黒紫の手が伸び、その手はスバルの胸、心臓を掴む……………。

スバル「……っ!?!戻って……来たああああああああ!!（ペナルティは健在って事か……………）」

その直後、スバルは額から汗を掻きながら叫び、胸を押さえて息を整えながら考えていたその時だった。

スバル「つて!?!えええええ!!わあああああああああああああああ!?!」

アウラ「すみませんアインズ様あああああああ!?!」

嵐牙「申し訳ありません！我が主いいい！」

アインズ「何でお前達ここに居るのお!?!」

リムル「嵐牙!?!」

レイト「何でここに居るの!?!」

飼育小屋に居るはずのハムスケとデスナイトがスバルに向かって走って来、その背後でアウラと嵐牙が謝る中、突然現れたハムスケ達に、流石のアインズとリムル、レイトも驚いた。

その後ハムスケとデスナイトの暴走は収める為に、アウラは2体の頭を思いつき殴ったのだった。

アウラ「申し訳ありませんアインズ様。急にこの子達が興奮して走り出しちゃって。」

ケロロ「一体……どうしてでありますか?」

スバル「それ……俺の体質に反応したんだと思う。」

頭を下げたアウラの話聞いてケロロが首を傾げると、スバルが自身に指差しながら話した。

スバル「俺って魔獣とか呼び寄せちゃう能力があるんだよお。アンデットも呼び寄せるとは思わなかったけど。」

カルム「呪い……………の類か?」

スバル「そうだな……………」

スバルの話聞いてカルムが聞き、それにスバルはため息混じりに

答えた。

ターニヤ「……………呪いにはお互い苦しめられるな。」

スバル「お互い？……………つてそこら辺の話も聞きたいんだけどその前に……………。助けてくれるとスゲエ助かるんだけどお!？」

ターニヤの呟きを聞いたスバルは、またもやハムスケに頭を齧られており、齧られてるスバルはこの場の全員に助けを頼んだ。

その後、思いつきり叱られたハムスケは、デスナイト、嵐牙と共に飼育小屋に戻ったのだった。

その際、ハムスケは、『私は悪い子です』と書かれたプラカードを持たされた。

午後のホームルームにて。

アインズ「と言う訳で、我々が元の世界に戻る為には、体育祭で優勝しなくてはならないようだ。」

リムル「皆、協力してくれるか?」

レイト「頼む。」

アインズとリムル、レイトの言葉に、誰も反対しなかった。

零士「俺たちも、優勝目指して頑張ろうぜ!」

カズマ「そうだな。まあ、急いで戻る必要性はないけど、やれるだけはやろう!」

リナ「そうね! 私たちは剣士だもの! 手を抜くなんてごめんだわ!」

零士、カズマ、リナの三人がそう言う。

すると、それに触発されたのか。

ターニヤ「そうだな。敗北を目的として戦争を始める間抜けはいない。やるからには全ての力を勝利に注ぎ込むべきだ。なあ諸君?」

ターニヤがそう言うと、203 航空魔導大隊の面々は立ち上がりながら敬礼する。

ミリム「それでこそ、リムルとレイトなのだ! 私も、暴れるのだ!」
ヴェルドラ「クワーツハツハツ! 流石、我の盟友達よ!」

ゲルド「我々は、リムル様とレイト様を信じて着いていくだけです。」

ディアブロ「そうですね。」

ミリム達も、そう言う。

キリト「そうだな。俺たちは、全力でぶつかっていただけだ！」

カルム「今までだって、そうやって来たんだからな！」

アスナ「うん！」

ミト「私たちだって、負けてられないわ！」

カナ「私たちも頑張ります！」

ユイ「はい！」

リーファ「私たちも負けてられないよ！ねえ、アローン！」

アローン「そうですね！」

シノン「まあ、負けるのは嫌だから、勝ちに行くだけよ。」

エターナル「そうだな。」

ユウキ「よぉくし！負けてられないや！れ

ノーチラス「僕も、頑張るとしよう。」

ユナ「そうだね！」

アリス「私は、整合騎士です。」

ユージオ「整合騎士が、そんな事で手を抜いちゃいけないよね。」

イーデイス「やるからには、優勝だけよ！」

ダイジ「ああ！」

カルム達も、そんな風に頷く。

アーク「我も、全力で行くだけだな！」

アリアン「全力を出すのは良いけど、全力出し過ぎて、他の人達に

迷惑かけないでよね？」

チヨメ「ゴエモン殿も居るとは……………負けてられません！」

ポインタ「キュ！」

アークがそう宣言して、アリアンはアークに釘を刺して、チヨメも
気合を入れる。

レム「スバル君、レム達も頑張りますよ!!」

ベアトリス「にーちゃの為ならベティも頑張るかしら。」

ラム「ラムの代わりにバルスが頑張るわ。」

スバル「一人頑張らない宣言会ったけど……………俺達も頑張るぜ!!」

エミリア「皆……………！」

レムとベアトリスとラムの話聞いた後スバルも言い、それを聞いてエミリアは笑みを浮かべた。

そして、ケロロ小隊も。

ケロロ「そうでありませぬ！我輩達も、特訓をするでありますかな！」

ギロロ「いつも、侵略の時も、それくらいにやる気を出せ！」

タママ「タルルがいる以上、負けてられないですう！」

ドロロ「拙者も、頑張るでござる！」

クルル「まあ、他の奴らが頑張るから、大丈夫だぜ。」

モア「てゆうか、粉骨碎身？」

冬樹「僕も、出来る限りは頑張るよ！」

夏美「元の世界に戻る為にね！」

桃華「冬樹君も頑張るなら、私も……………！」

小雪「この小雪の嬢にお任せを！」

サブロー「そうだね。頑張るとしようか。」

そう言っつて、皆が気合を入れた。

すると。

ターニヤ「素晴らしい！」

零士「ん？」

ターニヤ「ケロロ軍曹！貴殿の心意気、お見事である！なので、203航空魔導大隊名物の訓練で、貴殿らを一人前の兵士にしてみせよう！」

ケロロ「そ、そうでありますか……………」

リムル（ん？何で、ヴァイス達が青褪めてるんだ？）

レイト（何か嫌な予感……………）

ターニヤの言葉に、ヴァイス達が青褪めている事に疑問を抱いた他のクラスメイト達。

すると。

ターニヤ「ヴァイス大尉!!」

ヴァイス「ハイ!!少佐殿!!」

ターニヤに呼ばれてヴァイスが他の面々と一緒にスコップを持ちながら立ち上がったのを見て、全員が嫌な予感をする。

その嫌な予感は、的中した。

「「「あああああ!!」」」

グラウンドに、ケロロ、零士、カズマ、キリト、カルムの悲鳴が響く。

その理由は……………。

パック「ほらほらほら!!ほくらほら!!

ギロロ「まだまだ行くぞ!!」

パックとギロロが上空から、氷、バズーカを連射していたのだ。

ターニヤ「そら泣け!!喚け!!貴様らの悲鳴が皆様の娯楽だぞお!」

そんな風になっていた。

ちなみに、それを見てトラウマが蘇ったのか、203航空魔導大隊の面々は全員顔色を悪くし、グランツに至ってはまた泡を吹いていた。

それを見ていたスバル、アインズ、リムル、レイト、アーク、エミリアは。

スバル「俺…………アイツらが一番恐ろしいわ。」

アインズ「それで合っていると思うぞー。」

エミリア「皆、大変でドツタンバツタンね。」

アーク「ドツタンバツタンって…………。」

リムル「今日日聞かないよな…………。」

レイト「確かに…………。」

「「「話しないで、止めるオオオオツ!!」」」

スバル、アインズ、エミリア、リムル、アークがそんな風に話している中、ケロロ、零士、カズマ、キリト、カルムはそう叫ぶ。

ちなみに、この後、漏れなく全員が特訓を受けて、一部を除いて、死にかけたのだった。

第11話 協力!たいいくさい

晴天、音だけの花火が鳴る空。

体育祭当日、その日は絶好の体育祭日和の天気だった。

そんな空の下、グラウンドには二組の面々が全員集まっていた。

エミリア「……うん!!今日は皆、頑張りましょう!!」

『おおお!!』

皆の前に立っていたエミリアの言葉に答えるように、殆どの面々が気合を入れて拳を上げた。

皆がそれぞれの、元の世界に戻る為に必要な体育祭が、今始まろうとしていた。

カズマ、めぐみん、零士、リナ、スバル、エミリア、レム、ケロロ、冬樹、キリト、カルム、アスナ、ミトが話していると。

ゆんゆん「み!見付けたわよ!!」

『ん?』

カズマ「おお、ゆんゆん。」

そこに現れたのは、めぐみんの自称ライバル、ゆんゆんだった。

ゆんゆん「めぐみん!今日こそは勝負よ!」

スバル「何この子?お前達の知り合い?」

キリト「勝負とか言ってるけど……。」

めぐみん「まったく知らない人です。人違いじゃないですか?」

めぐみんを指差しながら言ったゆんゆんを見てスバルとキリトは聞くが、めぐみんはそっぽ向きながら答えた。

ゆんゆん「あんたちよつと待ちなさいよ!私達は終生のライバルで

……!!」

めぐみん「………で、何の用ですか?」

ゆんゆん「そ、そうだった。えく……ゴホン!!今日の体育祭!!私達

三組が、優勝させて貰うわよ!!」

リナ「三組も存在してたんだ。」

ゆんゆん「ええ!?!」

そんなめぐみんにツツコンだゆんゆんは、めぐみんの問いに対して

少し顔を赤らめながらポーズを取り、宣戦布告の様な事を言ったのだが、リナの眩きを聞いて少しだけショックを受けた。

すると。

ダスト「おお！カズマに零士じゃねえか！」

零士「ダスト！リーン！」

声をかけてきたのは、零士とカズマと同じ世界の住人のダストとリーンだった。

カズマ「お前達も来てたのか。」

リーン「そうね。ちなみに、ゆんゆんと一緒のクラスだから。」

ダスト「優勝するのは、俺たちだけ！そして……へへへ……！」
ダストがそう言うと、顔を赤らめて、笑う。

それを見ていた人は。

リナ「ダスト……。」

ミト「何考えてるんだろ……？」

リーン「ダストってば……！」

女性陣は、全員呆れていた。
すると。

フェルト「よお兄ちゃん!!」

スバル「んう？おおフェルト!!……ゲエ!?ユリウス……！」

そんな中、スバルは聞き覚えの声がある声が聞こえて振り向くと、そこにはスバルと同じ世界出身のフェルトとラインハルト・ヴァン・アストレアとユリウス・ユークリウスが居て、スバルはその内のユリウスの姿を見たスバルは、少し苦虫を噛んだような顔をした。

フェルト「兄ちゃんには悪いが、今回は一組が勝たせてもらうかな!!」

ユリウス「ゲエっ!?とはご挨拶だな。スバル、騎士らしく正々堂々と戦おう。」

カズマ「……何この仲良く出来なさそうな奴。」

スバル「言いたい事はわかる。」

フェルトが話した後、自身を少し輝かせながら言ったユリウスを見て、カズマが言った事に対して頷くスバルだった。

お次は。

アイリス「お兄様！」

カズマ「アイリス！」

零土「ミツルギ、リア、エーリカ、シエロ！」

カズマ達に声をかけたのは、アイリス、ミツルギ、リア、エーリカ、シエロだった。

アイリス、ミツルギ、リア、エーリカに関しては、仮面ライダーである。

リア「今回は、ライバルという訳だ！」

シエロ「僕たちが勝ちますよ！」

エーリカ「覚悟しなさいよ！」

ミツルギ「お互いに頑張ろう！」

スバル「……………何か、ミツルギって奴の声が、ユリウスに似てるような……………」

リア、シエロ、エーリカ、ミツルギはそう話し、スバルは、ミツルギの声がユリウスに似ている事を気にしていた。

すると。

シリカ「キリトさくん！」

キリト「シリカ！リズ！アルゴ！」

フィリア「カルム〜！」

カルム「フィリア！アラン！クレハ！」

キリトの方に来たのは、シリカ、リズベツト、アルゴで、カルムの方に来たのは、フィリア、アラン、クレハだ。

シリカ、リズベツト、アルゴ、フィリアは、カルム達と一緒に、S A O 生還者で、アランとクレハは、エターナル、シノンと同様にGG O のプレイヤーだ。

リズベツト「今回は、あたしたち1組が勝たせて貰うからね！」

アルゴ「ニヤハハハ！俺っちも負けないからナ！」

キリト「ああ！」

アラン「カルム。俺たち3組が勝たせて貰うからな！」

クレハ「覚悟しなさいよ！」

カルム「ああ。」

そんな風に話していた。

一方、ケロロ達、アーク達の方にも、人が来ていた。

ガルル「お久しぶりです。ケロロ軍曹！」

ケロロ「ゲ〜ロ〜!?ガ……………ガルル中尉！」

ギロロ「兄ちゃん!？」

ケロロの前に現れたのは、ガルル小隊の面々だった。

ケロロは急いで敬礼をする。

ガルルも、敬礼を返す。

ガルル「ケロロ軍曹。今回、我々は1組というクラスに配属されたが、お互いに手加減なしで行きましよう！」

ケロロ「そ、そうでありますな！」

プルル「よろしくね、皆！」

タルル「タママ師匠！今回は負けませんからね！」

タママ「タルル！」

トロロ「なあ〜んで、僕がこんな面倒臭い事をしないと行けないんだがねえ……………」

クルル「クソガキ……………」

ゾルル「今日こそ、決着の時だ！ゼロロ！」

ドロロ「ええ〜つと……………。ダ……………ダササ君？」

ガルル小隊とケロロ小隊は、そんな風に話していた。一方。

灯「冬樹さ〜ん！」

冬樹「灯君！明ちゃん！」

新ケロロ「やつほ〜！」

夏美「ケロロ君！」

冬樹達の方には、新ケロロ、火ノ原灯、金阿弥明が来ていた。明「今日はよろしく。」

新ケロロ「僕たち、3組なんだ！ライバルだね！」

小雪「おお！更に増えた！」

桃華「そ、そうですね……………」

サブロー「どうやら、一筋縄じゃあ行かなそうだね。」

すると、再びケロロ達の方には。

カララ「こんにちは〜!」

チロロ「アロ〜ハ〜!」

ケロロ「カララ!チロロ!」

カララとチロロとは、ケロロ達に度々訪れるケロン人である。

カララ「ワイら、3組なんや!」

チロロ「よろしくな!」

ケロロ「ゲロ……………」

ケロロはそう答える。

冬樹達の方にも。

アリサ「冬樹。」

冬樹「ア、アリサちゃん!」

アリサ・サザンクロス。

闇に潜む者を狙う、闇の狩人。

ネブラ「今回は、よろしく頼むぞ。」

冬樹「う、うん……………」

ネブラの言葉に、そう頷く冬樹。

ちなみに、アリサ自身は人形で、動いたり喋れたりするのは、ネブ

ラが居るからである。

アークの方にも。

ダンカ「アリアン。」

アリアン「ダンカさん!」

チヨメ「ゴエモン殿まで!」

アーク「お2方も……………」

アリアンの仲間のダンカとチヨメの仲間のゴエモンが居た。

ダンカ「手加減はしないからな。」

アリアン「はい!」

すると、アークとゴエモンはお互いを取っ組み合う。

スバル「ちよつと!?!何してんの!?!」

アリアン「ああ……………気にしないで。」

しばらくすると、アークとゴエモンは肩を組み合う。

ゴエモン「お主、相変わらずやるな！」

アーク「いやいや、お主も相変わらずよ！」

「ガハハハハ!!」

アークとゴエモンは、お互いに笑い合う。

それを見て、全員が呆気にとられる。

一方、アインズは。

ユリ「申し訳ございませんアインズ様。まさかアインズ様の敵対勢力に、私達が組みする状況になってしまおうとは。」

その頃、飼育小屋前では、アインズの前でプレアデス全員がしゃがみ込みながら頭を下げており、その一人であるユリ・アルファがアインズに対して謝罪の言葉を述べた。

アインズ「気にするな。確かに前達戦闘メイドプレアデスは、私の盾となるべき存在だ。だがここは異世界、別のクラスになってしまった以上、遠慮は無用だ。」

そんなユリたちに対してアインズは話し続けた。

アインズ「茶番のバトルなど興ざめでは無いか。折角だ。今回はお互いライバルチームとして、思い切りやり合おう。」

ユリ「寛大なお言葉、ありがとうございます。」

アインズ（……まあこんなのギルド内でやるチーム戦見たいなものだしな。）

ユリ「ただ一つ懸念が……………」

アインズ「ん？」

アインズの言葉を聞いてユリが礼を述べた後、上を見上げながら思うていたアインズにユリが再び話しかけた。

ユリ「実は、私達のクラスに注意すべき人物達がおりまして。」

アインズ「ラインハルトを始めとする一部の者達だろうか？どうやら尋常じゃない能力を持っているようだな。」

ユリ「はい、アインズ様の敵ではないとは分かっておりますが、お耳にだけはと……………」

アインズ「分かった。心して置こう。」

ユリの言葉を聞いたアインズがそう答える。
一方、リムルの方は。

紅丸「申し訳ありません。リムル様、レイト様。」

紫苑「はい。まさか、リムル様とレイト様と敵対する事になるなんて…………。」

蒼影「面目ない…………。」

火煉「一生の不覚……………」

リムルとレイトの方には、紅丸、紫苑、蒼影、火煉、蒼華、蒼月、ガビル、ヤシチ、カクシン、スケロウ、トレイニー、ラミスが居た。リムル「いやいや。仕方ないって。ここは俺たちの世界とは違う。別のクラスになったのは、仕方ないだろ？」

ラミス「そうよ！リムル！レイト！あたし達が勝つからね！」

レイト「そういう事だ！お互いに頑張ろうぜ！」

「「はっ！」」

ガビル「我輩も負けませんぞ！」

カクシン「然り！」

ヤシチ「流石、ガビル様！」

スケロウ「かっくいい!!」

「「ガビル！ガビル！ガビル！」」

蒼華「うるさい……………」

蒼月「確かに……………」

トレイニー「ええ。負けませんよ。」

リムルの言葉にラミスがそう返して、鬼人達も返事をする。

ガビルの言葉にカクシン、ヤシチ、スケロウの順番でそう言って、ガビルコールを始める。

それを見ていた蒼華と蒼月はそう呟き、トレイニーがそう言う。
すると。

ゴブタ「あ！リムル様じゃないですか！」

リムル「おお！ゴブタ！リグル！エレン！カバル！ギド！シズさん！」

そこに現れたのは、ゴブタ、リグル、エレン、カバル、ギド、シズ

だった。

ゴブタ「リムル様、レイト様！」

リグル「申し訳ありません、リムル様とレイト様と敵対することになるなんて……………」

レイト「気にすんな。」

シズ「リムルさん、今日はよろしくね？」

リムル「ああ！」

エレン「シズさんと一緒に、頑張るから！」

カバル「だな。」

ギド「でやんすね。」

そうして、開会式へと移る。

ある程度の話や注意説明が終わった後、選手宣誓の時間になった。

グランツ「それでは、選手宣誓です!!」

アナウンス担当となつてゐるグランツの紹介が終わると、めぐみん

が朝礼台の上に立つて、マイクの調整をしていた。

カズマ「……………あれ？何でアイツ代表なんだ？」

エミリア「凄おくやりたいって言つてたから。」

カズマの疑問にエミリアが答えた後、めぐみんの選手宣誓が始まっ

たのだが……………。

めぐみん「選手宣誓!!ハツハツハツハツハ!!そう!!我々は今、抑圧

の解放の時つてあ……………」

ユナ「すいませえくん!!別の人にやらせまあす!!」

眼帯を付けて変な選手宣誓をしようとしたのを見て、ユナはめぐみんを引つ張り出し、その後、別の人が選手宣誓を行い、体育祭が本格的に始まつた。

デミウルゴス「皆さん、大丈夫ですか？」

ベアトリス「余裕なのよ!!」

アリアン「問題ないわ!!」

アウラ「やるねえ〜!!」

大縄跳びではデミウルゴスの問いに答えながら、ベアトリスとアリアンは飛びながら答え、それにアウラも感心している中、二組が一番

ゲルド「なんと!!」

コキユートス「見事ダ……。」

ラインハルト「すまない。綱引きの加護と言う物が……。」

スバル「ねえだろ!そんなのねえだろ!!」

綱引きではダクネスやゲルド、コキユートスと言った力自慢が居たにも関わらず、ラインハルト一人に完敗してしまい、その最中にラインハルトが呟いた事にスバルはツツコむが、一組に点数が入った事に変わりはなかった。

カズマ「玉入れ?俺のスキルステイルで全部取ってやるよ……。」
続いで玉入れでは、カズマはそう自慢げに宣言したのだが……。

カズマ「あれえええ!!ステイルが効かない!!?」

ラインハルト「残念。コソ泥避けの加護さ。」

スバル「ありそう!!それはありそう!!」

ラインハルトが持っていた玉はステイル出来ず、それに驚きを隠せないカズマに対してラインハルトが言い、それを聞いてスバルはツツコんだ。

結局玉入れも一組に軍配が上がり、その後も一組リードで試合が進んで行った。

アインズ「差が縮まらないな。」

キリト「確かに……。」

リムル「おい、スバル!あのラインハルトって、何者なんだよ!」

レイト「反則だろ!」

カルム「チートすぎるだろ……。」

スバル「だから言っただろう?アイツだけは別格だって。」

アーク「このままでは、負けてしまうぞ。」

ケロロ「まずいでありますな……。」

そんな風に話していると。

ロズワール「苦戦してるようだあくね?」

零士「ロズワール先生!」

ロズワール「でも安心したまえ。最終種目の騎馬戦は、逆転のチャア〜ンスだあくよ。」

そんな凜達に対してロズワールが話していると、一組のシズ・デルタのアナウンスが聞こえて来た。

シズ『まもなく最終種目の騎馬戦。勝ったクラスには……………何と一億点。』

ロズワール「……………ねえ？」

『今までの競技意味ねええええ!!』

シズ（プレアデス）のアナウンスが聞こえた後、ロズワールの笑みを浮かべながら言ったの対して、同時にツツコむアインズとターニヤとスバルとリムルとレイトとキリトとカルムとケロロとアークと零士だった。

そんなこんなもあったが、二組も最終種目の騎馬戦の準備をした。

出るのはアインズ、スバル、カズマ、ターニヤのチーム、キリト、リムル、アーク、ケロロのチーム、零士、カルム、レイト、ケロロ（コピーロボット）のチームだ。

騎馬の上に乗るのは、ターニヤ、ケロロ、ケロロ（コピーロボット）だ。

アルベド「後は我が主に全てを託します。」

アインズ「うむ、任せておけ。」

ヴィーシャ「少佐！よろしくお願ひします!!」

ターニヤ「ああ、帝国軍人の気概を見せてやろう!!」

レム「スバル君、頑張ってください!!」

エミリア「スバル、無理はし過ぎないでね？」

スバル「おお！任せとけて!!」

ミリム「リムル！レイト！頑張るのだ！」

ヴェルドラ「そうだぞ！決して負けるでないわ！」

リムル「おう！任せとけ！」

レイト「ああ！」

アスナ「キリト君。無茶しないでね。」

キリト「ああ！」

ミト「カルム。頑張つてね。」

カルム「ああ。」

冬樹「軍曹！頑張ってね！」

ギロロ「負けるんじゃないぞ。」

ケロロ「分かっているであります！」

リナ「零士。頑張って。」

カイト「勝てよ！」

カリン「負けたら承知しないわよ！」

零士「ああ！約束だ！」

アインズにはアルベドが、ターニヤにはヴィーシャが、スバルにはレムとエミリアが、リムルとレイトにはミリムとヴェルドラが、キリトとカルムにはアスナとミトが、ケロロには冬樹とギロロが、零士にはリナとカイトとカリンが励ましや期待と応援の言葉を言ったのだが……。

アリアン「アーク。決して、やりすぎない様にね。」

チヨメ「あんまりやりすぎて、校舎を壊してはダメですよ？」

めぐみん「足手まといにならないとは思いますが、迷惑をかけてはダメですよ？」

ダクネス「カズマ!!馬としてしつかり踏まれて来い!!そして揉みくちゃにされて更に踏まれてああ♡なんだか羨ましくなって来たぞ!!」

アクア「もう疲れちゃったから、こんなのちゃっちゃと終わらせて来なさいよちゃっちゃと。」

『なんか俺らだけ違うんですけど!?!』

アリアンとチヨメ、めぐみんとダクネスとアクアの全く別の意味の言葉を言われたアークとカズマがツツコんでから程なくして、騎馬戦は開始の合図が鳴った。

ちなみに、零士はセイバー・ブレイブドラゴンに、カズマはブレイズ・ライオン戦記に、レイトは仮面ライダージュウガに変身していた。

フェルト「行くぞお前ら!!」

『おおお!!』

ゆんゆん「い、行くわよ！」

『おおお!!』

一組はフェルトとラインハルトとユリウスとクリスのチーム、ガビル、ヤシチ、カクシン、スケロウのチーム、ガルル、ゴエモン、タルル、ゾルルのチームだ。

三組は、ゆんゆん、ダスト、アラン、クレハのチーム、ゴブタ、リグル、ファイリア、アリサのチーム、新ケロロ、エレン、カバル、ギドのチームだった。

零士「相手のお出ましか。」

ターニヤ「行くぞお前達!!勝利を我らに!!」

『おおお!!』

ターニヤの呼びかけにアインズ達は答えながら、それぞれのクラス
の騎馬がぶつかり合う。

取ろうとして避け、取ろうとして避けを繰り返していく。

フェルト「やるなあ兄ちゃん達?」

スバル「ハア……ハア……ありがとよ。ついでに俺達に勝ちを譲ってくれたら最高なんだけど。」

ラインハルト「すまないスバル、そこだけは僕も譲るつもりはない。」

ユリウス「言わずとも分かっているだろう。君ならば。」

フェルトの質問にスバルは息を整えながら答え、その答えに対して
ラインハルトとユリウスはそう答えた。

アーク「さて、どうする!?!」

カルム「このままだと消耗していくだけだぞ。」

スバル「正直まともにやって勝てる相手じゃねえ。ただ奴らを分散
させたら勝機はあると思う……。アインズ!リムル!レイト!アーク!
ク!」

アインズ「ん?」

リムル「どうした?」

レイト「ん?」

アーク「スバル?」

スバルは、アインズ、リムル、レイト、アークの4人に呼びかける。
スバル「ラインハルトを頼めるか?」

アインズ「責任重大だな……分かった。」

アーク「我も問題無い。」

リムル「俺もだ。」

レイト「ああ。」

ターニヤ「では……作戦通りに。」

スバルの頼みを引き受けたアインズとアークとリムルとレイトが答えた後、ターニヤの呼びかけると同時に行動を開始しようとした二組だったが……。

シズ『ここで唐突なお知らせ。』

『んう?』

シズ『この最終決戦に、先生チームが唐突に参加。なお、騎馬戦の得点は一億点なので、この競技の勝利チームが自動的に優勝となります。』

シズ(プレアデス)のアナウンスが聞こえて後に振り向いた先には、自分達と同じように先生達も、ロズワールとバニルとレルゲンとパンドラス・アクター、556とポールとユーリとエギル、白老とリグルドとテイランとグレニスのチームに分かれていた。

ちなみに、騎馬の上にはロズワール、ユーリ、白老が鉢巻をつけていた。

スバル「ロズツチ先生!」

ロズワール「やあく。」

カズマ「バニル!」

バニル「フハハハ!!どうしたあく?最終決戦だと思ったら違う敵が出て来て焦ったか?!」

ターニヤ「レルゲン先生!」

レルゲン「何故……何故私が……。」

零士「ユーリ!何やってんの!」

ユーリ「最高だろう?」

ケロロ「556にポール殿!」

556「ハアハッハッハッ!遂に決着の時だぞ!ケロロ!」
ポール「お手柔らかにお願いしますな。」

リムル「リグルドに白老!？」

レイト「何してんだよ!？」

白老「ホッホッホッ。リムル様、レイト様。まだまだ修行が足りませんな。」

リグルド「リムル様!レイト様!我々が勝たせて貰いますぞ!」

キリト「エギル!？」

カルム「何やってんの!？」

エギル「悪いな。俺たちが勝たせて貰うぞ。」

アーク「ディラン殿にグレニス殿!？」

ディラン「やあ、アーク君。」

グレニス「私たちも、参加させて貰いますね。」

アインズ「(後いるような気がしたけど……………)パンドラズ・アクター!？」

Pアクター「父上!!」

それぞれ同じ世界の出身同士で驚いてる中、アインズの仲間でもあるパンドラズ・アクターの声を聞いて…………。

『…………父上?』

アインズ「違う!!」

そうカズマ達は聞いたが、すかさず反論したアインズだった。

ちなみに、ユーリは仮面ライダー最光・エックスソードマンになっていた。

ロズワール「……………と言う事だから、私達を倒さないと優勝はできなあくいよ?」

零士「元の世界に帰る為に、俺達に協力は…………。」

ユーリ「それは立場上無理だな。全力で俺たちにぶつかって来い!!」

ロズワールの話を聞いて零士は聞くが、ユーリが代わりに答えた事で対決は免れない用らしい。

それを見ていた1組と3組は。

ゴエモン「……………気に入らぬ。」

ユリウス「勝負を邪魔されて黙ってるなど、騎士の名折れですね。」

タルル「じゃあ、皆、考えてる事は同じっすね！」

フェルト「おうよ！ガルル！ガビル！」

ガルル「おう！」

ダスト「急に出てきやがって……………」

リグル「父上も、大人気ないのでは……………」

フリーア「考えている事は、皆、同じって訳ね！」

ゆんゆん「えっ!?あの……………」

アラン「ゴブタ！新ケロロ！」

ゴブタ「はいつす！」

新ケロロ「OK！」

1組からはガルルが、3組からはアランが呼びかける。

ガルル「2組の諸君！我々1組は、君達に共闘を申し込む！」

アラン「俺たち3組も、2組に協力するぜ！」

2組「なあっ!?!」

突然の共闘の申し込みに、2組の面々は驚く。

フェルト「勘違いすんなよ!!さつさと先生達ぶつ倒して、それから

キツチリ勝負付けようぜ!!」

スバル「フェルト……………」

ガビル「行きましようぞ！リムル様！」

リムル「ガビル……………」

リグル「レイト様も、行きましよう！」

レイト「リグル……………」

クリス「そういう訳だから、助手君と零士君も任せたよ!?!」

カズマ「クリス…………ああ、分かった!!」

零士「よおし、行くぞお前ら!!」

「おおお!!」

フェルトが話した後にガビルとリグルとクリスが言い、それを聞いたカズマは頷いた後、零士の呼びかけに答えるように二組の騎馬戦組は前に出た。

アクア「むう……………」

エミリア「どうしたの？」

アクア「ちよつと私の立ち位置が脅かされているわ。」
アウラ「アハハハ……。」

その頃、二組テントでは、頬を膨らませているアクアを見てエミリアが聞くと、そう答えたアクアの話聞いてアウラは愛想笑い、マールは困った顔をした。

1組のテントでは。

紫苑「ぐぬぬぬ……！それを言うのは、私の役目ですよ……！！」

紅丸「紫苑、落ち着け。」

火煉「変な所で嫉妬しないの。」

紫苑は、ガビルに嫉妬の視線を向け、紅丸と火煉は、紫苑を落ち着かせる。

それを見ていた教師陣は。

ロズワール「うくん、これは困ったねえ。君達は皆優秀だから。」

白老「儂達も少々、本気を出させてもらおうとするかのお。」

バニル「では、まずは吾輩から行かせてもらおう!!」

ロズワールと白老が話した後、バニルはそう言いながら地面から自身の眷属、小さなバニルを大量に出現させた。

バニル「いでよ!!眷属達!!」

カズマ「気を付けろ!!アイツら爆発するぞ!!」

アインズ「構わん!!」

アーク「問題無い!!」

零士「ええええ!?!」

ミニバニル達を見て警告するカズマだったが、アインズとアークが臆してない事に、零士は少し驚いた。

アインズ「直接本丸に突入する!!グレーターテレポーション
!!」

アーク「我も、これを使うとしよう!次元歩法!」
次元歩法

零士「しょうがない。俺も使うか!ブックゲート!」

アインズはグレーターテレポーションを、アークは次元歩法

を、零士はブックゲートを使い、教師陣の背後を取る。

『もらったああああああああああ!!』

そのままターニヤがロズワールの、ケロロがユーリの、ケロロ（コピーロボット）が白老の頭に巻かれた鉢巻を取ろうとしたのだが。

Pアクター「おおアインズ様!!こうやって、親子のぶつかりが実現するとは!?!」

アルベド「お前など息子でも何でもない!!」

Pアクター「変……身!!」

アルベドにツッコまれたのも気にせず、パンドラズ・アクターは言った後に変身能力を使ってアインズに変身すると。

Pアクター「グレーター……テレポーターション!!」

『なあ?!』

本物のアインズと同じようにグレーターテレポーターション（本物と違って何故かアクションめいた物もあるが。）を使い、逆にアインズ達の後ろを取った。

エギル「ユーリ!」

ユーリ「俺に任せろ!」

零士「ユーリもブックゲートを!」

ユーリがブックゲートを使って、リムル達がいる騎馬の背後を取る。

白老「お三方、頼みますぞ。」

リグルド「お任せを!」

デイラン「行きます………よ!」

アーク「何イイイツ!」

何と、リグルド、デイランが同時に大きくジャンプをして、零士達の騎馬の背後を取る。

ロズワール「貰ったあくよおおお………おお?」

白老「貰いましたぞ………お?」

ユーリ「俺たちの勝ちだ………何?」

今度はロズワールと白老とユーリがターニヤとケロロとケロロ（コピーロボット）の鉢巻を取ろうとしたが、アインズ達の後ろに展開さ

れた、光のバリアによってそれを封じられた。

スバル「ユリウス!!」

ユリウス「アルクラウゼリア!!」

レルゲン「くう……なんだこの光は!？」

エギル「クツ………!」

リグルド「眩しい………っ!？」

それはユリウスが放ったアルクラウゼリアで、その光にレルゲンとエギルとリグルドが思わず目を瞑った次の瞬間。

クリス「バインド!!」

レルゲン「なあ!?!ふあああああああ!!」

エギル「何!?!」

リグルド「のわあお!?!」

クリスがスキル「バインド」を使い、それに気づいた先生達は一旦バラけたが、逃げ遅れたレルゲンとエギルとリグルドはその縄に捕まってしまう。

クリス「三人確保!!」

零士「クリス、サンキュー!!」

ロズワール「いやあく。」

クリス「なあ!?!」

それを見て言ったクリスに零士が礼を言うが、先生チームは今だ諦めて無かったらしい。

ロズワール「君達、なかなかやるじゃなあ〜いの!!」

バニル「強大な敵にも勝利を信じて一心不乱に挑む姿!!それもまた、学生の自分であるなあ!!」

Pアクター「ただあ!!この程度で私達を倒せると思ったら……大間違い、なのですよお!!」

白老「儂らには、奥の手があるのじゃ。」

556「今こそ見せようぞ!」

ポール「ここからが、本当の戦いですぞ。」

デイラン「そ、そうだな。」

グレニス「行きますよ!」

ユーリ「行くぞ！フオーメーション！」

『オクテット！』

全員がそう叫ぶと、バニル、パンドラズ・アクター、556、ポール、デイラン、グレニスで新たな騎馬を作り、その上にロズワール、白老、ユーリが乗る。

『じゃーん!!』

クリス「それありなの!？」

ターニャ「しかも、オクテットじゃなくて、ノネットだろ！」

ロズワール「さあ、勝負はまだまだこれからであらうよ？」

そんなロズワール達を見てクリスとターニャがツツコむ中、ロズワールが話したのと同時にバニルはミニバニルを沢山出現させ、アイズ達二組とユリウス達一組、エレン達三組は、防御状態を維持しながらも、隙が出来るのを待っていた。

それを見ていた一同は。

アリアン「何てレベルの高い戦い……………」

ケーニツヒ「……………思うんだが。」

ノイマン「ああ……………」

イーデイス「レルゲン先生とエギルとリグルドさんが可愛そうに見えるのは、気のせい？」

ダイジ「気のせいじゃないな。」

その、もう騎馬戦でも何でもない戦いを見てアリアンが呟く中、ケーニツヒが聞き出した事にノイマンは頷き、イーデイスの言葉に、ダイジは頷いた。

ソフィア「戦況はどうですか？」

ルーデルドルフ「少々、先生チームが不利のようですね。」

ゼートウーア「ふむ……………ならば、アレを投入するか？」

戦いの様子を校舎から見ていたルーデルドルフとゼートウーアの後ろからソフィアが聞くと、その質問に対してルーデルドルフが答える中、ゼートウーアはルーデルドルフにそう提案じみた言葉と言った。

ルーデルドルフ「アレか?……………精々頑張ってくれよ、生徒諸君。」

ソフィア「分かりました。ポチツとな。」

朱菜「リムル様…………お気をつけて…………。」

ゼートウーアの話聞いてルーデルドルフが言った後、ソフィアは赤い箱の様な物に付けられた青いボタンを押し、朱菜はリムルの身を案じた。

そのボタンから、インターホンの音が聞こえてきた。
すると。

『っ!!?』

突如として地面が揺れ始め、二組と一組と三組の騎馬戦組は思わず動揺し、先生チームはレルゲン、エギル、リグルドを除いて余裕の表情を取っていた。

ユージオ「な…………揺れてるよ!？」

アリス「何か出てきます!」

リーファ「えっ!？」

アーロン「何ですか!？」

ユージオが驚き、アリスがグラウンドのある一点を指差し、全員が注目する。

すると、爆発が起こり、ある物が出てくる。

ターニヤ「な…………なあ…………」

リムル「何じやありやああああああああ!!」

レイト「ええええええええっ!？」

アーク「何っ!？」

爆発の際に起こった砂煙が晴れると、そこには巨大な物体が現れていた。

八本の脚に光る七つの瞳、そして巨大な大砲を備えた機械的な物体を見て、ターニヤとリムルとアークは驚くしかなかった。

アーク「アレは…………!」

「二二」機動要塞……………!」

「二」デストロイヤー……………!」

それはカズマや零士達の世界で脅威として恐れられていた機動要塞デストロイヤーで、それを見てカズマと零士がそう呟く中、ロズ

ワール達はそのデストロイヤーの上に乗った。

白老「さて……。」

ユーリ「生徒達よ。」

ロズワール「本番と行こうじゃなあ〜いか？」

白老とユーリとロズワールがそう言ったのと同時に、デストロイヤーの七つの瞳が光り出した。

今、体育祭最後の、本当の戦いが始まろうとしていた。

第12話 団結！おくてつと

突如として現れた機動要塞デストロイヤーは、ロズワール達が離れるのと同時に前進し始めた。

それを見たケロロは。

ケロロ「ちよつと、ちよつと、ちよつと！何なんですか、あれは!？」

カズマ「あれは機動要塞デストロイヤー!!」

キリト「デストロイヤー……?」

零士「ああ！俺たちの世界では魔王すら逃げ出すと言われる超古代兵器だ!!」

ターニャ「魔王すらつて……。」

カルム「マジかよ……。」

そんなデストロイヤーを見て聞いたケロロにカズマと零士が答え、それを聞いてターニャだけでなくキリトとカルムも冷や汗を出していた。

そんな最中、デストロイヤーの七つの目から光線が発射された。

スバル「いやあでも、あれつて無関係だし放置で良いんじゃないやねえの?」

アインズ「そうも行かないようだぞ?」

『ええ?!』

ターニャ「アレをしてみる。」

スバルがそう聞いた事にアインズが言い、それを聞いたスバルとカズマと零士とリムルとレイトとケロロとアークが少し驚く中、ターニャはデストロイヤーの頭部分を指さした。

そこには……ロズワール達と同じ色の鉢巻が三つ巻かれていた。

リムル「マ、マジかよ……。」

レイト「嘘だろ……!？」

ロズワール「マジだあゝよ!!」

それを見てリムルとレイトがドン引きする中、ロズワール達は二組騎馬戦組の後ろに立った。

ロズワール「さあ生徒諸君？ 第二ラウンドと行こうじゃなあ〜いか？」

ロズワールは笑みを浮かべながら言い、第二ラウンド……最終決戦の火蓋が切つて落とされた。

ロズワール「ほらほらあゝ逃げ場が無くなるよお〜。」

ロズワールによる魔法での攻撃を二組、一組、三組共に避ける中、次に動いたのはパンドラズ・アクターとバニルだった。

Pアクター「父よお〜!!偉大なる父よお〜!!このパンドラズ・アクター、必ずあなたの、ご期待に、応えて！見せ……ますう!!」

パンドラズ・アクターがそう言った後、パンドラズ・アクターは三體、バニルは一体のミニサイズの分身を作ると、そのミニ分身は騎馬を作つて前進し始めた。

バニル「フハハハハハハハハハハ!!汝らの焦燥感、大変美味!!美味であるぞ!!」

フェルト「……なあ!?危ねえ!!」

ラインハルト「お守りします!!」

その後も何隊も作ったミニ分身騎馬は一組、三組の方に向かって来、一組はユリウスとクリスとタルル、ゾルルが応戦し、三組はアラン、クレハ、アリサ、エレンが応戦する中、上を見たフェルトがデストロイヤーの光線が降つて来るのに気付き、それをラインハルトが防御したのだが、その衝撃は凄まじかった。

フェルト「くう……………」

ダスト「これ……………結構やばくね?」

タルル「あのデストロイヤーって奴が面倒つす!!」

カズマ「……これダメだ。もう諦めよう。」

零士「どうした?お前らしくもない。」

リムル「諦めたからって、何かいい未来が来ると思うか?」

カズマ「だよなあ……………」

レイト「弱音を吐くな!」

デストロイヤーをフェルトが見て、ダストとタルルがそう言って、呟いたカズマに零士とリムルとレイトがそう言う。

すると、カズマは何かを思いつく。

カズマ「ん?……でもステイールなら鉢巻をとれるかもしれない!?!」

ケロロ「何でありますか、それ。」

カズマ「とにかく、やった方が早い!!ステイール!!」

カズマが気づいた事にケロロが呟き、そう言ったカズマは早速ステイールをデストロイヤーに向けて放ったが……カズマの手には鉢巻は渡らなかつた。

カズマ「あ、あれ!?!じゃあこつちにステイール!!」

それに驚いたカズマは、ロズワール達の方にステイールを放ったが、こちらも全く効果なしだった。

それを見ていたターニヤは。

ターニヤ「貴様……何をやっているんだ?」

カズマ「何でだ!?!ここまで成功しない事なんて無かつたぞ!」

ケロロ「本当に運が高いのでありますか……?」

カズマ「イヤイヤ違うつて!?!第一俺運だけは本当にステータス高いんです!!本当なんです!?!」

レイト「本当か?」

リムル「マイナスの方面にか?」

カズマ「だから違うつて!?!」

クリス「カズマ君!」

動揺を隠しきれないカズマにケロロが言い、それに言い返すようにカズマは話すが、それにすら疑問を浮かべるレイトとリムルにまたツッコんだ。

そんな中、同じ世界でカズマにステイールを教えたクリスが話しかけた。

クリス「この世界は、ステータス調整が入ってる!!前の世界の常識は通じないよ!!」

カズマ「クリスのパ●ツはステイール出来るのに……。」

クリス「今それ言わなくてもよくない!?!」

零士「本当だよ。」

クリスが説明した最中、カズマが言った事にクリスはツッコみ、零士が呆れる。

スバル「まあどう見てもラスボスだし、ラスボスに一発系の魔法は効かないわな……」

ロズワール「君達いく、ゆっくりしてる場合じゃなあ〜いよ?」

スバルがその話を聞いて呟く中、宙に浮いたロズワール達はデストロイヤーが光線を放ったのと同時に攻撃を放ち、それを避けた一組と二組と三組は、背中合わせ状態で集まった。

ユリウス「……スバル。提案がある。」

スバル「ん?」

ユリウス「戦う担当を決めるべきだ。」

スバル「そりゃあ良いアイデアだな!!で、振り分けは?」

その最中にユリウスが提案した事にスバルも同意し、その戦う担当の振り分けを聞いたのだが……。

ラインハルト「僕達一組と三組が先生方を引き受けるから、君達はあの大物を……。」

スバル「待てえ!!」

ラインハルト「ん?」

ラインハルトが言った事に対して、早速スバルが待ったをかけた。スバル「どう見てもあっちの方がヤバイだろう!!そこはお前達がウチのチート組と協力してあっちを担当するってのが筋じゃねえの!」
ラインハルト「すまない……今僕は、主役を譲る加護が発動してしまっていてね……。」

アーク「何だその加護は!?!」

リムル「都合良過ぎだろ!?!」

レイト「そんなのありかよ!?!」

スバル「もう加護なのかどうかすら分かんねえよ!!」

スバルが話した後、ラインハルトが言った事に対してアークとリムルとレイトとスバルはツッコむしかなかった。

フェルト「弱音ばっか吐くなよ!!男だろう!?!決めちまえ!!強く生きろよ!!」

エレン「そういう事です！」

ガビル「リムル様達に……………」

クリス「後は任せましたよ！スキル、バインド!!」

そんなスバル達に対してフェルトが言った後にエレンとガビルとクリスも言い、同時にクリスはスキル・バインドを使ってロスワール達の動きを封じた。

白老「ほおお……………」

ロスワール「おんやあ〜？」

グレニス「悪くないやり方ではありますけど……………」

Pアクター「こんな攻撃では、足止めにはなりませんよお。」

ガルル「それで結構！」

フェルト「先生さん方の相手は私達だ!!」

バインドの縄で動きを封じられながらも、余裕の表情を崩さない白老とロスワールとグレニス、パンドラズ・アクターたちに対して、ガルルそう言い、フェルトが言ったのと同時に一組と三組の騎馬戦組は、ロスワール達先生組に向かって行った。

ユリウス「スバル…………武運を祈る。」

スバル「おおおおおおおおおおおおい!!」

リグル「リムル様！レイト様！武運を祈ります！」

リムル「おう！」

レイト「ああ！」

ユリウスが言った事に対してスバルが声を上げ、リグルの言葉にリムルがそう返す。

二組の騎馬戦組は、任されたデストロイヤーの方を見ていた。

アインズ「さて…………奴をどうしたものか？」

ケロロ「何か、弱点があれば、いけるであります……………」

カズマ「無いぞ。」

ターニヤ「即答だな。」

カズマ「無いぞ。」

キリト「おい、そんな事はないだろ？」

カルム「どうにか……………」

そんな風に話す中、アークが動く。

アーク「しようがないな……。我が行こう。キリト！リムル！騎馬は任せたぞ。」

キリト「ええええっ!?!」

リムル「おい、アーク!?!」

アークは、騎馬をリムルとキリトに任せて、デストロイヤーの方に向かう。

アーク「我が時間を稼ごう。その間に、作戦を立ててくれ。」

アインズ「ま、待てアーク！いくら君でも無茶だ!!」

カズマ「そうだけ!!さつきも言ったけど、アイツは魔王すら逃げ出す……。」

アーク「面白いではないか!!」

『ハアアア!!?』

歩きながら言うアークにアインズとカズマが言った事に対して、アークはそう答えて全員を色々な意味で驚かせた。

アーク「魔王すら逃げ出す超古代兵器……。相手にとって不足なし!」

スバル「で、でもよお!?!」

アーク「我に任せろ!」

スバル達にそう言ったアークは、大きくジャンプして、デストロイヤーは七つの目から光線を一齐に放った。

アーク「次元歩法!」

アークは、次元歩法でデストロイヤーのビームを躲し、デストロイヤーのすぐそばに来た。

アーク「強打盾!」

『ええええええ!?!』

アークは、強打盾を使い、デストロイヤーを下がらせ、それを見た二組の一同は驚く。

アークはデストロイヤーと距離を取り。

アーク「……。さて。体育祭で使うのは、気が若干引けるが、やるでしょう。召喚！炎獄魔人イフリート!!」

『ええええええ!!』

アークは、イフリートを召喚して、全員が驚く。

アーク「イフリートよ!デストロイヤーの相手をせよ!」

イフリート「ぐわああ!!」

イフリートは、アークの命令に従い、デストロイヤーの方へと向かっていく。

それを見ていた一同は。

カズマ「……なあ、これももう全部アイツに任せて良いんじゃない?」

アインズ「いや、そうは行かんだろう。これは騎馬戦、騎手が鉢巻を取って初めて勝利が達成するものだ。」

ターニャ「そうだな……ではアークが言った通り、何か対策を考えねばな。」

そんな光景を見てカズマが言った事に対してアインズとターニャが言い、それを聞いたスバルはアインズに聞いた。

スバル「……なあアインズ。」

アインズ「んう?」

スバル「やつぱは死の王って、アンデットとかドカドカアって召喚できんの?」

アインズ「ああ、出来るぞ。」

スバル「そうか……じゃあ俺が……。」

スバルの質問に対してアインズは答え、その答えを聞いたスバルが言いかけた次の瞬間。

アーク「済まない!突破された!」

『なああ?!』

何と、デストロイヤーは、イフリートの攻撃を凌ぎ切って、二組の騎馬の方に向かって行ったのだ。

ターニャ「円珠防殻!ハアアア!!」

ケロロ「ケロンスターバリア!」

ターニャは防殻を、ケロロは、ケロロドラゴンの時に使っていたケロンスター型のバリアを展開する。

ケロロ本人曰く、いつの間にか使えるようになっていたとの事。

だが…………。

ケロロ「ゲくろく!!」

ターニヤ「持ち堪えられん!!」

ケロロとターニヤは、限界になりそうだった。
すると。

アインズ「ケロロ!!そしてターニヤ君……いやターニヤ!!私を誰だ
と
思っている!!」

歯を食いしばりながら耐えていたが、それも限界に来ていたケロロ
とターニヤに対して、アインズは言ったのと同時に幾つもの魔方阵を
発動した。

アインズ「我こそは!ナザリック地下大墳墓の支配者にして、魔導
国の王!そして…………このクラスの副委員長である!!ボデイ・オブ・
イファルジエントベリル!!」

そう言いながらアインズはカズマとスバルとターニヤと一緒に一
旦離れると、そのまま魔方阵を展開した頭で頭突きを食らわし、食
らったデストロイヤーは勢い良く後退するが、反撃でビームを撃つて
くる。

カルム「ビームが来るぞ!!」

リムル「俺に任せろ!」

レイト「ああ!」

零士「リムル、レイト!」

今度は、リムルが動く。

リムル「俺だって、ジュラ・テンペスト連邦国の盟主で、九星魔王、
ノナグラムの一人で、委員長補佐だからな!喰らい尽くせ!暴食之王
!
!」

レイト「俺だって、ジュラ・テンペスト連邦国の盟主で、九星魔王、
ノナグラムの一人で、委員長補佐だからな!」

リムルとレイトはそう叫び、レイトは、ジュウガドライバーに装填
してあるバイスタンプを倒しまくる。

『アメイジングファイニッシュ!』

リムルはベルゼビュートを発動して、デストロイヤーの光線を防

ぎ、レイトはアメイジングファイニッシュを発動して、一部の光線を弾き返す。

アーク「流星であるな！では……………鎧リアット!!」

アークは、後退するデストロイヤーにラリアットをして、一時的に動けなくする。

それを見ていた、残りの生徒達は。

「……………」

ゲルド「さすがは、リムル様とレイト様！」

ディアブロ「当然です。」

レルゲン「四人共、見事だ……………」

リナ「……………つて、どうしてレルゲン先生は普通にここに居るのかしら？」

カリン「うん。」

その光景を見てアルベドとシャルティアが鼻血を出しながら手を合わせて余韻に浸り、ゲルドとディアブロがそう言う中、いつの間にか二組テントに居たレルゲンに対してリナが言い、それにカリンも頷いた。

ターニャ「流星だなリムル、レイト、アインズ君……………いや、アインズ。」

アインズ「フフ……………」

さっきのを見てターニャが言った事に対して少し笑って答えたアインズは、テントで見守っている二組クラスメイトと一組と三組のメンバーを見ていた。

アインズ「……………さあ。」

カズマ「えええ!？」

スバル「ちよちよちよちよちよちよ!？」

アインズ「後は……………お前達に、任せるとしよう!!」

『わああああああああああああああああああああ!!』

その直後、アインズは両手でターニャとカズマとスバルを掴むと、そう言いながら、三人を空に向けて思いっきりぶん投げた。

ケロロ「嘘でありましょう!？」

リムル「じゃあ、後は頼んだぜ！」

キリト「ああ！」

零士「俺たちも行くぞ！」

カルム「おう！」

Cケロロ「分かったであります！」

レイト「行ってこい！」

『クリムゾンドラゴン！』

ケロロが驚き、リムルがキリトとケロロを送り出す。

キリトは妖精の羽を、ケロロは飛行ユニットを出して、空を飛ぶ。

レイトは、零士とカルムとCケロロを送り出す。

零士はクリムゾンドラゴンになって、クリムゾンウイングを広げ、

カルムも妖精の羽を、Cケロロも飛行ユニットを出して、空を飛ぶ。

アインズ「さて、そちらはどうだ？」

アーク「あの光線が出る目玉は、四つ壊した。」

リムル「そうだな。後はイツらに任せよう！」

レイト「ああ！」

アインズ「だな……では私も、この世界を維持する為にも、もう

一仕事するでしょう。」

隣に来たアークとリムルの話を聞いたアインズは頷き、そう言いな

がら魔方阵を展開した。

アインズ「アンデスアーミー!!お前達、この世界を守れ!!」

アーク「おお……。」

リムル「凄いな……。」

レイト「わお……。」

すると地面から大量のアンデットが現れ、アンデットはアインズの

命令に答えるように、クラスの皆を守るように前に立った。

それには、アークとリムルとレイトは感心する。

アクア「アンデットに世界を守られるって複雑だわ……。」

エミリア「本当に優しい人ばかり。」

アクア「まだ認めたわけじゃないけどね……ってか私の周り守られ

過ぎじゃない!!」

大量のアンデットが守るように群がっているその真ん中で、アクアとエミリアはそう話し、アクアは自分に群がっているアンデットを見てツツコんだ。

アーク「ほう……………」

リムル「アクアの奴、アンデットに大人気だな。」

レイト「確かにな。」

アインズ「そうだな……………。(お前がわざわざ俺に聞いて来たって事は、何か意味があるんだろ?後は任せたぞスバル!!)」

そんな光景を見て言ったアークとリムルにアインズは頷きながら、心中でさつき聞いて来たスバルに対し、期待に似た何かを託したのだった。

スバル「つで、この後どうすんだよ!？」

ターニヤ「……………斬首戦術だ。」

『ハア!?!』

空を飛びながらデストロイヤーに向かって行ったターニヤ達とケロロ達と零士達。

その最中、スバルが効いて来た事にターニヤが答え、それを聞いてカズマ達は少し驚いた。

ターニヤ「私かケロロかコピートのケロロがアイツの真上まで飛んで行って、鉢巻を三つ同時に取る!!」

カルム「でも!!その前に攻撃を食らったらお終いだぞ!？」

ターニヤの話を聞いたカルムが言い、それを聞いたターニヤは眉間に皺を寄せながら黙る中、今度はスバルが口を開いた。

スバル「……………仕方ねえな。俺が囷になってやるよ。」

キリト「おい!スバル本気か!？」

スバル「ああ!!カズマ、お前のスキル潜伏で、ターニヤを近くまで届けてくれ!!あとの2組は……………まあ何も言わなくても大丈夫か。」

カズマ「スバル!!この世界じゃ生き返ったり出来ないんだぞ!？」

スバルの話を聞いて凜が驚く中、スバルはカズマや零士やキリト、カルム達に言い、聞いていたカズマはスバルに対して言い返した。

スバル「ああ……………そうだな、知ってる。でもそれって普通じゃね?」

『……………』

スバル「しかも俺の場合、もっと厳しい設定が付いてるんだよなあ……誰も知らない話だけだ。」

零士「スバル……………」

スバルの話に全員が思わず聞いてる中、停止していたデストロイヤーが再び動き出し、飛んでいたターニヤ達とケロロ達と零士達に向けて残った目を光らせる。

カズマ「っ!?照準合わされた!!」

スバル「だからこそだ……………」

『何があ!?!』

それに気付いたカズマが言う中、スバルが呟いた事に対してキリト、カルム、零士がツツコンだ次の瞬間……………。

スバル「だからこそ!命を張った勝負は、誰にも負けねええ!!」
叫んだスバルはカズマとターニヤを握りしめ、その場で腰を動かした。

スバル「ベンチプレス!!80キロおおおおおお!!」

『ぬわああああああああああああああ!!』

カルム「スバル!?!」

スバル「大丈夫だ!!まっすぐお前らは行けえ!!」

そのままスバルはターニヤとカズマを更に上空まで飛ばし、それに声を上げるターニヤとカズマを追いかけながらカルムは、落ちて行くスバルを見て叫ぶが、スバルは落ちながらそう皆に向けて叫んだ。

エミリア「スバル!!」

レム「心配ありません、エミリア様。」

エミリア「え?」

その光景を見てエミリアは叫ぶが、そんなエミリアを安心させるようにレムは答えた。

レム「大丈夫です。スバル君は……………絶対に。」

レムがそう言った直後、スバルはすぐさま行動をした。

スバル「聞こえてる奴は全員耳塞げえ!!……………って、誰も聞こえてねえなこりや……………っ!俺は!!死に戻りして……………!!」

そう叫んだ次の瞬間、スバルの精神は再び黒い霧に包まれたが、すぐさまその黒い霧に解放された。

スバル「……戻って、来たああああああ!!そしてアンデットが来たああああああああああ!!」

スバルが叫びながら地面を見ると、スバルの呪いに嗅ぎ付けたアンデット達が、アンデットの塔を作るようにスバルに近付いて行った。

アーク「おお……。」

アインズ「何だこれは？」

リムル「さあ……?」

レイト「ええ……?」

デストロイヤーはそのアンデット搭みたいなものに対して光線を放ち、それを見てアークとアインズとリムルとレイトは呟いた。

カズマ「スバル……。」

零士「アイツ……。」

落ちて行くスバルがサムズアップしているのを見ると、宙を浮いたアインズがそのスバルを救出し、それをみたターニャとカズマと零士とキリトとカルムと二人のケロロは、デストロイヤーに向かって行く中、デストロイヤーはそんなに7人に対して大砲を放った。

キリト「くっ!ふっ!」

キリトは、大砲を躲していく。

零士「行くぞ!」

『ストームイーグル!』

零士は、ストームイーグルの力で、炎の竜巻を目の前に設置して、大砲を破壊していく。

カズマは、ファンタステイックライオンに変身して。

カズマ「ソゲキ!!ソゲキ!!ソゲキ!!」

カズマはパチンコ玉と狙撃スキルを使って、大砲を撃ち落とすべく。

ケロロ「カズマ殿!お見事であります!」

カズマ「ソゲキ!そうかあ!!ソゲキ!!じゃあもうちよつと!!ソゲキ!!優しく!!ソゲキ!!接して!!ソゲキ!!くれえ!!」

キリト「いや、それは良いんだけど……。」

カルム「それ、一々言わないといけないのか？」

ケロロは感心して、カズマはソゲキと言いながら、そう言う。それに、キリトとカルムはそう突っ込む。

カズマ「そして……これが最後の、ソゲキ!!」

カズマは、大砲を全て撃ち落とした。

零士「さて!」

カズマ「俺らがやれるのはここまでだな!!」

ターニヤ「ああ、道中助かった。」

キリト「後は、俺達に任せてくれ!!」

カルム「ああ!」

ケロロ「ありがとうございます!」

零士とカズマの言葉に、ターニヤ、キリト、カルム、ケロロは礼を言う。

すると。

カズマ「所でさあ!!」

ターニヤ「何だ?」

カズマ「さつきも言ったけど、俺って運だけはやたら良いんだわ。」

ターニヤ「ほお……私とは大違いだな。」

カズマ「だから、きつと上手く行くさ!!」

カズマはターニヤ達に対して言い、それにターニヤだけでなくキリト、カルム、二人のケロロも頷いた。

ターニヤ「じゃあ……行って来る!!」

カズマ「ああ……行ってらあ!!しやあああああああ!!」

零士「という訳でカルム!後は任せたぞ!」

カルム「ああ!」

キリト「行くぞ、ケロロ!」

ケロロ「了解であります!」

ターニヤはカズマを蹴り飛ばしながら更に上空に飛び、零士は、カルムの足を思いつき蹴って、上空に飛ばし、キリトとケロロもそれを追う。

た目での光線と大砲を放つデストロイヤーに向かって突貫した。
キリト、カルム、二人のケロロが攪乱する様に動いていると。

キリト「今だアア!!」

カルム「行け!ターニャ!!」

ケロロ「頼むであります!!」

ターニャ「ウオオオオ!!」

キリト、カルム、二人のケロロが切り開いた道をターニャが突き進み、デストロイヤーから鉢巻を取る。

鉢巻を取った事で、力尽きた様に落ちるターニャだったが、アインズ、カズマ、スバルがキャッチする。

キリト、カルム、二人のケロロが降り立つと、零士、リムル、レイト、アークがハイタッチする。

ちなみに一組、三組、先生組の対決はと言うと、三つのグループとも鉢巻を取られ、点数も無効となった。

こうして、二組の大逆転勝利で、体育祭は幕を閉じた。

体育祭の翌日。

スバル「全然元の世界に戻れてねえじゃねえか!」

ロズワール「元の世界に戻るかも、と言っただけだからね。」
スバル達二組はそれぞれ元の世界に……戻っておらず何時もの教室

室におり、その事でツツコんだスバルにロズワールは話した。

カズマ「まあ、どっちでも良いんだけどさ。」

アクア「ちよっと!私が神界に戻れないじゃ無い!」

めぐみん「フツフツフツフツ……世界が何処だろうが、私が変わる事はありません!!」

ダクネス「私もこの世界、それほど嫌では無いぞ。」

リナ「そうね。」

カイト「この世界は、どうも飽きないな。」

カリン「そうだね!」

アクア「皆まで!」

零士「でも、アクアもそれほど悪くないって思ってるんだろ?」

アクア「……まあね。」

カズマに向けて言ったアクアはめぐみん、ダクネス、リナ、カイト、カリンの言葉を聞いて少し驚くが、零士が聞いた事に対してそう目を瞑りながら答えた。

ターニャ「この平和に腑抜ける事なく……自らを堅固に保たねばな……。」

ヴィーシャ「少佐？」

ターニャ「これもどうせ全て奴の仕業なのだ……はあ!? もしやシヨック死狙いか!？」

ヴィーシャ「少佐？」

ターニャが小言で呟いてたのを聞いて、ヴィーシャ達203航空魔導大隊の面々は首を傾げた。

ノーチラス「まあ、腑に落ちないが、仕方ないかもな。」

ユナ「そうだね。」

リーファ「たとえば、どんな世界でも、私たちは私たちだしね。」

アーロン「そうだね。」

シノン「ま、こんな世界でも、悪くはないわね。」

エターナル「色々と、謎が多い世界ではあるんだがな……。」

ユウキ「でも、僕は自分の体で学校に通えるっついでだけでも、物凄く嬉しいよ!」

オーズ「そうだな!」

アंक「ふん。」

アリス「どんな事でも、気を抜かずに……。」

イーデイス「私だって、まだまだこの世界に来た可愛い女の子達を愛でたいのよ!」

ユージオ「そうだね。」

ダイジ「……イーデイス。お前、目的がすり替わっていないか?」

ユイ「ママ達と学校に通えるのは、嬉しいです!」

カナ「私も、もっとママ達と通いたいです!」

アスナ「ありがとう! ユイちゃん!」

ミト「カナもありがとうね!」

キリト「俺たちも、頑張るか。」

カルム「だな。」

カルム達は、各々でそう話す。

ケロロ「まあ、大方予想は出来ていたであります……。」

ギロロ「俺たちは侵略者なんだぞ！侵略をしろ！侵略を！」

タママ「まあ、楽しいから良いです。」

ドロロ「拙者も、気が合いそうな者達が居るでござるからな。」

クルル「クツクツクツクツクツ。まあ、悪くはないからな。」

冬樹「まだまだ居れるんだね！」

桃華「冬樹君と一緒に居られるなんて、嬉しいです！」

夏美「サブロー先輩、小雪ちゃん、頑張ろうね。」

サブロー「そうだね。ここなら、サボりたくないしね。」

小雪「そうだね！夏美さん！」

ケロロ達もそう話す。

アーク達は。

アーク「まあ、色々と面白いからな！」

アリアン「……これが、人間とエルフ族が仲良くなったことになるのかしら……。」

チヨメ「きつとそうですよ。」

ポンタ「キュ！」

アーク達は、そう話していた。

アリアンは、これが人間とエルフが仲良くなった事なのかと考えていた。

スバル「納得いかねえよな、ベア子？」

ベアトリス「そんな気がしてたのよ。予想どうりかしら？」

エミリア「でも……今ね、私、凄く楽しい!!」

レム「はい!!とても楽しい毎日です!!」

ラム「そうね、悪くはないわ。」

そう聞いて来たスバルにベアトリスが答えていると、真ん中に座っていたエミリアが笑顔で言った事に対して後ろに立っていたレムとラムも頷いた。

リムル「ま、これはこれで悪くないか。」

レイト「これもまた、ありかもな。」

ミリム「よろしく頼むぞ！リムル、レイト！」

ヴェルドラ「クワクハツハツハツハツ!!まだまだ聖典を読み切っていないのだ！更に知識を得るとしよう!!」

ゲルド「例え違う世界でも、我らはリムル様とレイト様について行きます！」

ディアブロ「勿論です。」

嵐牙「我も居ますぞ！リムル様！レイト様！」

リムル「分かった！分かった！」

レイト「全く……………」

リムル達は、そう話す。

アインズ「(そうだよ…………その通りだ。それにこの世界に来てから、守護者達の自主性がどんどん上がっているから…………そう考える)。このろくでもないも、悪くはないな。」

そんな会話を聞いたアインズも心中で思いながら、アルベドや守護者達の顔を見て、そう呟くのだった。

ロズワール「そうであらう。」

『んう?』

そんな中、何かを思い出したロズワールはそう言い、聞いたアインズ達は全員前を向くと…………。

ロズワール「大事な事を言うのを忘れてたあーよ!!今日から転校生が、何人か入って来るんだあーた!!」

スバル「はあ？」

ターニャ「はああ？」

カズマ「はっ？」

アインズ「はあああ!?!」

零士「え？」

キリト「はあ？」

カルム「はあ？」

リムル「ええっ!?!」

レイト「はあ？」

アーク「ほう……………」

ケロロ「ゲロ!?!」

ロズワール「入って来たまあ〜え!!」

ロズワールの話を聞いてスバル、ターニヤ、カズマ、アインズ、零士、キリト、カルム、リムル、レイト、アーク、ケロロがそれぞれ驚く中、ロズワールのかげ声と共に教室の出入り口から、その転校生が入って来ようとしていた……………。

どうやら、この異世界学園生活は、まだまだ続くようだ。

日常回

日常1 激突！かりえす・うおー

ある日、放課後の2組。

ケロロ、リムル、レイト、ミリムは話していた。

ケロロ「……………てな、感じでありますな！」

リムル「へえ……………ケロロ達の世界じゃあ、宇宙人が沢山来てるのか。」

レイト「多種多様だな。」

ミリム「何だか、リムルとレイト達の国みたいだな。」

ケロロ「リムル殿とレイト殿の国は、よく分からないですが、それはもう……………ッ!？」

ケロロがそう話す中、ケロロは突然、顔を顰める。

気になったリムルが尋ねる。

リムル「どうした、ケロロ？」

ケロロ「な……………なんでもありません……………」

零士「どうした？」

リムルが尋ねるが、何でもないと答えるケロロ。

そこに、零士、カズマ、ターニャ、アインズ、カルム、キリト、アークが来る。

レイト「いや、ケロロの様子がおかしいんだよ……………」

カズマ「何か、頬を抑えてないか？」

ターニャ「どうしたのだ？」

アインズ「もしかして、虫歯なのではないか？」

ケロロ「そ、そんな訳ないであります……………」

キリト「いや、顔が悪いぞ？」

カルム「十中八九、虫歯じゃね？」

アーク「そうではないか？」

皆がそう話す中、クルルがやって来る。

クルル「おやあ、隊長？」

カルム「クルル。」

零士「どうしたんだ？」

クルル「もしかして、あれの様ですなあ……………」

すると、周囲からサイレンが出てきて、警報音が鳴る。

ケロロ「ま、まさか……………」

ターニャ「何なんだ、騒々しい！」

その後、2組のクラスメイト全員が呼び集められた。

スバル「いきなりどうしたって言うんだよ？」

アリス「そうです。いきなり呼び出しとは、どうしたのですか？」

リナ「何かあったの？」

クルル「隊長の歯に、虫歯が確認されたんだぜえ。クククツクツ

クツクツ。」

スバル、アリス、リナが疑問を口にする中、クルルがそう答えると、

冬樹達を除く全員がずっこける。

ターニャ「たかが虫歯だと？その為に、我々が呼び集められたのか

？」

カルム「バカバカしくね？」

ギロロ「たかがだと？虫歯を舐めるな！」

全員『ええ……………』

ギロロの言葉に、全員が戸惑う。

クルルが理由を説明する。

クルル「俺たちの世界じゃあ、細菌並みに小さい侵略宇宙人も居る

んだ。」

ギロロ「そして、その宇宙人が生命体の口の中に侵入し、歯を削り、

基地を建設する。それが、俺たちの世界の虫歯だ！」

仰天!!

虫歯は、宇宙戦争だった!?

その事に、全員が驚く。

ミリム「そうなのか!？」

ヴェルドラ「何と!？」

リムル「いや、ケロロ達の世界が特殊なだけだと思うから……………」

レイト「多分、ケロロ達の世界と俺たちの世界は、全く違う。」
ダイジ「そうなのか？」

イーデイス「リアルワールドでも、あんな風なの？」
アスナ「それは違うわよ。絶対。」

ミト「まあ、虫歯は放置していると痛いからね。」

異世界組やアンダーワールド組は、それを信じてしまいそうになるが、訂正する。

ギロロ「また歯磨きをサボったな!？」

ケロロ「だって、めんどくさいでありますし。」

そう言うケロロ。

すると、ケロロが拘束されている台が動き出し、椅子の形になる。

ケロロの口の中に、チューブ型カメラが入っていく。

ケロロの歯の方を搜索していると、見つけた。

モア「居ました!やはりおじさまの口の中に居たのは、超ダリーです!」

モアがそう叫ぶ中、モニターに映し出されたのは、エイリアンみたいな奴だった。

ケロロの奥歯は、かなり削られていた。

スバル「何だよ、その超ダリーって?」

モア「超ダリーとは、危険レベル5の、敵性宇宙人です!」

ギロロ「カリエス・ウォー、スタンバイ!」

ケロロ組『お〜!』

ギロロの掛け声と共に、ケロロの世界の人たちがそう叫ぶ。

他の世界の人たちは、ついていけてなかった。

めぐみん「カリエス……………」

リーファ「ウォー……………」

アールン「具体的には、何なんですか?」

タママ「虫歯の原因となる異星人との戦いを、ケロン星では、カリ

エス・ウォーって、呼んでるんです!」

シノン「戦うって言ったって……………」

エターナル「どうやって、口の中に入るんだ?」

めぐみんとリーファが首を傾げ、アーロンが質問をすると、タママが答える。

だが、シノンとエターナルが当然の疑問を口にする。
それには、冬樹が答える。

冬樹「マイクロイド光線っていうのを使って、自分の体を小さくして、軍曹の口の中に入ります。」

ミリム「面白そうではないか！私も行きたいのだ！」
ヴェルドラ「私も行きたいな！」

リムル「お前らは、ただ暴れたいだけだろ！」

冬樹の説明に、ミリムとヴェルドラが気合を入れる中、リムルが突っ込む。

すると、ケロロが口を開く。

ケロロ「もちろん、我輩も行くであります！」

ノーチラス「ケロロ、何を言ってるんだ？」

ユナ「そうだよ。身動き取れないのに。」

クルル「そんな時の為の、これだ。」

そう言っただけでクルルが出したのは、コピーロボットだった。

チヨメ「クルル殿。それは何ですか？」

クルル「こいつは、コピーロボ966。スーパーリミテッド2号機。

カリエス・ウォー専用ロボだあ〜！」

全員『カリエス・ウォー専用ロボだあ〜？』

チヨメの質問に、クルルはそう答え、ケロロ達の世界の住人を除く全員がそう言う。

クルル「だあ〜は良いんだよ。ケロン本星でも、隊長のように、自分で自分の口をカリエス・ウォーしたいという需要が多い。」

カイト「どんな需要だよ。」

カリン「ケロロ達の世界って、そんな物好きが多いのかしら……………？」

ドロロ「確か、それは……………」

夏美「今回は、ダソ又☆マソを呼んでないわよね!？」

クルル「呼んでねえよ。」

そう、このコピーロボは、以前、クルルが実験をする為に、ケロロの口に虫歯役として配置されたダソヌ☆マソが居たのだ。

だが、今回は呼んでいないとの事。

クルルがケロロにコピーロボをタッチさせると、コピーロボの外見がケロロになる。

ターニヤ「ほう。コピーロボの外見がケロロ軍曹になったぞ。」

クルル「意識も丸ごとコピーする。だから、本人も当然だ。」

アスナ「……………」

ミト「……………」

カルム「ミト?どうしたんだ?」

キリト「アスナも。」

アスナ「いや、人の意識を丸ごとコピーするなんて、精神が崩壊しないの?」

ミト「確かに。比嘉さんのコピーは崩壊したしね……………」

アスナとミトは、複雑な表情で見ていた。

なぜなら、やっている事は、菊岡や比嘉達と何ら変わらないのだから。

だが、どういう訳か、ケロロのコピーの精神は崩壊していない。

Cケロロ「ゲロ!?もしかして!?!……………やっぱり、ありますな……………」

ヴァイス「コピーのケロロ殿の膝についているあれは何でしょうか?」

ターニヤ「まさか……………自爆装置ではなからうな……………?」

クルル「正解だぜえ〜。」

自爆装置。

それを聞いた途端、機械が存在する世界の人たちは、ドン引きする。コピーとはいえ、ケロロを自爆させるようなものになるのだから。クルル「さて、誰が隊長の口の中に行く?まあ、流星にこのクラス全員は行けないがな。」

ギロロ「俺たちは行くぞ。」

ターニヤ「戦闘訓練になりそうだな。」

ヴァイス達「ッ!？」

ミリム「私も行きたいのだ!」

ヴェルドラ「我也行くぞ!」

リムル「……………俺は、この二人の監視役として行くわ。」

レイト「俺も。」

アーク「我也行って良いか?」

アインズ「こういうのも、偶には悪くないだろう。」

零士「まあ、俺も行くわ。」

カズマ「じゃあ、俺も。」

リナ「私も行って良いかしら?」

結果として、ケロロ達の世界の住人、203航空魔導大隊、アインズ、ミリム、ヴェルドラ、リムル、レイト、アーク、零士、カズマ、リナが行く事になった。

その面々は、ミクロイド光線を浴びて、小さくなり、カタパルトに乗る。

ちなみに、零士、カズマ、リナの3人は、ワンダーコンボになっていて、レイトはジュウガになっている。

ギロロ「こちら、スカル1。こちら、スカル1。これより、ケロロの口の中に突入する!……………ギロロ、出る!」

こうして、Cケロロ、ギロロ、タママ、ドロロ、冬樹、夏美、ターニャ、ヴィーシャ、ヴァイス、ノイマン、グランツ、ケーニツヒ、アインズ、ミリム、ヴェルドラ、リムル、アーク、零士、カズマ、リナはケロロの口の中に。

中に入ると、そこには大艦隊が。

Cケロロ「既に、これ程までの軍備を整えていたとは……………!」

零士「口の中に大艦隊が居るよ……………」

ミリム「これは、暴れがいがあるのだ!」

ヴェルドラ「そうであるな!」

リムル「おい。ここはケロロの口の中なんだぞ。あんまり暴れすぎると、ケロロにダメージが及ぶだろ。」

ターニャ「そうだな。クルルに改造してもらったこれを使うとしよ

う。」

ギロロ「各個撃破しつつ、マザーの元に向かうぞ！」

そうして、各自が動き出した。

夏美は、ビットを出して、超ダリーを撃破していく。

ギロロ「グッドファイティング！」

夏美「うん！」

ギロロも、自分が持っている武器で、超ダリーを撃破していく。

Cケロロと冬樹は、でかい大砲に、冬樹がチューブを接続していた。

冬樹「良い？軍曹？」

Cケロロ「良いであります！」

冬樹「エネルギー充填！」

Cケロロ「カリエス・ウォー専用の我輩の力を見てください！発射！」

Cケロロの攻撃によつて、超ダリーの艦隊は倒されていく。

一方、ミリムは。

ミリム「ワアッハッハッハッ！私も暴れるのだ！」

リムル「ミリム、手加減しろよ。」

ミリム「分かったのだ！これが……手加減という物だアア!!
ドラゴバスター 竜星拡散爆!!」

ヴェルドラ「波動拳！波動拳！波動拳！」

リムル「手加減とは……？まあ、俺も行くか！」

レイト「ああ！」

ミリムは竜星拡散爆を、ヴェルドラは波動拳を撃ち、超ダリーの艦隊や超ダリーを沈めていく。

リムルとレイトも、超ダリーを倒していく。

一方、当のケロロは。

ケロロ「ゲッロッ！口の中で大爆発が起こっちゃ嫌々!!」

エミリア「ケロロさん、苦しそうですね。」

バック「そうだね。」

カイト「口の中で暴れられてはな……。」

ダクネス「う、羨ましいぞ！ぜ、是非とも！私にも……！」

カリン「はいはい、ダクネス、落ち着いてく。」

ケロロの口で大爆発が起こっている為、ケロロが苦しんでいるのを見て、心苦しくなった人たちと、性癖を出すダクネス。

一方、口の中では。

ドロロ「十時光輪！」

ドロロは、光の手裏剣を出して、超ダリーを倒していく。

アインズは。

アインズ「私も行くでしょう。炎ファイヤー！ストームの嵐！」

アインズは、炎の嵐を発動して、周囲に居る超ダリーを焼却していく。

零士、カズマ、リナの3人は、ある程度超ダリーに攻撃し、必殺技の体勢に入る。

『『『必殺読破！』』』』

『烈火拔刀！』

『流水拔刀！』

『黄雷拔刀！』

『ドラゴン！イーグル！西遊ジャー！』

『ペガサス！ライオン！ピーターファン！』

『ケルベロス！ヘッジホッグ！アランジーナ！』

『『『三冊斬り！』』』』

『ファ・ファ・ファ・ファイヤー！』

『ウオ・ウオ・ウオ・ウォーター！』

『サ・サ・サ・サンダー！』

零士「爆炎紅蓮斬！」

カズマ「ハイドロ・ボルテックス！」

リナ「トルエノ・デル・ソル！」

ワンダーコンボの必殺技が炸裂して、超ダリーを撃破する。

ターニヤ達、203航空魔導大隊は。

ターニヤ「諸君！私たちがやる事は、前の世界に居た時となんら変わらない！あのデカブツを落とすぞ！」

ヴィーシャ「船が浮いてますね。」

ターニャ「そうだな。」

ヴァイス「少佐に続けー！」

ノイマン「だな！」

グランツ「はい！」

ケーニツヒ「まあ、いつも通りですね。」

203航空魔導大隊は、銃を使って、超ダリーの艦隊や超ダリーを撃破している。

アークは。

アーク「さて。私も行くか。飛竜斬！」

ワイバーンスラッシュ

飛竜斬を発動して、超ダリーを倒していく。

しばらくして、目に見える超ダリーや艦隊は全滅していた。

ギロロ「どうやら、敵を撃破した様だな。」

Cケロロ「あとは、マザーだけです！」

ケーニツヒ「それはそうと、そのマザーって奴は、何処に居るんですか？」

ノイマン「だな。」

ターニャ「恐らく……。」

零士「あの虫歯ら辺だろうな。」

そうして、随分と削られたケロロの奥歯へと向かう。

ターニャ「……おかしい。」

ヴェーシャ「少佐？」

リムル「確かに。敵の本拠地っていう割には、敵が見当たらないな。」

レイト「そうだな。」

零士「罨か？」

アインズ「その可能性は高いだろうな。」

ヴェルドラ「罨が何だというのだ！正面から打ち破って見せようぞ！」

ヴェルドラのその声と共に、虫歯へと降り立つ一同。すると、隣の歯が上昇する。

カズマ「やっぱり罨じゃねえかアアア!!」

ヴァイス「しかも、退路が断たれたぞ！」

ミリム「あれが、基地とやらなのか？」

アーク「あのでかいのは、何だ!？」

ギロロ「マザーだ！」

マザー「この歯には、既に数億個の卵を産みつけたわ。全て排除するのは、不可能！」

マザーがそう言う。

だが、そう言った矢先。

ヴェルドラ「かくめくはくめく波アア!!」

マザー「ギヤアア!!」

リムル「いきなり!？」

レイト「不意打ち!？」

ヴェルドラのかめはめ波によって、マザーはあっさり倒された。

零士「おい!さっきの波動拳といい、多方面から怒られるぞ!」

ヴェルドラ「何でだ?」

リムル「ごめんなさい……………」

レイト「うちの好奇心旺盛な竜が、本当にすいません……………」

零士がそう叫び、ヴェルドラが首を傾げ、リムルとレイトが謝る。

すると、マザーは呻く。

マザー「な……………なかなかやるじゃない。でも……………さっきも言った通り、既に数億個の卵を産みつけたわ。」

ターニャ「確かに、数億個も卵を見つけるのは……………」

Cケロロ「ゲロ?」

すると、Cケロロが突然動きを止める。

更に、とんでも無いことを言い出す。

Cケロロ「自爆まで、あと10秒。」

ドロロ「自爆でござるか!？」

ギロロ「クルル!貴様、自爆させようとしてるのか!？」

クルル『いやあく。こっちの方が面白いだろ?』

リナ「面白く無いわよ!」

零士「皆!ブックゲートで避難するぞ!」

日常2 奮闘！さくもつさいばい

ある日の2組。

ロズワール「今日は、皆にお知らせがあくるよ。」

スバル「随分と唐突だな。」

リムル「お知らせって？」

ホームルームで、ロズワールがお知らせがあると言い、それに関して、スバルが突っ込み、リムルが質問をする。

ロズワール「実は、我が校で、作物を育てる事にしたんだあ〜よ。」

ターニャ「作物の栽培だと？」

カズマ「それは、本当に唐突だな。」

ケロロ「何で、作物栽培をする事になったのでありますか？」

ターニャがそう聞き、カズマが呟き、ケロロがロズワールに質問をする。

ロズワール「実は、この案は、トレイニー君が提案したんだあ〜よ。」

リムル「トレイニーさんが？」

零士「トレイニーって……………」

アーク「確か、1組の生徒であったな。」

キリト「その提案が良く通ったな。」

カルム「確かに。」

ロズワールの答えに、リムルがそう言っ、零士、アーク、キリト、カルムが話し合う。

ロズワール「というわけで、2組から、何人か、作物栽培をする人を決める〜よ。」

スバル「2組から……………って事は、1組と3組からもいるのか？」

ロズワール「そうであ〜よ。1組からは、トレイニー君、プルル君、シリカ君で、3組からは、新ケロロ君、灯君、シズ君が出る事になっていくるよ。」

零士「1組と3組からは、3人ずつか。」

ロズワールの言葉に、スバルが質問をして、ロズワールがそれに答えると、零士が呟く。

ロズワール「それでくは、作物の栽培をやりたい人は、手を上げて
くね。」

ゲルド「では、私もやります。」

零士「俺も良いか？」

ドロロ「拙者もやるでござる。」

小雪「あたしも！」

アリス「私もよろしいでしょうか？」

ユージオ「僕も良いですか？」

ユイ「私もやりたいです！」

カナ「私もです！」

ロズワールのその言葉に、ゲルド、零士、ドロロ、小雪、アリス、ユ
ージオ、ユイ、カナが手をあげる。

リムル「おお！ゲルド、頑張れよ！」

ゲルド「はっ！」

カズマ「零士も手をあげるなんて、珍しいよな。」

零士「たまには、空を飛ばない普通の野菜を育てたい。」

カズマ「……………だな。」

夏美「そっか！ドロロと小雪ちゃんって、よく作物を育ててるもん
ね！」

ドロロ「拙者も頑張るでござる。」

小雪「そうだね！」

カルム「アリスとユージオもか。」

アリス「ルーリッドの村では、作物も育てていたので。」

ユージオ「僕もね。」

ミト「カナ、出来る？」

カナ「大丈夫です！出来ます！」

アスナ「じゃあ、ユイちゃん、カナちゃん。お願いね。」

ユイ「はいです！」

手を上げた人に対して、同じ世界の人たちが声をかける。
すると、イーデイスが声をかける。

イーデイス「ねえ、ロズワール先生。」

ロズワール「何だい、イーデイス君？」

イーデイス「その収穫した作物はどうするの？」

ダイジ「確かに。」

ロズワール「収穫した作物は、君達が美味しく食べてくれても良いよ。………そういえば、朱菜先生と紫苑君が、料理をするって言ってたよ。」

「ツ!？」

イーデイスの質問に、ケントが頷いて、ロズワールがそう答える。最後に付け足した言葉に、リムルとゲルドが震える。

そう、リムルとゲルドは、紫苑の料理の恐ろしさを知っていたのだ。一方、紫苑の料理の恐ろしさを知らない人たちは。

夏美「なら、ロズワール先生！私も料理して良いですか？」

モア「なら、モアも！てゆうか、愛妻料理？」

アスナ「私も、料理の担当をして良いですか？」

ミト「私も。」

レム「レムもお手伝いします。」

アーク「我也料理をして良いか？」

夏美、モア、アスナ、ミト、レム、アークが手を上げた。

アークが手を上げた事に、一部の人が驚く。

冬樹「あれ？アークさんって、料理出来るんですか？」

アーク「ああ。」

アリアン「アークの料理は美味しかったからね。」

そう、アークの料理スキルはかなり高く、醤油擬きを使った照り焼きピザをアリアン達にご馳走したり、ある時では、旅の途中でかなり凝ったシチューを作ったりしていた。

そんな感じで、ゲルド、零土、ドロロ、小雪、アリス、ユージオ、ユイ、カナが、作物の栽培場所へと向かう。

そこには、1組からは、トレイニー、プルル、シリカ、3組からは、新ケロロ、灯、シズが居た。

シリカの頭には、フェザードラのピナの姿があった。

ユージオ「こんにちは。」

ユイ「こんにちははです！」

シリカ「ユイちゃん！カナちゃん！」

プルル「ドロロ君。」

ゲルド「トレイニー殿、シズ殿。本日は、宜しく頼む。」

トレイニー「はい。」

シズ「宜しくね。」

こうして、お互いに挨拶をして、作業を始める事にした。

トレイニーとドロロは、土を調べていた。

ドロロ「どうぞござろうか、トレイニー殿。」

トレイニー「はい。中々に良い土です。こんな所で、良く用意できました。」

新ケロロ「じゃあ、早速植えようよ！」

小雪「まあ、落ちて置いて。まずは、苗や種の選定をしないと。」

灯「苗や種の選定？」

シリカ「具体的に、何をするんですか？」

新ケロロは、早速植えようとするが、小雪は苗や種の選定をする事を言う。

シリカは、どういう事をするのかを聞く。

ドロロ「まずは、健康な種で、実が膨らんでいる種に、苗は、茎がしっかりして、節間が詰まって短い物が、良い苗と言われているでござる。」

ユージオ「なるほど……………」

プルル「健康な種なら、健やかに育つからね。」

零士「そうだな。」

カナ「どういう事をやるんですか？」

小雪「基本的には、塩水につけて、浮いてきた種を取り除くの。」

ドロロ、小雪、トレイニーの指示の下、全員が良い苗と良い種を探す。

シリカ「これは、どうでしょうか？」

ドロロ「そうでござるな……………。もう少し、短い物が良いでござるよ。」

新ケロロ「ねえええ！これで良いの？」

小雪「うん！良い感じだよ！」

アリス「ルーリッドで作物を育てたのを思い出しますね。」

ユージオ「そうだね。」

シズ「こんな感じで……………」

プルル「良いと思うわ。」

しばらくして、全員が選定の作業を終えて、種や苗を植えていく。

ゲルド「よし、植えていくぞ。」

ドロロ「そうでござるな。」

零士「よし、植えるぞ！」

そう言っつて、植える作業をやる。

全員で協力して、全て植え終わる。

小雪「終わったねえ。」

新ケロロ「疲れたああ……………！」

灯「お疲れ、ケロロ。シズさんもお疲れ様です。」

シズ「お疲れ、灯君。」

アリス「お疲れ様です、ユージオ。」

ユージオ「お疲れ、アリス。」

零士「ふう……………。お疲れ様です、プルル看護長。」

プルル「お疲れ、零士君。」

ゲルド「これで、どれくらい実りますかな……………」

トレイニー「収穫が楽しみです。」

ドロロ「そうでござるな。」

シリカ「ピナ、楽しみだね！」

ピナ「キュウ！」

こうして、作物栽培が始まり、皆で作物を育てていく。

日常3 盛況！じよしかい

ある日の夜の体育館。

体育館の扉には、『現在、女子会開催中の為、男子禁制！』と書かれた張り紙が貼ってあった。

1組、2組、3組、教師陣の女性が集まる中、朱菜が前に出る。

朱菜「本日は、集まっていたいただき、ありがとうございます。只今より、女子会を始めたいと思います！」

こうして、女子会が始まった。

何故、女子会をやる事になったのかというと、朱菜が提案したからだ。

女子同士の親睦を深める為に。

女性陣は、朱菜、エギル、アスナ、ミトといった、料理が出来る面々が作ったお菓子を食べながら、談笑していた。

アルベド「……………そういえば、レム、アスナ、ミト、リナ。貴方達の大事な人との話を聞きたいわね。」

リナ「良いわよ。じゃあ、まずは私からね。」

アルベドの質問に、まずはリナから話し出す。

リナは、当初はカイトとパーティーを組んでいた。

そんなある日、ソロでクエストに出かけたが、エルダートレントに襲われ、死ぬ覚悟をした。

そこに、仮面ライダーセイバーに変身した零士がやって来て、助けを貰い、零士の事を好きになったのだと。

レム「なるほど……………」

リナ「その時からかな。零士の事を意識しだしたのは。」

ミト「へええ……………」

アスナ「なるほどねえ……………」

アルベド「ふうん……………」

リナの言葉に、レム、ミト、アスナ、アルベドはそう反応する。

その次は、ミトとアスナになった。

ミト「私は、以前、モンスターに襲われて、その時に、アスナを見

捨てそうになった。でも、カルムが言ってくれたのよ。『そんな事をしたら、きつと後悔する。なら、少しでも足掻けよ！簡単に友達を見捨てるなよ!!君にとつて、大切な友達なんだから!!』つて。」

リナ「良い人じゃない。カルムさん。」

レム「そうですね。」

アスナ「私は、キリト君と一度戦ったの。そして、とある一件で、キリト君の事が、好きになったのよ。」

アルベド「まあまあ……………!」

そんな風に、恋バナが盛り上がっていた。

一方、カリンとリズベツトは。

リズベツト「へええ。アンタも鍛冶師なんだ。」

カリン「そうね。鍛冶師でもあつて、剣士なのよ。この、音銃剣鈴音を使うの。」

リズベツト「あたしは、リズベツト武具店を経営してるのよ。」

カリン「なるほどね。」

と、女性鍛冶師同士、話が盛り上がっていた。

一方、シャルティア、紫苑はというと。

シャルティア「アインズ様は偉大なる思考の御方でありんす!そちらのリムルというスライムとは比べ物にはならないであります!」

紫苑「何を言うか!リムル様も凄いですよ!それに、私は、リムル様と一緒に風呂にも入った事があります。」

シャルティア「なっ……………!?それは……………とても羨ましいであります……………」

シャルティアはアインズを、紫苑はリムルを褒め称える中、紫苑の、リムルと一緒に風呂に入ったという発言には、羨望していた。

一方、アリアンは、エミリア、アウラ、マーレと話していた。

アリアン「貴方達も、エルフなのよね?」

エミリア「うん。私は、ハーフエルフ。」

アウラ「私とマーレは、ダークエルフだよ。」

マーレ「そ、そうですね……………」

アリアン「そうなのね。」

エルフ同士、話をしていた。

一方、小雪、チヨメ、蒼華、アルゴが集まっていた。

小雪「ここに居る皆って、忍だよね？」

チヨメ「はい。小雪殿も、中々に腕が立ちそうですね。」

蒼華「わ、私は、その……………忍……………？じゃなくて、密偵でして……………」

アルゴ「まあ、俺つちの場合は、密偵や忍びじゃなくて、情報屋だけどナ。」

忍、密偵、情報屋はそんな感じの話をしていた。

全員、軽やかに動ける。

一方、アリス、イーデイス、ダクネスの女性騎士たちは。

ダクネス「な、なあ！アリス殿！」

アリス「どうしたんですか？ダクネス。」

ダクネス「アリス殿の金木犀の剣の武装完全支配術とやらを、受けてみたいのだが！」

イーデイス「ど、どうしたのよ、急に……………」

アリス「いえ。私は、そんな事はしません。」

ダクネス「そ、そこを何とか頼む！」

イーデイス「何で？」

ダクネス「あの木偶人形を斬り倒した様に、この私にも、是非やって欲しい！私は、耐えてみせる！」

アリス「……………。」

ダクネスの性癖には、アリスは引いていた。

イーデイスも、ダクネスには呆れながら見ていた。

一方、プルルと朱菜は。

朱菜「お兄様つたら、脱いだ服はその場に脱ぎ捨てるし、部屋も散らかしっぱなしにするし、もう少し、きちんとやって欲しいです。」

プルル「ああ……………。ケロロ君もそんな感じだったわね。まあ、服を脱ぎ捨てるとかはないけど、だらしないというか……………」

朱菜「プルルさんは、ケロロ達とは、どんな関係なんですか？」

プルル「私とケロロ君、ギロロ君、ドロロ君は、幼馴染なのよ。」
プルルと朱葉は、そんな風に話をしていた。

お互いに、少しだらしない人が居る事を、話のネタにしながら。

一方、クリス、フェルト、フィリアは。

フェルト「へええ。姉ちゃんって、色んな物を盗んだんだな。」

クリス「まあ、盗んだって言っても、主に悪徳貴族から盗むのが主だけだね。」

フェルト「一体、どんなのを盗んだんだ？」

クリス「そうだね……。本当に色んな物を盗んだよ。」

フィリア「私は、盗賊というよりは、トレジャーハンターなんだけどね……。まあ、色んなお宝を頂いたよ！」

盗賊、トレジャーハンタートリオは、どんな物を手に入れたのかで盛り上がっていた。

一方、シズ（転スラ）とエレンは。

シズ「それにしても、また貴方達と会えるなんてね。」

エレン「私も嬉しいです！色んな事を話しましょう！」

シズ「うん。」

シズとエレンは、再会を喜び、お互いに話し合う。

体育館はかなり盛り上がっていた。

そんな中、ギロロが迫っていた。

ギロロ「ぐぬぬぬぬ……。夏美は、俺がああああ!!」

ギロロは、夏美が小雪などの女性達と一緒に居る事に苛立っていて、遂にその苛立ちが限界になって、体育館に入ろうとしていた。

すると、ギロロの足元に、手裏剣がや苦無が飛んでくる。

ギロロ「っ!?!ドロロ!?!それに、色んな奴まで……。!」

ギロロのすぐ近くには、ドロロ、蒼影、紅丸、零士、キリト、カルムといった、男性陣が居た。

ドロロ「申し訳ござらんが、これ以上は、小雪殿達の邪魔はさせないでいやるー!」

蒼影「リムル様の命により、お前を拘束させて貰う。」

紅丸「朱葉に手を出そうとしたんだ。命は奪わないが、怪我をする

事を覚悟しろよ。」

零士「ギロロ！落ち着けて。」

ギロロ「面白い！だが、俺は全力で行かせて貰う！」

ギロロはそう叫ぶと、銃を乱射する。

男性陣は、ギロロの弾幕を避けつつ、ギロロと交戦する。

ギロロは、紅丸や蒼影、零士、キリト、カルムといった、接近戦に強い面子が多い事が分かっているのか、銃だけでなく、ロケットランチャー、センチリーガン、ビットなどを使う。

ちなみに、ケロロはガンプラを作っていた。

しばらくして、膠着状態になっていた。

ギロロ「……………フツ。やるじゃないか。」

ドロロ「一步も引けんでござる……………！」

キリト「ギロロ！これ、校則違反じゃないのか！」

ギロロ「黙れ！」

カルム「完全に頭に血が昇ってるよ。」

アインズ「そうだな。」

リムル「さて、どう止める……………？」

アーク「弱ったな……………」
すると。

ケロロ「あ！ギロロ！見て見て！ガンタンクが完成したんであります！」

ギロロ「やかましい！」

ケロロが、ギロロにガンタンクを見せる中、イラついていたギロロは、ガンタンクに向けて、銃を撃つ。

その結果、ガンタンクは壊れた。

ケロロ「ゲ〜ロ〜!!我輩の……………ガンタンクがああ……………!!
ああああ……………!!」

ケロロは、ガンタンクが破壊された事で、泣いていた。

ドロロ達は、恐る恐る声をかける。

ドロロ「た……………隊長殿……………」

零士「ケロロ……………？」

ケロロ「て……………テメエら……………!!」

アインズ「わ、私たちもか!？」

ケロロ「リユウさんの無念を味わえゴルアアアアアアア!!」

ケロロは、怒りの余り、戦車に乗りながら攻撃を開始する。

ギロロ「ぬわああああ!!」

ドロロ「あれえええ!!」

ギロロとドロロは、攻撃で吹っ飛んでいく。

他の面子は、予め避難していた為、無事だった。

そんなトラブルが起こる中、女性陣は気づいていなかった。

女性陣は、就寝した。

その翌日、グラウンドの惨状に、女性陣は全員唾然となるのだった。

日常4 激突！がんばらさばいばる

ある日、この世界での今のケロロ達が住んでいる家に遊びに来た面子が居た。

皆それぞれにガンプラの箱を持っていた。

それを見た夏美は。

夏美「あれ？ボケガエルは兎も角、皆がガンプラ持ってるなんて、珍しいわね。」

冬樹「実はね……………」

そう、どうしてこうなったのか。

遡る事数日前。

ケロロは、屋上でガンプラを作っていた。

ケロロ「ゲロゲロゲロ。家だと、ギロロとかがうるさいしね。ここなら、思う存分、ガンプラを組み立てられますな。」

ケロロはそう呟きながら、ガンプラ作りに勤しんでいた。しばらくして、ケロロはガンプラを完成させていた。

ちゃんと、墨入れと塗装も施して。

ケロロ「出来たであります！」

カズマ「何してんだ、ケロロ。」

ケロロ「ゲロツ!？」

突然のカズマの声に、ケロロは振り返ると、そこには、カズマ、スバル、零士、アインズ、ターニヤ、リムル、アークの姿が。

ケロロ「ど、どうしたでありますか……………」

リムル「いや、俺たち、話をしようと思って、屋上に来たんだけど……………」

スバル「まさか、ケロロが先に居たとはな。」

ターニヤ「ケロロ軍曹。貴様、風紀委員としての自覚があるのか！」

ケロロ「ま、待つであります！ターニヤ殿！」

ケロロは、青褪めながらターニヤにそう言う。

すると、アインズが仲裁に入る。

アインズ「まあ、待て。流星に、一生懸命に作った物を壊されるの

は、酷だと思うぞ。」

ケロロ「アインズ殿……………！」

アインズ「良い出来ではないか。」

ターニヤ「アインズ……………!?!」

アーク「確かに、よく出来てるな。」

リムル「そうだな。墨入れに塗装まで、ちゃんとやってるよ。」

ケロロ「分かるでありますか!?!」

ターニヤ「……………まあ、良いか。」

零士「それにしても、そのガンダムって、どんな奴なんだ?」

ケロロ「では、教えるであります!」

零士の質問に、ケロロは答える。

ケロロは、自分が作っていたガンプラの元のガンダムを説明する。

その説明には、熱がこもっていた。

ケロロが説明をし終えて、それを聞いたターニヤは。

ターニヤ「ほう……………。もし、これが本物なら、戦力には素晴らし

いものだろうな。」

カズマ「確かなな。ガンプラが本物になったら乗れるだろうな。」

スバル「いやいや。いくらなんでも、そんな事は……………」

クルル「出来るぜ。」

ターニヤは、戦力的にそう判断して、カズマがそう言う中、スバル

は否定しようとするが、そこにクルルが現れる。

ケロロ「クルル!」

零士「出来るって……………本当か、クルル?」

クルル「ああ。これを使えばな。」

そう言っ取り出したのは、一本のペットボトルだった。

アインズ「そのペットボトルは?」

クルル「これは、万能兵器化飲料ナノラだ。」

リムル「万能兵器化飲料……………?」

アーク「ナノラ……………?」

スバル「それって、どんなもんなんだよ?」

クルル「これを振りかければ、なんでも兵器化出来るのさ。」

クルル曰く、ナノテクノロジーの応用で、振りかけたら、なんでも兵器化するとの事。

それには、ターニヤも感心と驚きを見せていた。

ターニヤ「ほう……それは凄いな。というより、ケロロ軍曹達の世界の技術力は、どうなっているんだ……」。

クルル「そこで、隊長達がガンプラを作って、ナノラをかければ、兵器化出来るから、それでバトルしてみたらどうだ？」

ケロロ「やってみようであります！」

そうして、ガンプラバトルをする事になった。

ちなみに、スバルは辞退した。

スバル曰く、『嫌な予感がする』との事。

ターニヤはヴィーシャ達に、アインズはコキュートスにも声をかけた。

特別訓練として、ヴィーシャ達も参加する事になった。

こうして、今に至る。

冬樹「………つていう感じで、零士さん達もやる事になったんだよ。」

夏美「あのボケガエルに付き合うなんてね。まあ、侵略を企んでなければ良いんじゃない？」

冬樹と夏美は、そう話す。

ちなみに、それぞれが持ってきたのは、零士はガンダムダブルオー、カズマはガンダムXX、ターニヤはストライクフリーダムガンダム、ヴィーシャ達は陸戦型ガンダム、アインズはガンダムレギルス、コキュートスは武者ガンダム、リムルはガンダムアストレイゴールドフレーションアマツ、アークはデステイニーガンダムだ。

なぜ、ケロロの方に行くのかというと、ナノラは、よりうまくリアルに作れば、それだけ性能が上がる。

その為、ケロロにガンプラ作りを習うことに。

零士達は、ガンプラが保管されている部屋、ガンプラギャラリーへと案内された。

そこには、ケロロがこれまでに作り上げたガンプラ達とジオラマが

飾っていた。？ その一つ一つの精巧な出来栄えに皆が感心するのであった。

ヴィーシャ「よく分かんないですけど、凄い出来栄えですね。」

アインズ「確かに。これだけを集めるのに、苦労したのでは？」

ケロロ「そうなんですよ。」

零士「すげえな。」

ケロロ「では、我輩が、上手くガンブラを作る方法を教えるであります！」

そうして、ケロロのガンブラ講座が始まったのだった。

ガンブラルームからは。

ケロロ「ちよつと、ちよつと！ガンブラは普通、ニツパーで切るでしょうが！それでは、後でヤスリがけするんだから！ああ、そこ！変な感じに墨入れをしないで欲しいであります！」

そんな風に、ケロロはガンブラ作成の指導に熱が入っていた。

ケロロのそんな指導もあって、全員が、上手くガンブラを作る事ができた。

その翌日、全員がそれぞれ作ったガンブラを持って、グラウンドに集まっていた。

カズマ「さて、ガンブラを持ってきて、学校に来たわけだが……………」

零士「まさか、グラウンドで戦わせる訳じゃないよな？」

ケロロ「そんな訳ないであります。クルル曹長！」

クルル「あいよ。ポチツと！」

クルルが何かのリモコンを操作すると、何かのゲートが現れる。

そのゲートに吸い込まれたと思うと、

ターニャ「こ、ここは一体……………!?!」

クルル「ここは、俺様が特別に用意したクルル時空だぜえ。」

アインズ「クルル時空だと？」

クルル「ここなら、どれだけ暴れても、外には何の影響も無いからな。」

コキユートス「凄マジイナ。」

零士「じゃあ、やりますか。」

ジャングルステージのクルル時空にて、ガン普拉バトルを行う事に。

そして、一定の間隔で離れた場所で、それぞれのガン普拉にナノラをかける。

すると、ガンプラは巨大化して、まさにガンダムそのものとなった。

ケーニツヒ「本当に兵器になった……………」

ノイマン「だな……………」

ヴィーシャ「どんな技術ですか……………」

ヴァイス「何でもありか……………」

グランツ「すげえ……………」

ナノラを作れるケロン軍の技術力には、203航空魔導大隊の面々は驚いていた。

そうして、零士達は、それぞれが作ったガン普拉に搭乗する。

すると、クルルが通信を入れる。

クルル「まずは、それぞれのガンダムの操縦に慣れてもらう為に、こいつらと戦ってもらうぜ。」

そう言っつて、クルルが出したのは、ザクやジムといった、モビルスーツだった。

零士「ザクにジム？」

クルル「そいつらは、リアルホログラムだ。そいつらを倒して、操縦に慣れる。」

ケロロ「了解であります！」

ターニャ「さて、諸君。例え違う兵器であろうと、やられるなよ。」

203大隊「は、はい!!!」

ターニャがそう言っつて、203大隊は、返事を返す。

そうして、モビルスーツは、ザクやジムとかに向かっつていく。

その間、ターニャは。

ターニャ「ハハハハハ！良いぞー！これなら、神に祈る必要もなく、戦えるではないか!!」

狂喜していた。

ターニヤは、神を自称する存在Xによって、転生させられ、神を嫌っている為、力を発動する際に、神への祈りが必要となるエレニウム九五式を嫌っている。

神への祈りがいらぬという事で、ターニヤは絶好調だった。

ケロロ以外の他の人たちも、最初は、操縦に苦戦していたが、次第に慣れてきて、動きが良くなった。

しばらくして、リアルホログラムのザクとジムは、全滅した。

そうして、バトルロワイヤルを始める事にした。

ケロロ「我輩が優勝するであります！」

零士「いや、俺だ！」

リムル「俺だ！」

そんな風に張り合う3人。
すると。

ミリム「やっと見つけたのだ！」

リムル「げえっ!? ミリムにヴェルドラ!？」

そんな声が聞こえてきて、周囲を見渡すと、ミリムとヴェルドラの2人がいた。

ターニヤ「なぜ、あの2人が!？」

カズマ「おいおい……………」

コキユートス「誰カ、アノ2人二漏ラシタノカ？」

ミリム「酷いのだ!こんなに面白そうな事してるのに、黙ってるなんて!」

ヴェルドラ「全くだ。この我に言わずにやるとは、リムルも酷いぞ。」

リムル「いや……………」

ケーニツヒ「これ、やばくね?」

ノイマン「だな……………」

グランツ「ええええ……………」

零士「……………多分だけど、犯人が分かったぞ。」

ケロロ「まさか……………」

零士「お前だろ……………クルル!!」

零士がそう叫ぶと、クルルの笑い声が聞こえてくる。

クルル「いやあく面白そうだったんでなあ。あの2人に声をかけたんだぜえ。」

カズマ「お前かあああああ!!」

ターニヤ「何を考えているのだ!?!」

クルル「それが、俺様の美学だぜ。クツクツクツクツ……。」

ミリム「なら、私が気が済むまで相手して貰うぞ!」

ヴェルドラ「では、我も参加させて貰うぞ!」

リムル「ちよつ……?!?!」

そう言つて、ミリムとヴェルドラは、攻撃を開始する。

ケロロは、ミリムとヴェルドラを取り押さえようとして、向かうが、頭部を左腕と頭部を吹き飛ばされる。

ケロロ「ゲロ〜! まだだ! たかがメインカメラをやらただけであります!」

ミリム「ドラゴ・バスター竜星拡散爆!!」

ケロロは、あのセリフをそう言うが、ミリムが放った竜星拡散爆が、RX-78に命中して、コアファイターを残して、爆発する。

ケロロ「ゲ〜ロ〜!!」

零士「あくあ……。」

ターニヤ「これでは、訓練にならないな。」

こうして、ガンプラバトルは、ミリムとヴェルドラの乱入により、あやふやになってしまったのだった。

日常5 襲撃!どらごんもどぎ

ある日、零士、ダスト、リーンは、アインズ達に話していた。ちなみに、他にも、色んな人がいた。

ダスト「カズマって、すげえ所、意外とあるんだぜ。」

アインズ「ほう……………というと?」

リーン「カズマって、結構頭が回るのよね。」

零士「アイツが立てた作戦に、何度か助けられてるからな。」

アインズ「なるほど……………カズマは、策略家としての一面もあるのだな。」

そう。

カズマは、紅魔の里でのシルビア戦や、アクセルでのクローンズヒュドラ戦にて、作戦を立てたのだ。

すると。

アクア「アアアアアア!」

ケロロ「ゲくろく!!」

スバル「のわあああ!!」

「二つ!」

外から、アクア、ケロロ、スバルの叫び声が聞こえてきて、零士、ダスト、リーン、アインズが外を見ると、アクア、ケロロ小隊、スバル、エミリア、パツク、フェルト、ユウキが、ドラゴンみたいなのに追われていた。

零士「ええええええつ!」

カズマ「なああああつ!」

ダクネス「あれは……………!」

リナ「ドラゴン……………!」

カイト「にしては……………何か、変じゃね!」

そう。

ドラゴンにしては、頭が二つあり、体は、毛皮で覆われていて、まるで、ドラゴンのカメラというべき存在だった。

めぐみん「何ですか、あれは!紅魔族の琴線に激しく触れますよ!」

バナイル「これはこれは……………何やら、美味なる悪感情を頂けそうだな！」

冬樹「凄いや！もしかして、ドラゴン型のUMAなのかな!？」

アーク「おおおー！これは、これは正に、ファンタジーであり得る、謎の巨大モンスターの襲来！久しぶりにファンタジーを感じるぞ！」

ヴェルドラ「おお！何やら、強そうな感じがするではないか！」

ミリム「強そうなのだ！相手をしてみたいのだ！」

めぐみんとバナイル、冬樹、アーク、ヴェルドラ、ミリムは興奮していた。

ちなみに、UMAとは、未確認生物の英語の略称である。

アインズ（ええええええ!?いきなり、何だ、あれは!?俺たちの世界の

モンスターじゃ、ないよな!?)

キリト「あれは……………!？」

カルム「ドラゴンか……………?」

アスナ「でも……………それにしては……………」

ミト「姿が、アンバランスっていうか……………」

リムル「何だよ、あれ……………!？」

ターニャ「ドラゴンだと……………!？」

一部の人は、アンバランスな姿をしたドラゴンに、首を傾げていた。そこに。

ゆんゆん「あれって、一体……………!？」

ミツルギ「アクア様！アクア様はどこに居るんだ!？」

リア「何だ、あれ……………!？」

シエロ「ドラゴンですよね……………!？」

エーリカ「何か、変なのが居るわね。」

クリス「あれは……………!？」

ユーリ「何やら、凄いことになっているな。」

ヴィーシャ「少佐、大丈夫ですか!？」

ヴァイス「アレは一体……………!？」

ラインハルト「凄まじい存在だね。」

ゆんゆん、ミツルギ、リア、シエロ、エーリカ、クリス、ユーリ、ヴィー

シヤ、ヴァイス、ラインハルトがやって来る。

零士「皆、行くぞ！」

リナ「ええ！」

カズマ「流石に、全員行くのは無理だろうから、一部の奴は、この校舎を守ってくれ！」

ラインハルト「分かった。」

リムル「ミリム、ヴェルドラ！俺たちは、校舎を守るぞ！」

ミリム「つまらないのだ！」

ヴェルドラ「まあ、零士達仮面ライダーがどんな物か、見ておくか。」

夏美「冬樹！避難するわよ！」

冬樹「待って！もうちよつとだけ……！」

キリト「カルム、ミト！校舎の方を頼むぞ！」

アスナ「ユイちゃんもお願い！」

カルム「分かった！」

ミト「アスナ、気をつけてね！」

グラウンドに、零士、カズマ、リナ、ダクネス、めぐみん、カイト、クリス、ゆんゆん、バニル、ミツルギ、アイリス、リア、シエロ、エーリカ、ユーリ、ゆんゆん、クリス、キリト、アスナ、アインズ、ターニヤ、アークが向かう。

グラウンドには、アクア、ケロロ小队、スバル、エミリア、パツク、フェルト、ユウキが追いかけていた。

零士「アクア！早く逃げろよ！」

アクア「助けて〜！」

カズマ「全く………：………しょうがねえくなああああ!!」

アインズ「カズマ？」

カズマはそう叫び、アインズは首を傾げる。

カズマ「よし！全員、変身するぞ！アインズ達は、俺たちと一緒に、攻撃してくれ！」

アインズ「お、おお。」

ターニヤ「本当に、指揮能力が高そうだな。帝国人だったら、真つ先に徴兵したい所だな。」

零士「行くぞ！」

零士がそう言うのと、変身アイテムを構える。

『ブレイブドラゴン！』

『ライオン戦記！』

『ランプドアラランジーナ！』

『玄武神話！』

『猿飛忍者伝！』

『ヘンゼルナッツとグレーテル！』

『ジャアクドラゴン！』

『エックスソードマン！』

『昆虫大百科！』

『オーシャンヒストリー！』

『ムーンドラゴン！』

『スタードラゴン！』

『ジャアクリード！』

『スターリード！』

『烈火抜刀！』

『流水抜刀！』

『黄雷抜刀！』

『一刀両断！』

『双刀分断！』

『銃剣撃弾！』

『闇黒剣月闇！』

『最光発光！』

『狼煙開戦！』

『界時逆回！』

『萬月抜刀！』

『星雲剣恒星！』

それぞれのワンダーライドブックを、それぞれのベルトや聖剣に装填して、零士達は叫ぶ。

『変身!!』

そう叫んで、それぞれの聖剣を振るう。

『ブレイブドラゴン!』

『ライオン戦記!』

『ランプドアラランジーナ!』

『ドゴ!ドゴ!土豪剣激土!』

『風双剣翠風!』

『音銃剣錫音!』

『ジャアクトドラゴン!』

『エックスソードマン!』

『昆虫!CH O!大百科!』

『オーシャンヒストリー!』

『ムーンドラゴン!』

『スタードラゴン!』

零士はセイバー、カズマはブレイズ、リナはエスパルダ、ダクネスはバスター、めぐみんは剣斬、カリンはスラッシュ、カイトはカリバー、ユーリは最光、エーリカはサーベラ、リアはデユランダ、ミツルギはグラム、アイリスはグラディウスに変身する。

キリト「これが……………」

アスナ「零士さんとカズマさん以外の人たちの変身……………」

ターニヤ「凄いな……………」

アインズ「聖剣が12本もか……………」

アーク「おお!凄いな!」

アクア「そんな事は良いから、早く助けてええええ!!」

キリト達が、零士達の変身を見ると、アクアがそう叫ぶ。ちなみに、ケロロ小隊は、何とか離れる事が出来た。

ケロロ「ゲロ!我輩達も行くであります!」

ギロロ「了解!」

タママ「やってやるですう!」

ドロロ「拙者も、行くでござる!」

クルル「まあ、頑張ってくれや。クククククククツツ。」

ケロロ小隊も参戦する事になった。

カズマは、全員に指示を出す。

カズマ「よし！俺たちを中心として、攻撃を仕掛けるぞ！弱ってきたら、一気に叩き込め！」

零士「ああ！」

その指示の下、全員がドラゴンのキメラに攻撃を開始する。

ターニヤ、カリン、ギロロは、それぞれの銃で、ドラゴンのキメラに攻撃する。

ターニヤ「行くぞ、カリン！ギロロ伍長！」

カリン「ええ！ターニヤさん！」

ギロロ「ああ！」

ターニヤのライフル、カリンの音銃剣錫音、ギロロのビームライフルが、火を吹く。

一方、アーク、ユーリ、アイリスは。

アーク「我也行くぞ！カラドボルグ聖雷の剣！」

ユーリ「俺も行くでしょう。」

アイリス「行きます！」

アークは聖雷の剣、ユーリは光剛剣最光、アイリスは星雲剣恒星と自前の剣で、斬撃波を放ち、攻撃していく。

一方、キリト、ミツルギ、カイトは。

キリト「行くぞ！」

ミツルギ「ああ！魔剣の勇者もとい、月の剣士の力を見せてやろう！」

カイト「あんまり調子乗るなよ！」

キリトはエリユシデータとダークリパルサーの二刀流、ミツルギは月光剣萬月、カイトは闇黒剣月闇を使って、攻撃していく。

一方、アスナ、リア、エーリカ、シエロは。

アスナ「ユウキは、私が守る！」

リア「行くぞ、エーリカ！アスナさん！」

エーリカ「可愛い私に任せて！」

シエロ「支援は私に任せて下さい！」

シエロの支援魔法が、アスナ、リア、エーリカにかかって、アスナ

はランベントライト、リアは時国剣界時、エーリカは煙叡剣狼煙で、攻撃していく。

一方、ドロロ、めぐみん、クリスは。

ドロロ「行くでござる！アサシンの力を発揮する時でござる！」

めぐみん「行きますよ、風双剣翠風！」

クリス「私を捕まえられるかな？」

この3人は、身軽に動き、それぞれの武器で、攻撃していく。

一方、タママ、ゆんゆん、バニル、アインズは。

タママ「見せてやるですう！」

ゆんゆん「行くわよ！と……………友達の為に！」

バニル「フハハハハハ！この後に待つお楽しみのためにも、やるとしようか！」

アインズ「お楽しみ？」

アインズは、バニルの言うお楽しみという言葉に首を傾げるが、タママはタママインパクト、ゆんゆんはライト・オブ・セイバー、バニルはバニル人形、アインズは自分の魔法で攻撃する。

一方、零士、カズマ、リナは。

零士「ハアアアア!!」

カズマ「オラアアアア!!」

リナ「フツ！」

零士、カズマ、リナは、ワンダーコンボに変身していて、それぞれの能力を使い、攻撃していく。

それぞれの攻撃により、ドラゴンのカメラは、弱っていた。

キリト「弱ってるぞ！」

カズマ「よし！もうちよい弱らせるか！」

零士「行くぞ！」

零士とカズマは、大きいワンダーライドブックを取り出す。

『ドラゴニックナイト！』

『キングライオン大戦記！』

そして、その二つのワンダーライドブックを装填して、抜刀する。

『烈火抜刀！』

『流水拔刀!』

『Don't miss it!』

『The knight appears. When you
side,』

『ドメタリックアーマー!』

『You have no grief and the flame
e is bright.』

『ドハデニックブースター!』

『Ride on the dragon, fight.』

『ドハクリヨックライダー!』

『Dragon ic knight.』

『ドラゴニックナイト!』

『すなわち、ド強い!』

『Rhyming! Riding! Rider! 獣王来迎! Risi
ng・Lifull!』

『キングライオン大戦記!』

『それすなわち、砲撃の戦士!』

零士はセイバー・ドラゴニックナイトに、カズマはブレイズ・キン
グライオン大戦記になる。

そして、再びバツクルに聖剣を装填して、必殺技の体勢に入る。

『ドラゴニック必殺読破!』

『キングライオン必殺読破!』

『烈火拔刀!』

『流水拔刀!』

『ドラゴニック必殺斬り!』

『キングライオン必殺斬り!』

零士「神火龍破斬!」

カズマ「ライオネル・ハイドロ・ストリーム!」

二人の必殺技が、ドラゴンのキメラに命中する。

ドラゴンのキメラは、大分弱っていたが、まだ生きていた。

キリト「これでも、仕留めきれないのかよ!?!」

零士「どうするかな……………」。

めぐみん「フフフフ……………」。

カイト「めぐみん？」

めぐみん「こうなったら、私とカズマの爆裂魔法で、消し炭にしましよう！」

カズマ「はあっ!?……………ったく。しょうがねーな。」

カズマは、呆れながらも、めぐみんと共に、爆裂魔法の詠唱を始める。

それを見ていた一同は、驚く。

零士「え、アイツ、爆裂魔法なんて、使えたのか!？」

リナ「でも……………めぐみんの爆裂魔法に付き合ってるから、あり得なくはないかも……………」。

アスナ「カズマさんとめぐみんさんって、結構良いコンビかもね。」

キリト「そうかもな。」

そんな風に話す中、カズマとめぐみんは、大きく叫ぶ。

「「エクスプロージョン!!」

その叫び声と共に、爆裂魔法が発動して、ドラゴンのキメラに命中する。

クレーターが開き、全員が覗き込むと、そこには、ドラゴンのキメラは居なかった。

ケロロ「どうやら、倒したみたいでありますな。」

ターニャ「その様だな。」

アインズ「本当に、カズマはすごいな。」

アーク「的確な指示だったからな。」

カズマ「……………そうか？」

零士「それにしても、あのドラゴンは何だったんだ？」

キリト「確かにな。」

アクア「ぎくっ!」

アインズとアークは、カズマを褒める。

そんな中、零士のさりげない一言で、アクアはそう言う。
すると、カズマは悟った。

アクアが原因であると。

カズマ「おい。お前、何か知ってるだろ？」

アクア「し、知らないわよ！」

零士「あ、そう。バニル。絶対、お前、何か見通しただろ？」

アクア「ちよっ!?!」

バニル「丁度良い頃合いであるな。良かろう！あのドラゴンが何なのかを教えてやろう！」

バニルは語った。

アレは、零士達の世界に存在しているドラゴンもどきで、元々封印されていたが、アクアが封印を解いた事を。

それを聞いた全員は、呆然として、カズマは叫ぶ。

カズマ「お前かアアアアアア!!」

アクア「ああああ！許して！カジユマさああああん!!」

零士「やれやれ……………」

バニル「フハハハハハ！何とも、これは素晴らしい悪感情！美味である！美味である！フワ〜ハツハツハツハツ!!」

こうして、ドラゴンもどきの襲撃は、収まったが、バニルの高笑い
とアクアの泣き声が響くのだった。

第2期

第1話 参戦! てんこうせい

チャイムが鳴る、八つの異世界が混じった学園。

その学校のクラスの一つである二組教室の出入り口前には、1人の男が立っていた。？ その男が教室を見渡してたのと同時に、教室にいた面々もその男を見ていた。

尚文「……………チツ!!」

そう舌打ちして、盾の勇者である岩谷尚文は、扉を閉じた。

カズマ「……………今の、誰だよ?」

零士「確かに……………」

ターニヤ「何も言わずに出て行ったな?」

スバル「まあいきなりこのクラスを見たら逃げ出すわな?」

アインズ「どうして私の方を見ながら言うのだ?」

尚文が去って行ったのを見てカズマと零士とターニヤが言った後、アインズを見ながら呟いたスバルにツッコむアインズ。

カルム「まあそりや見るよな? スバルも初見はビビってたし。」

ケロロ「あの反応でビビってたのでありますかスバル殿? 何じゃこの状況はあああああ!? ってノリノリだったのでありますのに?」

リムル「そうだな。遅れて来るわ騒がしいわ……………」

スバル「アレ!? 俺が叩かれる流れ!」

その話を聞いてカルムが呟いた事にケロロとリムルも反応し、二人の言葉を聞いて驚くスバル。

アーク「まあ、スバルに比べたら、さっきの人は、常識があるって事か。」

キリト「……………なるほどな。」

レイト「確かにな。」

スバル「フオロー入る気配無いつて言うか、あんたにだけは言われたくないわ!? キリトもレイトも納得しないで!」

その後アークが呟いたのを聞いてキリトとレイトも頷き、それを

聞いたスバルはまたツツコんだ。

一方、エミリアは。

エミリア「ロズワール先生。」

ロズワール「んう〜？」

エミリア「あの人が、新しい転校生ですか？」

そんな中、さっきの尚文がロズワールが言っていた転校生なのか気になったエミリアは手を挙げた後、席を立ちながらロズワールに聞いた。

ロズワール「いやあく、彼らは多分一組の転校生じゃないかあくな？」

アスナ「一組の？」

ユナ「誰なんだろう？」

ノーチラス「さあ……………？」

ロズワール「ああ〜、確か……………盾って呼ばれてる子だあくね。」

ロズワールの言葉に、アスナ、ユナ、ノーチラスが首を傾げる。

そして、ロズワールがそう言う。

『盾？』

ターニヤ（盾……………盾とは一体……………？）

ターニヤは、そんな感じに首を傾げる。

カズマ「それより、ウチの二組の転校生は誰なんだよ？」

零士「確かに。さっきの奴じゃないんだろ？」

スバル「そうであく、ウチのクラスの転校生が気になる。」

レイト「ロズワール先生。転校生はいつ来るんですか？」

その後、二組の転校生が気になるのか、スバルとカズマと零士とレイトの四人がロズワールに聞く。

ロズワール「そうあくねえ……………お、丁度来たみたいだあくよ。」

ロズワールがそう言うと、再び扉が開く。

そこには、大きな剣を背負った猫耳の女の子と、狼、そして、リムルに似ているが、髪がピンク色の人、黒い体に青いマスクを付けた人が入ってくる。

リムル「あつ……………!」

レイト「エミルス!」

キリト「知り合いか?」

カルム「なんか、リムルと似てね?」

リムル「知り合いついていうか……………。」

レイト「リムルの悪魔だ。」

ターニャ「何だと……………!?!」

それを見て、リムルとレイトが驚く中、キリトが質問して、二人がそう答えたのに、ターニャは驚く。

ロズワール「あと、転校生は彼らだけじゃなくいよ。」

そう言つて、一匹の猫を出す。

その猫は、めぐみんが飼っているちよむすけだった。

ロズワール「それでくは、自己紹介をどうくぞ?」

師匠「ああ。俺は、インテリジェンスウエポンの師匠だ。」

フラン「黒猫族の冒険者、フラン。師匠の弟子。」

師匠「で、この狼がウルシだ。」

エミルス「俺はエミルス。その魔王リムルの悪魔だ。」

バイス「やつほく!俺つちバイス!イカした悪魔のバイスだぜ!」

ロズワール「そして、ちよむすけ君だあくよ。」

ちよむすけ「なう。」

そんな風に自己紹介をした。

それを聞いていた一部の人は。

アインズ（嫌…………ツツコんではダメだ!?!ツツコんでは!?!）

ターニャ（我々がツツコまなくても、今までのパターンで奴が、奴がツツコんでくれる!?!）

アインズとターニャは、そう考えていた。
すると。

スバル「おいおいロズつち先生!?!」

（来たああああああああ!!）

スバルがそう言ったのに対して、アインズとターニャは、心中で叫ぶ。

スバル「え〜と、そいつなんて言ったっけ？」
めぐみん「ちよむすけです!!」

スバル「そのちよむすけ?が生徒扱いになるんだったらさ……………」
パツクも生徒扱いじゃないと可笑しくねえか!？」

パツク「ニヤ〜。」

スバルは、猫や剣が転校生なのを突っ込むのかと思ったら、そう突っ込んだ。

(…………ツッコむ所はそこではない。)

それを聞いたアインズとターニヤは、そう心の中で呟く。
すると。

アーク「ロズワール先生。少し待って欲しい。」

アインズ(おお!まさかのアークが!?)

ターニヤ(そうだツッコめ!この際、思いっきり!!)

アークがそう言いながら立ち上がったのを見て、アインズとターニヤは、そう思う。

アーク「そのちよむすけとパツクが生徒扱いになるのなら

……………ポンタも生徒扱いでないとおかしいではないか!!」

ポンタ「キユ?」

(だから、そこじゃない!!)

アークは、ポンタも生徒扱いにして欲しいと言って、アインズとターニヤは、再び心の中で絶叫する。

一方。

アリス「剣が喋りましたよ……………!？」

ユージオ「どうなってるの……………!？」

ミト「……………零士達は、思いの外冷静ね。」

カルム「確かにな。」

零士「いやなあ……………。」

カズマ「喋る剣なんて、何度か見た事あるから、今更なあ

……………」

イーデイス「あるの!？」

ダイジ「零士達の住んでいる世界は、一体どんな世界なんだ

「……………?」

アリスとユージオが驚く中、ミトとカルムが、零士達が大して驚いていないのに気付き、そう話す。

零士達は、ユーリという前例があるだけに、驚いていなかった。それを聞いたイーディスは驚愕して、ダイジは呆然としていた。ヴィーシャ「でもまさか、転校生が猫ちゃんに喋る剣に悪魔とは……………」

ターニャ「……………まあ悪魔やアンデットが生徒として存在する世界だ。猫や喋る剣くらいで騒いでも仕方あるまい。」

アクア「そうよ!女神だっているぐらいだからね!!」

その後、さつきちよむすけ相手に手を振っていたヴィーシャが呟いた中、心の中でもう諦めたのか、ターニャがそう言ったのを聞いて、アクアが立ち上がりながら言った。

だが……………。

ターニャ「貴様、まだそんな戯れ言を言っているのか?」

アクア「え?」

ターニャ「人の信心にまで口出しはしないが、妄言は人を不快にする」と心得た方が良くぞ?」

ダクネス「そうだぞ、流石に女神を名乗ると言うのは……………」

アクア「ダクネスまで!」

カズマ「プウクスクス……………」

零士「……………フツ。」

アクアの事を本当の女神だと信じていないのか、ターニャにそう言われた後、仲間であるダクネスにまで言われたアクアは思わず涙目になり、それを聞いてカズマは笑みを浮かべ、零士は鼻で笑う。

アクア「嘘つきみたいに言わないで!私結構頑張ってるのに!」

アインズ(本当に女神なんだけどな……………)

リムル(信じて貰えてないな……………)

レイト(まあ、当然の反応か。)

アクアがそう言う中、アインズ、リムル、レイトはそう思う。

アクア「カズマさんも零士さんもほら、皆に言ってあげて!私は

れっきとした……!!」

カズマ「ターニヤすまない! アクアは妄想を口に出してしまう癖がある、残念な子なんだ。」

アクア「待ってええええええええ!!」

ターニヤ「……………カズマと零士も苦労するな。」

シノン「こんなのと一緒にいるからね。」

エターナル「同情するな。」

アリアン「確かに、そうね。」

ディアブロ「少しは、この様な下賤な女と一緒にいる事を同情しますよ。」

アクア「皆酷っ!」

アクアは、カズマと零士に対して、そう言うが、カズマはそう言い放つ。

それを聞いたターニヤ、シノン、エターナル、アリアン、ディアブロはそう言っ、アクアは叫び、机に突っ伏して泣く。

アクア「うう……………えぐつ……………ううう……………うううううううう!!」

アインズ（ここまで信じてもらえない女神も凄いな……………。）

アインズは、そう思っていた。

すると、師匠は零士に話しかけていた。

師匠「あの……………あのアクアという人は、女神なんですか?」

零士「……………を自称してるだけだ。気にすんな。」

師匠の質問に、零士はそう答える。

すると、ロズワールが手を叩く。

ロズワール「はいはあくい、それじゃあ転校生も入って来た事だし、席替えでもしようじゃないの?」

そんなロズワールが提案したのは、今ある席の席替えだった。

スバル「姉様、残念だったなあ。」

ラム「何がかしら?」

スバル「コキユートスの後ろに隠れて、授業中にサボれなくなるからな。」

ラム「…………ラムはどんな席だろうと、サボる時はサボるわ。」

レム「流石は姉様です!!」

スバル「流石は流石だけど違くない!」

アーロン「ていうより、そんな事を堂々と言うなんてね……………」

アリアン「やれやれ……………」

席替えの事を聞いたスバルはラムに対して言ったが、それにラムが言い返したのを聞いてレムは笑みを浮かべ、スバルはツッコんだ。

それを聞いたアーロンは苦笑を浮かべ、アリアンは呆れたように首を振る。

ロズワール「確かに、一部の生徒達が見えにくいと言う問題はあるだろうねえ? マーレ君とか?」

マーレ「つ!?も、問題無いです! ずっとアインズ様の後ろ姿を眺め続けられるなんて…………ここ、光栄ですから。」

アインズ「……………」

スバル達の話聞いたロズワールは顎に手を添えながらマーレに対して言い、その事に対してマーレが返答した答えを聞き、反応に少し困るアインズだった。

アルベド「それを言うなら、私はアインズ様の右横側を眺め続けますわ!!」

アインズ「え?!」

シャルティア「妾は左横側を!」

アインズ「え!?!」

アウラ「私だって、右後ろ姿をずっと!?!」

アインズ「……………」

そんなマーレに反応したのか、アルベドとシャルティアとアウラが張り合うように言いあったのを見て、アインズは思わずため息を付いた。

デミウルゴス「皆さん…………きちんと授業を受けると言う規則があると言う事を、忘れては行けませんよ?」

アルベド「でも……………」

デミウルゴス「その点、私はアインズ様の後ろ姿を拝見しながら授業を受けられると言う、まさにベストポジションにいる訳ですが。」
シャルティア「ずるいでありんす!!」

そんな三人を見てデミウルゴスが注意した後、そう少し自慢げに言ったのを見てシャルティアは思わずツッコんだ。
すると。

ヴェルドラ「ならば!リムルとレイトの席は、我の近くが相応しいわ!」

リムル「えっ!?!」

ディアブロ「いえ、この私が……………!」

レイト「お前ら……………!?!」

ミリム「おおい!リムルとレイトは、私のマブダチなのだぞ!私の近くに決まっているであろう!」

そう言つて、ヴェルドラ、ディアブロ、ミリムが言い争う。

リムルとレイトがどうしようかと思つている中。

ロズワール「はいはい、一先ず席を決めようじゃなあくいか?方法は勿論……………」

『くじ引き!!』

ロズワール「正解。」

そうこうしている内に席替えの席を決める時間になり、ロズワールは言おうとしたのを聞いて皆は指を差しながらそれを先読みし、それに領きながらくじ引き箱を取り出すロズワールだった。

そうして、くじ引きの結果、席の順番はかなり変わっており、見事なまでに同じ世界のメンバーはバラバラに設置されたのだった。

アルベド「ああ、アインズ様が遠くに……………」

ミリム「くっ……………!リムルとレイトと離れているではないか……………!」

ロズワール「君達はしばらくこの席で勉強してもらおうよおく。」

ロズワールはそう言う。
すると。

アルベド「先生!席替えのやり直しを要求します!!」

ミリム「私もものだ!!」

その後、アルベドはロズワールに席替えのやり直しを要求し、それに続くようにミリムも要求したが。

ロズワール「それじゃあ、142ページの粉塵爆発かあくら。」

「なあ!?!」

ケロロ「というより、粉塵爆発って……………」

冬樹「なんでそんな事を習うの?」

あつさり無視された。

ちなみに、恋人がいる人は、比較的近くに配置されていたので、文句はないようだ。

そして、粉塵爆発を習う事に突っ込む、ケロロと冬樹だった。

一方、外には、岩谷尚文が居た。

尚文「……………どうなってるんだ? 波の影響、ではないのか?」ラフタリアとフィーロは……………」

尚文は、そう考えていた。

仲間の動向を心配する中、視線を感じて振り向くと、そこには、スバルの世界のヴィルヘルム・ヴァン・アストレアが立っており、そのヴィルヘルムが尚文を見つめていた。

尚文は、ヴィルヘルムを警戒して、睨む。

その後、用務員専用の部屋に招かれた。

ヴィルヘルム「そうですか、あなたもこの世界に呼び出されたのですね。」

尚文「ああ、モンスターと戦っていたら、この盾が急に形を変えて……………」

尚文曰く、ラフタリアとフィーロと共にモンスターと戦っていた最中に、唯一の武器である盾が突然、二組や一組の面子がこの世界に転移した時に押されたスイッチと同じ形になり、そのスイッチのボタンにモンスターが触れたのが原因で、今に至るらしい。

尚文「……………俺と一緒にいた、ラフタリアとフィーロは何処に?」

ヴィルヘルム「……………尚文さんとおっしゃいましたね?」

尚文「ああ……………」

尚文は、ラフタリアとフィードロを心配する。

そんな中、ヴィルヘルムは尚文に話しかける。

ヴィルヘルム「あなたがここに呼ばれたと言う事は、何か意味があるのでしょうか？ それを知るまでは、前に進んでみてはいかがでしょうか？ 何か得られるかもしれません。」

尚文「何故そんな事を……？」

ヴィルヘルムの言葉に、尚文は少し警戒して聞く。

ヴィルヘルム「あなたの目が……昔の私そっくりだからですよ。」

尚文「……………？」

ヴィルヘルム「お茶、飲まれないのですね？」

尚文「ああ……。」

セバス「失礼します。そろそろお昼でも……。」

ヴィルヘルムの言葉に、尚文は少し困惑して、質問に答える。

すると、ヴィルヘルムと同じく用務員としてこの世界に居る、アイズの間であるセバス・チャンがやって来て、そのセバスは尚文の姿をすぐに見つめた。

セバス「おや？ お客様がいらっしやいましたか？」

尚文「今、出て行く所だ。」

セバスがそう聞くと、尚文は出て行くこうとする。

そんな尚文に、ヴィルヘルムが話しかける。

ヴィルヘルム「またお会いする事になるでしょう。」

尚文「……………」

ヴィルヘルムがそう言う中、尚文は黙ったまま、外へと出る。

セバス「……………ヴィルヘルムさん、楽しそうですね。」

ヴィルヘルム「若者の成長は、いつ見ても楽しいものです。」

セバス「そうですね、その通りです。」

そんな二人を見て笑みを浮かべていたヴィルヘルムにセバスが聞く、それに答えたヴィルヘルムの返答に納得しながら向かい側に座った。

セバス「さて、今日は何の話をしてしましようか？」

ヴィルヘルム「やはり、今日もアレでしようか？」

セバス「今日もするとしますか……………」

「恋バナ!!」

その後、セバスとヴィルヘルムは恋バナをしながら、お昼休憩を取ったのだった。

一方、外では。

めぐみん『お昼の放送です。ランチの彩るはこの曲!!』

ダクネス「……………来い!!」

ヴィーシャ「ダクネスさぁーん!!頑張ってくださいあい!!」

グランツ「ヴァイス大尉!後ろは任せてくださいあい!!」

レム「はい!後ろには抜かせません!!」

めぐみんの放送が流れる中、ダクネス、コキユートス、デミウルゴス、シャルティア、マーレ、ヴァイス、グランツ、ヴィーシャ、レム、リーファ、アロン、ユウキ、夏美達が野球をしていた。

現在、ダクネスがバッター、デミウルゴスがキャッチャー、コキユートスが審判として立っており、ベンチにはヴィーシャとシャルティアとリーファ、アロン、ユウキ、夏美が順番を待っており、ピッチャーであるヴァイスの後ろでグランツとレムとマーレが守備を担当していた。

ヴァイス「ダクネスさん、容赦しないでですよ……………フン!!」

ダクネス「っ!当たらん!!」

コキユートス「ストライーク。」

ヴァイスが第一球を思い切り投げると、当然の様にダクネスはバットを振ったが当たらず、デミウルゴスが持っているキャッチャーグローブに球が入った。

ダクネス「当たらん!!」

コキユートス「ストライーク。」

続く第二球も当たらず、審判であるコキユートスの判定はストライークのみだった。

ダクネス「クソオ!まるで当たらない……………」

リーファ「ボールとバットの距離が離れすぎなんじゃ……………」?

ダクネス「私は……………攻撃が当たらないのだ!!」

夏美「それ……………堂々と言う事なの？」

アーロン「開き直りましたね……………」

ユウキ「というより、剣では当てられるのに、バットはダメなの……………」

全然バットにボールが当たらない事に悔しがるダクネスに次の出番街をしていたリーファはアドバイスする。

ダクネスはそう堂々と言い返し、夏美とアーロンとユウキは、困惑するしかなかった。

ヴァイス「よおーし、これで……………終わりです!!」

ダクネス「くう……………かくなる上は!!」

そうこうしている内にヴァイスが最後の一球を投げると、ダクネスは何かを決意したのか、目を見開いた。

ダクネス「とおおおおおおお!!ああああん!!」

ヴァーシャ「ダ、ダクネスさんがボールに当たりに行ったあああああああ!!」

ダクネスは、性癖を發揮して、バットを捨てて自分からボールに当たりに行き、それを見てヴァーシャは驚いた。

ダクネス「……………こ、これは良い……………ではなく、デッドボールだな……………」

コキュートス「ストライクバッターアウト!!」

ボールがお腹に直撃したダクネスは、当然と言うべきか笑みを浮かべながら言ったのだが、コキュートスが出した判定はストライクバッターアウトだった。

ダクネス「何故だ!?ボールに当たったでは無いか!」

コキュートス「ストライクノボールニ当たりニ行クノハルール違反だ!!」

ダクネス「そうなのか!」

リーファ「そうなのかじゃないでしょ……………」

アーロン「ダクネスさんは、平常運転でしたね……………」
ユウキ「そうだね。」

その事についてダクネスは抗議を申し出たのだが、コキュートスの返答を聞いて驚き、そんなダクネスに呆れながらツツコむリーファに、呆れるアロンだった。

一方、飼育小屋では。

スバル「……………ウチつてさ、飼育されてるのはさつき加わったウルシも含めて、四匹だよな。」

アウラ「そうだね。」

飼育委員の面々は、飼育小屋に居るハムスケ達を見つめており、スバルの質問に対してアウラは答える。

「どういう事かと言うと。」

ユージオ「でも……………今は五匹だよね?」

ドロロ「どうやら、この鳥が増えた様でござるな。」
そう。

本来四匹しかいない、デスナイトとハムスケと嵐牙とウルシしかないはずの飼育小屋に、大きな鳥が追加されていたからだ。

アクア「じゃあ減らせば良いだけよ。」

ハムスケ「あああああ!デスナイト君が消えてしまったでござる!!」

するとアクアはそう言いながらデスナイトに触れると、デスナイトは青白い光を放ちながら消滅してしまい、それを見たハムスケは驚きを隠せなかった。

ユージオ「確かに、一匹減ったね。」

スバル「うんうん、これで一匹減って一件落着……………」

ユージオ「って!なる訳ないでしょ!」

スバル「って!なる訳ないだろ!」

それを見ていたユージオとスバルは、アクアに突っ込み、アクアは黒い笑みを浮かべる。

チヨメ「そもそも、この鳥はなんなのでしょうか?」

フィーロ「フィーロ?フィーロの名前はフィーロだよ?ご主人様知らない?」

その鳥は、フィーロと名乗った。

それを見た面子は。

小雪「喋れるんだ！」

ユージオ「ご主人様？君のご主人様の名前は、何ていう名前なんだ
い？」

小雪が目を輝かせながらフィードロを見て、ユージオはフィードロに質
問をする。

フィードロ「ご主人様はね、尚文って名前だよ。」

アウラ「尚文？誰だろう？」

ドロロ「もしや、ホームルームの時に入ってきたあの者が、その尚
文殿かもしれないでござるな。」

チヨメ「そうかもしれないですね！」

フィードロは、尚文の名前を言うが、アウラは首を傾げる。

ドロロは、ホームルームに入ってきた男が尚文なのではと伝える。

そんな中、アクアはデスナイトを元に戻す。

ハムスケ「ああ！デスナイト君が戻って来たでござる!!」

嵐牙「良かったな、ハムスケ殿！」

ハムスケは、デスナイトが戻ってきた事に喜ぶ。

一方、校舎内では。

ラフタリア「尚文様！尚文様！尚文様はどこに……………？」

尚文の仲間の一人であるラフタリアが、尚文の事を探していた。

歩いていると、廊下の角から、アインズ、カズマ、零士、キリト、ア
スナ、カルム、ミト、リムル、レイト、師匠、フランが出てくる。

どうやら、師匠とフランを、学校案内していた様だ。

零士「ん？」

ラフタリア「ハッ……………魔物！」

零士達が、ラフタリアに気付いた途端、ラフタリアは剣を抜刀する。

カズマ「ちよお!?待った待った!」

零士「ここはお姉さんが元居た世界とは違うから、むやみやたらに
争うのは無しで頼む！」

ラフタリア「……………。」

ラフタリアが剣を抜いたのを見て、カズマと零士がそう言うが、ラ

フタリアは警戒心を解かない。

それを見ていたフランは。

フラン「……………師匠、斬っていい？」

師匠「待った、待った！カズマと零士の言う通りだ。無闇に争うのは無しだ。」

フラン「……………ん。」

フランは、ラフタリアと戦おうとしたが、師匠に止められ、止める。アインズ「私達は君達に危害を加えたりはしない。」

アスナ「安心して。そつちも唐突にこの世界に転移されたんでしょ？」

ミト「実は、私達も違う世界からこの世界に連れて来られたの。」

そんな中、アインズとアスナとミトがそう言うのと、ラフタリアは警戒を少し緩めたのか、剣を下げる。

ラフタリア「……………尚文さまと同じく。」

リムル「尚文……………？」

レイト「そいつも、俺達と同じ立場の人間なのか？」

零士「なあ、その尚文って、何者なんだ？」

ラフタリアの呟きに、リムルとレイトがそう呟いて、零士が質問をする。

ラフタリア「尚文さまは盾の……………」

カズマ「え？何？」

ラフタリア「勇者様です!!」

ラフタリアは、そう言う。

ちなみに、ラフタリア達が居る廊下の外には、当の尚文が居た。

ミト「勇者って事は、英雄とか、そんな感じなの？」

カズマ「俺TUEEE！見たいな奴なのか？」

ラフタリア「そんなんじゃないやありません!?尚文様は世界を救うために召喚されたのに裏切られて、濡れ衣を着せられ迫害されて……………」

アインズ（ハードモードだな……………）

ミトとカズマがそう聞くと、ラフタリアはそう言って、アインズは、心の中でそう呟く。

零士「召喚しておいて、尚文って奴を迫害するとか……………」

カルム「その世界、理不尽すぎるだろ……………」

ラフタリア「でも諦めたりせずに、誰かを護ろうとする方です!!」
師匠「よく迫害されてる中で、守ろうとするな。余程良い奴なんだろうな。」

フラン「尚文、すごい。」

それを聞いた零士とカルムは、尚文を召喚した世界に、あまり好印象は抱かなかった。

原因は、三勇教と言う宗教が原因だが。

ラフタリアの話は続く。

ラフタリア「ただ……………尚文様もちよつと気難しいと言うか、自分を出すのが苦手で……………」

アインズ（本人もハードモードか……………。）

ラフタリア「でも、本当は優しい人なんです。」

アインズ「…………ツンデレ、と言う奴か？」

アスナ「アインズさんの口からツンデレって……………」

キリト「何か印象変わるな。」

アインズ「自分で言っているもそう感じたぞ。」

ラフタリアの話を聞いてアインズが呟くと、それを聞いたアスナとキリトがそう反応し、それにアインズはそう答えた。

すると、ラフタリアは叫ぶ。

ラフタリア「とにかく！尚文様を探さなくては行けないのです!!」

零士「分かった。俺たちも、その尚文を探すのに協力するよ。良いよな？」

師匠「構わんさ。」

フラン「ん。」

カズマ「ああ！」

ラフタリア「ほ、本当ですか!？」

アスナ「ええ。ラフタリアさんにとって、尚文さんは、大切な人なんだよね？」

ラフタリア「はい！」

ミト「なら、早く見つけましょう。」

こうして、零士達も、尚文の搜索を手伝う事になった。
ひとまず、グラウンドに出る事にした。

ヴィーシャ「フン!!」

マーレ「ふうえ!?!」

コキュートス「ストライク。」

ヴィーシャがボールを投げ、マーレが空振って、コキュートスが
言う。

階段では、アクア、チヨメが座っていた。

カズマ「ん? アクアとチヨメさんじゃないか。」

零士「あつちに居るのは……………」

「アハハハハハハハ!!」

「うわああああああああああああ!!」

リムル「デカイ鳥!」

レイト「デカすぎる!?!」

フィーロはグラウンドを爆走していて、フィーロの背中には、アウ
ラ、小雪、ドロロ、ユージオ、スバルが乗っていた。

ラフタリア「フィーロ!?!」

ミト「え?もしかして仲間?」

カルム「ああ良かった、良かった。」

フィーロの姿を見て驚きながら近づこうとするラフタリアを見て、
ミトとカルムは安堵の笑みを浮かべていると、フィーロはラフタリア
の声が聞こえると急ブレーキして止まった。

「ん?」

フィーロ「わあ!!ラフタリアお姉ちゃん!!」

突然止まった事にアウラと小雪とドロロとユージオとスバルが首
を傾げていると、フィーロの身体から煙が出て、煙が晴れるとフィー
ロは背中に翼の生えた幼女の姿に変わっていた。

小雪「姿が変わった!?!」

アウラ「凄い!欲しい!」

ユージオ「いてて……………」

ドロロ「変化の術の類でござるか……………?」

アスナ「良かったあ……………無事に仲間と合流出来て。」

リムル「後はラフタリア君が探している尚文と言う勇者だけか。」

スバル「それってもしかして……………フィーロも探していた、一組に入ったもう一人の転校生?」

アインズ「らしいな。」

フィーロと合流出来たラフタリアを見てホツとしているアスナの隣でリムルが眩き、フィーロが変身した反動で倒れたスバルは立ち上がりながらアインズに聞き、それにアインズも頷いた。

ダクネス「あと一球!!」

ヴィーシャ「これで……………終わりです!!」

キャツチャーをしているダクネスがそう言う中、ヴィーシャはボールを投げる。

マーレ「んうううううう!!?んわあああああ!!」

マーレはどういう訳か、自分の杖をバット代わりにしており、マーレが打ち返すと、ボールは凄まじい勢いでケーニツヒの横を通過する。

そして、そのボールの行先には、ラフタリアとフィーロが。

レイト「危ない!」

レイトがそう叫ぶが、ボールの速度から、誰も間に合わない。すると。

尚文「エアストシールド!」

その声と同時に、ラフタリア達の前に巨大な盾が出現し、ボールからラフタリア達を護った。

キリト「あれは……………」

カルム「盾?」

アインズ「これは……………」

それをアインズ達が見ている中、階段の上を見るとそこには、さっきの盾を出現させた盾の勇者、尚文が立っていた。

尚文は、階段をジャンプしながら駆け下り、そのままラフタリア達の方に向かって走り出した。

アインズ「ほお……。」

リムル「おい、盾にヒビが入ってるぞ！」

キリト「もう持たないのか!？」

その光景にアインズが関してゐる中、先ほど尚文が展開した盾にヒビが入り始め、今にでも壊れようとしていた。

尚文「セカンドシールド!!」

それを見ていた尚文は盾の形状を変えて、すぐさま新しい盾を出現させると、最初の盾が割れたものの、すぐに新しく出た盾が防いだ。
? だがその盾もひび割れてしまい、ボールは一直線にラフタリアとファイロに向かって行つたのだが……。

尚文「んうおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

間一髪尚文が前に立ち、自身の右腕に持つ盾で防いだ尚文は、勢いに任せるようにボールを空高くに跳ね飛ばした。

ラフタリア「……………?!?尚文様!!」

ファイロ「ご主人様!!」

尚文「……………二人共、無事だったか!？」

ラフタリア「はい!!」

ファイロ「うん!!」

目を瞑っていたラフタリアとファイロが目を開けると、そこには尚文が立っており、尚文の姿を見たラフタリアとファイロが声を掛けると、安堵の笑みを浮かべながら尚文が聞いた事に頷いた。

ちなみに、他の面子はそれを見ていて、マールは高速で謝っていた。

尚文「……………この世界には他の勇者たちも居ない。しかも学園生活とやらを続けなくてはいけないルールがあるらしい。」

ラフタリア「はい、そのように聞きました。」

尚文「ハッキリ言って、意味が分からない。……………が、幸い俺達は一緒にいる。一先ずこの生活を守りつつ、様子を見て行こう。」

ラフタリア「はい!」

ファイロ「分かった!」

尚文「行くぞ……………ラフタリア、ファイロ!!」

「はい!!」

尚文の掛け声に、ラフタリアとフィーロはそう答える。

こうして、八つどころか、十の異世界が混ざった異世界学園生活は、この先、どうなっていくのか。

それは、ここに居る誰もが、分からない。

第2話 潜入！こうちようしつ

ケーニツヒ「ただただ……飲みたい!!」

それは、ケーニツヒの一言から始まった。

ある日、ケーニツヒ、ノイマン、グランツ、アクアが集まっていた。ケーニツヒ「この学園生活、全体的に不満はないんだが………アレが飲めないのだけは辛いよな。」

ノイマン「だな。」

アクア「アレはねえ………一度知ったら。」

ノイマン「だな!!」

学園のベンチに座っていたケーニツヒとノイマンの呟きを聞き、それにアクアが答えた事に頷くノイマン。

ケーニツヒ「でも………この世界じゃあ、あれ、売ってないよな。」

ケーニツヒはそう呟く。

どうもこの世界にはアレが売って無いらしく、売ってそうな場所に行っても。

荒くれ者『百の薬にも匹敵する伝説のポーションって奴か?』

ケーニツヒ『いや、そんな大層なもんじゃなく……。』

荒くれ者『へっ!』

と言った感じで、結局アレを手に入れる事は出来なかったらしい。

ノイマン「じゃああそこって、一体何を売ってるんだよ?」

ケーニツヒ「ハアゝア、アレ……何処かにねえかな?」

ノイマンが言った後にケーニツヒが溜め息混じりに言うと、その話を聞いていたグランツが話しかけて来た。

グランツ「ケーニツヒ中尉、ノイマン中尉、それがあある場所には会ったんですよ。」

ケーニツヒ「どこにあるってんだ?」

グランツ「なんと……校長室。」

グランツは、そう答えた。

遡る事、グランツがロズワールとともに、校長室に行った頃。

ロズワール（お忙しいですねえ。）

ルーデルドルフ（まあ出張と言つても一泊二日だ。明後日には戻つて来るよ。）

ロズワール（お疲れ様ですねえ。）

ロズワールと話しながら湯飲みに入った飲み物を飲むルーデルドルフ。？ その飲み物を見たグランツには、明らかにお茶に見えず、赤いアレに見えたらしい。

それを聞いたケーニツヒは、すかさず聞く。

ケーニツヒ「それって赤いヤツか!？」

グランツ「ええ赤いヤツです。」

アクア「校長が飲んでいたと言う事は、校長室にはあるって事よね？」

グランツ「間違いないと思う。それに校長先生は、出張で明日一日中居ないらしい。」

グランツは、ケーニツヒの質問にそう答え、居ない事を伝える。

それを聞いたアクアは。

アクア「なら！明日、手に入れましょう！」

ケーニツヒ「良いですね！」

ノイマン「だな！」

グランツ「作戦を立てるにしても、もう少し戦力が欲しい所だな……………」

アクア「それなら、私に任せてちょうだい！」

そうして、4人は話し合いを始める。

翌日。

2組は授業を受けていて、担当はバニルであった。

ちなみに、スバルとフランは、机に突っ伏していた。

フランは、座学が苦手なのだ。

デミウルゴス「それは教師としての義務の放棄でしょう。自由とは、責任と能力に応じて与えられる物です。」

バニル「いかにも頭の硬い悪魔が言いそうな事であるな。個人は自由により己が運命を決する権利がある。愚行権を知らぬのか？」

バイス「えええええ!?!俺たちは、俺たちが楽しければそれで充分だぜ

！」

ディアブロ「衆愚の権利など、私はそんな物には興味がありません。ですが、そのような考えが破滅に近づくのでは？」

と、悪魔4人が、討論をしていた。

そんな中、ノイマン、グランツ、ケーニツヒ、アクアが領き、一部の人が訝しげにする。

バニル「破滅！素晴らしいではないか！それこそが我が望……………おっと。時間のようだな。今日の授業はここまで。」

バニルがそう言う中、チャイムが鳴り、授業が終わる。

師匠は、フランに話しかける。

師匠「フラン、大丈夫か？」

フラン「座学……………嫌だ……………」

師匠がフランにそう聞くが、フランは魂が抜けたかの様に、机に突っ伏す。

それを見ていた人たちは。

アスナ「……………魂が抜けてるみたいだね……………」

ミト「確かにね。」

師匠「フランは、座学が苦手だから……………」

フラン「これなら、戦う方がマシ……………」

レイト「そして、戦闘狂か……………」

リムル「あははは……………」

アスナとミトが話す中、師匠がそう答え、フランの眩きに、レイトが苦笑気味に言い、リムルは苦笑する。

そんな中、ケーニツヒ達が移動する。

ケーニツヒ達は、校長室にたどり着いた。

ケーニツヒ「じゃ、いっちょ頂きに行くとしますか。」

ノイマン「だな！」

グランツ「それにしても、アクアさんは、戦力を用意すると言っていました、誰なんでしょうかね。」

アクア「待たせたわね！戦力つてのは、こいつらよ！」

ケーニツヒとノイマンがそう話す中、グランツがそう眩き、アクア

が叫ぶ。

そこに居たのは、カズマとケロロだった。

カズマ「いきなり何なんだよ。俺たちを呼び出すとか。」

ケロロ「なんか、嫌な予感がするでありますな……………」。

ケーニツヒ「カズマとケロロ軍曹か！」

グランツ「確かに、頼りになるかもな！」

ノイマン「だな！」

カズマとケロロは、急に呼び出されたらしく、そんな風に言う中、

ケーニツヒ達は、そう言う。

カズマは、アクアに聞く。

カズマ「お前ら、何するつもりなんだ？」

アクア「良い？ 私たちはこれから、校長室から赤い奴を盗むのよ！」

ケロロ「いや、それって、普通に校則違反でありますよね?！」

カズマ「ハアツ!? 大体、白老の師匠やグレニスさんからも呼び出されてたのに……………」。

アクアの言葉に、カズマとケロロはそう言う。

ちなみに、白老とグレニスは、零士、カズマ、リナ、カイト、カリ
ン、キリト、アスナ、カルム、ミト、リーファ、アーン、ユウキ、ノー
チラス、アリス、ユージオ、ダイジ、イーデイス、アーク、アリアン、
リムル、レイトなどといった者達を鍛えている。

ここ最近では、フランと師匠を誘おうと画策しているようだ。

アクア「はあ? あんなジジイの事なんて、無視すれば良いのよ！」

カズマ「おい、それを白老の師匠に聞かれたら、お前、終わるぞ。」

ケロロ「我輩達がそんな事をする必要って、あるでありますか?！」

アクア「へえ……………良いわよ、帰っても。でも、帰った時には、夏
美や白老のジジイに、色々嘘を吹き込むからね！」

「なっ!?!」

カズマとケロロは、校則違反になる事から、乗り気ではなかったが、
アクアにそう脅される。

カズマ「おい! 汚ねえぞ！」

アクア「なら、私たちに協力しなさい！」

ケロロ「ゲロ……………」。

カズマとケロロは、渋々手伝う事にした。

その場に居た全員は、校長室に入る。

ケーニツヒ「それで、赤い奴はどこにあるんだ？」

グランツ「あそこに見える奴がそうじゃないか？」

ケーニツヒの問いに、グランツはルーデルドルフの机の隣にある棚を指差す。

アクア「あああれね！じゃあ、早速頂きましょう!!」

カズマ「おい、アクア！」

アクア「これね！あら良い物じゃない!!」

ケロロ「やめておいた方が……………」。

アクアは、カズマとケロロの静止を聞かずに、棚を開けて、3本あつたうちの1本を取る。

すると。

アクア「え？」

ルーデルドルフ『この不屈き者めがあああああああああああ
!』

サイレンと共に、ルーデルドルフの叫び声が聞こえる。

すると、赤外線レーザーが張り巡らされる。

グランツ「うわあ!?何だコレ!」

カズマ「罨だ!」

アクア「え?え?えええええ!」

それを見てグランツとカズマも驚き、その原因を作ったアクアも動揺を隠しきれなかった。

しばらくして、サイレンは止まる。

ケーニツヒ「はあ……面倒くさい事になったな。」

ケーニツヒは、ため息を吐きながらそう言つて、レーザーにボールペンを当てると、ボールペンは焼き切れた。

それを見たケーニツヒは。

ケーニツヒ「……………これ、ガッツリ殺しに来てるよな。」

ノイマン「だな……………」。

ケーニツヒがそう言うのと、ノイマンがそう答える。

カズマ「全く！お前はなんでそう警戒せずにやるんだよ！」

アクア「だって仕方ないじゃない！まさか罠が用意されてるなんて思いもしないし!!」

ケロロ「そういう問題じゃないであります！」

カズマがアクアに対してそう言うのと、アクアはそう叫ぶ。

ケーニツヒ「我々も迂闊でした。平穩で緩み過ぎていたかな……………」

グランツ「こんな体たらく、大隊長にバレたりでもしたら大目玉ですよ！注意が足りなくて！」

ケーニツヒ「いや、赤いヤツを盗もうとしてる時点で大目玉だと思うが……………」

ノイマン「だな。」

そんな中、ケーニツヒがそう言うのと、グランツが叫び、ケーニツヒはそう言っつて、ノイマンも同意する。

アクア「とにかく！こんな怖い所早く脱出しちゃいましょう！ほら、出口の方には何も無いじゃない！あつちにさえ行けば……………」

ケロロ「あつちに出口なんて無かったはずであります……………」
アクア「え？」

ケーニツヒ「そもそも扉なんて、無かったはずだ!!」
アクアがそう叫んで、扉の方を指差す。

だが、ケロロがそう言うのに首を傾げ、ケーニツヒがボールペンを投げると、その扉はモンスター口の口になってボールペンを食べてしまった。

アクア「ヒイヒイヒイヒイヒイ!?カズマさん!?モンスター!モンスター!だったあ!!」

カズマ「アクアお前、記憶力大丈夫か？」

その後、ケーニツヒ達は、罠を防ぐか避けたりして回避し、罠の制御装置がある場所にまでたどり着いた。

ちなみに、カズマとケロロは、何かを話し合っていた。

ケーニツヒ「さて……………」

その後ケーニツヒが手慣れた手つきでケーブルを切ると、罨発動中に光っていた赤いランプも消え、正常に戻った。

ケーニツヒ「これで、無事全ての罨の解除に成功つと。」

グランツ「後は脱出してこの赤いヤツを流し込めば、ミッション完了……ですわね。」

ノイマン「だな！」

3人は、そういう風に話していた。

そんな中、カズマとケロロは、校長室に飾られている額縁を見ていた。

ケーニツヒ「ん？どうしたカズマ、ケロロ軍曹？」

カズマ「いや、何でもない。マークが気になっただけかも。」

ケーニツヒの質問に、カズマはそう答える。

ノイマン「これは、俺達帝国の国旗だ。」

ケロロ「そうなのでありますか？」

ケーニツヒ「ああ、校長先生は俺達帝国軍作戦本部の親玉だからな。」

そう。

額縁に飾ってあったのは、ターニヤ達の帝国の国旗だった。

すると、アクアが不安げな声を出す。

アクア「ねえ、そんな話もう良いから、早くここから出しましょうよ!?!」

ケーニツヒ「そうですね。なら、さっさと脱出……。」

アクアの言葉に、ケーニツヒが同意しようとする。

ルーデルドルフ『そうは問屋が許さんぞおおおおお!!』

再びルーデルドルフの叫び声がこだまする。

すると、帝国軍の国旗が入っている額縁が揺れる。

アクア「え!?!何!?!何々!?!」

ケーニツヒ「総員！警戒態勢!!」

「はっ！」

ケーニツヒ達は、身構える。

すると、額縁が外れ、その奥から巨大なカエルの形をしたモンス

ターが四匹出て来た。

グランツ「な、何なんだよ、こいつら!？」

カズマ「ジャイアントトード!俺達の世界のモンスターだ!」

ケーニツヒ「強いのか!？」

カズマ「強……くはない。」

ノイマン「なら!うおおおおおおおおお!!フン!

そう。

零士達の世界のモンスター、ジャイアント・トードだった。

カズマの言葉を聞いたノイマンは、ジャイアント・トードには効いていなかった。

カズマ「けど、打撃は効かない。」

ケーニツヒ「ノイマン!グランツ!」

ノイマンは、ジャイアント・トードに食べられ、グランツもいつの間にか食べられていた。

ケーニツヒ「このままだと、全滅か……せめて、これは死守しなくては……!」

カズマ「幸い、ジャイアント・トードは全部で四匹だ!そしてアイツらは一匹につき一人しか飲み込めない!」

ケーニツヒ「という事は……。」

ケロロ「あと2人、犠牲になるしかないんですか……!？」
そう。

これは、あと2人が犠牲になる必要があった。

それを聞いて、ケーニツヒは覚悟を決める。

ケーニツヒ「そうだな……そこは、男の仕事って奴だな。アクアさん、脱出出来た暁には、皆で祝杯を上げましょう!!」

アクア「顔の細い人!」

ケーニツヒ「ケーニツヒです。」

ケーニツヒは、アクアにそう言う。

アクアの呼び方に、ケーニツヒはそう訂正する。

ケーニツヒ「俺達に構うな!行け!!」

ケーニツヒはそう言つて、ジャイアント・トードへと向かつていくが、あつさり食べられる。

アクア「顔の細い人おおおおおおおおおおお！」

ケロロ「ケーニツヒでありますよ……………」

アクアがそう叫ぶ中、ケロロはそう呟く。

そして、アクアはカズマとケロロに話しかける。

アクア「カズマさん！ブレイズに変身して、こいつらをやつつけちやつて！」

カズマ「何で？」

アクア「何でつて、何？」

カズマ「……………悪いなアクア。俺たちは流石に離脱させてもらうよ。」

ケロロ「行くでありますよ。」

カズマ「ああ。スキル、潜伏。」

カズマとケロロは、カズマの潜伏スキルで、姿を消す。

ジャイアント・トードは、アクアの方を見る。

アクア「待って……………ちよつと待って……………！覚えてなさい！カズマアアア!!ケロロオオオ!!」

アクアはそう叫びながら、瓶を持って、ジャイアント・トードから逃げる。

一方、カズマとケロロは。

カズマ「さて。俺は白老の師匠の所に戻るか。」

ケロロ「まあ、その前に、報告しておくでありますか？」

カズマ「だな。」

カズマとケロロは、何処かへと向かう。

その頃、アクアは。

アクア「どわああああああああああ!!」

アクアは、必死にジャイアント・トードから逃げていた。

すると、進行方向の先に、尚文とラフタリアの2人がいた。

アクア「助けて！助けて！助けてくれたら神の加護をあなたに授けてあげるわあ!!」

アクアは、尚文とラフタリアに、助けを求める。
それに対する尚文の対応は。

尚文「……………シールドプリズン!!」

尚文はアクアを見捨て、シールドプリズンで自分とラフタリアを守る。

アクア「何やってんのよ、アンタアアア!! わああああ!! 覚えてなさい! 神の罰が当たるからねえええええええええ!!」

アクアはそう叫びながら、横を通過する。

それを聞いていた尚文は。

尚文「……………神ね。」

ラフタリア「尚文様?」

尚文「神を騙る奴程、信用出来ない奴はいない。」

尚文はそう呟き、ラフタリアが首を傾げる。

尚文は、色々と酷い目に遭った為、神は信用していない。

アクアは逃げ続ける。

すると、進行先には、師匠の姿が見えた。

アクア「助けて! 私を助けて!」

アクアは、師匠に向かって叫ぶ。

だが……………。

師匠「来るな! 来るなアア!!」

カリン「お願い! 調べさせてええええ!!」

フラン「師匠ー!!」

師匠は、カリンに追われていて、アクアには気づかなかった。

無論、師匠を追うカリンや、その2人を追うフランも気づいていない。

アクア「何やってんのよおおお!!」

アクアはそう叫ぶが、3人は気付かずに、アクアから遠のく。

一方、技術室と書かれている部屋の中では。

カイジン「リズベットの嬢ちゃんは、中々才能があるな。」

黒衛兵「んだ。良い鍛冶師になれるべ。」

リズベット「えへへ……………ありがとうございます!」

カイジン、黒衛兵は、リズベットの鍛冶師としての腕を褒め、リズベットは嬉しそうにしていた。

カイジンと黒衛兵、ガラム、ドルド、ミルドの3人は、つい最近来たのだ。

カイジン「それにしても、リズベットの嬢ちゃんは、違う世界で鍛冶師をやってたんだよな？」

リズベット「ええ。自分の店を持って、色んな武器を作ったりしたわよ。」

黒衛兵「なら、納得だべ！」

ガラム「この技術室にも、華が生まれたな。」

ドルド「全くだな！」

ミルド「うんうん！」

リズベット「ミルドさんは、喋らないんですね……………」

カイジン達は、そう話していた。

すると、技術室の前を、アクアとジャイアント・トードが通る。

カイジン「何か、揺れるな……………」

リズベット「ていうか、2組のアクアって人の叫び声が聞こえる気がするの、気のせいかしら？」

黒衛兵「気のせいだと思うべ。それより、リズベットちゃんも頑張るべ！」

リズベット「そうね！」

リズベット達は、アクアの存在に気づかずに、作業を再開する。

一方、アクアが逃げる先には、エミルスとバイスが居た。

バイス「なあなあエミルス！俺っち、暇なんだけど！」

エミルス「うるさいぞ。そもそも、しようがないだろ。」

エミルスとバイスは、そんな風に話していた。
すると。

アクア「どわあああああああああ!!」

バイス「え？何この声？」

エミルス「なあっ!？」

アクアの叫び声が聞こえてきて、後ろを振り向くと、アクアが目

入る。

アクアは、2人に声をかける。

アクア「助けて！襲われてるの！助けてよ！」

バイス「エミルス！どうする？」

エミルス「放っておくと、俺たちが食われそうな気がするな。

………つたく！」

エミルスはそう言って、リバイスドライバーを腰に装着する。

そして、レックスバイスタンプを起動する。

『レックス！』

エミルスは、レックスバイスタンプを起動した後、押印面に息を吹きかける。

エミルス「ハアア………フツ！」

そして、レックスバイスタンプをオーインジエクターに押印する。

『Come On！レ！レ！レ！レ！レックス！』

バイス「フハハハハ！いやっほう！」

『Come On！レ！レ！レ！レ！レックス！』

待機音が流れる中、エミルスは変身ポーズを取って、叫ぶ。

エミルス「変身！」

エミルスはそう言って、レックスバイスタンプをリバイスドライバーに装填して、倒す。

『バディアップ！』

『オーイング！ショーニング！ローイング！ゴーイング！』

『仮面ライダー！リバイ！バイス！リバイス！』

バイス「いやっほう！」

エミルスとバイスは、仮面ライダーリバイと仮面ライダーバイスに変身する。

アクアが2人の横を通過して、ジャイアント・トードが迫る。

バイス「エミルス！どうする!?!」

エミルス「リミックスは使えないから、必殺技で行くぞ！」

バイス「あいよ！」

エミルスとバイスはそう話して、レックスバイスタンプを2回倒

す。

『レックス！スタンピングファイニッシュ！』

「ハアアアアア！」

2人は、ライダーキックをジャイアント・トードに放つ。

それを食らったジャイアント・トードは、絶命して、倒れる。

2人は、変身解除する。

そして、アクアに近寄る。

エミルス「おい。俺たちを巻き込むなよ。」

アクア「悪魔に助けられるのは複雑ね……………」

バイス「何だよ！巻き込んでおいて、その言い方は無いだろ！」

アクア「まあ良いわ！今日は飲むわよ〜！」

蒼影「何を飲むというのだ？」

アクアは、悪魔であるエミルスとバイスに助けられた事に複雑な表情を浮かべるが、すぐにそう叫ぶ。

すると、蒼影が現れる。

アクア「どわあああつ!?」

エミルス「蒼影か。」

バイス「やつほ〜！」

アクア「アンタ、どこから現れるのよ!!」

蒼影「俺はいつでもお前の背後に居る。」

ロズワール「何をやっているのくくな。」

すると、蒼影だけでなく、ロズワールも現れる。

横には、ラム、カズマ、ケロロがいた。

アクア「あ、これは……………」

ロズワール「君たちの気持ちも分かるのだけれどね。」

アクア「アンタ達！先生にチクったわね！」

ラム「当然よ、ラムはロズワール先生の味方なもの。」

ケロロ「というより、蒼影殿には最初からバレていたでありますよ。」

カズマ「ああ。俺たちが脱出した直後に、蒼影が居たからな。どうやら、蒼影にはバレていたそうだ。」

そして、ロズワールが校長室にいるジャイアント・トードも引き寄せる。

ロズワール「ノイマン君、グランツ君、ケーニツヒ君、アクア君。」
アクア「えっ!?!」

ロズワール「可哀想だけれど、校則違反は違反だからね。君達四人、生活指導室送りだあくよ!!」

ロズワールは、そう宣言する。

それを聞いたアクアは。

アクア「な……………なんでよおおおおおおおおおおおおお
おお!!」

そんな風に絶叫した。

ロズワールに、エミルスとバイスが話しかける。

エミルス「それで、俺たちはどうなるんだ?」

バイス「まさか、俺っち達も!?!」

ロズワール「まあ、君たちは咄嗟の判断だっただろうからね。今回は、特別にお咎めなしという事しておくよ。」

エミルスとバイスは、正当防衛が認められたのか、お咎めなしになった。

第3話 反省!しどうしつ

アクア、ノイマン、グランツ、ケーニツヒの4人が生活指導室送りになった。

その翌日のホームルームにて。

レルゲン「彼らは本学で窃盗を目論んだ。よって処分が下された。」

リムル「そりゃ……………そうだよな。」

レイト「あんな事をすればな。」

スバル「やつぱ停学とか……………」

その事を朝のホームルームで二組の皆に話したレルゲンの言葉を聞いて、リムル、レイト、スバルがそう言う。

だが、レルゲンは眼鏡をずらす。

レルゲン「いや……………生活指導室送りだ。」

キリト「生活指導室?」

カルム「そんなのがあんのか。」

レルゲン「彼らは……………そこで特別指導を受けている。」

それに答えたレルゲンに今度はキリトとカルムが聞くと、レルゲンを顔色を少し悪くしながら答えた。

一方、その生活指導室送りとなったアクア達はと言うと。

恐怖公「校則違反をしたあなた達には、誇り高き本学園の生徒としての……………自覚を持って頂くとしましょう。」

『ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

アインズ達と同じ世界出身の、あの虫の姿をした恐怖公の指導を受けており、その指導により悲鳴を上げていた。

恐怖公「我が眷属は常にお腹を空かせておりますがご安心を。ここは特別な世界、皆さんを食べたりはしません。代わりに……………耳や口、あんな所やこんな所へ、出たり入ったりするだけ……………するだけです。」

『ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

恐怖公がそう言うなか、4人の悲鳴が響き渡る。

一方、2組では。

アウラ「……………私、凄く嫌な予感がするんだけど。」

シャルティア「妾もでありんす。」

生徒指導を行っているのが恐怖公だと察したのか、アウラとシャルティアは冷や汗を掻きながら呟いた。

レルゲン「とにかく!!彼らに会ったら、優しく……優しく接してやってくれ。(特に……ターニヤ・フォン・デグレチャフ少佐、本当に頼んだぞ。)」

そう2組の面々に対してレルゲンは言った後、ターニヤに対して目で訴えながら首を動かした。

だが、当のターニヤは。

ターニヤ(分かっております!精神的にも後で鍛えておきます!!)(あ……これお互い意思疎通出来てない感じだ。)

レルゲンの訴えが分かかって無かったのか、そう考えながら頷いたターニヤを見てアインズとリムル、レイト、アーク、零士、カズマ、ケロロ、師匠が心中でそう思った。

お昼休みになり、廊下をめぐみん、ダクネス、零士、リナ、キリト、アスナ、カルム、ミト、リムル、レイトが歩いていた。

めぐみん「ちよむすけのエサどうしましょう?」

アスナ「やっぱり、小魚じゃないのかな?」

ミト「無難にキャットフードじゃない?……って、アクア?」
ちよむすけのエサについて話しながら歩いていると、アクアがいた事に気づく。

リナ「アクア……大丈夫?」

ダクネス「そうだぞ……所で、一体どんな指導を受けて来たのだ!?絶叫系か!?それとも快樂系か!」

カルム「ブレないな……」

キリト「ていうか、様子がおかしくないか?」

リムル「ん?」

リナが心配して声をかけ、ダクネスがそう言う中、カルムは苦笑しながらそう言うが、キリトとリムルは、アクアの様子がおかしい事に気づいた。

レイト「お、おい、どうした?何があったんだ?」

ダクネス「ほ、本当にどうした!? アクア、返事をしろ!? そんな表情をして一体何があったと言うのだ!」

流石に様子がおかしい事に気づいたのか、ダクネスがそう聞くと、アクアは口を開く。

アクア「指導……………あれは指導なんかじゃ無いわ……………。ねえ……………来るの……………。黒い悪魔が……………もうそれは連なつて。」

リムル「何言つてんだ、お前?」

アクアがそう言う中、リムルはそう聞く。

すると、めぐみん、リナ、アスナ、ミトは何か気づいたのか、表情を強張らせる。

アスナ「み、皆……………。」

ミト「アクアの髪に……………。」

キリト「え?……………のわっ!」

レイト「ん? えっ!」

アスナとミトがそう言う中、皆がアクアの髪を見ると、何か、黒い虫の足が見えた……………見えてしまった。

ダクネス「ア……………アクア……………。」

アクア「へえ?」

カルム「そ、その髪についてる黒いのつて……………!」

零士「まさか……………ゴ……………むぐっ!」

リナ「やめて! それ以上言わないであげて!」

リムル「おいおい……………。」

レイト「うそくん……………。」

ダクネスがそう聞こうとして、零士が名前を言おうとした瞬間、リナが口を塞ぐ。

全員が唾然となる中、アクアは虚な目で横を通過する。

零士「ん? なんか、声が……………。」

アスナ「あれつて……………グランツさん達だよね……………?」

声が聞こえてきて、全員が声のした方を向くと、そこには、ノイマン、グランツ、ケーニツヒの3人がいた。

そんな二人に対してパツクが聞き、パツクに対してスバルとアスナは言い返すと、パツクはほんの少し首を傾げた。

ダクネス「一体どうしたら良いんだ……。」

めぐみん「ハア……諦めましょう。」

カズマ「だな。」

ダクネス「そんな!？」

ミト「結構冷たいわね……。」

リムル「お前ら、アクアの仲間だろ!？」

そうダクネスが顎に手を添えながら考えていると、ため息混じりにめぐみんとカズマが言ったのを聞いてダクネス、ミト、リムルが驚いた。

めぐみん「仕方ないですよ、私達に出来る事はありません。」

カズマ「そもそも、あいつらの自業自得だろ?」

アリス「そうですね。めぐみんとカズマの意見に同意です。」

ユージオ「アハハハ……。」

ダイジ「まあ、無理ないだろ。」

めぐみんとカズマの言葉に、アリスとダイジも賛同して、ユージオは苦笑する。

すると、エミリアが口を開く。

エミリア「……ねえスバル、レルゲン先生に掛け合って見たらどうかな?」

スバル「ナイスアイデア!エミリアたん!!」

ダクネス「かたじけない……二人共頼めるか?」

エミリア「うん、何処までやれるか分からないけど、頑張って見るね!!」

そんな中、エミリアの言葉を聞いてスバルは頷き、礼を言ったダクネスにエミリアが答える。

そして、エミリアとスバルは職員室に向かい、レルゲンと交渉をする。

エミリア「……ですので、皆の処分を軽くする事は出来なんでしょうか?」

レルゲン「……………」。

エミリア「な、何か？」

職員室、事の詳細をエミリアがレルゲンに教えると、話を聞いたレルゲンが黙ったのを見てエミリアが聞く中、レルゲンは後ろを向いた。

レルゲン（な、何だこの良い子は……あの少女の皮を被った悪魔とは全く違うではないか。）

レルゲンは、そんな風に思っていた。

ちなみに、少女の皮を被った悪魔というのは、ターニヤの事である。レルゲンは、エミリアの方を向き、言う。

？レルゲン「……な、何か良い行動を取ってくれたなら、処分が軽くなる可能性は十分にあるだろう。」

エミリア「良い行動……ですか？」

レルゲン「ああ、良い行動だ。私の方からも校長先生に掛け合って見よう。」

エミリア「っ！ありがとうございます!!」

日頃からターニヤへの恐怖感への反動か、エミリアの善意な行動に思わず涙を流したレルゲンの言葉を聞き、エミリアは笑みを浮かべながら礼をした。？ そんなエミリアを見て、一緒にいたスバルも笑みを浮かべている中、レルゲンは再び後ろを向くと……………。

レルゲン（エミリア君……………マジ天使か……………。）

レルゲンはそう涙を浮かべていた。

すると、視線を感じて、視線の方向を向くと、バニル、白老、朱菜、クリスハイトがレルゲンを見ていた。

？レルゲン「んう？……………な、なんですか!？」

レルゲンは4人にそう聞くが、朱菜は笑みを浮かべるだけで、答えなかった。

エミリアとスバルが職員室から出ると、ダクネス達がいて、ダクネスは2人に聞く。

ダクネス「どうだった!？」

エミリア「うん、何か良い行動をしたら、処分を軽くしてもらえる

かもしれないって。」

カズマ「良い行動って、アクアには難しいんじゃないか？」

イーデイス「まあ、問題ばかり起こすからね。」

ダイジ「困ったな……………」

レイト「そうだな……………」

エミリアの言葉を聞いて、その場にいる全員が考える。

すると、めぐみんが口を開く。

めぐみん「フツフツフツフツフツフ……良い行動ですね、それなら簡単じゃないですか！」

スバル「自信ありげじゃねえかめぐみん。」

リムル「何か考えでもあるのか？」

そんな中、めぐみんが笑みを浮かべながら言ったのを聞いたスバルとリムルが聞くと、めぐみんはこう聞き出した。

めぐみん「次の授業は理科の実験でしたよね？」

エミリア「そうだけど？」

めぐみん「フツフツフツフツフツフツフツフツフツフツフツフ!!」

キリト「お、おい、めぐみん？」

アリス「何かとんでもない事を考えているのではないのか!？」

めぐみんの質問にエミリアが答え、それを聞いて再び笑いだしためぐみんにキリトとアリスは冷や汗を掻きながら聞いた。

ロズワール「それじゃあ、実験を始めようかあくな。」

次の授業の理科の実験が始まり、理科室に集まった面々にロズワールが言う中、ダクネスとアリスは、不安な表情でめぐみんを見つめていた。

コキュートス「……娘、ドウシタノダ？」

ゲルド「アリス殿も、顔色がすぐれないように見えるが。」

ダクネス「い、いや……………」

アリス「少しな……………」

そんな二人にコキュートスとゲルドが聞くとダクネスとアリスは浮かない表情で答えた。

ロズワール「火の魔法を使える人達は、アルコールランプに火をつ

けてくださあ〜いね。」

アインズ「では私が……ファイヤーボール。」

ロズワールが説明した後、同じ班のラムとターニャとアークが見る中、アインズは指から「ファイヤーボール」を放って火を点けた。

シャルティア「誰が火を点けるであります?」

エミリア「じゃあ、私が火精霊にお願いするね。」

ちよむすけ「ナアー!!」

『ええええ!?!』

シャルティアと同じ班のエミリアがシャルティアに言った直後、ちよむすけが口から火を吐いてランプに火を点け、それを見ていたスバルとレイトは思わず驚いた。

スバル「ちよむすけ火吹いてたぞ?!」

めぐみん「ちよむすけは猫ですよ?火を吹くはずがないじゃないですか。」

レイト「え!?!えええええ!?!」

その事をスバルはめぐみんに伝えるがめぐみんはそう言い、それを聞いたレイトはちよむすけを見ながら戸惑ってしまう。

めぐみん「そ、それより二人共、行きますよ。」

スバル「お、おおお……。」

レイト「分かった……。」

そんなレイトとスバルにめぐみんは眼帯を付けながら聞き、頷いたスバルとレイトは二人並んで、ロズワールからめぐみんを隠した後、めぐみんは同じ班で協力してくれる事になったヴィーシャとヴァイスとサブローに目配せし、それに3人共頷いた。

めぐみん「我が名はめぐみん……紅魔族随一の……。」

ターニャ「っ!?!貴様達何を……!?!」

ヴィーシャとヴァイスがアルコールランプ周辺に防殻を展開し、サブローは実体化ペンでバリアを生み出し、めぐみんは爆裂魔法を放つ為の詠唱を始めた。? その魔力に気付いたターニャがめぐみん達に注意しようとすると、それをアインズとリムルが前に出て止めた。

アインズ「ターニャ、風紀委員としての立場は分かるが、ここは彼

らの好きにさせてやってはくれまいか？」

リムル「アイツらもアイツらなりに、アクア達の力になろうとしてるんだ。」

ターニヤ「しかし問題を起こしては、奴らも生活指導の対象に!」
カルム「それはまだ分かんないよ。ほら？」

アインズとリムルの言葉に対してターニヤが言い返した後ろで、カルムが言った言葉を聞いてロズワールの方を見ると、ロズワールは気づかずに本を読んでいるように見えた。

ターニヤ「……………ロズワール先生は、この状況を黙認している？」
アーク「恐らくな。だろウラム殿？」

ラム「聡明なロズワール先生が、気づかない筈などないわ。」

そんなロズワールを見てターニヤは考え、頷いたアークはラムに聞くと、ラムは当然の様に頷いた。

めぐみん「……………爆裂魔法に祝福し、爆裂魔法に感謝するだろう。爆裂魔法が……………!」

『ぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐう!!』

サブロー「これはすごいね……………」

めぐみんの詠唱と共に集まる魔力を何とか抑えようとするヴィーシヤとヴァイス。

サブローは、めぐみんの魔力に驚く。

ダクネス「めぐみん……………」

ノーチラス「大丈夫か？」

ユナ「今は、彼らを信じよう。」

そんなめぐみん達を見てダクネスは眩き、ノーチラスとユナはそう話す。

めぐみん「解き放て……………エクスプロー……………ジョン!!」

次の瞬間、めぐみんの爆裂魔法が発動し、その爆発は教室全体を包む程の威力だったが、ヴィーシヤとヴァイスの防殻とサブローのバリアによって大事には至らず、アルコールランプが置かれた机と蛇口が壊れたぐらいに留まった。

ロズワールが口を開く。

ロズワール「おんやあく？これは一体……!!？」

めぐみん「すいません、ランプの着火に失敗しました。」

レイト「おお失敗したのか?!失敗したなら仕方ないよな!」

スバル「なあ!?!ロズっち先生!」

その影響で壊れた配管から水が漏れたのを見てロズワールが聞くと、めぐみんが謝罪したのを聞いたスバルとレイトはフォローしながらロズワールに言った。

ちなみに、ヴィーシャは倒れながら疲れた表情を見せ、ヴァイスに至つては気を失い、サブローは疲れた表情を見せていたが、倒れていない。

ロズワール「そうだあねえ、失敗なら仕方ないねえ。でも……失敗にしても、ちよつと大惨事過ぎやしないかあくな?」

スバルの言葉にロズワールが言った直後、壊れた配管から水が大量に溢れ出て来て、それは流水の様に廊下を流れて行った。

ロズワール「おやおや………。あの二人はこれにどう対処するかあくな?」

その流れは校長室に向かって来ると思ったのか、ロズワールはそう呟いた。

一方、校長室では。

ルーデルドルフ「……ん?」

ゼートウーア「どうした?」

ルーデルドルフ「何か大きな音が。」

ゼートウーア「ふむ……音からすると流水が、近付いて来るようだ。」

ルーデルドルフ「この校長室にか?」

ゼートウーア「恐らく……。」

ルーデルドルフ「……何!?!」

その流水の音が聞こえたルーデルドルフにゼートウーアが言い、それを聞いたルーデルドルフが驚きながら立ち上がると、ゼートウーアは机の引き出しを開けた。

その中には、葉巻が入っていた。

ゼートウーア「さて……ここには貴様が秘蔵する葉巻があるわけだが………?」

ルーデルドルフ「何たる事か!」

ゼートウーアの話聞いて再び驚いたルーデルドルフは校長室を出ると、そこには偶然生活指導室から出、またもやぐったり状態のアクア達の姿が見えた。

ぐったりしていたが、いきなりの水に驚く。

アクア「えっ!? 何これ!」

ルーデルドルフ「ん? 貴様らは……良い所に居るな。手を貸してもらうぞ。」

ケーニツヒ「校長先生……。この水を何とかしたら、懲罰は解いていただけますでしょうか!」

ルーデルドルフ「良からう、信賞必罰は世の常だ。」

そのカズマ達の流れて来た流水に気付いた矢先、ルーデルドルフはアクア達の手を借りようと声を掛けた。? それを聞いたケーニツヒが聞くとルーデルドルフは頷きながら言い、それを聞いたアクア達の顔には英気が取り戻したかのように明るくなった。

ケーニツヒ「ああ! アクアさん!」

アクア「任せて! 顔の細い人!!」

ケーニツヒ「ケーニツヒです……。」

ケーニツヒがアクアに問うと、アクアはそう言つて、ケーニツヒは突っ込む。

そして、作業を始める。

ケーニツヒ「ノイマン、グランツ! 防殻展開!!」

グランツ「はい!」

ノイマン「だなあああああああああああああああああ!!」

ケーニツヒの指示で、グランツとノイマンは防殻を展開する。

その間、ケーニツヒは窓を開けた。

ケーニツヒ「アクアさん! 集めた水を、俺の防殻で閉じ込める! 後は頼めますか!」

アクア「任せてよ! 私を誰だと思ってるの? 水の神様よ!」

アクアはそう言うと、杖を取り出して準備をする。

ケーニツヒ「頭の可哀そうな子だと思っていたが……………力は本物みたいだな。」

ノイマン「だな…………。」

グランツ「め、女神だ…………。」

その姿を見て、3人がそう言う中、アクアはスキルを発動して、水を外に出す。

すると、窓を通って行った水は空高くまで上がって行き、一つに纏まるとそのまま弾けて飛んだ。

ルーデルドルフ「お、おお…………。」

それを見て声を漏れそうになったルーデルドルフが見た空には、大きな虹が出来ていた。

その後、2組では。

ダクネス「それで、謹慎が解除されたと言うわけか。」

エミリア「皆、良い行動が出来て良かったわね。」

その後、カズマ達の生活指導は解除され、その事を聞いたダクネスとエミリアは笑みを浮かべていた。

スバル「その前にめぐみんが悪い行動をしていたけどなあ。」

めぐみん「何の事ですか？分かりませんねえ〜？」

キリト「おいおい…………。」

カルム「やれやれ…………。」

アクア「まあ、礼は言っておくわ！」

スバルがそう言う中、めぐみんはそう言っつて、キリトとカルムは呆れる。

それを見ていたヴィーシャは。

ヴィーシャ「これに懲りたら、もう校則違反はしないでくださいね!？」

グランツ「めぐみんさんも、ありがとうな。」

めぐみん「礼なら、あなた達の隊長殿にも言った方が良いですよ。

あの時、風紀委員として止めずにいてくれたんですから。」

そんなアクアにヴィーシャが言った近くでグランツもめぐみんに

礼を言い、それにめぐみんは目を瞑りながら言い返した。

ケーニツヒ「よおーしノイマン！代表してお前、礼を言つて来てくれ。」

ノイマン「俺一人でかよ？」

ケーニツヒ「駄目か？」

それを聞いたケーニツヒはノイマンに言い、それに聞き返したノイマンにケーニツヒは呟いた。

すると、2組に笑いが満ちる。

恐怖公「良かったですね、ロズワール先生。」

ロズワール「おんやあく、恐怖公先生。」

そんな皆の様子を見ていたロズワールに恐怖公が話しかけた。

恐怖公「結果がどうであれ、これでまたクラスメイトの結束が強まりました。」

ロズワール「そうですね。このまま順調に行ってくれれば……………」

恐怖公「ですね……………」

恐怖公の話にロズワールが言い、それに恐怖公が頷く。

すると、恐怖公がロズワールに話しかける。

恐怖公「あ、どうです？この後一緒にアフタヌーンティーでも……………」

ロズワール「お断りします。」

恐怖公はロズワールにアフタヌーンティーに誘ったのだが、ロズワールはそれを断るのだった。

しかも、道化師染みた口調をやめて、真面目な口調で。

こうして、2組の結束が深まる中、ロズワールと恐怖公が居る廊下には、微妙な空気が満ちた。

第4話 窮地！がくりよくてすと

指導室送りにされたアクア達が復帰してから、しばらくが経ったある日。

ロズワール「テストが近づいていくよ。」

スバル「……………だから、イベント多すぎだつて!!」

ロズワールがそう言うと、スバルはそう突っ込む。

ロズワール曰く、テストが近くにやるらしい。

ロズワール「テスト問題は、授業でやった範囲からしか出ないかあくらね。」

アインズ「テストに…………。」

ロズワール「ん？」

アインズ「……………テストに落第はあるのか？」

ロズワールが2組の面々に話していると、アインズはロズワールに對して腕を組みながら聞いた。

それを聞いた途端、ナザリツクの守護者達が反応する。

マーレ「だ！大丈夫ですアインズ様!!」

アインズ「お、おう…………。」

アルベド「そうです！我ら守護者、このようなレベルで落第する者など、けっしておりません!!」

アインズ「お、おう…………。」

アインズの話聞いたマーレとアルベドが、立ち上がって言ったのを聞いたのを聞いてアインズが頷く中、今度はアウラが口を開いた。アウラ「アインズ様はシャルティアの事を心配されているのかもしれませんが、シャルティアとてナザリツクを守護する者です。このレベルは余裕でクリアして見せます!!」

シャルティア「そ、そうでありんす！ちよおくと苦手な部分はありませんが、アインズ様のご期待には必ず！必ず答えて見せるでありんす!!」

アインズ「お、おう…………。」

アウラの話聞いたシャルティアが、少し慌てながらも言ったのを

それを見ていたデミウルゴスは。

デミウルゴス「ふむ……なるほど。」

ギロロ「今ので、何が分かったんだ？」

ドロロ「分からないでござるな。」

デミウルゴスがそう呟く中、ギロロとドロロは、そう話すのだった。その後、教室にて、カズマ、零士、アクア、スバル、ターニヤ、リムル、レイト、キリト、カルム、アークが話していた。

零士「お前、アインズに勝負を挑むなんてバカにも程があるだろ。」

アクア「だってだって……。」

ターニヤ「彼は貴様と違って真面目に授業を受けていた。」

アーク「確かに。勝てるつもりでも思ったのか？」

零士とターニヤとアークの言葉に、アクアは涙目になる。

そんな中、カズマが口を開く。

カズマ「一方お前は知能のステータスが想像越えて低くて、しかもこれ以上上がらないんだぞ？」

アクア「……うわあ〜ん！そんなハッキリ言わなくても良いじゃない!?カズマもつと優しくフォローしてよおおおおお!!」

そんなアクアに対してカズマが言ったのを聞いて、アクアは思い切り涙を流しながら床を叩いた。

そんな中、リムルとレイトが、カズマに聞く。

リムル「え？アクアって、そんなに知能が低いのか？」

カズマ「絶望的にな。」

キリト「マジかよ。」

レイト「水の女神を自称してる割には、知能が低いってダメだろ。貧乏神ならギリ分かるけど。」

カルム「ああ………確かに貧乏神って言われたら、納得するわ。」

アクア「誰が貧乏神よ！」

零士「とにかく、このままじゃあ、勝負にすらならないから、勉強はしろ。」

リムルとレイトがそう言って、アクアが突っ込む中、零士はそう言

う。

すると。

ターニヤ「素晴らしい！」

アクア「へ？」

ターニヤ「我が203大隊名物の勉強合宿に歓迎するぞ!!」

アクア「ごめんなさい、許してください。」

ターニヤ「短期練成には絶対の自信がある！充実な内容で将校も狙えるのだが……………！」

アクア「本当にごめんなさい、許してください。」

そうターニヤはアクアを歓迎しようとしたが、当のアクア本人は頭を下げて断った。

すると、フランと師匠が、零士に話しかける。

師匠「なあ、零士。ちよつと良いか？」

零士「どうしたんですか？」

師匠「フランの勉強を手伝って欲しいんだが。」

零士「フランさんの？」

フラン「座学……………嫌だ……………」

師匠「流石に、フランを落第させる訳には行かないからな。この後、盾の勇者達と一緒に勉強するんだが、良かったら、手伝ってくれないか？」

零士「ああ。良いぞ。」

リムル「俺たちも良いか？」

レイト「よかつたら手伝うぜ。」

師匠「おお！ありがとう！」

こうして、零士、リムル、レイトは、尚文達と一緒に勉強をするこ
とになった。

一方、図書室では。

パック「ふわあく、寝てても良い？この世界は眠くならないけど、もう飽きちゃったよ。」

エミリア「ダメよ、学生パック君。頑張るように。」
パック「ちえく。」

その後、スバルはエミリアとパックとレムと一緒に図書室に来てテスト勉強をしていた。？ その最中に欠伸をしながら言ったパックに対し、エミリアは注意していた。

レム「スバル君完璧です。レムは感服しました!!」

スバル「おお!!……何か懐かしいなあ。」

『んう?』

スバル「エミリアたんとも、レムとも、こうやって勉強したなあって。」

エミリア「そうね。」

レム「そうですね!!」

スバル「……………ん?」

レムの言葉を聞いたスバルは何かを思い出し、それにエミリアもレムも頷いたのだが、スバルはそこである事に気付く。

スバル(……一緒に勉強した、それは何時の事だ? 俺は二人と、何時一緒に勉強していた? 一体、俺達はどのタイミングからここに……?)

その事をスバルが考えているのを、隣の席で本を読んでいたベアトリスが見ていた。

ベアトリス「……………。」

マーレ「ど、どうかしましたか?」

シノン「何か気になる事でも?」

ベアトリス「何でも……………ないのよ。(多分、いくら考えても答えが出ない類のものかしら。)」

前で本を読んでいたアウラとシノンの声かけに答えた後、スバルの考えているのを見ながら心中で思った。

そんな中、エミリアがスバルに話しかける。

エミリア「スバル? スバル?」

スバル「ん? ああごめんごめん! 考え事してた!」

エミリア「急にだんまりするから、ビックリしちゃった。」

スバル「だんまりって今日日聞かねえな。」

レム「フフっ、では次に進みましょうか。」

エミリア「ええ、そうね。」

スバル「ウイウイ、了解。」

エミリアに声を掛けられたスバルは言った後、レムとエミリアと共にテスト勉強の続きをし、ベアトリスも読書の続きをした。

一方、一組では、クリスがフェルトに勉強を教えていた。

クリス「だから、ここはこうなるんだって！」

フェルト「ううう……だあー！分かんねえなあ!!」

クリスがフェルトに勉強を教えていたのだが、フェルトは殆ど分かって居なくて苦戦していた。

カズマ「よお、クリス。」

クリス「やあ、カズマ君!!」

カズマ「一つ頼みがあるんだけどさ、アクアの勉強見てやってくれないかな？」

そんな中、カズマがアクアを連れてやって来、クリスにアクアの勉強を見てくれと頼んだ。

フェルト「おっ！兄ちゃんの友達のお兄ちゃんだな!!」

カズマ「兄ちゃんの友達のお兄ちゃんって……ツフ、カズマで良いよ。」

カズマを見てフェルトが声を掛けると、カズマはフェルトに対して少しカツコつけた風に答えた。

カズマ「それにしても珍しい組み合わせだな。」

クリス「ああ、それはね……。」

フェルト「この姉ちゃんが盗賊って聞いてよ、私も似たよう事してたもんで、話が合うんだよ。」

カズマがクリスとフェルトが一緒にいる事に聞くと、それにクリスの代わりにフェルトが答えた。

クリス「ちなみにこのカズマ君は冒険者なんだけど、私がスキルを伝授してるから、意外と盗賊の才能もあるんだよ？」

フェルト「へえ、スゲエじゃん！今まで何盗って来たんだ？」

カズマ「クリスのパンツ。」

クリス「今それ言わなくても良くない!？」

クリスの話を聞いてフェルトがカズマに質問すると、その質問に答えたカズマに立ち上がりながらツツコむクリスだった。

アクア「……………ねえ、私の勉強を見てくれる話は？」

そんな会話を聞いてもつまらなさそうにしていたアクアはカズマに聞くが、カズマは何も答えなかった。

一方、零士達は、尚文達と一緒に、勉強をしていた。

フラン「座学……………嫌だ。戦いたい。」

師匠「ダメだ！流石に、落第する訳には行かないからな！」

フラン「ぶくく。」

尚文「アンタも大変だな。」

零士「尚文。そっちはどうだ？」

尚文「……………別に。大したことはない。」

リムル「なんか、零士に対する当たりが強くないか？」

レイト「確かに……………」

フランと師匠が勉強をしているのを見て、尚文は苦笑したが、零士が話しかけた途端、笑みを消して、警戒する感じで零士に対応する。それを見て、リムルとレイトがそう話す。

零士「……………なあ、俺、なんかやったか？もしそうだとしたら、謝る。」

尚文「……………お前はいまいち信用出来ない。それだけだ。」

零士「あははは……………手厳しいな。」

ラフタリア「尚文様……………」

尚文は、零士を信用していなかった。

その訳としては……………。

尚文（どうせ、俺の事を裏切るに決まってる。）

尚文は、前の世界でのビッチことマインに冤罪を着せられた事で、他者をそう簡単には信頼できないでいた。

そんな中、零士は尚文に話しかける。

零士「……………もしかして、前の世界での冤罪が原因か？」

尚文「っ!？」

零士「ラフタリアから聞いた。濡れ衣を着せられたんだってな。」

尚文「そうなのかな？」

ラフタリア「すいません、つい……………」

零士「俺は、お前が悪い奴だっと思って思えない。だって、師匠達と勉強に付き合ってくれるからな。」

尚文「……………」

尚文は、零士の言葉を聞いて、零士が前の世界に居た槍の勇者の北村元康、剣の勇者の天樹鍊、弓の勇者の川澄樹、元康の仲間のビッチとは違うと感じていた。

そんな中、リムルとレイトも話しかける。

リムル「まあ、ここは色んな世界が混じり合った世界だから、すぐに信用できないのも、無理はないさ。」

レイト「でも、少しでも俺たちの事を信じて欲しい。」

尚文「……………言っておくが、完全に信じた訳じゃないからな。」

リムルとレイトの言葉に、尚文はそっぽを向きながらそう言う。

それを見て、零士達は心の中で、『素直じゃない』と思いつつも、追求はしなかった。

それが、尚文との適切な距離感だと分かったからだ。

それからしばらくして、テスト当日となった。

ロズワール「それじゃ、そろそろテストを始めようか？ 今回の問題は、パンドラズ・アクター先生の力作だよ。」

ロズワールがパンドラズ・アクターが作ったテスト問題が書かれたテスト用紙を全員に配り始めた。

ロズワール「そうそう、不正行為は見つかり次第0点だから、やらないようにねえ。」

ターニャ（今更ペーパーテストとは、真面目に授業を受けている事の確認か？ まったく侮られたものだ。 ……アインズも同じように考えているに違いない。）

アインズ（ターニャがこつち見てるよ、あの目つき……………うう、過大評価が辛い。）

テスト用紙を配りながら話すロズワールの話を聞きながら、ター

ニヤはアインズを見ながらそう考えていたのだが、アインズはそのターニヤの視線に冷や汗を掻くような事を考えていた。? ……実際冷や汗は掻けてないが。

ノーチラス「人の回答、ステイール禁止な。」

カズマ「ドキイ!!」

スバル「今後ろでドキイ! って音がしなかったか?」

カズマ「ききききききき、聞こえねえよ?」

そんな中、ノーチラスの言葉を聞いてカズマがその通りドキイってなると、それが聞こえたスバルの質問にカズマは少し慌てながら答えた。

すると、めぐみんが口を開く。

めぐみん「カズマはそんな事しませんよ。紅魔族の私程ではありませんが、カズマの知能はかなり高いです。普通にテスト受けたら、このクラスでもきつと上位の成績を収める事でしょう。」

ターニヤ「ほお、実は出来る男なのか?」

ダイジ「たまに聞く、やれば出来るタイプってどこか?」

カズマ「あ……いや、それほどでも。」

そんな話に対してめぐみんが話すと、その話を聞いたターニヤとダイジがカズマに聞き、めぐみんの話を聞いて少し顔を赤らめるカズマは少し照れながら答えた。

ターニヤ「……貴様の事を侮っていたようだ、すまなかった。」

イーデイス「ごめんなさいね。」

そんなカズマに対してターニヤとイーデイスは謝罪した。

そんな中、カズマは。

カズマ(……………ステイールしようと思ったことは、胸にしまっておこう。)

スバル「今後ろから、ズキズキって、良心が痛む音がしたか?」

カズマ「きききききききききき! 聞こえねえよ!?!」

そう考えており、それに薄っすら気付いたスバルが言った事に、少し慌てながら答えるカズマだった。? そうこうしている内に、ロズワールは二組全員にテスト用紙を配り終わった。

ロズワール「でえくは、テスト開始だあくよ!!」

皆がテスト開始を待っていた次の瞬間、ロズワールの掛け声とともにテストが始まり、皆はテストを表返してテスト問題を解き始めた。

アインズ「(この一週間、頑張って小学校の範囲から勉強したが……………)まったく分かん。」

そんな中、一番落第を恐れているアインズはテストの問題を見るやいなや、誰にも聞こえない声でそう呟いた。

アインズ「(パンドラズ・アクター、難しい問題作り過ぎだろ!? まあ、俺も出題側なら難しい問題作っちゃうけどさ…………仕方ない、ここは多少のズルを使っても、結果を出さなきゃな。不本意だけど、第十位階魔法「タイム・ストップ」を使わせてもらう。こっそりと……………)……………タイム・ストップ。」

そう考えたアインズは、前で本を読んでいるロズワールの様子を見た後、自身が持つ魔法、「タイム・ストップ」を展開して、周囲の時間を止めた。

アインズ「…………さて、皆の回答を……………」

そうして時間が止まったのを確認したアインズは、隣にいるヴィーシヤの回答を覗き見しようとした。

だが……………」

アクア「え? どうしたの!? 皆固まっちゃって!?!」

アインズ「え!?!」

前の方から聞こえるはずの無い声が聞こえてみると、そこには止まっている事に驚くアクアが動いており、そんなアクアを見て驚くアインズはゆっくり覗くのを止めた。

アクア「ツンツン、おい? よっ!!」

アインズ(そうか! アクアは神の領域の者だったな! 止まった時の中でも動けるのか?)

アクア「ラッキーね! ホラカズマ、答えを見せなさいよ!」

アクアが様子を知る為についたり、ロズワールが座っている椅子を退かし足りるのを見てアインズは考える中、今の状況をラッキーだと思ったアクアはカズマの席に行き、カズマの鼻に鉛筆を挿した後

に退かし、カズマの回答を丸写しし始めた。

それを見ていたアインズは。

アインズ（……………客観的に見るとこれは、人として駄目だな。あつちが女神でこっちはアンデッドだけど……………チート行為をしようとした自分を恥じよう。でも、これどうしたら良いのかな？ 時間止めたの俺だけど……………）

そんなアクアを見てアインズは、不正行為をしようとした自分を恥じ、その後この状況をどうすれば良いか困っていた。

すると。

ターニヤ「この状況は貴様が作り出したのか？」

アクア「違うわよ、私にこんな能力ないもの。」

ターニヤ「そうか、やはり貴様は存在Xではなさそうだ。」

アクア「前からそう言ってるじゃない。」

解答题紙を完全にカンニングしているアクアに対して何処からか聞こえた声に対して、アクアは答えながらカンニングを続けていた。

ターニヤ「それはそうと貴様、一体何をしている？」

アクア「え？」

? アインズ（え?!）

その声の主はターニヤで、そのターニヤに対してアクアとアインズはそれぞれ別の意味で驚いていた。

ターニヤ「堂々と違反行為を働くとは中々良い度胸では無いか？」

アクア「え!? ち、違うの……………違うのよ私は……………!」

ターニヤ「問答無用!!」

アインズ（何でターニヤも動けるのおお?! いや待て、確かターニヤは神を名乗る存在Xに、異世界転生されたとか言ってたな。神と会話できるレベルなんだから、タイム・ストップが効かないと言う事は無い話ではない……………のか?)

そんなターニヤがアクアに対して指を指したのを見て、再び驚くアインズだったがすぐさま冷静に考え、ターニヤに対して口笛を吹いて誤魔化しているアクアを見ていた。

すると、更なる展開になっていく。

スバル「おいおい、ターニヤもアクアもテスト中だぜ？ 静かにしろよ静かに……つつか、他の連中もちよつと集中し過ぎじゃね？」

アインズ（っへあ!?!）

アクアとターニヤが喋っているのを聞こえたのか、こちらも動いているスバルが声を掛けた後、いつの間にか静かになっている事に驚いてる中、アインズはスバルが動いているのを見て、心中で変な声を出す見たいに驚いた。

アインズが驚く中、スバルも驚いていた。

スバル「あれ!?!息してない!?!おいおいおい!!これどうなってるだよ!?!」

アインズ（まさかスバルも動けるの!?!）

そんなスバルがこの状況に困惑している中、アインズはスバルまで動ける事に困惑していたのだが、これで終わりでは無かった。

零士「おい、どうなってんだ？何で時間が止まってんの？」

スバル「え!?!零士も動けるの？」

アインズ（零士もかあ!?!いや、確か、零士はワンダーワールドという、違う世界で一年過ごしたと言っていたな！それなら、タイム・ストップが効かないのも頷ける………のか？）

零士が自分の椅子から動かずにそう言う中、アインズは、零士から聞いていた話を元に、推測していた。

零士は、ワンダーワールドの守り人になった事がある為、時間停止は効かなかった。

さらに。

リムル「おいおい、どうなってんだよ!?!」

レイト「時間が止まってる………!?!」

ディアブロ「おや、どうなっているのでしょうか？」

ミリム「面白そうなのだ！」

ヴェルドラ「これは………我が時間停止の能力を会得したのか!?!」

レイト「絶対違うだろ。」

アインズ（リムルやレイト達もかあああ！いや、リムル、レイト、ミ

リムの三人は魔王で、ディアブロは上位の悪魔で、ヴェルドラは暴風竜だったな！効かないのも……………待てよ？という事は!?)

アインズは、リムル、レイト、ミリム、ヴェルドラ、ディアブロの五人が動いている事に納得しようとしていた。

そんな中、ある可能性に思い至り、とある人物の方を向くと。

アーク「おお!?時が止まったぞ?!」

アインズ（ですよねええええええ!!こんなに動ける人がいて、君が動けない訳無いもんねええええええ!!）

アークも普通に動いており、それにはアインズは心の中で絶叫した。

もはや、理解できるレベルを超えてしまったからだ。

アインズ（つて言うか、俺の世界では使える者さえ殆ど居ない、第十階魔法だぞ!?それが効かない相手がこんなに居るなんて!?この世界本当怖ああ!バレル前に魔法解いちやお……………）

アインズは、タイム・ストップが効かない人が多すぎるこの世界に恐怖して、魔法を解除する。

『っ!』

魔法が解除されたことに気づいたスバル、ターニヤ、零士、リムル、レイト、ディアブロ、ミリム、ヴェルドラ、アークは、すぐに自分の座席に戻った。

だが、アークは遅れた。

アーク「え、何?皆、どうしたの?」

アークが呆然と立っていると。

ロズワール「何をやっているのかあくな?」

アーク「……………へ?」

カズマ「何か息しづらいと思ったら……………鉛筆う!」

ユウキ「カズマの鼻に鉛筆が刺さってるよ!」

アークはロズワールに声を掛けられて驚く中、カズマは鼻に詰まっていた鉛筆に驚き、ユウキも驚いていた。

そんな中、ロズワールは空気椅子の状態から立つ。

ロズワール「アーク君……………立ってよおくか? 廊下。」

アクア「何でよおおおおおおおおお!!」

その後、ロズワールはアクアに対して廊下に立つように指示し、それにアクアは涙目で叫んだ。

それを見ていたアインズは。

アインズ「……………すまない、アクア。」

そんなアクアに対して小声で謝罪するアインズ。？　そうこうしている内に時間が進み、テスト終了も近づいていた。

アインズ（とりあえず分かる所は埋めたけど…………。）

アインズはその後、自力でテストを行なった。

そんな中、ある事に気づく。

？　アインズ「ん？ん……………？んんんん!!」

ロズワール「アインズ君もうるさいよお。」

そう考えながらテストを見直したアインズはある事に気づき、それに驚いたアインズに注意するロズワールだった。

そんな事がありながらも、テストは終わった。

しばらくして、返却日になった。

ロズワール「テストを返すよお。」

ロズワールが、皆のテストを返却する。

アインズは、呟いた。

アインズ「（パンドラス・アクターの性格からもしやと思ったけど、まさか……………）……………本当にこんな解答欄だったとはな。」

そう。

アインズは気づいたのだ。

解答欄がパンドラス・アクターの顔になるように仕組まれていた解答用紙だったのだ。

そのお陰もあって、アインズは百点を取っていた。

アスナ「ミト……………これ……………」

ミト「満点だと、パンドラス・アクター先生の顔になるのね……………」

アスナとミトは、アインズと同じく100点だったが、仕組まれていた解答用紙には、苦笑を浮かべていた。

デミウルゴス「このようなテストでアインズ様を試すなど、不敬の極みでしたね。」

アインズ（結果オーライだったんだけどね。）

ヴィーシャ「やっぱりアインズさんは凄いですね。」

リーファ「確かに、凄いです。」

小雪「本当ですね。」

デミウルゴス「当然です！全知全能の趣向なる恩方ですよ!!」

アインズ（本当に、結果オーライだったんだけどね……………。）

そんな中、デミウルゴスが言った事にアインズは心中で呟き、デミウルゴスの話を聞いたヴィーシャとリーファと小雪が呟いたのを聞いたデミウルゴスは立ち上がりながら言い放ち、それを聞いて再び思うアインズだった。

ちなみに、アクアは例外なく0点で、フランは師匠や零士達のサポートもあって、ギリギリ落第は免れた。

余談だが。

リア「う〜〜ん？」

エーリカ「どうしたのよ、リア？」

シエロ「分からない所でもあったの？」

リア「いや、そうじゃないんだ。なんか、時が止まったような気がして……………」

「ん？」

アインズ「っ!？」

リアは、時の剣士にして、仮面ライダーデュランダルなので、タイム・ストップが効かなかった。

それを聞いていたアインズは、再び驚愕するのだった。

第5話 勤勉!ばれんたいんでー

???「愛……それは何より尊く美しく、そして勤勉……でなくてはなりません。」

その日、学園前にはある男が立っており、学園を見ながら何かを話していた。

ペテルギウス「愛する人に気持ちを伝える日、それが…バレンタインデー……デスッ!!」

そう言う男は、スバル達が居た世界ではある意味スバルの宿敵のような存在であるペテルギウス・ロマネコンティは、歯を大きく出した。どうやら今日は、バレンタインデーらしい。

一方、2組では。

エミリア「バレンタインデー?」

夏美「そ。私たちの世界では、この時期の風習なんだ。」

めぐみん「ああ、好きな人にチョコレートを渡すと言う、カズマの居た世界にもある風習ですよね?」

夏美「まあそうだね。」

エミリア「ふうん……………」

その頃2組の教室では、エミリアに夏美がバレンタインデーの事を話し、それを聞いていためぐみんの質問に夏美は頷き、エミリアは興味ありそうに聞いていた。

すると、ヴィーシャが口を開く。

ヴィーシャ「チョコか……………。私はチョコが大好きなので、人に渡すなんてちよつと勿体ない気がしますね。」

エミリア「めぐみんと夏美は誰に、チョコレートを渡すの?」

その話を同じように聞いていたヴィーシャの話聞いた後、めぐみんと夏美に誰に渡すかと聞くエミリア。

夏美「私は、サブロー先輩かな。」

めぐみん「私もカズマですかね?」

ヴィーシャ「そ、即答ですね?」

めぐみん「カズマはバレンタインと無縁の人生だったららしいです!!

母親からしか貰った事無いと、嘆いてましたし。」

夏美「私は、日頃お世話になってるから、お礼でね。」

夏美とめぐみんの答えを聞いたヴィーシャはそう言っただけで、夏美とめぐみんはそう言う。

ヴィーシャ「へえ、ちなみにエミリアさんは誰かいらっしゃるんですか？」

エミリア「うん……パックかな？」

パック「わーい！じゃあ僕もリアに渡すね。」

エミリア「ありがとうパック。」

パック「ウフフフフフ。」

その答えを聞いた後にヴィーシャはエミリアに聞くと、エミリアの返答を聞いたパックがエミリアの髪から出て来ながら言い、それを聞いたエミリアは礼を言った。

夏美「猫がチョコを食べちゃダメなんじゃ……。」

ヴィーシャ「そう言う物じゃ無いと思うんですが……あつ!!」

エミリアが礼を言った後、嬉しそうに宙を浮かぶパックを見て、夏美とヴィーシャは呟く中、ターニヤが近づいて来るのに気づいた。

ヴィーシャ「少佐!!」

ターニヤ「おお、皆して集まってどうしたのだ？」

夏美「今、皆でバレンタインデーの話をしてたの。」

ターニヤ「バレンタインデー？ああ……あの宗教上の伝説を資本主義が乗っ取った、市場の勝利の物語だな？」

パック「凄い表現してくるね。」

ヴィーシャに呼び止められたターニヤが聞くと、それに夏美が答えると、その答えを聞いたターニヤが言った事に小さくパックがツッコんだ。

ヴィーシャ「少佐は誰かにチョコレートを渡しになられるんですか？」

ターニヤ「個人的にはまったく気乗りがしないのだが……税制上の経費になるなら、交際費として支出しても良いだろう。所謂、義理チョコと言う奴だ。」

エミリア「義理……チョコ？」

ヴィーシャの質問にターニヤは顎に手を添えながら答え、それにエミリアは首を傾げた。

ターニヤ「ああ、友人や職場の関係者などに、これからもよろしくと渡す類のものだよ。」

ヴィーシャ「チョコを沢山配るんですか……。」

ターニヤ「安心しろ、安く小さな物で良い。ほんの心づけだ。」

ヴィーシャ「ああ……良かったです。」

エミリアに答えたターニヤの話を聞いて少し落ち込むヴィーシャだったが、そんなヴィーシャに言ったターニヤの話を聞いてホッとするヴィーシャ。

それを聞いたエミリアは。

エミリア「じゃあスバルにも、その義理チョコを渡してあげなくちゃ。」

パック「それは良い考えだねリア。」

めぐみん「……スバルも大変ですね。」

夏美「そうね……。」

ターニヤ「そうだな……。」

『ん？』

ターニヤの話を聞いたエミリアが言った事にパックが頷き、そんな会話を聞いためぐみんと夏美とターニヤが呟くと、それに首を傾げるエミリアとヴィーシャだった。

一方、食堂の調理室では、アスナ、ミト、ユナ、アリス、イーディス、リナ、朱菜、火煉、アリアンが集まっていた。

朱菜「………と言うわけで、これから皆でチョコを作りますよー！」

リナ「ええ。」

アスナ「ミトも頑張ろう！」

ミト「ええ。」

アリス「上手く行くでしょうか……。」

イーディス「大丈夫よ。想いが籠ってれば。」

どうやら、チョコを皆で作るようだ。

そんな中、火煉はエギルに話しかける。

火煉「エギルさん、調理場を貸してくれて、ありがとうございます。」
エギル「何、これからチョコを作るんだろう？協力は惜しまないぜ。」

アリアン「それにしても、家庭科室でもつくれば良かったじゃない。」

ユナ「家庭科室は、アルベドさんと紫苑さんが使っているみたいなの。」

火煉とエギルがそう話す中、アリアンはそう呟くが、ユナがそう言う。

「どうやら、家庭科室では、アルベドと紫苑がチョコを作っているようだ。」

朱菜やアスナ、エギルなどの指導の下、チョコ作りを開始する。

その調理場の近くの廊下では。

零士「皆、チョコ作りに励んでるよな。」

リムル「だな。」

レイト「まあ、この時期ではこんな風になるしな。」

零士、リムル、レイトがそう話しながら歩いていた。

一方、家庭科室では。

アルベド「バレンタインデー！愚かな人間共のイベントの中で唯一、私が評価する日がやって来ましたわ!!」

紫苑「ええ！リムル様に想いを伝えるこの日を待ち侘びていました！」

アルベドと紫苑は、気合いが入っていた。

机にはチョコを作る為の材料などが揃っていた。

アルベド「この甘き漆黒に……愛！愛をこめて!!」

ペテルギウス「その通りですう！あなたの愛を！愛を愛を愛をお！

チョコレートに込めるのですう!!」

紫苑「はい！ペテルギウス先生!!」

そんなアルベドと紫苑に対して、いつの間にか学園に入っていたペ

テルギウスがテンション高めに言った事に対して、何の疑いも無く頷いた紫苑。

ペテルギウス「良い返事です……私が勤勉なる愛の信徒!! ペテルギウス・ロマネコンティ……デスッ!!」

そんな2人に対して、ペテルギウスは少しだけ為を入れながら名前を言った後、何事も無かったように2人に近付いた。

ペテルギウス「さて、チョコレートと言っても種類は無数なのです。あなた達……一体どんなチョコをご希望なのですか？」

アルベド「そうですね、やはりアインズ様は全ての死者を統べるお方。闇に相応しい、漆黒のビターチョコが良いですわ。」

紫苑「私は、リムル様に相応しい感じにしてみせます。」

そんなペテルギウスの質問に対し、アルベドと紫苑は顔を少し赤らめながら答えた。

ペテルギウス「甘さ……ではなく大人の苦みを出すのですね？」

アルベド「愛をふんだんに塗したチョコレート!そして隠し味は私の……愛!!」

紫苑「なるほど!それは参考になります!」

それに呟いたペテルギウスに対して今度は、ドヤ顔気味に答えるアルベドで、紫苑は感心していた。

ペテルギウス「素晴らしい!素晴らしいのですう!このような勤勉な方が、よもやここに居わすとはあ!!」

アルベド「アインズ様を愛する事に、怠惰でいられるわけがないですわ!!」

紫苑「私も、リムル様を愛する事に、怠惰でいられません!」

ペテルギウス「まさにまさにまさにまさにい!あなた達こそ勤勉な、愛の信徒おおお……」

アルベド「そう!私はアインズ様の愛の奴隷……!」

紫苑「私はリムル様の忠実な僕……!」

その言葉を聞いて拍手したペテルギウスは、続けて言ったアルベドと紫苑の言葉に頭を抱えながら顔を隠し、それと同時にアルベドと紫

苑が言ったその直後……。

『アスッ!!』

ほぼ同じタイミングで、同じような顔を露わにした。

一方、それを見ていたカズマは。

カズマ（その時、カズマは、決してこの人たちに近づいてはいけな
いと………思ったのだった。）

そう思っていた。

一方、保健室では、ダクネス、レム、シャルティア、プルル、モア、
リズベットが居て、ダクネスが口を開く。

ダクネス「皆は誰にチョコレートを渡すのだ？」

シャルティア「当然！アインズ様でありんす!!」

レム「レムはスバル君です!!」

プルル「私は………ケロロ君達とか、ガルル隊長達にも渡すか
な。」

モア「モアは、おじさまに渡そうと思っっています。てゆーか、愛妻
菓子？」

リズベット「私は、キリトに渡すかな。」

ダクネスの質問に、シャルティア達はそう答える。
すると、プルルがダクネスに聞く。

プルル「ダクネスさんは、カズマさんには渡さないんですか？」

ダクネス「カ、カズマにか!？」

シャルティア「違うのでありんすか？」

ダクネス「カズマは……ただの仲間であって……。」

リズベット「そう？そうは見えないけど？」

プルルの質問にダクネスは狼狽え、シャルティアの質問に照れなが
ら言うと、リズベットはニヤニヤ顔で言う。

ダクネス「………。」

ダクネスは、リズベットのニヤニヤ顔に顔を赤くして俯く。

一方、尚文と師匠は。

師匠「そういえば、今日はバレンタインだが、ラフタリアちゃんや
フィーロちゃんから、チョコを貰うのか？」

尚文「何でそうなる。というより、アンタもフランからチョコを貰えるんじゃないのか？」

師匠「いやあ……………俺、剣だからさ。貰っても意味ないんだよな。」

尚文「ああ……………。」

尚文と師匠はそう話していた。

師匠は、剣である為、飲食が不能だからだ。

すると、師匠は尚文に話す。

師匠「なあ、これから一緒にチョコを作らないか？」

尚文「俺が？」

師匠「俺たちがチョコを渡すのもありかと思うんだが、どうだ？」

尚文「……………それもありかもしれないな。良いだろう。というより、料理は出来るのか？」

師匠「料理は出来るんだよ。」

尚文と師匠は、そんな風に話していた。

一方、ヴァイス、ノイマン、グランツ、ケーニツヒは。

ヴァイス「チョコが……………欲しい!!」

廊下では、気合が入ったようにヴァイスが言った。

ヴァイス「この世界のチョコは、何と言えば良いのか……………本当に美味しいのだ!前の世界で食べていたチョコの味を思い出せない程に!?!」

ケーニツヒ「ヴァイス大尉…………。」

ヴァイス「そして、今日は年に一度、女性からチョコレートが支給される日だと言うではないか!?!」

ケーニツヒ「ヴァイス大尉…………。」

ヴァイス「こんな幸せな日があつて良いのだろうかあ!!」

ケーニツヒ「ヴァイス大尉い!!」

ヴァイス「何だ？」

隣で呼びかけるケーニツヒの言葉が聞こえない程にヴァイスは、勘違いしているとはいえ喜んでおり、それに思わず笑みを浮かべるヴァイスだったが、ケーニツヒの呼びかけによく応じた。

ケーニツヒは、口を開く。

ケーニツヒ「今日はそう言う日で無いです。」

ヴァイス「ん？」

グランツ「今日は女性が、好意を持つてる相手にチョコレートを贈ると言う日です。」

ヴァイス「ご厚意でチョコレートを貰えるわけだな！最高じゃないか!!」

ケーニツヒの言葉に首を傾げたヴァイスに対して、グランツがケーニツヒに合わせるように話したが、ヴァイスの耳には別の意味に聞こえていたらしい。

それを聞いたグランツは呆れる。

グランツ「あ、駄目ですね……。」

ケーニツヒ「分かってないな。」

ノイマン「だろ？」

ケーニツヒ「だろ？じゃないぞノイマン!?お前、ちよつと、この脳内お花畑に説明してやれ!!」

ノイマン「任せとけ!!」

そんなヴァイスを見てグランツとケーニツヒが呆れる中、ノイマンはケーニツヒにツッコまれた後、ヴァイスに説明した……かに見えたが。

ノイマン「ヴァイス大尉!!」

ノイマン「ん？」

ノイマン「……そうです！大尉のおっしゃる通り、今日は女性にチョコレートを要求して良い日です!!」

ケーニツヒ「……っ!?!」

ノイマンの間違った説明を聞いて、近くで聞いていたケーニツヒは無言で驚いた。

ノイマン「ただ、ちゃんとその時には、礼を尽くてはなりません!!」

ヴァイス「礼を尽くす。当然の事だな。」

ノイマン「ん？」

ノイマンの話を聞いてヴァイスが考えていると、ノイマンは近くで

ケロロが歩いて来るのに気づいた。

ノイマン「よお、ケロロ！」

ケロロ「ゲロ？ノイマン殿でありますか。」

ノイマン「実はかくかくしかじかで、相手からチョコを恵んで欲しい時、お前のいた世界ではどう言ってたんだ？」

ケロロ「そうでありますな……………」

ノイマンの質問にケロロは考える素振りを見せる。

すると、何か思いついたのか、少し悪い笑みを一瞬浮かべて、行動する。

ケロロ「ギブミーイイイイ！チョコおおおおお!!……………でありますな。」

ケロロは頭を下げながら両手を前に出しながらそう叫ぶ。

それを聞いたヴァイスは、首を傾げる。

ヴァイス「ギブミー……………チョコお……………」

ケロロ「そうであります！両手を差し出し、丁寧に頭を下げ、何度も言えばそれはもう、チョコの一つや二つ、貰い放題でありますよ！」

そう叫んだのを見たヴァイスに対し、さっきのを見てケロロの嘘にしか見えなかったケーニツヒの目線を気にする事無く、ケロロは本当の事のように説明した。

ヴァイス「ケロロ軍曹！感謝するぞ!!」

ケロロ「礼には及ばないであります。頑張るであります！」

その話を信じてしまったヴァイスが礼を言った後、ケロロはそう言いながらこの場を去り……………。

ケロロ「ゲロゲロゲロリンチョコ……………!!」

去りながらケロロは、悪びれた感じのた笑みを浮かべるのだった。それを見ていたグランツ達は。

グランツ「……………どう考えても嘘ですよ。」

ノイマン「だろ?」

ケーニツヒ「だろ?じゃねえぞ?お前、ヴァイス大尉が本気になつてるじゃねえか?」

そんなケロロを見てグランツが眩き、その眩きに頷いたノイマンに
対してケーニツヒが、笑みを浮かべながら涎を少し垂らすヴァイスを
見る。

すると。

カリン「もうすぐバレンタインか……………カイトにもチョコをあ
げないとね。」

リーファ「じゃあ、私たちがチョコを作りませんか？」

シノン「賛成。」

エレン「私も手伝うよ！」

チヨメ「ボクもです！」

そんな風に話しながら、カリン達がやってくる。

それを見たケーニツヒは。

ケーニツヒ「ああ！向こうからカリンさん達が歩いて来たぞお？」

そんな風に、ヴァイスに聞こえる風と言う。

すると、ヴァイスが目の前に立ちはだかり、カリン達は立ち止まる。

ヴァイスは、背中から炎のようなオーラを出していた。

カリン達「ん？」

ヴァイス「ギブミーイイイイ！チョコおおおおお!!」

シノン「え？」

ヴァイスは、ケロロに教わったことを実行して、シノンがそう言う。

ヴァイス「ギブミーイイイイイ……………チョコおおおおお

……………!!」

ヴァイスは、目を光らせながらカリン達に近寄る。

それを見て、カリン達は。

チヨメ「ちよっ!?なんか近寄って来ますよ!」

リーファ「ヴァイスさん!?どうしたんですか!」

シノン「なんか……………危ないわよ!」

そんな風に反応する。

そんな中、ヴァイスは再び叫ぶ。

ヴァイス「ギブミーイイイ……………チョコおおおおお

!!」

エレン「アイシクルランス水氷大魔槍!!」

『ブレーメンのロックバンド! イエーイ!』

『錫音読撃! イエーイ!』

カリン「ガンズ・アンド・ミュージック!」

ヴァイス「あゝ ああああああああああ!!!」

ヴァイスが迫る中、エレンの魔法とカリンの必殺技が命中する。

シノン「……………さっさと離れましょう。」

リーファ「ですね。」

チヨメ「同感です。」

カリン「ええ。」

エレン「そうですね。」

シノン達は、そそくさとその場を後にする。

ボロボロのヴァイスは、呻く。

ヴァイス「何故……………誰もチヨコをくれないのだ……………」

ノイマン「……………だろ?」

ケーニツヒ「だろ? じゃねえぞ!!」

グランツ「流石にヴァイス大尉が哀れ過ぎて……………」

2人の攻撃を受けてボロボロ状態で倒れてしまったヴァイスを見て、ノイマンはそう言い、そんなノイマンにケーニツヒがツツコみ、グランツはヴァイスを見て涙を堪えた。

ターニヤ「ん? ヴァイス大尉、どうしたのだ? ボロボロでは無い
か?」

そこに、ターニヤ、スバル、アークがやってくる。

ターニヤがヴァイスに話しかけると。

ヴァイス「……………少佐あ。」

ターニヤ「何だ? 何か……………あつたのか?」

ターニヤを見てヴァイスが話しかけ、顔色を悪くしたヴァイスを見て少し驚いたターニヤが聞くと、ヴァイスは再び両手を前に出すと。

ヴァイス「……………ギブ。」

ターニヤ「は?」

ヴァイス「ギブミー……………チヨコ……………」

ヴァイスは頭を下げ、ターニヤにチョコをお願いするのだった。
アーク「……………これは……………」

ターニヤ「……………ヴァイス大尉。」

ヴァイス「はい……………」

ターニヤ「貴様、担がれているぞ?」

スバル「はあ……………」

そんなヴァイスを見て、アークが呆然とする中、ターニヤがヴァイスに対して言ったのを聞いたスバルは呆れたのか、思わずため息を付くのだった。

一方、家庭科室では、アルベドと紫苑のチョコ作りは、佳境に入っていた。

アルベド「ふう〜。」

紫苑「これで、完成です!」

ペテルギウス「お見事です……………実に実に素晴らしい!! これぞ、まさに愛の結晶……………」

『デスッ!!』

その頃、ようやくチョコが出来上がり、ホツと息をついたアルベドを見てペテルギウスが言った後、三人は再び同じような顔を浮かべた。

すると。

セバス「何をやっている……………のですか?」

アルベド「ん?」

そんな二人の後ろに、いつの間にかセバスとリグルドが立っており、そんなセバスを見てペテルギウスは少しだけ首を傾げた。

アルベド「愛するアインズ様の為に、チョコを作っていたのですわ! 勤勉に、そう勤勉に!!」

紫苑「私も、愛するリムル様のために、チョコを作っていたのです!」

セバス「それはとても素晴らしい事です。」

リグルド「ところで、こちらのお方は?」

ペテルギウス「お初にお目にかかるのです。私は勤勉なる愛の信

徒、怠惰担当……ペテルギウス・ロマネコンティ……デスッ!!」

アルベドと紫苑の話を聞いた後、セバスとリグルドはペテルギウスについて聞こうとすると、そのペテルギウス本人は後ろを向いたかと思えば、背中を逸らしながら自己紹介をした。

セバス「不法侵入ですね……。」

リグルド「その様ですね。」

ペテルギウス「……デスッ!!」

そんなペテルギウスを見てセバスもリグルドは言うのと、何故か体育座りをしたペテルギウスを窓の外から放り投げた。

ペテルギウス「デスッ!!」

放り投げられたペテルギウスは、そのまま学園外まで飛んで言った後……。

ペテルギウス「デスッ!!」

見えざる手を使って着地し、何事も無かったように立ち上がった。

ペテルギウス「まあ良いのです、既に私の目的は果たされたのです。

……おや? あちらからも何やら感じるので、愛を、愛の波動を!! 行かねばならぬ……デスッ!!」

そう言つてペテルギウスは、学園を後にしたのだった。

アルベド「ありがとう……愛の信徒。」

紫苑「あなたのことは忘れません。」

アルベドと紫苑はそう言う。

すると、家庭科室にキリトとカルムが入ってくる。

キリト「アルベドさんに紫苑さん。」

カルム「チョコ作りか?」

アルベド「キリトにカルムね? で、どう? このバレンタインチョコレート? アインズ様喜んでくださるかしら?」

紫苑「どうですか!? これなら、リムル様も喜んでくれますよね!」

キリトとカルムに気づいたアルベドと紫苑が、チョコを2人に見せる。

すると、2人は顔を青ざめる。

キリト「……えっ?」

カルム「っ!？」

アルベドのチョコは、材料自体はチョコなのだが、デザインがアイズを現した顔に無数の手が掴んでいる状況が、ハッキリ言っただけ怖く思える程だった。

紫苑のチョコは、もはやチョコと呼べる様なものでは無かった。

アルベド「どうかしら!？愛が、愛が籠っていると思わない!？」

紫苑「リムル様への愛が籠っていますよね!？」

カルム「なんと言うか……………俺たち的には、ネガティブなイメージが強い……………」

キリト「でも、愛は強そう……………」

カルム達「……………デス。」

アルベドと紫苑がそう言う中、2人は紫苑達を傷つけない様に言う。

その後、学園の皆は、それぞれのバレンタインを過ごす。

アクア、めぐみん、ダクネスのチョコを受け取ったカズマは、三人の前ではあまり喜ばなかったが、廊下に出た途端、はしゃいでいて、それをコキユートス、デミウルゴス、ドロロが見ていた。

スバルはスバルで、義理とは言えエミリアからチョコを貰えたのが嬉しくて涙を流しており、その後ろではレムが特大チョコを渡そうとしていた。

ベアトリスは仕方なくなのか、ケーニツヒ、ノイマン、グランツにチョコを渡して、三人は五体倒地で彼女を崇め、パツクとちよむすけは、それを見ていた。

廊下では沢山の友チョコと書かれたチョコを持ったゆんゆんを見て、ヴィーシャとヴァイスは涎を垂らして驚いていた。

だが、全部自分で買ったチョコであり、ゆんゆんが落としたレシートを拾った灯と明は察した。

放送室では、夏美がサブローにチョコを渡しており、それを陰から見ていたギロロが突撃しようとしていたが、クルルにカレールーを渡されて、トラウマを再発していた。

図書室では、桃華が冬樹にチョコレートを渡していたが、ヴェルド

ラやミリムも現れて、

1組では、フェルトが少し照れながらラインハルトにチョコを渡しており、その後ろではなぜか、ユリウスがタコ焼きを食べていた。？

近くではクリスの机に大量のチョコが置かれており、そのチョコを見て目を光らせているルプスレギナ・ベータ。

更に、蒼華は蒼影にチョコを渡し、紅丸は朱菜からチョコを受け取っていた。

アクセルハーツの三人も、互いに友チョコを交換し合っていた。

プルルも、ガルル、タルル、トロロ、ゾルルにチョコを渡していた。

3組では、エレンがカバルとギドに、クレハがアランにチョコを渡していた。

他のプレアデスである、ユリとナーベラル、ソリユシャン・イプシロンとシズ・デルタはバレンタインのチョコを売っている店に来ており、ペテルギウスもその店に来ていた。

飼育小屋では、ハムスケは嬉しそうにチョコを頬張っており、そんなハムスケにお茶を出すデスナイトと嵐牙とウルシとポンタ。

恐怖公が居る生活指導部屋には、エントマ・ヴァシリツサ・ゼータが来ており、エントマが渡した虫型のチョコを見て、思わず驚く恐怖公。

別の場所の廊下では、ロスワールにラムがチョコを渡しており、それをルーデルドルフとゼートウーアが見ていた。

職員室では、ターニャから義理チョコを渡されてレルゲンが驚き、それを面白そうに見ているユーリとバニルとパンドラス・アクターとリグルド。

グレニスは、デイランにチョコを渡していた。

尚文と師匠は、自分たちで作ったチョコを、尚文はラフタリアとフィーロに、師匠はフランに渡して、三人は喜ぶ。

一方、アスナはキリトに、ミトはカルムに、ユナはノーチラスに、アリスはユージオに、イーデイスはダイジに、リナは零士に、火煉はレイトに、モアはケロロに、アリアンはアークにチョコケーキを渡して

おり、男性陣は美味しく食べる。

それを見ていたクラインは、血の涙を流しており、エギルが肩に手を置き、タママも嫉妬の炎を燃やしていた。

紫苑と朱菜、シズさんは、リムルにチョコを渡し、アインズに対してアルベドだけでなくシャルティアやアウラにマールがチョコを渡し、渡せたアルベドは、これまで無い程の笑みを浮かべたのだった。

その日の夕方、アインズは受け取ったチョコを見ながら、呟く。

アインズ「(だから……………チョコレート……………)食べられないんだよな……………」

アインズの悲しき呟きが、教室に響いた。

余談だが、キリトはアスナだけではなく、シリカやリズベットからも貰った為、食べるのに苦労したそうだ。

第6話 激突!どっじぼーる

ターニャ「あり得ないぞ!頭が可笑しくなったのか!」

アインズ「貴様の方こそ正気を疑うぞ!」

スバル「二人共落ち着けよ!」

何時もは仲が良いはずのターニャとアインズが言い争いをしており、それをスバルは止めようとしていた。

ターニャ「部外者は引っ込んでいてもらおう!これは我々の問題だ!!」

アインズ「貴様とは分かり合えると思ったのだがな。」

ターニャ「それは私の台詞だ!!」

『フンツ!!』

そんなスバルに対してターニャは言った後、アインズが言った事に對して言い返した後に同時に目を逸らした。

カルム「まったくもお、二人ともいい加減にしてくれって。」

カズマ「そうだぞ二人共……。」

そんなアインズとターニャを見てカルムが頭を掻きながら言った後、カズマは叫んだ。

カズマ「から揚げに何を付けるかなんて、どうでも良いじゃねえかあああああ!!」

そう大声を出しながらツツコんだ? どうやらアインズとターニャは、から揚げに何を付けるかで揉めていたらしい。

どうして、こうなったのか。

理由は、数分前に遡る。

ヴィーシャ「この間ラムさんと、門のお肉屋さんに行っただんですが……何とあそこ!から揚げも美味しかったんです!!」

ターニャ「ほお……。」

ヴィーシャの話を聞いて、思わず反応するターニャ。

ヴィーシャは、ラムに話しかける。

ヴィーシャ「ラムさんも絶賛でしたよね!!」ラム「あの味ならロズワール先生にも、満足して頂けそうだわ。」

コキュートス「ソコマデカ?」

ゲルド「そこまでののか?」

ヴィーシャの話にラムも頷いていると、その話を聞いていたコキュートスとゲルドが質問した。

ヴィーシャ「コキュートスさんにゲルドさん!?アレを食べないなんて人生損してますよ!」

コキュートス「ソコマデカ……。」

ゲルド「そこまでののか……。」

ラム「武人として恥を知りなさい。あなたもそんなんだから、そこまで墜ちるのよ?」

コキュートス「ソコマデカ……。」

ゲルド「そこまでののか……。」

レイト「2人とも、ラムの話に反応し過ぎじゃねえの?」

そんなコキュートスとゲルドに対し、ヴィーシャは指を指しながら答えると、少し驚いたコキュートスとゲルドに対してラムが言い、それを聞いて少し落ち込んだコキュートスとゲルドにレイトがツツコんだ。

ターニャ「これは、一度食べて見なくてはならんな……アインズ!放課後貴殿達も一緒に肉屋に行かないか!?あそこから揚げが絶品らしいぞ!」

そんな会話をターニャは聞いた後、アルベド達と話していたアインズを誘いに声を掛けた。

アインズ「ほお、それは興味があるな。(ま、俺食べられないんだけどさ。)……どうだ? アルベド?」

アルベド「至高たる恩方の考えに、異論などあろうはずもござません。」

それを聞いたアインズはそう思った後、アルベドに聞き、それに頭を下げながら答えたアルベドだった。

そして。

スバル「俺が聞いたのが悪かった!悪かったからさあ!」

零士「お前ら、落ち着けよ!」

その後、スバルがから揚げに何を付けるかを聞き、それをきつかけに現在に至るらしい。

ターニヤ「ならば今一度問おうナツキ・スバル、神崎零士。貴様はから揚げに何を付ける？塩コショウか？ケチャップか？」

スバル「……マヨネーズ。」

零士「おろしポン酢。」

ターニヤ「貴様達とも相容れぬようだな。」

零士「え!？」

アインズ「残念だよ、スバル、零士。」

スバル「ええええええええええ!?!どう考えてもマヨネーズ一択だろ!?!」

そんなこんなで、きつかけを作ってしまったスバルが零士と一緒に、アインズとターニヤを止めようとする。

だが、ターニヤの質問に対してそう即答してしまい、それを聞いたアインズとターニヤの反応を見て驚きながら言った。
すると。

レルゲン「実はずっと黙っていたのだが………………。もう授業は始まっているぞ。」

レルゲンはそう言う。

立っていた生徒は、元の座席に戻る。

レルゲンは、ため息を吐きながら言う。

レルゲン「人が多く集まれば、主義主張の違いは大なり小なり起きるものだ。今回の言い争いの原因は、唐揚げに何を付けるかだったか?………………。口に出すと本当にどうでも良いテーマだな。」

ケロロ「言っちゃったでありますな。」

アーク「まあ、確かにな。」

レルゲン「ひとまず、クラス内でアンケートを取ろうではないか。」
レルゲンはそう言うと、ケロロとアークがそう突っ込む。

アンケートを取ると、見事に別れた。

レルゲン「見事に分断したな………………。」

派閥はこうなっていた。

塩コシヨウ派は、ターニヤ、ケーニツヒ、ノイマン、レム、ラム、コキユートス、ダクネス、アリス、ユージオ、イーデイス、ダイジ、シノン、エターナル、リーファ、アーロン、ドロロ、小雪、ゲルド、キリト、アスナ、

ケチャップ派は、アインズ、アルベド、シャルティア、デミウルゴス、めぐみん、ちよむすけ、グランツ、ユウキ、オーズ、アंक、ユナ、ノーチラス、夏美、ギロロ、タママ、

マヨネーズ派は、スバル、エミリア、パツク、ベアトリス、カズマ、アクア、アウラ、マール、ヴァイス、アリアン、ケロロ、モア、リムル、ミリム、ヴェルドラ、ディアブロ、

おろしポン酢派は、零士、リナ、カイト、カリン、レイト、冬樹、桃華、チヨメ、アーク、カルム、ミト、エミルス、バイス、フラン

ちなみに、ユイとカナ、ヴィーシャ、サブロー、クルル、師匠は、どれにも入っていない。

クルル曰く。

クルル「俺的にはどうでも良いんでな。クククツクツクツ。」との事。

その結果を受けて、話を始める。

ダクネス「お前達はスバルと同じだと思っていたが？」

ラム「バルスの思考と被るのは屈辱だわ。」

レム「レムは何時でもスバル君の味方です!!ですがアレだけは……アレだけは……!」

アリス「一体、何があつたのですか？」

レムとラムが塩コシヨウ派な事に以外と思ったダクネスが聞くと、それにラムが答え、その後レムは拳を作りながら答えた。

そんなレムに、アリスはそう聞く。

アインズ「お前達はケチャップ派なのか？」

アルベド「至高たる恩方と好みを同じくするのは、当然であります。」

アインズ「……ん？」

アインズはアルベドの意見を聞いた後、守護者の中で唯一塩コシヨ

ウ派のコキユートスを見ると……。

コキユートス「決シテ……忠誠が低イト言ウ分ケデハ……。」
アインズ（キャラ設定が味の好みに影響を与えているのかな……。）
そう自身に言い聞かせているコキユートスを見てそう思ったアインズ。

リムル「お前達は、マヨネーズなんだな。」

ミリム「うむ！」

ヴェルドラ「我も、マヨネーズは好きだぞ！」

ディアブロ「リムル様と好みを同じにするのは、当然の事かと。」

リムル「ははは……うん？」

リムルは、マヨネーズ派についたミリム達を見ながらそう言うと、ゲルドの方を見る。

ゲルド「いや、忠誠心が低いというわけでは……！」

リムル「アハハハ……。」

コキユートスと同じように、リムルと違う事を気にしていたゲルドを見て、リムルは苦笑する。

ケロロ「アインズ殿と違うでありますか、良いんでありますか？」

アウラ「アインズ様には悪いと思ってるんだけど、こればかりは譲れないと言うか……。」

マーレ「ぼ、僕も……マヨネーズの方が好きと言うか……。」

エミリア「あ、それ分かる！私もスバルに勧められて食べてみたら、すつごく美味しかったもん!!」

『確かに!!』

師匠（エルフ系の人とマヨネーズって、相性良いのかな？）

ケロロがアウラとマーレにそう聞くと、2人はそう答えて、エミリアもそう言う。

それを遠くから見ていた師匠は、そう思う。

グランツ「ケチャップ派なんだな？」

めぐみん「ええ！真紅のソースが紅魔族の私にぴったりじゃないですか!!」

夏美「ちなみにその猫も？」

めぐみん「当然、ケチャップ派です!!」

ちよむすけ「なう。」

グランツがめぐみんにした後、今度は夏美が質問すると、それにもめぐみんが答えたすぐに鳴いて答えるちよむすけだった。

すると、カズマが口を開く。

カズマ「戦力としては、マヨネーズ派が一番かな。」

スバル「よおし！じゃあここはマヨネーズが最高って事で、皆納得してくれねえ……………」

『貴様は黙ってろ!!』

『横暴!?!』

カズマが派閥の数を見て言ったのを聞いたスバルはそう言おうとしたのだが、それを遮ったアインズとターニヤにカルムやキリト、リムル、レイトと一緒にツッコんだ。

ターニヤ「フン、多数決に意味などまるでないな！」

アインズ「ではどうする？力で証明でもして見せるか？」

ミリム「戦うのか!?!なら、私も参加するのだ！」

ヴェルドラ「もちろん、我もな！」

フラン「戦い……………やる！」

リムル「お前ら、落ち着けよ！」

レイト「面倒な事になったな……………」

師匠「ちよっ!?!フランさん、落ち着いてっ！」

ターニヤがそう言うと、アインズはそう返す。

そして、ミリムとヴェルドラとフランが反応して、リムルとレイトも反応する。

すると、レルゲン先生が案を出す。

レルゲン「ならば、誰が一番正しいのか、これで決めてはどうだろうか？」

リーファ「ボールですか？」

アーロン「なんですか、それ？」

レルゲン「力無き正義は無力だ。ドッジボールで勝敗を決めよう

じゃないか。」

ユウキ「ドツジボールか！良いじゃん！燃えてきたよ！」

オーズ「それなら、安全かもね。」

アंक「どうだかな。」

レルゲン先生は、ドツジボールで雌雄を決する事を提案した。

それを聞いたアインズ達は。

アインズ「私は構わないが、大丈夫か？ターニヤ。我がケチャップ

派は精鋭揃いだぞ？」

ターニヤ「その言葉そのまま返そう。塩コショウ派の恐ろしき、目

にももの見せてやる!!」

そんな風に火花を散らす。

それを見ていた他の人たちは。

カズマ「ていうか……………これは無事では済まなそうなんだが

……………。」

スバル「分かる。ミリムにヴェルドラが居るからだろ！すつげえ分

かる！」

レイト「おろしポン酔派、少ないな……………」

カルム「試合になるのかな……………」

ミト「少なくとも、波乱の展開になるのは、間違い無さそうね。」

冬樹「大丈夫かな……………」

桃華「頑張りましょう！冬樹君！」

そんな風に話していた。

それを見ていたレルゲンは口を開く。

レルゲン「では、各員準備の上、グラウンドに集合。」

一同「はい！」

レルゲン「パワーバランスの調整が必要だな……………ん？」

レルゲンがそう言うと、返事をする。

すると、廊下には、尚文、ラフタリア、フィーロの三人がいた。

準備が終わり全員運動場に集まると、既に円状に造られたコートに

内野と外野に分かれ、それぞれの派閥の場所に立った。

レルゲン「魔力などを込める事も出来るこのボールに当たった人は

OUTだ。」

尚文「待ってくれ!？」

レルゲン「ん?」

レルゲンが全員に説明をしていると、何故か塩コシヨウ派の面子に入れられている尚文が異議を申し上げた。

尚文「何故俺達がここに巻き込まれているんだ!？」

レルゲン「パワーバランスの調整だ。」

尚文「調整って……………」

尚文の異議に対して、レルゲン説明したのだが、尚文はそれでも納得できなかった。

ノイマンとケーニツヒが、尚文に話しかける。

ケーニツヒ「良いじゃないか、よろしくな、盾の勇者?」

尚文「俺は、別にやるなんて一言も……………」

ノイマン「頼むよ盾のあんちゃん!塩コシヨウ派、少し不利なんだ。」

尚文「塩コシヨウ派って……………」

そんな尚文に対してケーニツヒとノイマンがそれぞれ言い、尚文は今だ困惑するだけだった。

すると、ターニヤが話しかける。

ターニヤ「塩コシヨウ派として、頼りにしているぞ?」

尚文「何なんだ……………」

フィーロ「ねえねえ!!」

ターニヤにそう言われても、尚文は納得していなかったが、フィーロが話しかける。

フィーロ「やろうよご主人様!楽しそうだよドツジボール!!」

尚文「…………ハア、仕方ないか。」

フィーロ「わぁーい!!」

フィーロがそう言うので、尚文は折れる。

すると、ラフタリアが尚文に話しかける。

ラフタリアは、ケチャップ陣営に居た。

ラフタリア「尚文様、あの……………」

『ん?』

ラフタリア「ごめんなさい! 私は尚文様の剣とやらなくてはいけないのに……。」

尚文「……プフツ! 似合っているぞ、ラフタリア。」

ラフタリア「え?」

尚文「ケチャップを選ぶラフタリアってのが良い。」

ラフタリア「それはどう言う意味ですか!? んうく!!」

そう尚文に対して謝るラフタリアが、ケチャップと書かれたゼツケンをつけているのを見た尚文は笑いだしながら言い、それを聞いてツツコみながら声を唸らせるラフタリアだった。

そして、試合が始まろうとしていた。

ヴィーシャ「さあて始まりました! から揚げに何付けるドツジボル対決!! 実況は私、ヴィクトーリヤ・イヴァーノヴナ・セレブコリヤコーフ! そして解説には、お肉屋さんに来ていただきました!!」

実況席には、何も入らなかったヴィーシャが実況をしており、その隣には、荒くれ者が座っていた。

ちなみに、他に入らなかつたメンツは見学しているが、師匠はフラシと一緒に入っていた。

そして、変身出来る人は変身していた。

ヴィーシャ「この勝負、どう見られますか!」

荒くれ者「感じるぜ、今だかつてない生命の躍動をな……フンツ!!」

シノン「それって、ただそう言いたいだけなんじゃないの?」

エターナル「だろうな。」

ユイ「パパー! ママー! 頑張ってください!」

カナ「パパもママも頑張って!」

キリト「おう!」

アスナ「ユイちゃん! 頑張るからね!」

カルム「応援ありがとうな!」

ミト「やってやるわ!」

ヴィーシャが荒くれ者にそう聞くと、鼻で笑いながら答えて、シノ

ンとエターナルが突っ込む。

ユイとカナは、自分たちの両親に応援をする。
シャルティア「まずは小手調べでありんす！」
シャルティアはそう言っつて、ボールを投げる。

その先には、ダクネスが居たが、何もせずにボールに当たりに行っ
た。

ダクネス「あああ!!」

スバル「……………あれ、ワザと食らいに行つたな。」

カズマ「分かるか？」

イーデイス「何やってんのよ……………。」

カゲロウ「本当に、汚いアリスみたいだな。」

アリス「何か言いましたか？」

ダイジ「いえ！何も！カゲロウ！余計な事を勝手に喋るな！」

ユージオ「アハハハ……………。」

それを見て、スバルとカズマがそう話す中、イーデイスは呆れて、ダ
イジの中のカゲロウがそう言っつて、アリスに怒られる。

それを見て、ユージオは苦笑していた。

ダクネス「こ、これは……………良い!!」

コキユートス「娘……………。」

ゲルド「何をやってているのだ……………。」

レルゲン「ダクネス君アウト！」

ダクネスが喜ぶ中、コキユートスとゲルドがそう呟く中、レルゲン
はそう叫ぶ。

ラム「行くわよ、レム!!」

レム「はい！姉様!!」

レムの返答を聞いたラムがボールを空中に投げると、レムと共に座
り込みながら足を上げたコキユートスの足裏に立つと、そのコキユ
ートスが足で押したのと同時に空中に飛んだ。

ヴィーシャ「こ、これはああああああああああ!!」

アウラ「負けてられないよ！マーレ!!」

マーレ「うん、お姉ちゃん!!」

空中に飛んだレムとラムは、ボールを同タイミングで蹴り、そのボールがマヨネーズ陣営に飛んで行ったのを見てヴィーシャが声を上げる中、アウラの呼びかけにマーレも頷いた。

『ハアアアアア!!』

アリアン「んうううう……ハアアア!!」

アウラとマーレを、先ほどのコキュートスと同じ要領でアリアンが上空に飛ばす。

『行っけえええええええええええええええええええええ!!』

ノイマン「だなあああああああああああああ!!」

ヴィーシャ「なあああああああああああ!!ノイマン選手取れない
いいいい!!」

レムとラムが蹴ったボールを、同じように蹴り返したアウラとマーレのボールにノイマンは取る事が出来ず、それを見てヴィーシャが叫ぶ中、レルゲンのホイッスルが鳴った。

レルゲン「君たち、足を使ったらダメよ。」

『えええええええ!!』

ラム「フン!!」

レルゲンの注意に対してアウラとマーレは声を上げ、ラムは思わず目を逸らした。

ノイマン「少佐殿!!」

ターニヤ「おう。」

カズマ「甘い、スティール!」

ターニヤ「なあ!貴様あ!」

リムル「よくやった!カズマ!」

ターニヤがノイマンから投げ渡されたボールを受け取ろうとした矢先、カズマがスティールを使ってそのボールを奪い取った。

アクア「カズマ良くやったわ!ボール頂戴!!」

そのボールをカズマから横取り気味にアクアが取ると、アクアはケチャップ陣営、特にアインズを見つめた。

アクア「……聞きなさいあなた達、本来アクシズ教は全てを許す教えよ。でも今!私がかから揚げに付けたいのはマヨネーズなのよ!!」

食らえ！ゴツドブロー!!!」

ヴィーシャ「かつて、こんなカツコ悪い必殺技の口上があったでしょうか!?!」

レイト「俺からしたら、アインズを倒す為の言い訳にしか聞こえないのは、気のせいかな?」

アーク「気のせいではないだろうな。」

カルム「どっだけ目の敵にしてるんだよ……………」

ミト「確かに……………」

アークがそう言つて、ボールを投げ、ヴィーシャが叫ぶ中、レイト、アーク、カルム、ミトの4人はそう話す。

ボールがアインズに迫る中、アルベドが間に入る。

アルベド「笑止！ウォールズ・オブ・ジェリコ!!」

グランツ「ぬおおおお!!この技を俺にかける必要ってあります!?!」

アークが投げたれたボールはそのままアインズに向かって行ったその瞬間、アルベドは前に立って「ウォールズ・オブ・ジェリコ」を展開してボールを防ぎ、その際にアルベドにプロレス技をかけられたグランツはツツコんだ。

そのボールは、ちよむすけの方に転がって行って、口に啜える。

ちよむすけ「なう? ハムウ……………ボオオオオオ!!」

アリアン「ねえ!?!あの子、絶対普通の猫じゃないよね!?!」

めぐみん「どう見ても普通の猫ですよ?」

スバル「普通の猫はボールを投げたりしねえよって!?!わああああ!?!間に合わねえええええ!?!」

それを見たアリアンが突っ込む中、めぐみんはそう答え、スバルは突っ込む。

だが、ボールはスバルに迫っていた。

ベアトリス「ふん!」

スバル「アパラチア山脈!」

ベアトリスは魔法を発動して、スバルを浮かせて、ボールを回避させる。

ベアトリス「全く！ぼーつとしてるんじゃないかしら！」
スバル「サンキュー！ベア子！」

ベアトリスが呆れながらそう言うと、スバルは礼を言う。
ボールは、エミリアが持っていた。

エミリア「パック!!」

パック「任せてリアく。」

ボールを手にしたエミリアがパックを呼ぶと、パックはエミリアが持つボールに魔力を注いだ。

めぐみん「その子、絶対普通の猫じゃないですよね!？」

アリアン「どう見ても普通の猫じゃないでしょ!!」

スバル「そもそも猫でもねえよ!!」

そんなパックを見てめぐみんが言った事に対してアリアンとスバルがツッコむ中、パックはボールに魔力を注ぎ終えた。

エミリア「ふう……………ごめんね!!」

リナ「来るわよ!」

エミリアは謝りながらボールを投げて、リナはそう叫ぶ。

おろしポン酢派の方に向かったボールは、レイトの方に向かっていった。

レイト「来たか！なら!」

レイトはそう叫んで、ジュウガバイスタンプを4回倒す。

『アメイジングファイニッシュ!』

レイトは、必殺技を発動して、エミリアのボールをキャッチする。

レイト「ふう……………」

エミリア「嘘っ!？」

パック「やるねえ……………」

レイトはボールをキャッチして、エミリアは驚き、パックはそう呟く。

レイトは、アークにボールを渡す。

レイト「アーク！頼んだぞ!」

アーク「おう！行くぞ！シールドバッシュ強打盾!」

アークは盾を使って、ボールを投げる。

その威力は、凄まじいものとなっていた。

そのボールは、ケチャップ陣営に居るノーチラスの方に向かっていった。

ユナ「ノー君！」

ノーチラス「嘘だろ……………?!」

ユナがそう叫ぶ中、ノーチラスはアークのボールを受け止めようとする。

だが、その威力は凄まじく、ノーチラスは少しずつ後ろに下がる。

ノーチラス「ううう……………!! うおおおおおっ!!」

ノーチラスはそう叫ぶと、何とか受け止め切る。

流石に、アークも手加減していたようだ。

アーク「ノーチラス殿！申し訳ない！」

ノーチラス「だ、大丈夫……………。タママだったな。頼んだぞ。」

タママ「分かったですう！これでも食らいやがれ！タママインパクト!!」

ノーチラスは、タママにボールを渡して、タママはタママインパクトを発動しながら、ボールを飛ばす。

その行く先には、モアが居た。

夏美「モアちゃん！」

ギロロ「敵を心配している場合か！」

ドロロ「しかし、あれは手加減無しでござるよ!」

ケロロ「モア殿くくっ!!」

モア「てゆーか、絶体絶命!」

リムル「させるか！ベルゼレユート暴食之王!!」

手加減なしの一撃を見て、夏美達が慌てる中、リムルはスキルを発動して、タママインパクトだけを取り込み、ボールをキャッチする。

タママ「なっ!」

リムル「全く。ケロロ！任せたぞ！」

ケロロ「分かったであります！」

ミリム「おおい！私ではないのか!」

ケロロ「行くであります。我輩の力を見せてやるであります！食ら

え！談合坂S A！」

リムルは、ケロロにボールを渡す。

ケロロは、そう叫びながら、ボールを放つ。

キリト「談合坂S A……………?」

アスナ「皆！あのボールを、避けないで！」

ターニヤ「どういう事だ!？」

キリトが首を傾げる中、アスナはそう叫び、ターニヤは首を傾げる。すると、ボールは誰にも当たらなかった。

ケロロ「ゲロっ!?どういう事でありますか!?どうして見抜けたのでありますか!？」

アスナ「談合坂S Aって、談合坂サービスエリアの事でしょ?だったら、それくらい見抜けるわよ。」

ターニヤ「ああ……………。」

ギロロ「また外してるではないか……………。」

ケロロが驚く中、アスナはそう言う。

そう。

談合坂サービスエリアに入る際の軌道を表しており、動かなければ命中しない。

ボールは、アリスの手にあった。

イーデイス「やっちゃって!アリス！」

アリス「仕方ありませんね。エンハンス・アーマメント!舞え!花たち!」

アリスは、金木犀の剣の武装完全支配術を発動して、それを使ってボールを投げる。

そのボールは、フランの方に向かう。

師匠「フラン！」

フラン「うん!師匠!」

それを見たフランはすぐに動く。

師匠は、念動を使ってアリスのボールの勢いを殺し、フランは師匠を使って、ボールを受け止める。

アリス「何っ!？」

ユージオ「アリスのボールを受け止めた!?!」
フラン「へへっ。」

師匠「よくやった! エミルス! 頼んだぜ!」

エミルス「俺か。行くぞ、バイス!」

バイス「あいよ!」

師匠は、エミルスにボールを渡し、エミルスはリバイスドライバーに装填されているレックスバイスタンプを2回倒す。

『レックス! スタンプングファイニッシュ!』

「ハアアアア!!」

エミルスとバイスは、ピンクのエネルギーを纏ったパンチで、ボールをマヨネーズのほうに飛ばす。

その先には、ディアブロが居た。

ディアブロ「ほう。良いでしょう。」

ディアブロは、そのボールを難なく受け止めた。

リムル「よくやったディアブロ!」

ディアブロ「ありがとうございます! リムル様アアア!!」

レイト「歓喜してんな……………」

ヴェルドラ「では、我に任せてもらおう! 盾の勇者、岩谷尚文よ!」

尚文「俺か?」

ヴェルドラ「我の一撃を受け止めて見せよ!……………これをやりたかったのだ! 勇者と相対するというのを! 行くぞ! かくめくはくめく波アア!!」

リムルがディアブロを褒め、ディアブロが喜ぶ中、ヴェルドラがボールを持ち、尚文にそう言う。

ヴェルドラは、かめはめ波を放ちつつ、ボールも一緒に投げる。

ターニャ「っ! 盾男! マヨネーズなどに負けるなあ!!」

尚文「……………っ!! うおおおおおおおおおおおおお!!」

ラフタリア「何故そこまで本気に!?!」

尚文は「憤怒の盾」を使ってそれを防ぎ、それを見て驚くラフタリアだった。

試合は、夕方になるまで続いた。

そんな中、ボールにヒビが入っていた。

アインズ「さて、そろそろこの茶番を終わらせる時が来たようだな。」

ミリム「本当にそうなのだ！」

レイト「ミリム!？」

アインズがそう言うと、ミリムはそう叫んで、オーラを解放する。すると、アインズはボールを落としてしまい、それがミリムのほうに渡る。

ミリム「やっと私の出番なのだ！」

リムル「み、ミリム!す、少し落ち着こうぜ!な!？」

ミリム「……………私に全然ボールが来ないのを耐えるのはもう嫌なのだ!私が、終わらせてやろう!」

レイト「やばい……………!」

カルム「え?」

ミリムがとんでもないオーラを出しながらそう言うと、全員の顔が青ざめる。

すると、ミリムはジャンプする。

ミリム「食らうのだ……………!竜星拡散爆!!」ドラゴバスター

リムル「やばい!皆、逃げろ!!」

ミリムはそう叫んで、ボールを放ち、コートの方に向かっていく。全員がコートから離れると、コートは大きく爆発する。

土煙が上がり、皆が耐える中、煙が晴れていく。

すると、コートは粉々になり、ボールも消滅していた。

キリト「嘘だろ……………!？」

カルム「ボールが消えた……………!」

レイト「ミリムの魔力には、耐えきれなかったか……………!」

リムル「おいおい……………!」

ヴィーシャ「おおおっと!ボールがはじけて、コートがめっちゃくちゃになってしまいました!これでは……………!」

荒くれ者「それが、お前達の見物か……………!」

ヴィーシャ「それはどう言う?」

荒くれ者「つへ!!」

その光景を見て、ヴィーシャも驚く中、荒くれ者が言った事を聞いて質問するが、荒くれ者はそう笑みを浮かべるだけで何も答えなかった。

サブロー「これじゃあ、続行は不可能だね。」

アインズ「そうだな。」

スバル「……所でさ、俺達何で争ってたんでしたっけ?」

カズマ「どうでも良い事だった気がするぞお。」

零士「たしかに。」

尚文「ハア………お前達は本当にどうでも良い事で争っていた。」

サブローがそう言う中、アインズはそう言う。

それを見ていたスバル、カズマ、零士がそう言うのと、尚文はため息を吐きながらそう言う。

アインズ「………ターニヤすまない。私が大人げなかった。」

ターニヤ「いや、それを言うなら私の方こそ、大人げなかった。」

キリト「幼女が大人げないって……。」

カルム「でもそれを言ったら、アインズなんて大人とか子どもとか超えてねえか?」

師匠「確かに!」

アーク「そうだな。」

一同『アハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!』

アインズとターニヤがそう謝る中、キリト、カルム、師匠、アークがそう言っつて、皆で笑う。

すると、ヴィーシャが話しかける。

ヴィーシャ「それでは、仲直りした所で、皆でコロッケでも食べに行きませんか?」

リムル「でもま、コロッケなら何つけるかで意見も割れないしな。」

スバル「流石に俺もここでマヨネーズとは言わねえぜ?」

レイト「本当か?」

スバル「いやたまには付けるけどさ……やっぱアレでしょ!」

アインズ「ああ、アレだ！なあターニヤ？」

その後、リムルの話を聞いてスバルが言った事にレイトが聞くと、そう答えたスバルの話に頷いたアインズがターニヤに聞くと……。

ターニヤ「ああ！コロツケには………塩！一択だな!!」

『……………塩?』

そう笑みを浮かべながら答えたターニヤの返答に対し、この場に居た全員が首を傾げるのだった。

こうして、ドツジボール大会は終わったのだった。